松浦市文化財調査報告書 第14集

松浦・今福遺跡

国営農地再編整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

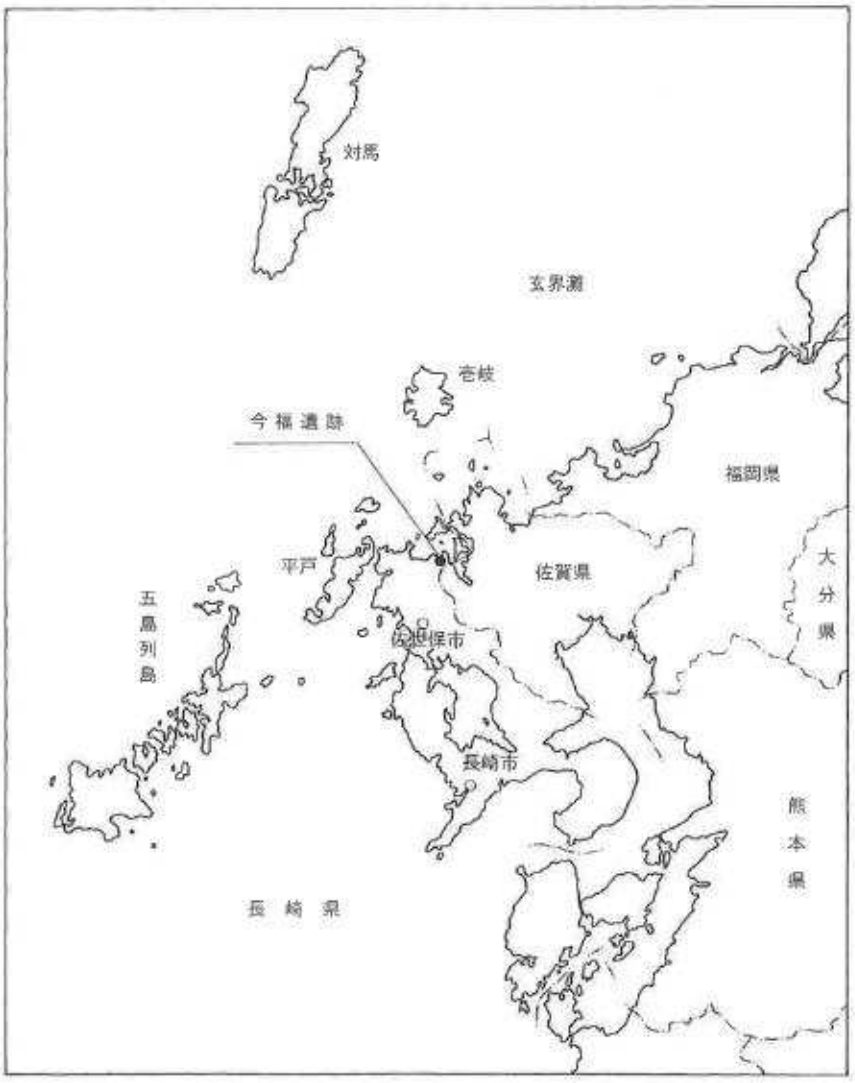
1998

長崎県松浦市教育委員会

松浦市文化財調査報告書 第14集

松浦・今福遺跡

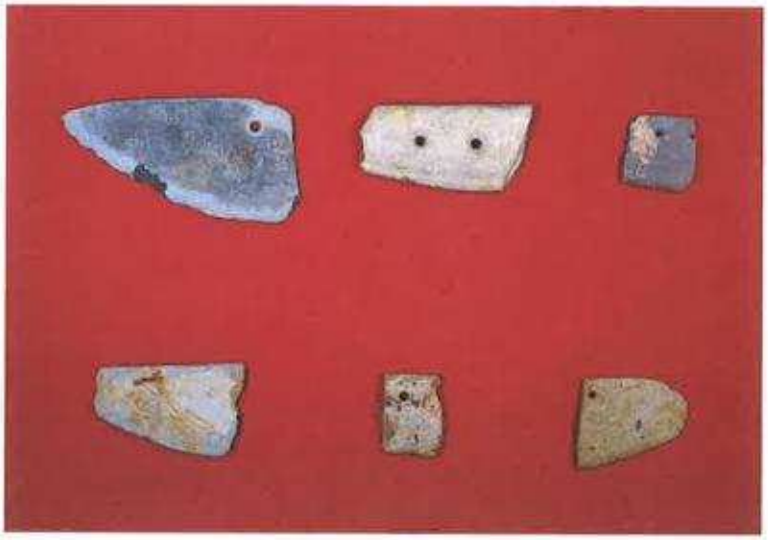
国営農地再編整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



1998
長崎県松浦市教育委員会

今福遺跡空中写真

縄文土器



石庖丁

土師器

発刊にあたって

中国大陸では、太古より多くの文明・文化が花開いてきましたが、海を隔てた対岸の長崎県松浦市及びその周辺地域も大陸との交流によって様々な文化を享受していたことが各地の遺跡や遺物からうかがうことができます。縄文時代・弥生時代・古墳時代と、貴重な文物の流入が、この松浦地方という土地を媒体として行われてきたようです。このような松浦地方の性格は、中世においても変わることはありませんでした。松浦党の活躍は、遺跡から出土する多くの輸入陶磁器がそのことを雄弁に物語っています。

このように歴史の宝庫である松浦地方でありますが、松浦市でも近年の開発行為によって様様な遺跡が消滅の危機に瀕しています。文化財行政の直面する重要な課題として埋蔵文化財の保護を訴えなければなりませんが、宅地造成その他の開発は後を絶えず、とどまるところを知らないというのが現状であります。松浦市教育委員会としてもこのような状況を踏まえたうえで、やむを得ず保存できない埋蔵文化財については、事前に発掘調査を行って、できるだけ正確な記録保存に努め、また、後世に伝えていくことも文化財行政の重要な課題であると痛感いたしております。

今回の調査は、九州農政局北松農地整備事業所による国営農地再編整備事業今福工区に伴うものであります。今福遺跡は平成７年度の試掘調査で発見し、遺跡の保護と事業の調整について幾度となく協議をしてきましたが、どうしても設計変更ができない部分を記録保存するための発掘調査であります。調査の結果、縄文時代晩期から弥生時代、古墳時代、中世期までの多くの遺物の出土を見ることができました。特に弥生時代前期において稲の穂を摘む道具として使用された石庖丁は６点も発見され、松浦市における稲作の起源が弥生時代にまでさかのぼることが確認されました。また、古墳時代の遺物は、量・種類とともに豊富であり、松浦地方の古墳時代の人々の生活を解明するうえで貴重な資料を得ることもできました。

この報告書が、地域住民の皆様はもとより、広く市民各位の埋蔵文化財保護に対するご理解と認識を深める一助となり、さらには学術研究の分野においてもご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土遺物の整理にいたるまで、地元の作業員の方々をはじめ、多くの人々のご協力とご理解に対しまして心から感謝の意を表すものであります。

平成10年３月31日

長崎県松浦市教育委員会

教育長　黒　川　壽　信

例　　言

1．本書は、国営農地再編整備事業に伴い松浦市教育委員会が平成８年11月から平成９年２月にかけて長崎県松浦市今福町仏坂免・浦免において発掘調査を実施した今福遺跡の調査報告書である。
2．調査は、長崎県教育委員会文化課の指導を受けて、松浦市教育委員会があたった。
3．調査及び本報告書作成にあたっては、九州農政局北松農地整備事業所・県文化課・松浦市農林課・地元今福地区の協力を賜った。
4．本書の執筆は、第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅵ章を中田敦之、第Ⅲ、第Ⅳ章を高原愛があたった。石器計測表及び遺物観察表は明石拡子が作成した。第Ⅴ章は（株）古環境研究所による。
5．遺構の実測は高原・宮川泰男・内野義・中田があたり、遺物の実測は高原・明石・中田が行った。
6．遺構・遺物の製図は、高原・明石・瀬上久美子・中田があたった。
7．遺構・土層の写真撮影は、内野・高原・中田があたった。
8．遺物の写真撮影は、中田があたった。
9．出土遺物は、松浦市教育委員会がその保管の任にあたり、松浦市民会館（松浦市志佐町浦免1483）にて一括保管している。
10．本書の編集は、高原の協力を得て中田が担当した。
11．写真図版の縮尺は、不統一である。

目　　次

第Ⅰ章　はじめに
Ⅰ．発掘調査に至る経過……1
Ⅱ．発掘調査関係者……2
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境
Ⅰ．地理的環境……3
Ⅱ．歴史的環境……4
Ⅲ．試掘調査……8
第Ⅲ章　遺跡の調査
Ⅰ．調査の概要……9
Ⅱ．層　　位……13
Ⅲ．遺　　構……17
第Ⅳ章　遺　　物
Ⅰ．旧石器時代の遺物……23
Ⅱ．縄文時代の遺物……23
Ⅲ．弥生時代の遺物……40
Ⅳ．古墳時代の遺物……45
Ⅴ．中世の遺物……60
第Ⅴ章　科学分析
Ⅰ．今福遺跡におけるプラント・オパール分析……93
Ⅱ．今福遺跡における花粉分析……96
第Ⅵ章　ま と め
Ⅰ．遺物と遺跡について……104

挿 図 目 次

第１図　遺跡周辺の地形分類図……3
第２図　周辺遺跡分布図……5
第３図　今福遺跡位置図……6
第４図　平成７年度試掘調査地点……8
第５図　調査区設定図……10
第６図　土層図……11～12
第７図　ＧＨ14～16ピット平面図……13
第８図　Ｍ～Ｑ22・23ピット平面図……14
第９図　Ｇ38～41ピット平面図……15
第10図　Ｆ～Ｈ５・６ピット平面図……16
第11図　ピット内出土遺物……16
第12図　ＭＮ22集石土壙実測図……17
第13図　Ｇ７礫群実測図……18
第14図　Ｇ７礫群内出土遺物１……19
第15図　Ｇ７礫群内出土遺物２……20
第16図　ｅ57土壙実測図……21
第17図　Ｂ13列石実測図……22
第18図　旧石器・縄文時代の遺物１……24
第19図　縄文時代の遺物２……25
第20図　縄文時代の遺物３……26
第21図　縄文時代の遺物４……27
第22図　縄文時代の遺物５……28
第23図　縄文時代の遺物６……29
第24図　縄文時代の遺物７……32
第25図　縄文時代の遺物８……33
第26図　縄文時代の遺物９……34
第27図　縄文時代の遺物10……35
第28図　縄文時代の遺物11……37
第29図　縄文時代の遺物12……38
第30図　縄文時代の遺物13……39
第31図　弥生時代の遺物１……41
第32図　弥生時代の遺物２……42
第33図　弥生時代の遺物３……43
第34図　弥生時代の遺物４……44
第35図　古墳時代の遺物１……47
第36図　古墳時代の遺物２……48
第37図　古墳時代の遺物３……49
第38図　古墳時代の遺物４……50
第39図　古墳時代の遺物５……51
第40図　古墳時代の遺物６……52
第41図　古墳時代の遺物７……54
第42図　古墳時代の遺物８……56
第43図　古墳時代の遺物９……57
第44図　古墳時代の遺物10……58
第45図　古墳時代の遺物11……59
第46図　中世の遺物１……61
第47図　中世の遺物２……62
第48図　中世の遺物３……64
第49図　中世の遺物４……65
第50図　中世の遺物５……66
第51図　中世の遺物６……67
第52図　中世の遺物７……68
第53図　中世の遺物８……69
第54図　中世の遺物９……70
第55図　中世の遺物10……71
第56図　中世の遺物11……72
第57図　中世の遺物12……73
第58図　中世の遺物13……74

図　版　目　次

図版１　遺跡遠景　調査風景　Ｆ０東土層 ……109
図版２　Ｈ７東土層　H13東土層　H18東土層 ……110
図版３　H42東土層　Ｊ22東土層　ｅ59北土層 ……111
図版４　ｆ58東土層　ＧH14～16ピット検出状況　Ｍ～Q22・23ピット検出状況 ……112
図版５　ＭＮ22集石土壙検出状況　Ｇ７礫群検出状況　Ｂ13列石検出状況 ……113
図版６　礫群内出土遺物１ ……114
図版７　礫群内出土遺物２ ……115
図版８　ｅ57土壙検出状況　遺物出土状況 ……116
図版９　旧石器・縄文時代の遺物１ ……117
図版10　縄文時代の遺物２ ……118
図版11　縄文時代の遺物３ ……119
図版12　縄文時代の遺物４ ……120
図版13　縄文時代の遺物５ ……121
図版14　縄文時代の遺物６ ……122
図版15　縄文時代の遺物７ ……123
図版16　縄文時代の遺物８ ……124
図版17　縄文時代の遺物９ ……125
図版18　弥生時代の遺物１ ……126
図版19　弥生時代の遺物２ ……127
図版20　弥生時代の遺物３ ……128
図版21　弥生時代の遺物４ ……129
図版22　古墳時代の遺物１ ……130
図版23　古墳時代の遺物２ ……131
図版24　古墳時代の遺物３ ……132
図版25　古墳時代の遺物４ ……133
図版26　古墳時代の遺物５ ……134
図版27　古墳時代の遺物６ ……135
図版28　古墳時代の遺物７ ……136
図版29　古墳時代の遺物８ ……137
図版30　古墳時代の遺物９ ……138
図版31　古墳時代の遺物10 ……139
図版32　中世の遺物１ ……140
図版33　中世の遺物２ ……141
図版34　中世の遺物３ ……142
図版35　中世の遺物４ ……143
図版36　中世の遺物５ ……144
図版37　中世の遺物６ ……145
図版38　中世の遺物７ ……146
図版39　中世の遺物８ ……147
図版40　中世の遺物９ ……148
図版41　中世の遺物10 ……149
図版42　中世の遺物11 ……150
図版43　中世の遺物12 ……151

表　目　次

表１　今福遺跡出土石器計測表１ ……75
表２　今福遺跡出土石器計測表２ ……76
表３　今福遺跡出土石器計測表３ ……77
表４　今福遺跡出土石器計測表４ ……78
表５　今福遺跡出土石器計測表５ ……79
表６　今福遺跡出土石器計測表６ ……80
表７　今福遺跡出土土器観察表１ ……81
表８　今福遺跡出土土器観察表２ ……82
表９　今福遺跡出土土器観察表３ ……83
表10　今福遺跡出土土器観察表４ ……84
表11　今福遺跡出土土器観察表５ ……85
表12　今福遺跡出土土器観察表６ ……86
表13　今福遺跡出土土器観察表７ ……87
表14　今福遺跡出土土器観察表８ ……88
表15　今福遺跡出土土器観察表９ ……89
表16　今福遺跡出土土器観察表10 ……90
表17　今福遺跡出土土器観察表11 ……91
表18　今福遺跡出土遺物一覧表 ……92

第Ⅰ章　はじめに

1．発掘調査に至る経過

九州農政局北部九州土地改良調査管理事務所（以下「九州農政局」という。）では、土地利用の整序化を図り、農用地の効率的な土地利用と生産性の高い基盤を形成するため、既耕地を再編整備する区画整理497ha、及び隣接する未墾地等の開畑７haを一体的に施行し、高収益性作物の導入を行い、経営規模の拡大と中核農家の経営合理化を図るとともに兼業化、高齢化に対応するために集落営農を定着させることにより農業の振興と地域活性化に資することを目的として、平成８年度から長崎県県北の松浦市、北松浦郡田平町・同江迎町・同鹿町町・同小佐々町・同佐々町・同吉井町の１市６町で面積610haの国営農地再編整備事業に取組むことになった。このため松浦市教育委員会では長崎県教育委員会に協力を得て九州農政局と埋蔵文化財についての協議に入った。協議の結果、まず松浦市内における国営農地再編整備事業予定地区内の遺跡の分布調査を平成６年７月18日から７月20日に実施した。その分布調査の結果、確認調査が必要な遺跡として牟田Ａ・牟田Ｂ・水尻Ｂ・厳川・下谷・田口高野・大石Ｂ遺跡があった。周知の遺跡はないが今福・調川・川内の３ヵ所において試掘調査が必要である旨を九州農政局へ回答した。協議の結果、平成７年度から３ヵ年計画で今後の協議に必要な基礎資料を得ることを目的に確認調査及び試掘調査を行った。その調査費については国庫補助・県費補助を受けて、松浦市教育委員会が主体となって実施することになった。なお、大石Ｂ遺跡については地元との協議の中で事業計画地より除外されている。

今福工区の８haの工事予定地区内には周知の遺跡はなかった。しかし、志佐川流域での県営圃場整備事業関連の排水路工事中に偶然発見された宮ノ下り遺跡と同じ様な立地環境であるため、予定地区内の遺跡の有無を確認するための試掘調査を平成７年11月17日から12月27日までの期間行った。その結果、約16,300㎡の範囲に古墳時代から中世にかけての遺物包含層が確認されたため、文化財保護法に基づく第57条の６の遺跡発見届を行うとともに再度九州農政局と協議に入った。協議中の平成８年４月には九州農政局が北松浦郡吉井町に移転し、北松農地整備事業所（以下「事業所」という。）が開設されるとともに今福遺跡の保護問題も本格的な協議に入った。数十回に及ぶ協議の結果、約16,300㎡の遺跡の範囲のうち工事の計画が変更できない１号支線道路・２号支線排水路と削平される水田部分の合計 1,650㎡の本調査を実施することになった。発掘調査費用については、平成８年８月８日付けで事業所長と松浦市長との間で今福遺跡の発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査負担契約を締結し、発掘調査に向けての諸準備に取りかかった。事業所では今福工区の工事をモデル地区とするため工区内の稲刈り後の11月上旬から２月中旬の予定で発掘調査を行い、その後早急に工事を行う計画であった。教育委員会では、今福遺跡の発掘調査を計画通りに進めるため調査員の確保と作業員の確保に全力を注いだ。調査員については平成７年度から県文化課と協議を重ね４月の当初から２名の調査員を確保をしていたが、工事設計等との関係で調査面積が 2,580㎡に変更されたため調査員１名の増員確保を余儀なくされた。このため県文化課に協力を求めたが協議の結果、市の内部異動で確保をと

の結論に達した。市長部局での協議の結果、11月の人事異動で３月31日までという期限付きで建設課兼務という変則な形での調査員の確保ができた。作業員については、市立今福公民館の７月号の「公民館だより」で募集を行い、10月６日に今福公民館で説明会を開催して当初49名の確保ができた。いよいよ11月５日から発掘調査の開始となった。

Ⅱ．発掘調査関係者

調査の関係者は次のとおりである。

調査総括	黒川壽信	松浦市教育委員会教育長	
事務局	川上啓一	社会教育課課長	
庶務担当	神田泰善	〃	次長兼指導係長
〃	田畑徹二	〃	主事
調査員	中田敦之	〃	社会教育主事
〃	内野　義	〃	主事（平成８年11月１日から平成９年３月31日まで）
〃	高原　愛	〃	文化財調査員
〃	宮川泰男	〃	〃　（平成９年２月28日まで）
〃	明石拡子	〃	〃　（平成９年４月14日から）

整理補助員　瀬上久美子・氏山百合子・久家芽衣子

作業員　松尾英一・永田幸重・青木定五郎・津田シエ子・田中チエ・保田スナ子・和田ヤス・村本ナル子・永田シノブ・天本清幸・林ヤエ子・久保田富美子・辻礼子・村田政子・松永セツエ・福村猛・江島敏明・高橋祐一・末竹源次・田代タミ子・田中サエ子・津田ハルエ・白井康子・下條キクエ・松元キクヨ・遠藤良子・森淑子・冨野トシエ・松田マサヨ・森山八重美・小村信和・辻朝二・野口勉・田中シズヨ・小田原ふじの・岡頼子・田中セツ子・末竹千代子・崎田ツユ・田中フイ子・森永都美子・大塚英子・里森知恵子・辻元エン・天久保正子・渡口誠一・前田正枝・吉永次男・藤田シノブ・西ミヨ子・前田恵子・宮地チカグイ・森田ミヤ子・坂口豊子・池田征子・小畑郁子・坂本クニ子・黒田ヒサエ・岡村ヒサノ・吉田末千子・山口ミチヨ・森山レイ子・森田秀子・志水マサ子・久保川タキノ・村田岱子・鴨川文江・橋本光雄・野崎冨子・久家ナツ子・山口ヒデ子・田中美津江・濱田トミ・渡口米子・松本君子・崎田政子・前田美智子・中島カズ子・福本君江・太田黒久江・内田マスエ・岩崎武・福岡寅一・前田チエ子・宮本吉次郎・下條綾子・太田一枝・泉頭守・藤丸八重子・田中冨美子・田中正道・田中薫・久保川衛・白井絹枝・中田精一・末永キヌエ・田中美雪・木村末子・福浦泰枝・松永マサ子・副島多知子

調査協力　九州農政局北松農地整備事業所　国営今福土地改良区　松浦市農林課　長崎県教育委員会　市立今福公民館

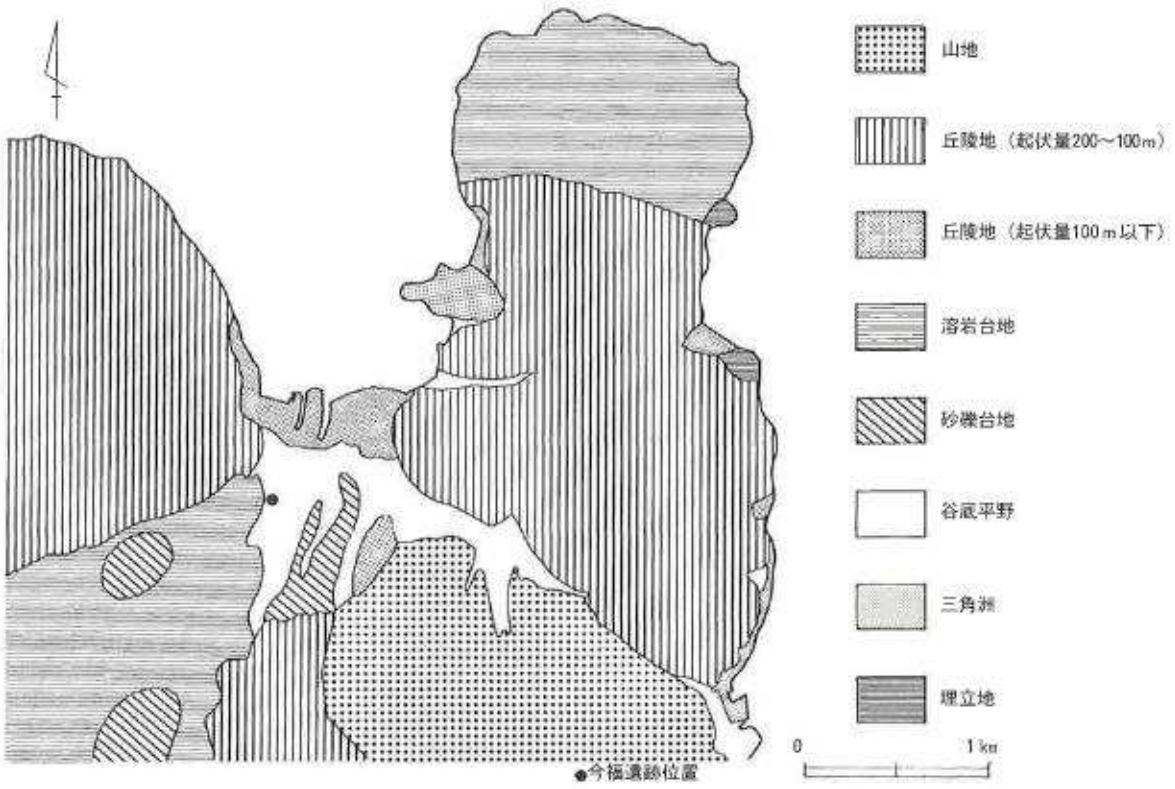
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

1．地理的環境（第1図）

松浦市は、九州西北部の長崎県本土の北端、北松浦半島の北端部とその沖に浮かぶ青島・飛島と小さな島々とで構成されている。松浦市の北には伊万里湾とその奥に「元寇と水中考古学」で有名な北松浦郡鷹島町があり、西の北松浦郡田平町には西の登呂遺跡といわれる「里田原遺跡」がある。南の北松浦郡吉井町には縄文草創期の隆起線文土器が出土した「福井洞窟」があるなど松浦市の近郊は日本の歴史上においても重要な地域であり、旧石器時代から遺跡の宝庫でもある。

松浦市の地質は、第三紀層を基盤としてその上に玄武岩が広く堆積している地質構造を呈している。

今福遺跡は、松浦市の東部、松浦市役所より約 5.3kmの佐賀県伊万里市との境に近い今福町仏坂免・浦免に所在している。北には伊万里湾に浮かぶ鷹島を望むことができる。今福の市街地は、東に城山、西に白井岳、南に国見岳などの三方を玄武岩台地の山々に囲まれた凹地に立地しており、南高北低の地勢を呈している。遺跡の東側には佐賀県との境をなしている国見岳を中心に人形石山・石倉山を源流とし、第三紀層を削って北流して伊万里湾へと注ぐ流路延長 1.8kmの2級河川の今福川がある。河口には三角洲が発達している。この今福川と並行して西側には市道大川西線も走っている。北側には松浦鉄道西九州線が走っている。今福遺跡はこの今福川で形成された沖積平野の水田地帯にあり、東西約100m、南北約270mの範囲で約16,300㎡に分布しているものと思われる。水田は北側に沿って高さを減じており、水田面の標高は約7mから14mを測る。遺跡に沿って市道西田原線が走っている。



第1図　遺跡周辺の地形分類図

II．歴史的環境（第２図・第３図）

今福町における埋蔵文化財の調査は、まず昭和54年の金井崎半島の先端の台地上に位置する満場遺跡に始まる。調査は団体営草地開発事業（13ha）に伴う満場遺跡の分布調査で、調査を行った長崎県教育委員会では簡単な10ヵ所の試掘調査でＢ地点の一部の表土下に厚さ約40cmの遺物包含層を確認している。その後、県畜産課との協議によりＢ地点の一部が設計変更されているようであるが詳細については不明である。昭和40年１月発行の県立松浦高等学校郷土社会部発行の『松浦考古１号』には、松浦市の石器時代遺跡紹介の項目で今福町万場遺跡が記載されている。本文には採集遺物としてナイフ形石器・台形石器（トラピーズで報告）等が図示されており、「無土器時代最終末期から縄文時代に継続したと考えられる重要な遺跡である」と結んでいる。

昭和56年にはこの満場遺跡に隣接する北平遺跡（三等三角点付近）でＮＴＴ無線中継所建設に伴う確認調査が久原巻二（現県教育委員会学校教育課）・川道寛（現県教育委員会文化課）により行われている。17ヵ所68㎡の調査区はほとんどが深耕を受けており、包含層の検出は確認できなかったようである。耕作土及び撹乱層から石鏃・フレイク・チップ・石核が出土している。

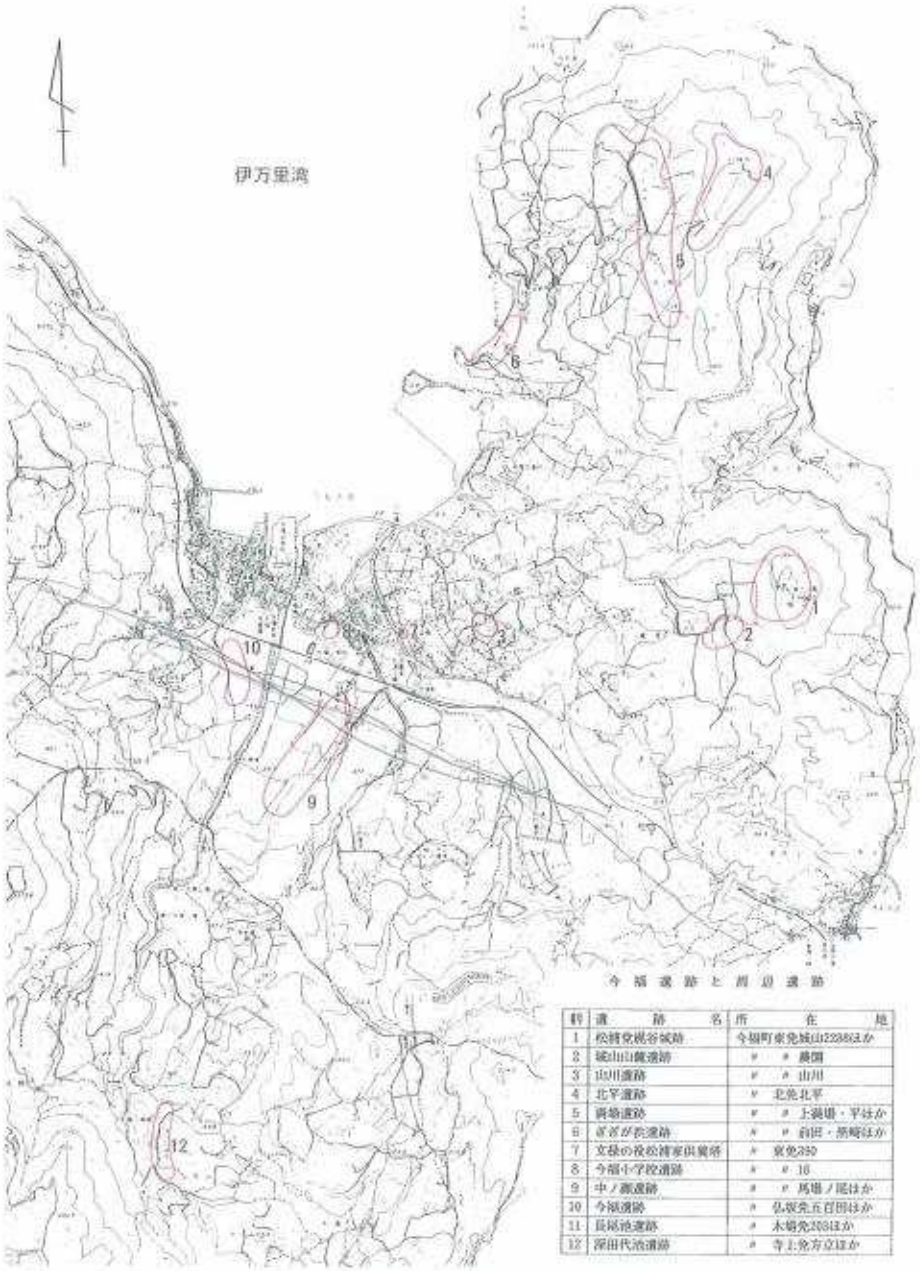
平成３年度～６年度には松浦党梶谷城跡の確認調査を市教育委員会で行っている。梶谷城跡は確実な文献上の確証がなく江戸時代に著わされた松浦氏の家譜である『松浦家世伝』によると、延久元年源久なる人物が摂津国渡辺荘より肥前国松浦郡志佐郷今福に下向して土着し、宇野御厨検校および検非違使となったのが松浦氏の最初で、その頃梶谷城を築いたとあり、平安時代末期には築かれたことになっている。教育委員会では、平成元年度から梶谷城跡の保存整備についての諮問機関として「史跡松浦党梶谷城跡保存整備委員会」を設置し、調査は保存整備基本計画を検討する中で梶谷城跡に関する基礎資料を得るために行ったものである。３・４年度の調査は梶谷城跡の西側麓の館跡と思われる部分の確認調査を実施した。５年度は副郭地区（二の丸）、６年度は主郭地区（本丸）の確認調査を実施した。その結果、主郭部分には掘立柱建物跡のピット群・造成した跡等が確認された。出土遺物では館跡の調査では縄文時代の石鏃等の石器と13世紀後半から14世紀前半の中国産輸入陶磁器の青磁、16世紀後半から17世紀前半の中国産輸入陶磁器の青磁・染付・朝鮮産白磁・国内産古唐津・備前があった。石垣の調査では構築方法に年代差があることが指摘され、副郭が穴太積みが成立する永禄年間頃を前後する時期の成立で、主郭及び館跡が文禄・慶長期頃との年代が提示されている。これらの調査結果と出土遺物等から梶谷城が築城された年代は16世紀後半から17世紀初頭頃であろうと思われる。今後の保存整備が望まれるところである。

平成７年度は鉱害復旧事業に伴う中ノ瀬遺跡の確認調査と国営農地再編整備事業に伴う今福遺跡の試掘調査を国庫補助・県費補助を受けて実施している。中ノ瀬遺跡は今福遺跡の南東今福川をはさんで対岸に位置しており、第１次調査では弥生中期の甕形土器や11世紀後半から14世紀中頃の輸入陶磁器の青磁・白磁・青白磁、土師器が出土している。遺構では土壙２基と８ヵ所の調査区でピットが検出されている。

次に考古学的調査から文献に移り、今福についてふれてみると、現存する文献には今福神社にある

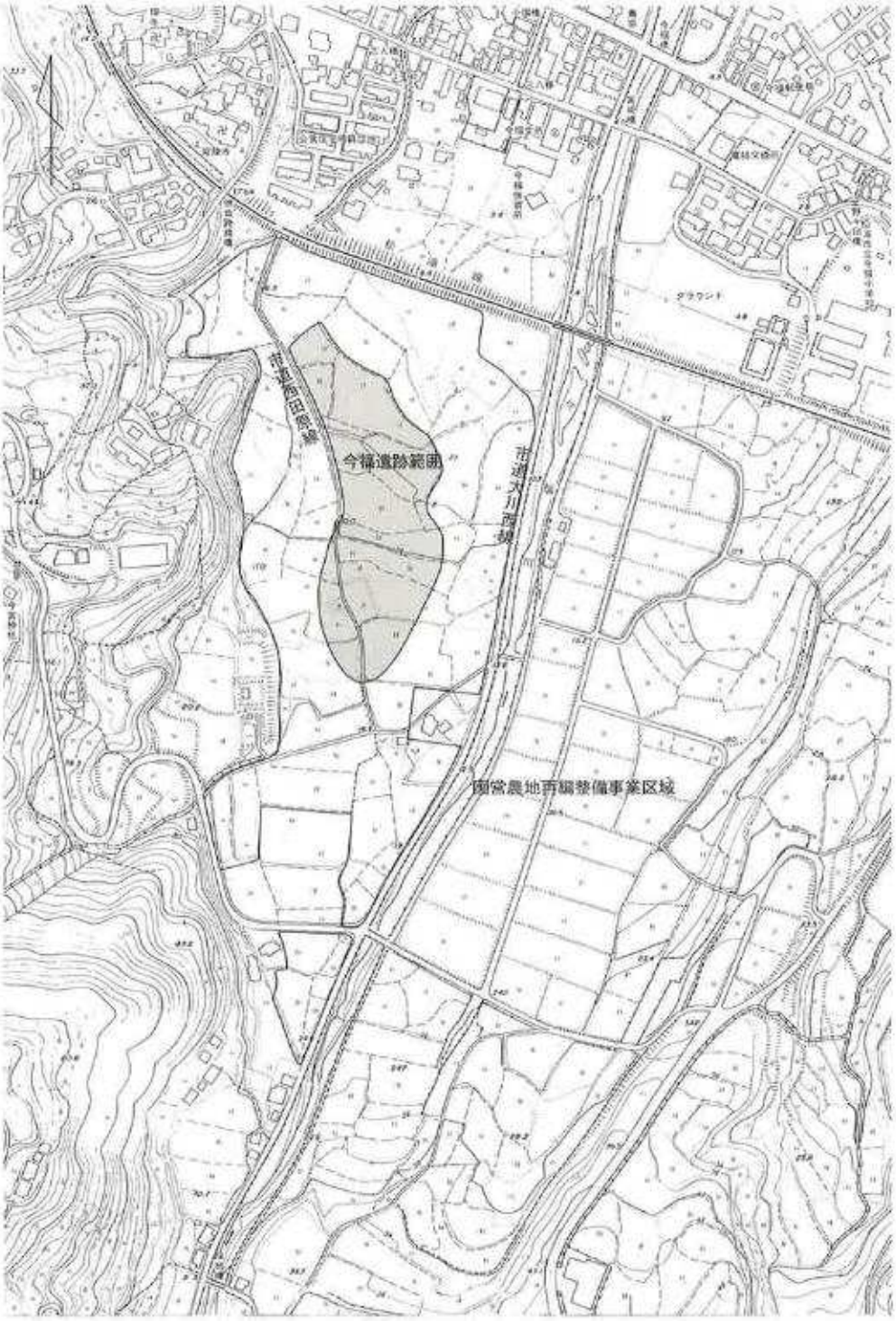
『早田文書』と『宛陵寺文書』を上げることができる。『早田文書』は今福神社の大宮司職を代々継承されている早田家に伝わる文書である。この今福神社は明治4年に名称を歳ノ宮から変更している。従って宗家松浦氏との関係は深く松浦氏の中世史を研究する上で欠かせない文献である。しかし残念ながら明治3年に早田恒氏の書写したものをさらにその後に書写を繰り返しているようで、判読できないところや読解の困難な箇所がある。現在この文書は九州大学文学部九州文化史研究所に保管されているようである。宛陵寺は代々宗家松浦氏の菩提所で、源久の隠宅居邸として天漸院と称していたが久の卒去後に宛陵寺と称するようになったようである。『宛陵寺文書』の松浦系図によれば源久は嫡子である御厨執行兼弁済使源四郎大夫直に下松浦の所領を譲っている。嫡流に相伝されたとみられる御厨執行職は、直－清－遠－直－定－時（正）－（清）－直（定）－勝－延－進－盛－定－政－親へと伝えられている。

文書では時の後は時の子の直が当主になっている。しかし、別の系図によっては－定－時（正）と直（定）との間に清を入れている物もある。早田文書・宛陵寺文書には神社・寺に寄進した人物の名がある。清は歳ノ宮へ貞和6年（1350）に2通、観応3年（1352）に3通の寄進状をだしている。康永4年（1345）には源清下文案が「いまふくの大くし（大宮司）」に対して清が神事祈禱のことを命じている。直（定）は正平24年（1370）に直の名で、明徳2年（1391）、明徳4年（1393）、明徳5年（1394）のものは定の名で発給されて



第2図　周辺遺跡分布図（1／30000）

いる。宛陵寺文書には延の寄進状が６通ある。明徳元年（1390）１通、応永10年（1403）２通、応永12年（1405）２通、応永13年（1406）１通である。延の子の進の寄進状が４通宛陵寺文書にある。応永31年（1424）２通と応永32年（1425）１通がある。１通は年号なし。また、早田文書には進の発給文書が４通ある。応永24年（1417）、応永27年（1420）、永享３年（1431）と１通は年号が付いていない。これらの文書には「今福浦」の地名があり、南北朝から室町期には通常使用されていた名称であろう。また、「丹後守」初めて名乗るのは遠の子の直からで後代々使用しているようである。南北朝



第３図　今福遺跡位置図（１／5000）

から室町時代に行われ松浦党一揆契諾では、『青方文書』・『山代文書』によると永徳４年（1384）に「たんこ左衛門尉逸」、至徳４年（1387）「丹後守直」、嘉慶２年（1388）「丹後守五」、明徳３年（1392）に「丹後守定」が登場している。直の子の逸は13世紀初頭の人物であり、永徳４年の「逸」とは年代があっていない。また、「五」も謎の人物である。時（正）－（清）－直（定）－勝に至る系図は文献史料から再検討する必要があろう。進の子の盛については、『海東諸国紀』に受図書人として年１度の歳遣定約を結んでいる。この年が丁丑年で日本の長禄元年（1457）にあたっている。盛は『松浦家世伝』で嘉吉３年（1441）に宗家松浦氏の菩提寺の新豊寺に巨鐘を寄進していることが記されている。15世紀中頃に盛が今福から相浦へ本拠地を移したのではないかと考えられている。

今福遺跡の調査において、大いに関係するのが遺跡の東側に流れる今福川に関連する文献であろう。今福川は大雨が降ると頻繁に氾濫を起しているようである。治水事業が完全でない近世においては当然であろう。今福川の氾濫については、今福公民館に保管されている『今福御用留書』等によって確認することができる。寛保３年（1743）・延享２年（1745）・延享３年（1746）・天明７年（1787）・天明９年（1789）・明治24年（1891）に大雨によって今福川が氾濫をして遺跡がある西田原一帯が被害を受けている記録がある。試掘調査で確認した砂層・礫層はこれにあたるものである。

江戸時代に入って初めは平戸藩領であったが、松浦信貞の時、寛永12年（1635）３代将軍家光に召し出されて旗本となり、のち寛文４年（1664）平戸藩領のうち当村1500石が分地されている。しかし、寛政２年（1790）からはこの地行所支配は平戸藩に委任されたため、押役所が設置されている。平戸藩から派遣された役人は押役・代官・庄屋・筆取であった。元禄９年（1696）には今福領と平戸領との境の件で今福の百姓 238名が騒動を起こしている。天明６年（1786）・天明８年（1788）・寛政２年（1790）には今福の領民が逃散する事件もおきている。

今福村における炭鉱の歴史は古く江戸時代の中期頃からで、寛延２年（1749）今福宮本利兵衛の子徳兵衛石炭問屋を願い出、今福赤岩炭坑を山口陸左衛門が開くとある。明治に入っても石炭は掘られ、記録にあるものでも明治３年に３件、明治４年に５件、明治６年に４件の炭鉱の名がある。大正８年には第１次炭鉱景気となり、昭和14年には第２次炭鉱景気が訪れている。しかし、昭和37年に最盛期を迎えた炭鉱も昭和42年の飛島鉱を最後にすべての炭鉱が閉山している。

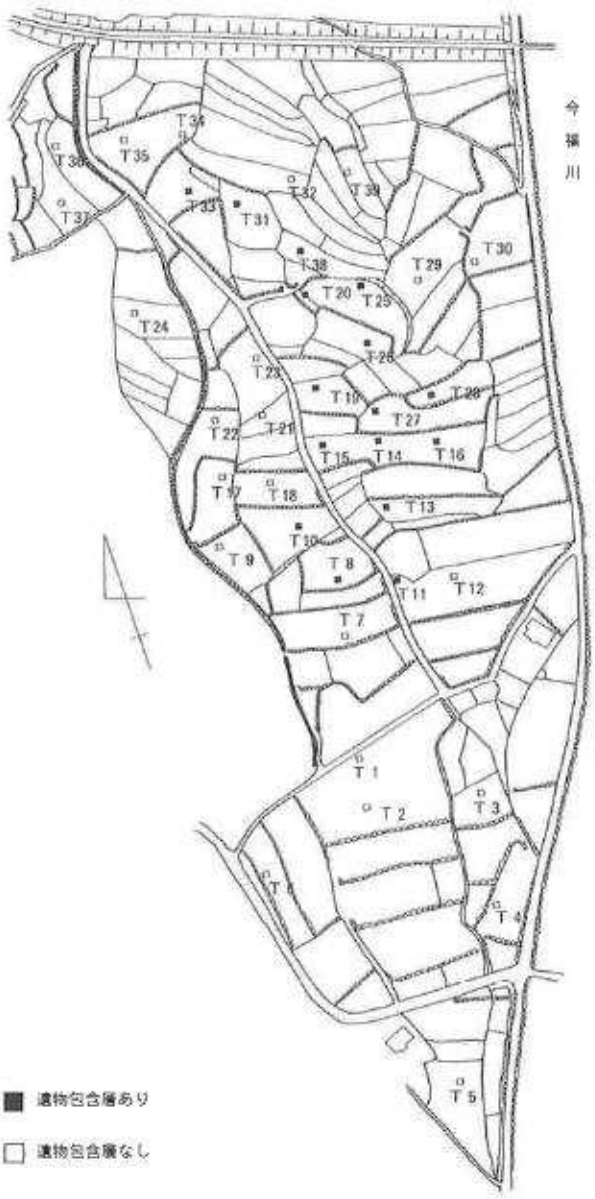
参考文献・引用文献

松浦市史編纂委員会　『松浦市史』　1975
藩史大事典　「第７巻　九州編」　雄山閣　1988
角川日本地名辞典編纂委員会　『角川日本地名辞典　42　長崎県』　角川書店　1987
山口正人　「早田文書」　『松浦党研究第10号』　松浦党研究会　芸文堂　1988
池田和博　「宗家松浦氏の歴史」　『武辺城跡発掘調査報告書（第２次）』　平成８年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書　佐世保市教育委員会　1997
申叔舟　『海東諸国紀』　1471

Ⅲ．試掘調査（第４図）

試掘調査は平成７年11月17日から12月27日にかけて国庫補助・県費補助を受けて行った。調査はまず工事面積８haの水田に30m方眼に区切って２ｍ×２ｍの調査区を39ヵ所設定した。その内の16ヵ所の調査区で遺物包含層が確認された。出土遺物では縄文時代の黒曜石製石鏃・石核・剥片、安山岩製石核・剥片、石斧、晩期後半の浅鉢、弥生中期の壺・甕、古墳時代の土師器手捏ね、須恵器甕・坏身・高坏、中世の土師器碗、瓦器、黒色土器、石鍋、輸入陶磁器の越州窯系青磁碗・龍泉窯系青磁碗・青磁皿・白磁碗・白磁皿等がある。遺構ではＴ10・Ｔ15の調査区で古墳時代のピットを検出した。調査区東側の今福川沿いでは幾度となく川の氾濫による堆積した砂層及び礫層が確認され、本来の遺物包含層が撹乱を受けている所もあった。また、周辺には昭和37年代頃まで炭鉱があったため、そのボタを埋めて整地している所も確認された。

調査の結果、遺跡の範囲は南側がＴ11・Ｔ８の調査区付近からＴ28・Ｔ25の東側を含んで北側のＴ31・Ｔ33の調査区付近まで、西側はＴ10付近までの弧を描き北側より南側が幅が広くなる範囲の約16,300㎡に分布していることが予想された。



第４図　平成７年度試掘調査地点（１／4000）

この試掘調査によって新たな遺跡が発見されたため、教育委員会では文化財保護法に基づく第57条の６の遺跡発見届を長崎県教育委員会を経由して文化庁に提出し、松浦市で 101番目の周知の遺跡となった。教育委員会では、この調査結果をもとに九州農政局と協議に入るとともに、地元の地権者や土地改良区の代表者とも協議を行い、今福遺跡の保存について協力を求めた。

第Ⅲ章　遺跡の調査

Ⅰ．調査の概要（第５図）

今福遺跡は、平成７年度の試掘調査の結果、標高約７ｍから14ｍ地点の水田一帯、約16,300㎡の広範囲に分布していることが確認されたため、遺跡の保存について事業所と協議を重ねてきた。その結果、工事実施の変更ができない2,580㎡の本調査を実施することとなった。事業所では、工事を急ぐということであったため、表土剥ぎ作業は事業所の協力を得て、工事地区内の稲刈り作業が終了した後に工事施工業者にお願いした。さらに、市教育委員会が期間内に発掘調査をスムーズに行うために、排土捨て場の確保のための表土剥ぎも並行して行っていただいた。

発掘調査は、表土剥ぎと簡易プレハブ・簡易トイレの設置が終了した平成８年11月５日から平成９年２月18日までの期間行った。工事が急務であった調査対象範囲の南側から実施し、工事の進捗状況を伺いながらの調査であった。作業の指導は調査員４名で行い、常時60～70名の作業員を20名前後のグループ４班に分割・組織した。作業員は、一日80名を越えることもあり、市内での発掘調査としてはこれまでにない大がかりなものであった。途中、最終日に近い２月10日と２月14日には、地元の市立今福小学校の６年生50名が、授業の一環として本調査の体験学習を行っている。

調査期間内における記録措置として、土層堆積状況および遺構の検出状況の写真撮影・実測図の作成を行った。写真撮影は、35ミリ判モノクロフィルム及びカラーリバーサルフィルムを使用した。実測図については、土層図を１／20、遺構図を１／20と１／10に縮小して作成した。

調査区設定は、１号支線道路の幅が８ｍであるため、東西方向につけたグリット番号Ｇ列とＨ列の境界を基準とし、トランシットを使用して南北に基準杭を打った後、調査の基本的なグリットを４ｍ×４ｍの16㎡で組んだ。将来の調査を考慮して、グリット番号は東から西へＡ・Ｂ・Ｃ～ｇ・ｈ・ｉ、南から北へ０・１・２～59・60・61とした。なお、Ｕ・Ｖ列は、２号支線排水路にあたるため、東西５ｍ、南北４ｍの調査区を設定した。また、１号支線道路にあたる57列も、調査と工事の都合上、東西４ｍ、南北５ｍの調査区を設定した。

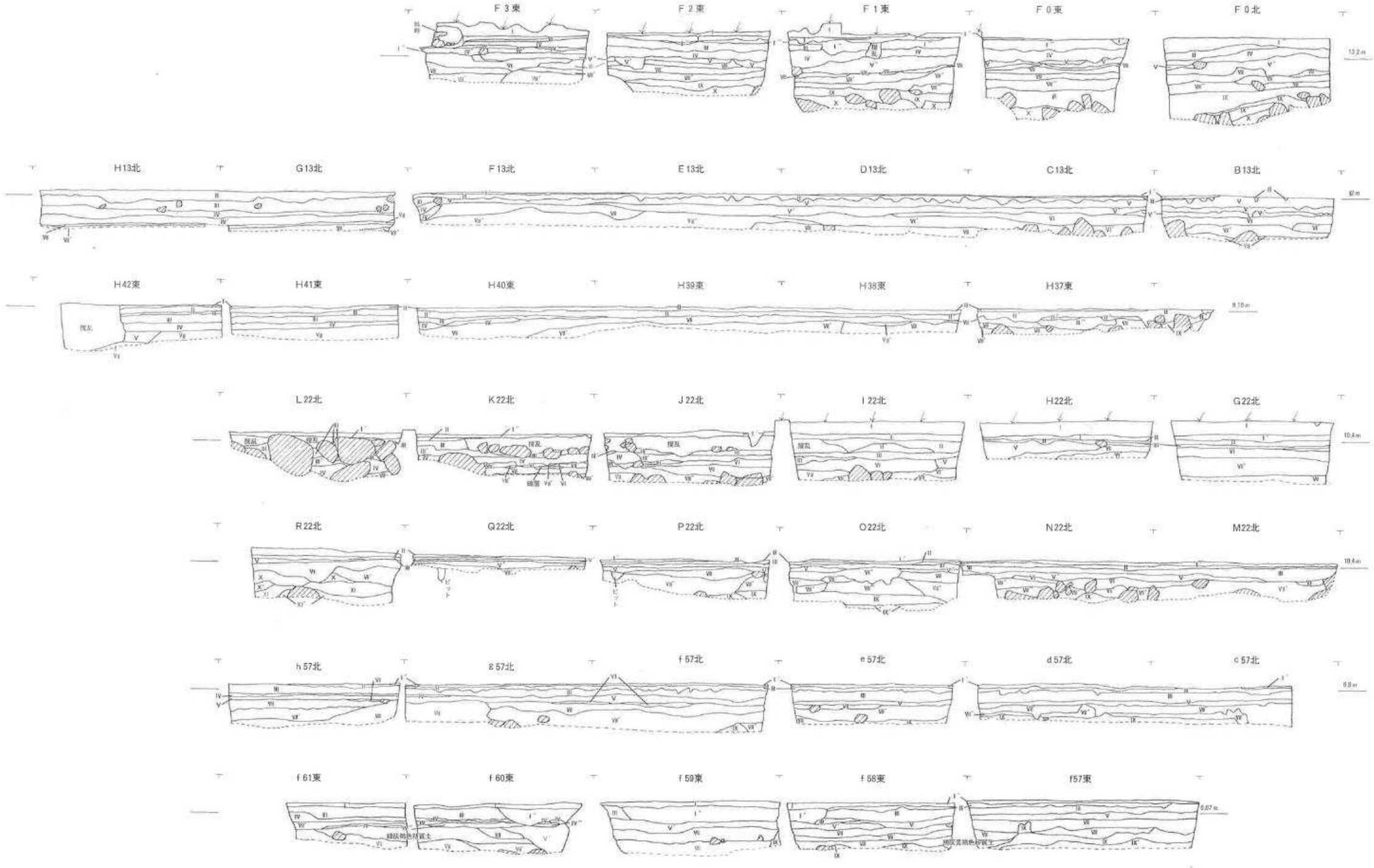
調査方法は、各グリットで層位に基づいて掘り下げ、無遺物層に至ると完掘とした。遺物取り上げについては、各グリットの同一土層内で出土した遺物を一括遺物として取り上げた。遺物出土状況によると、土器砕片が多く、各時代が同一層位に混在するため２次堆積と思われ、ドットマップ作成は行わなかった。

埋め戻しはほとんど人力では行わず、作業員によるグリット内の排水作業後、工事施工業者が重機を用いて行った。

出土遺物のナンバリングは、調査区番号・層位番号の順序で記入した（例：Ｆの０区のⅢ層出土はＦ０－Ⅲ、Ｆ０区とＦ１区の境界のベルトのⅥ層出土はＦ０・１－Ⅵ）。

調査期間中の12月にはプラントオパール土壌サンプリングを行っている。その結果については、第Ⅴ章を参照されたし。

第5図　調査区設定図（1／1500）


F 3東
F 2東
F 1東
F 0東
F 0北
H13北
G13北
F13北
E13北
D13北
C13北
B13北
H42東
H41東
H40東
H39東
H38東
H37東
L 22北
K 22北
J 22北
I 22北
H22北
G22北
R 22北
Q22北
P22北
O22北
N22北
M22北
h 57北
g 57北
f 57北
e 57北
d 57北
c 57北
f 61東
f 60東
f 59東
f 58東
f57東

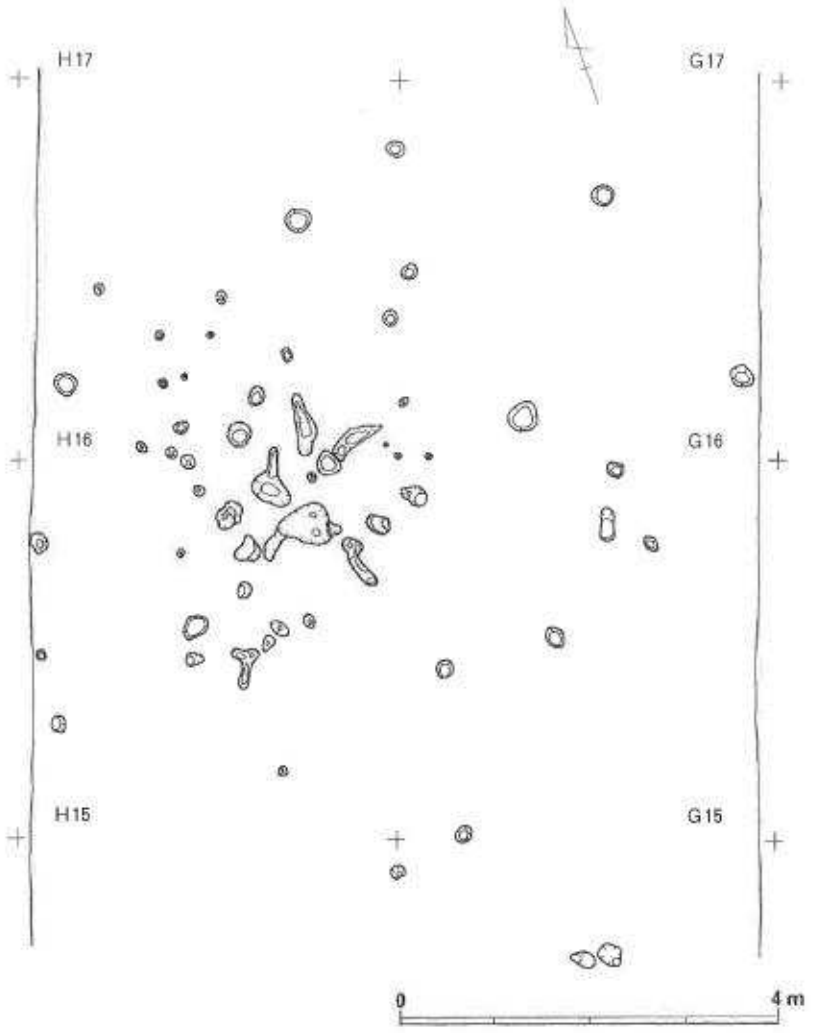
第６図　土層図（１／80）

Ⅱ．層　位（第６図）

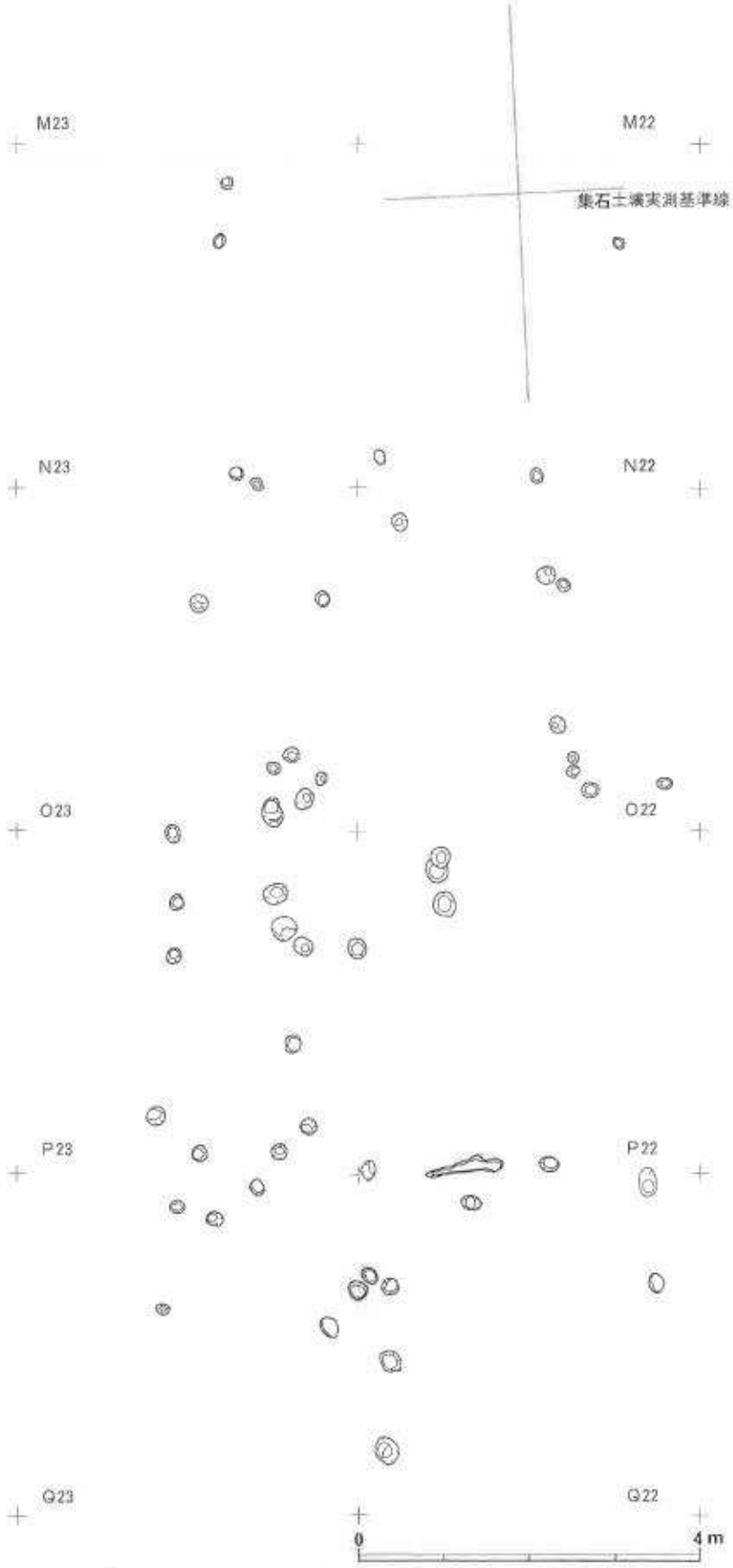
調査範囲があまりに広いため、隣接したベルトで層位番号を統一した。

Ｆ０区北壁からＦ３区東壁の層位は、粘質度が最も強かった地区である。下層のⅧ層緑褐色粘砂層からⅨ層青灰色粘質土層には、大量の石器と縄文時代晩期から弥生時代の土器を検出した。しかし、それぞれ混在しており、層位としてとらえることはできなかった。また、Ⅸ層中から弥生土器とともに木製加工品が一括して出土している。中世の遺物に関しては、Ⅱ層黒灰褐色粘質土層からⅤ″層混礫赤茶褐色粘質土層にかけて石鍋・黒色土器などが出土した。

Ｂ13区からＨ13区の北壁には、Ⅳ層灰黄褐色粘質土層やⅤ′層灰茶褐色粘質土層のように、粘土質で水平堆積した層位を確認した。また、Ｂ13区のⅤ″層上部に畦状の列石遺構を検出し（第17図）、以前から水田として土地利用されていた形跡がうかがえる。Ｈ13区Ⅶ′層黄灰褐色粘砂層中から、古墳時代の須恵器壺が流石によって破損した形で出土した（第45図74）。Ｆ13区からＨ13区にかけてのⅢ層混礫暗茶褐色粘質土層・Ⅳ層灰黄褐色粘質土層・Ⅳ′層暗灰黄褐色粘質土層が、Ⅴ層茶褐色粘質土層・Ⅶ層黄褐色礫層をきっている。



第７図　ＧＨ14～16ピット平面図（１／80）



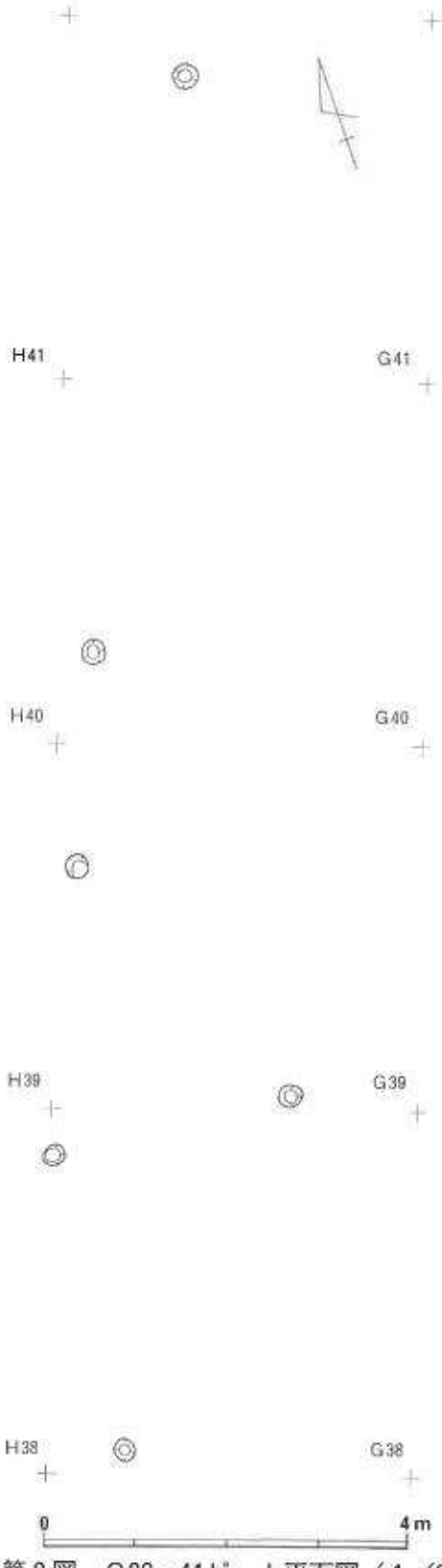
第8図　M～Q22・23ピット平面図（1／80）

H37区からH42区では、Ⅶ層黄褐色礫層とⅦ′層赤褐色礫層の下層であるⅧ層淡灰黄褐色粘質土層から、ピット群を検出した（第9図）。Ⅵ層混礫暗黒褐色粘砂層からは、多くの土師器砕片が出土した。

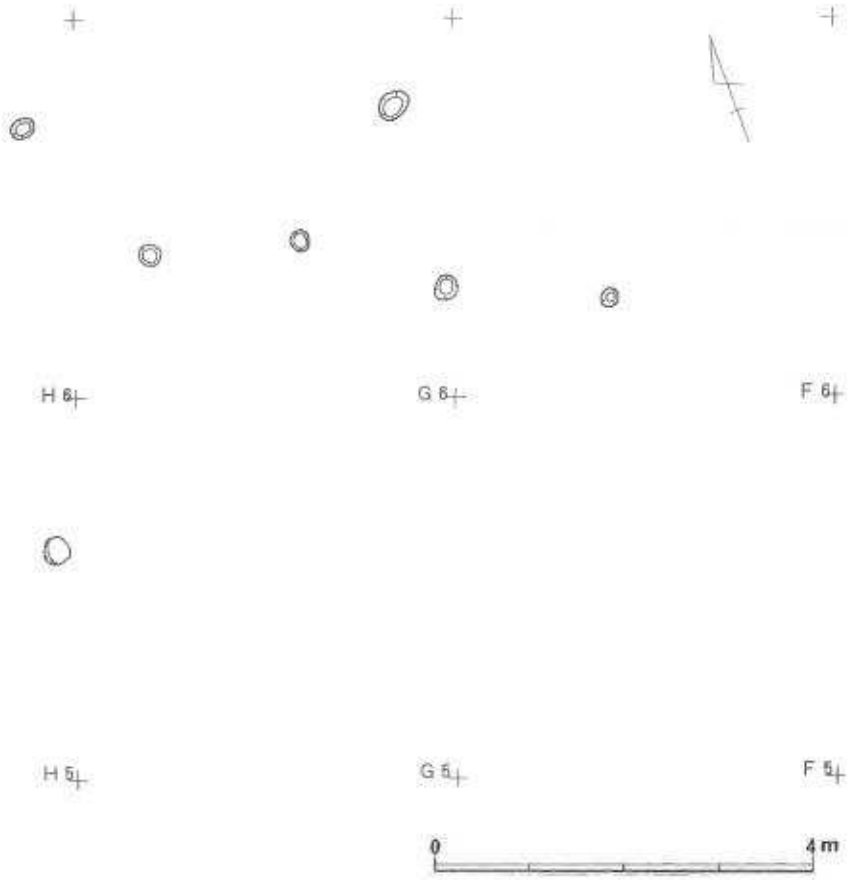
G22区からR22区の層位は、隣接しているが、L22区を境界として東西で異なる様相を呈する。そのため、G22区からL22区までとM22区からR22区までのⅧ層以下の層位内容は異なるため、ご了承いただきたい。L22区は、人為的と思われる大礫の廃棄によって、層位がかなり撹乱されている。I22区からK22区にかけての撹乱は人工的なもので、主に拳大ほどの円礫を投棄している。M22区からN22区にかけてのⅥ層黄褐色礫層には集石土壙を、M22区からQ22区にかけてのⅦ′層暗赤褐色粘質土層にはピット群を検出した（第12図・第8図）。この調査区範囲内での遺物は、Ⅵ層以下の出土が多く、内容は土師器を中心としている。

c57区北壁からh57区北壁と、f57区東壁からf61区東壁の層位番号は、f57区で交差しているため、共通とした。Ⅰ″層礫層は、Ⅲ層灰黄褐色粘質土層をきっているが、円礫を人為的に投棄したものと思われるもので、中世陶磁器などが出土している。

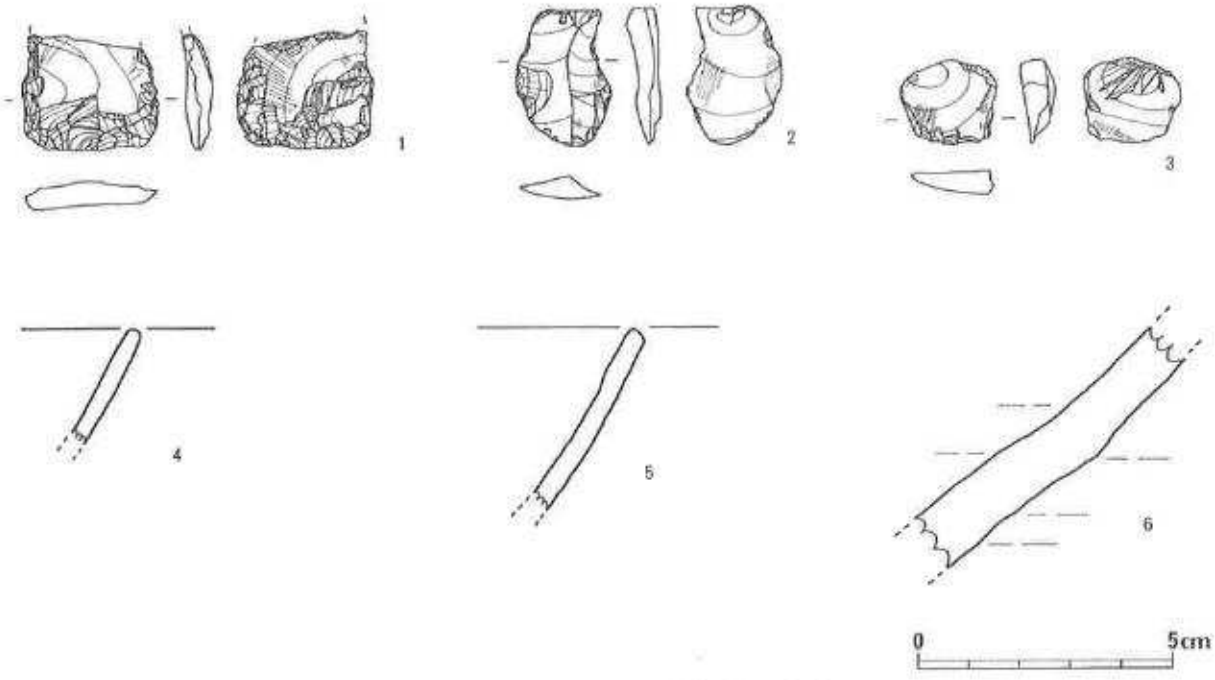
以上、層位と検出した遺構・遺物とをあわせて記述した。なお、B13区北壁からH13区北壁のⅦ層、H37区東壁からH42区東壁のⅦ層、G22区北壁からR22区北壁のⅥ層、c57区北壁からh57区北壁とf57区東壁からf61区東壁のⅥ層黄褐色礫層は、土層状況・遺物から同一層とし、この層位を基準に調査を進めた。



第9図　G38～41ピット平面図（1／80）



第10図　F～H５・６ピット平面図（１／80）



第11図　ピット内出土遺物（２／３）

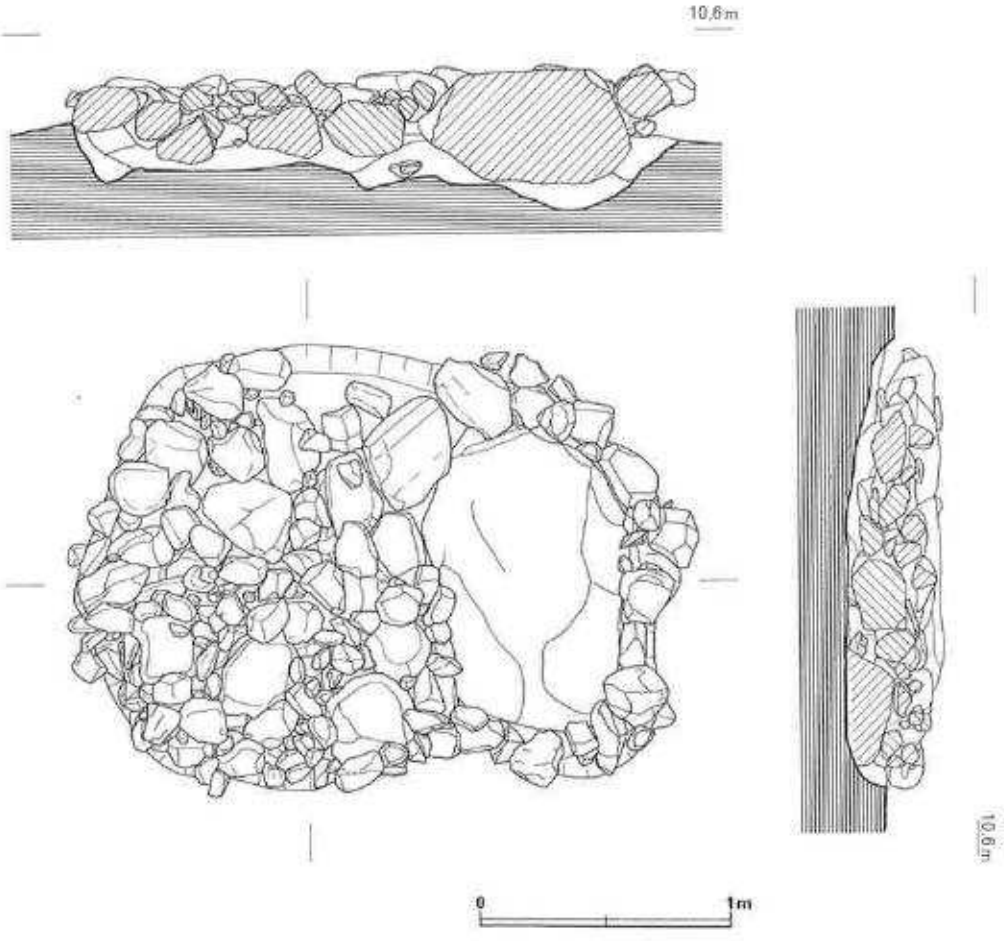
Ⅲ．遺　構（第７図～第17図）

遺構は８カ所から検出された。そのうち４カ所はピット群（第７図～第10図）、集石など墳主体の遺構３カ所（第12図・第13図・第17図）、土壙１カ所（第16図）であった。

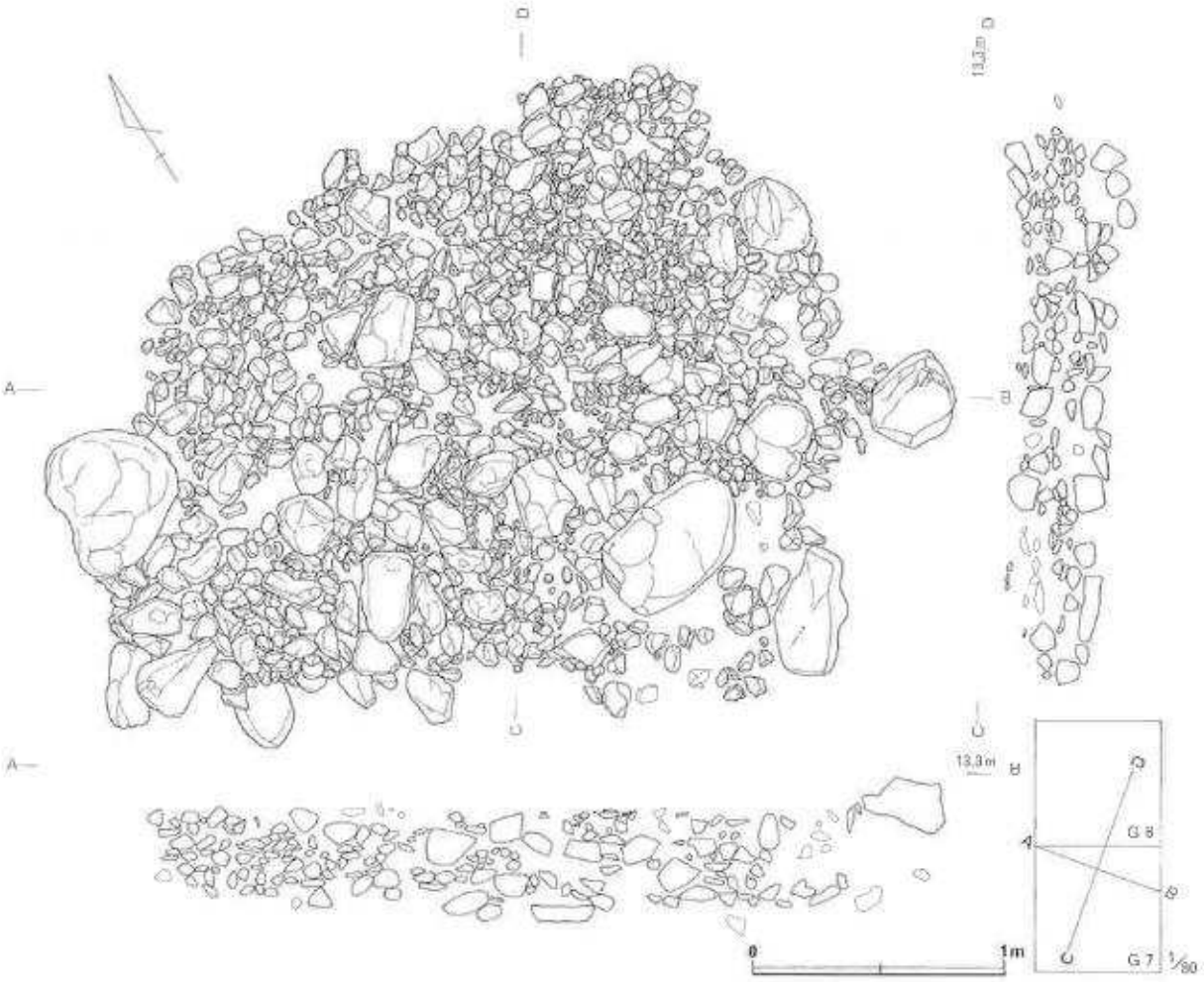
第７図は、G区・H区のそれぞれ14区から16区の間で検出したピット群である。B13区からH13区のⅦ層に掘り込まれている。Ⅶ層は礫が隙間なくつまった層であるため、地盤はしっかりしている。遺物の、ピット内からの出土はなかった。中央寄りにピットが集中している部分があるが、それらは土中で蛇行しており、立木の跡と思われる。その他のピットについては、調査範囲が限られていたため、建物跡か確認できなかった。

M22区・M23区からQ22区・Q23区にかけて検出したピット群は、第８図に示した。ピットの直径は、ほぼ20cmから30cmである。このピット群は、確認調査の時点でその一部を検出していた。そのため、この調査区一帯は注意して作業を進めた。層位では、Ⅶ′層に掘り込まれているが、地盤はやや軟弱だった。

ここでは、ピット内から遺物が出土している（第11図）。１は、下側縁に剥離調整を施したエンドスクレイパーである。黒曜石製で、横長剥片を素材としているようだ。その側縁を四角形状に剥離調整しており、下側縁の主要剥離面に特に密な調整を行っている。上側縁は欠損しているが、使用痕が



第12図　ＭＮ22集石土壙実測図（１／30）

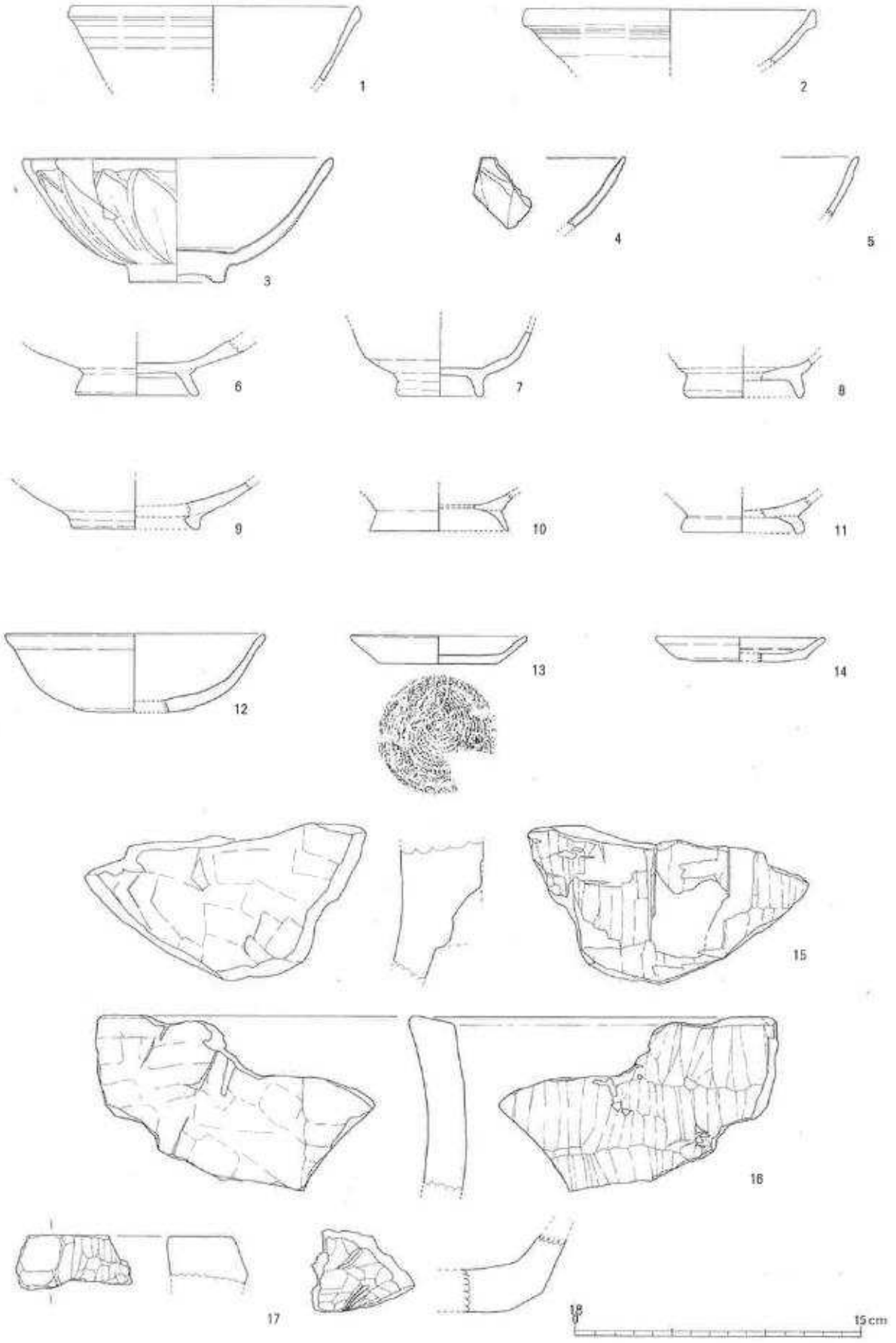


第13図　G７礫群実測図（１／30）

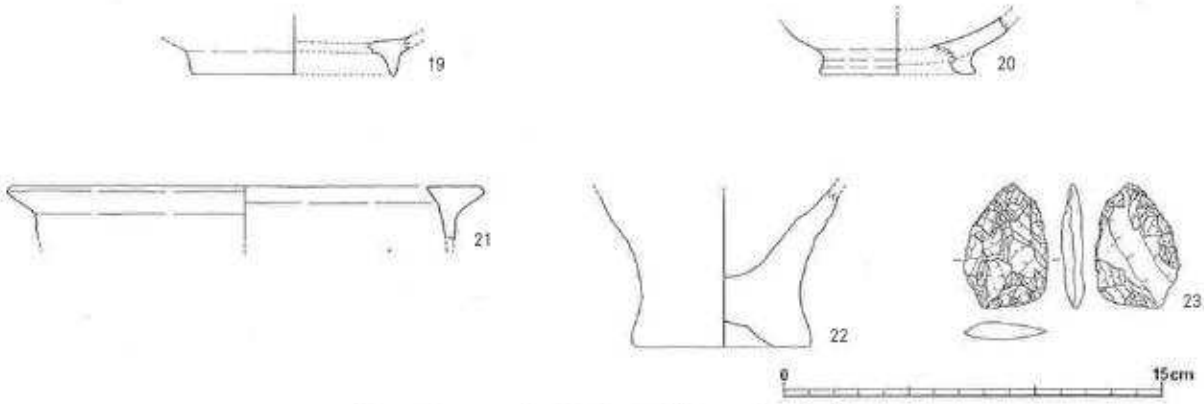
確認できる。２は、使用痕がある剥片である。黒曜石製で、その縦長剥片を二次加工せず、そのまま使用している。バルブが残り、上側縁以外の剥片のエッジに使用痕がみられる。３も使用痕がある剥片だが、黒曜石の小型の横長剥片を使用している。上側縁の自然面を打面とし、大きなバルブを残す。下側縁と左側縁に使用痕がみられる。４・５は中世の土師器碗と思われる砕片である。４は磨滅が著しく、口縁の一部であるため、器種確定は不可能である。胴部から直線的に立ち上がり、口唇は丸みをもつが、やや外側に収束する。胎土は精選され、色調は橙白色、焼成はやや不良である。５は、口縁下で若干内彎し、口縁部を外反させている。口唇は丸くおさめている。胎土に茶色の粒子を含む。調整は磨滅のため不明だが、色調は淡黄褐色、焼成はやや良好である。６は、東播系魚住窯の須恵質捏鉢である。胴部下方の破片で、胎土に石英粒を多量に含む。内外面にヘラナデ痕をはっきりと残す。焼成は良好だが、やや軟質である。色調は灰色。

前述した出土遺物の時代から、このピット群の成立時期は中世以降である。しかし、この地点のピット群出土の土器は、砕片で磨滅が顕著であり、数量が乏しいため、遺構の明確な時代・機能については言及できない。また、調査範囲が限られているため、建物跡の確認は不可能だった。

第９図は、G38区からG41区検出の直径25cmほどのピット群である。Ⅶ層・Ⅶ′層下のⅧ層を掘り



第14図　G７礫群内出土遺物１（１／３）



第15図　G７礫群内出土遺物２（１／３）

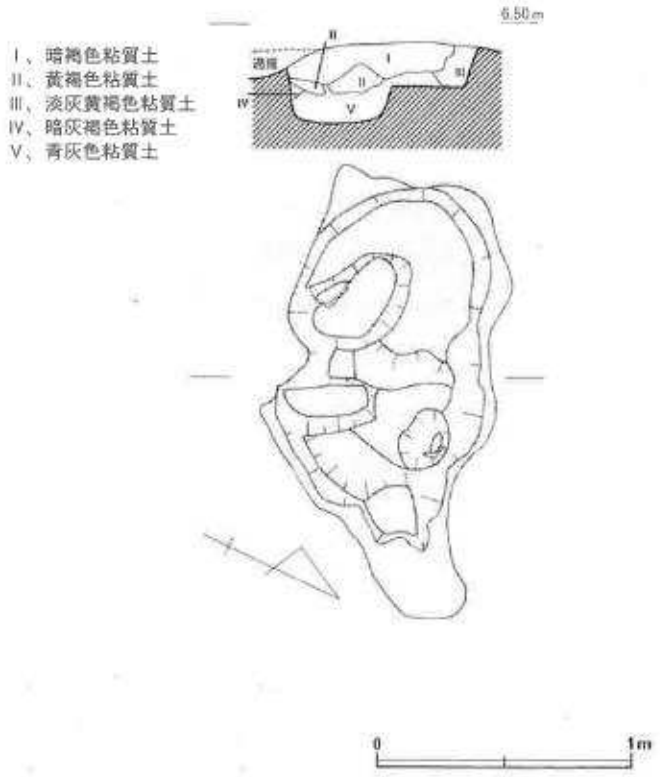
込んであり、ピットに関係する遺物は出土しなかった。

第10図は、Ｈ５区とＦ６区からＨ６区にかけて検出したピット群である。直径は20cmから30cmのもので、調査基準とした黄褐色礫層を掘り込んでいる。ピットに関係した出土遺物はなかった。G38区からG41区とＧ６区周辺の２カ所のピット群はピット数が少なく、点在しており、その上、調査範囲も拡大できないため、建物跡は確認できなかった。

第12図は、M22区とN22区にかけて検出した集石土壙実測図である。層位ではⅥ層形成時とほぼ同時代と考えられ、中世以降のものであろう。まず、礫を廃棄するためにこれらの礫がおさまる土壙をⅥ層から掘り下げる。その土壙は、東西2.4m、南北1.7mの東西に長い楕円形状を呈す。東側に巨大礫を配置し、その後、大きいものでは径70cm以上の大礫から、小さいものでは拳大ほどの礫までランダムに投棄している。内部構造は、前述したように礫の容量分のみの土壙であるため、検出していない。遺物は、土器の砕片などが表面から出土しただけで、遺構内部からは発見できなかった。

ピット群を検出したＧ６区の北側Ｇ７区からＧ８区にかけて、礫群が出土した（第13図）。東西2.6m、南北3.6mの南北に長い集石である。調査時にこの礫群の上部を若干取り除いてしまったが、それでも80cm以上の厚みがある。土壙はもたず、軟質な地盤上に投棄した格好である。大小さまざまな礫があり、拳ほどのものから60cm以上の大礫まで、ランダムに形成されている。遺物も礫の間から出土しており、ゴミ捨て場を兼ねていたものと思われる。

遺物は、中世のものがほとんどである（第14図・第15図）。１～５は、輸入陶磁器である。１・２は白磁で、２点とも碗の口縁部である。１は、胴部が直線的に立ち上がり、口縁に小さな玉縁をもつ。外面はヘラケズリで調整されている。森田　勉氏の分類では、Ⅲ類に属すると思われる。２は、１と同様に小さい玉縁をもつ。口縁下をヘラケズリし、釉には貫入がみられる。胴部にはやや丸みがあり、Ⅱ類と思われる。３・４は、鎬連弁をもつ龍泉窯系青磁である（Ⅰ－５）。３は、約４割の破片を検出でき、復元できた数少ない磁器の一つである。３は内面に文様がなく、見込に段を施す。釉は厚くかけられ、一度釉を掻き取った高台畳付部や高台内にも垂下している。高台内の調整は粗雑で、目跡がわずかに残る。４は口縁部の砕片である。釉を厚くかけているため、鎬削りを施しているか判別しにくい。５は緑釉陶器碗の口縁である。釉は薄づきで、口唇は外側に丸くおさめる。６～８・10・13



網掛部分は炭化物集中

第16図　e57土壙実測図（1／30）

・14は土師器の碗・皿である。6～8・10は高台付きの碗底部である。6は、外側に踏ん張った高台をもち、高台内にヘラ書き沈線を残す。器壁は、底部から胴部にかけて肥厚している。調整はヘラケズリを行い、焼成はやや良好である。7は、高台が小さいものである。内外面とも磨滅しているが、内面調整は丁寧なナデを施す。胴部は内彎し、高台畳付部は丸く形成されている。焼成はやや良好。8は、やや内彎した高台をもつ。ヘラケズリを施し、胴部は丸みをもつようだ。焼成はやや不良。10は、磨滅が著しい細い高台をもつものである。焼成は不良。13は、回転糸切りの底部をもつ皿である。口唇は外側に丸く収束している。焼成はやや良好。14は、底部が丸みを帯びた皿である。内面にヘラケズリによる段を施す。焼成は不良。9・11・12・19・20は、黒色土器である。内面のみ燻した黒色土器Aは9・19、内外面とも燻した黒色土器Bは11・12・20に分類できる。9は、団子状の丸く短い高台が付いた碗である。内面の黒色は、磨滅したことで一部に残っているのみである。焼成は良好。19は軟質な碗底部である。高台は、下方に直線的にのびる。焼成は不良。11は、短く外側に踏ん張った高台の碗底部である。高台内と胴部は、丁寧なヘラナデが施されている。高台と胴部境界には、接着時の貼り付け跡を消すために、ヘラでナデつけている。内面調整は、磨滅のために不明である。焼

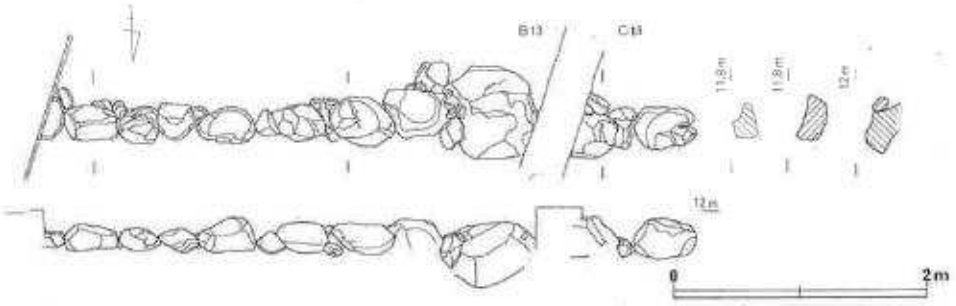
成はやや良好。12は、高台をもたない碗である。口縁はやや外反し、口唇を丸くおさめる。器面調整は粗雑で、粗いナデが施される。見込には、つなげると円形になる凹部があり、復元すると4カ所に凹みをもつものと思われる。焼成はやや良好。20は、外側に踏ん張った短い高台をもつ碗底部である。磨滅しており、黒色は剥離している。焼成はやや良好。15～18は、石鍋片である。15・17は方形の耳付きで、16は内彎した口縁をもつものである。16の外面調整は細かく丁寧だが、その他は粗雑な調整を施す。15～17は、森田氏分類のA－1に相当する。21・22は、弥生時代中期の甕の口縁部と底部である。21は、口縁内面を鋭角に作出した鋤形口縁である。口唇は水平に形成されている。磨滅が著しい。22は、指ナデによって上げ底を形成しているため、底部端部は水平ではない。胎土には砂が多量に混入する。23は、安山岩製のスクレイパーである。側縁には、剥離調整と使用痕を残している。長さ4.9cm、幅3.3cm、厚さ0.9cmを測る。

e57区南側から検出した土壙の実測図を第16図に図示した。層位では、Ⅸ層青灰色粘砂層を掘り込んであり、たんへん軟弱な地盤であった。表面には炭化物が集中して検出され、木片もわずかに出土した。遺物はほとんど確認されていない。

第17図は、B13区から検出した列石遺構実測図である。B13区からベルトをはさんでC13区まで続いている。層位では、V″層灰褐色粘質土層上部であり、礫の大きさは異なるが、直線状に配置されている。湿地帯であるため畦状の遺構と思われるが、列石は一列のみでC13区東端できれているため、断定することはできない。B13区の東側へ続く様相を呈するが、調査範囲外のため検出できなかった。付随する遺物は出土していない。

参考文献

森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会編　「森田勉氏遺稿集」　『大宰府陶磁器研究』　1995



第17図　B13列石実測図（1／60）

第Ⅳ章　遺　　物

出土遺物は28,000点以上にのぼり、そのうち791点を厳選したが、１点１点について細かく掲載できないため、遺物の詳細は後記の観察表を参照されたい。

Ⅰ．旧石器時代の遺物（第18図１）

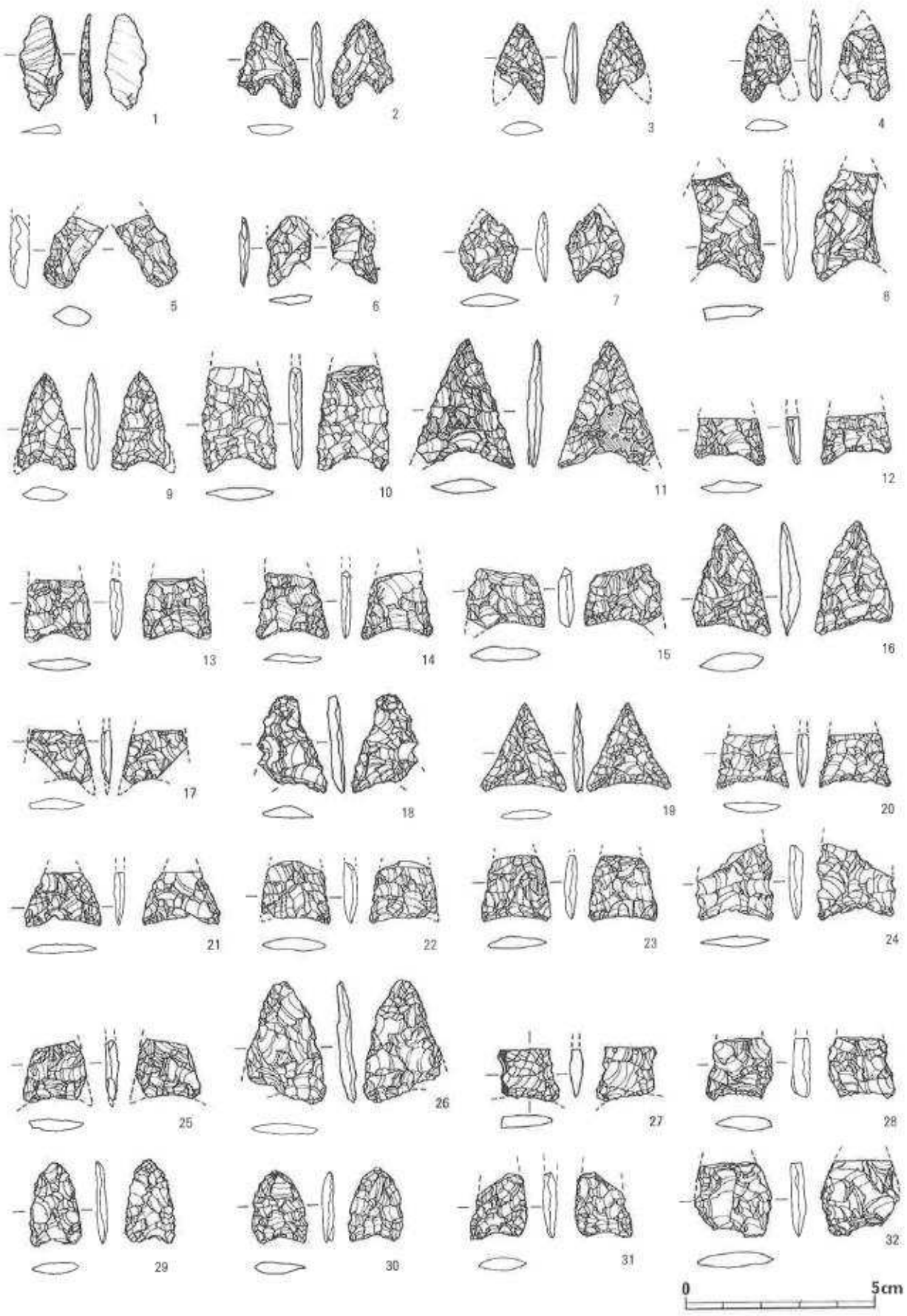
旧石器時代の遺物はほとんど検出されず、そのなかからナイフ形石器１点をあげる。薄手の縦長剥片を素材としている。右側縁に主要剥離面からブランティングを施した一側縁加工で、基部にもブランティングを有する。刃部から左側縁にかけては自然の剥離をそのまま利用しており、使用痕がみられる。

Ⅱ．縄文時代の遺物（第18図２～32、第19図～第30図）

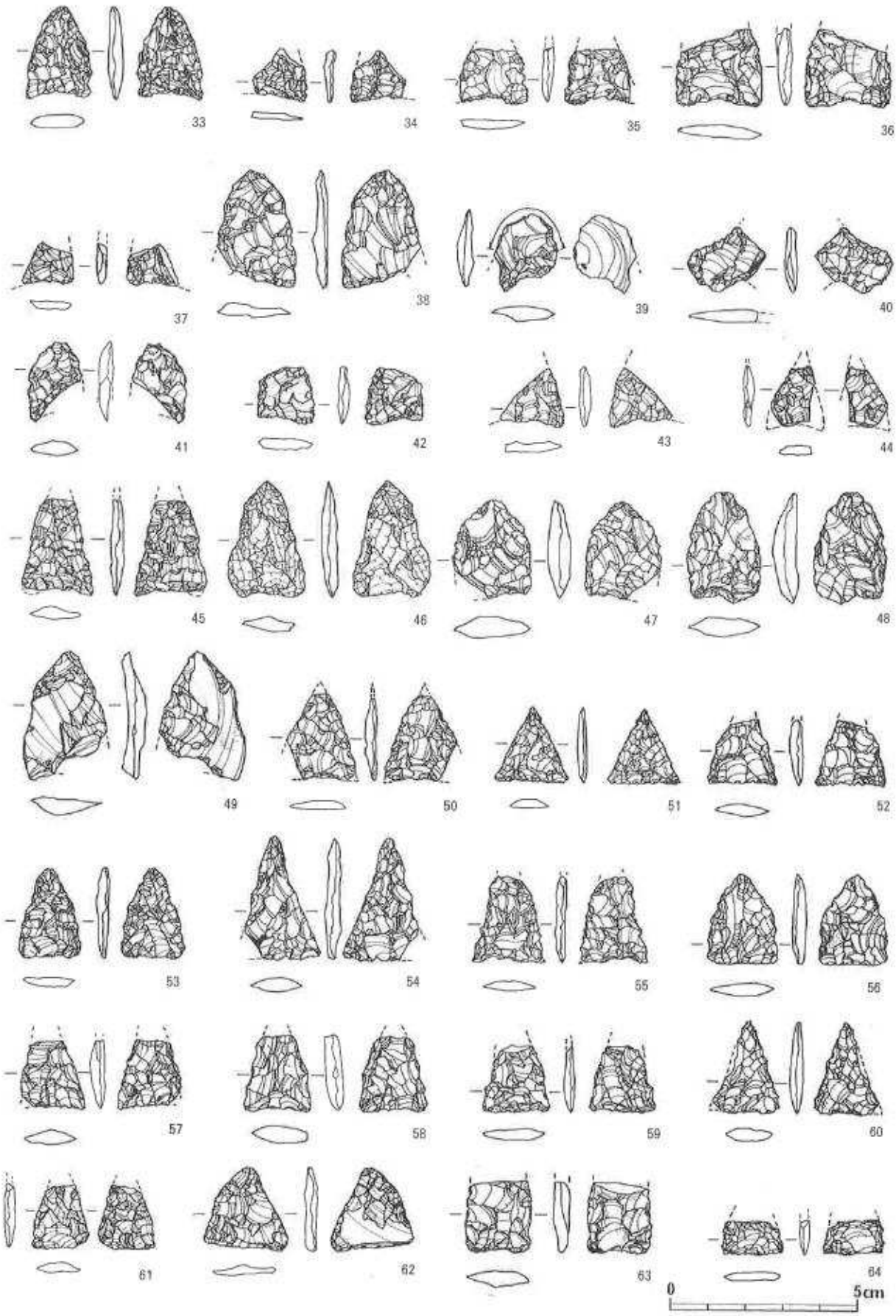
石器は、石鏃（第18図２～第22図、第23図161～163）151点、サイドブレイド（第23図150～160）11点、つまみ形石器（第23図164～168）５点、石錐（第23図169～176、第24図177）９点、スクレイパー（第24図178～第25図200、第27図221・223～226）28点、使用痕ある剥片（第25図201～ 第26図210）10点、石核（第26図211～215）５点、石斧（第27図216～220）５点、礫石器（第27図222）１点の計225点を図示した。

石鏃は剥片鏃（第23図161～163）３点、基部中央の抉入加工が深いもの（第18図２～６）５点、基部がわずかに内彎する凹基鏃（第18図７～第19図50）44点、平基鏃（第19図51～第21図100）50点、円基鏃（第21図101～108）８点、基部形態不明のもの（第21図109～第22図）41点に分類した。剥片鏃は３点とも側縁に使用痕がある。161・162には側縁・尖頭部に調整がみられないが、163の尖頭部には主要剥離面から垂直方向に剥離調整されている。抉入加工が深い石鏃は、６を除いて入念に剥離加工を施している。大型鏃の脚部と思われる５には磨滅部分があり、一時放置した後新しく調整加工したものと考えられる。凹基鏃は入念な剥離を施したものがほとんどで、比較的薄く仕上げている。11は両面の一部に擦痕があり、丁寧なつくりになっている。18・38・41・42の尖頭部は鋭利ではなく、平らに仕上がっている。39は横長剥片のエッジに使用痕を残し、基部の抉入部分を入念に加工している。右脚部は不作出である。平基鏃も凹基鏃と同様平坦剥離を密に行ったものが多い。51・70・71・73・78・96は器形が正三角形を呈し、96以外は緻密な平坦剥離・側縁加工を施す。71・76・83・90・100は尖頭部が平らで、鋭く作出されない。100の基部は、背面から主要剥離面にむかって抉入加工がなされている。円基鏃は101・104を除いて完形で、101以外は剥離調整が粗雑である。104は側縁の中央に張り出しを持ち、浅い抉りをいれて下まで垂直に側縁調整を施す。基部の形態が不明な石鏃のなかで、133・135は尖頭部が不作出である。135には、左下側縁に背面から主要剥離面へ垂直方向の剥離痕がみられる。

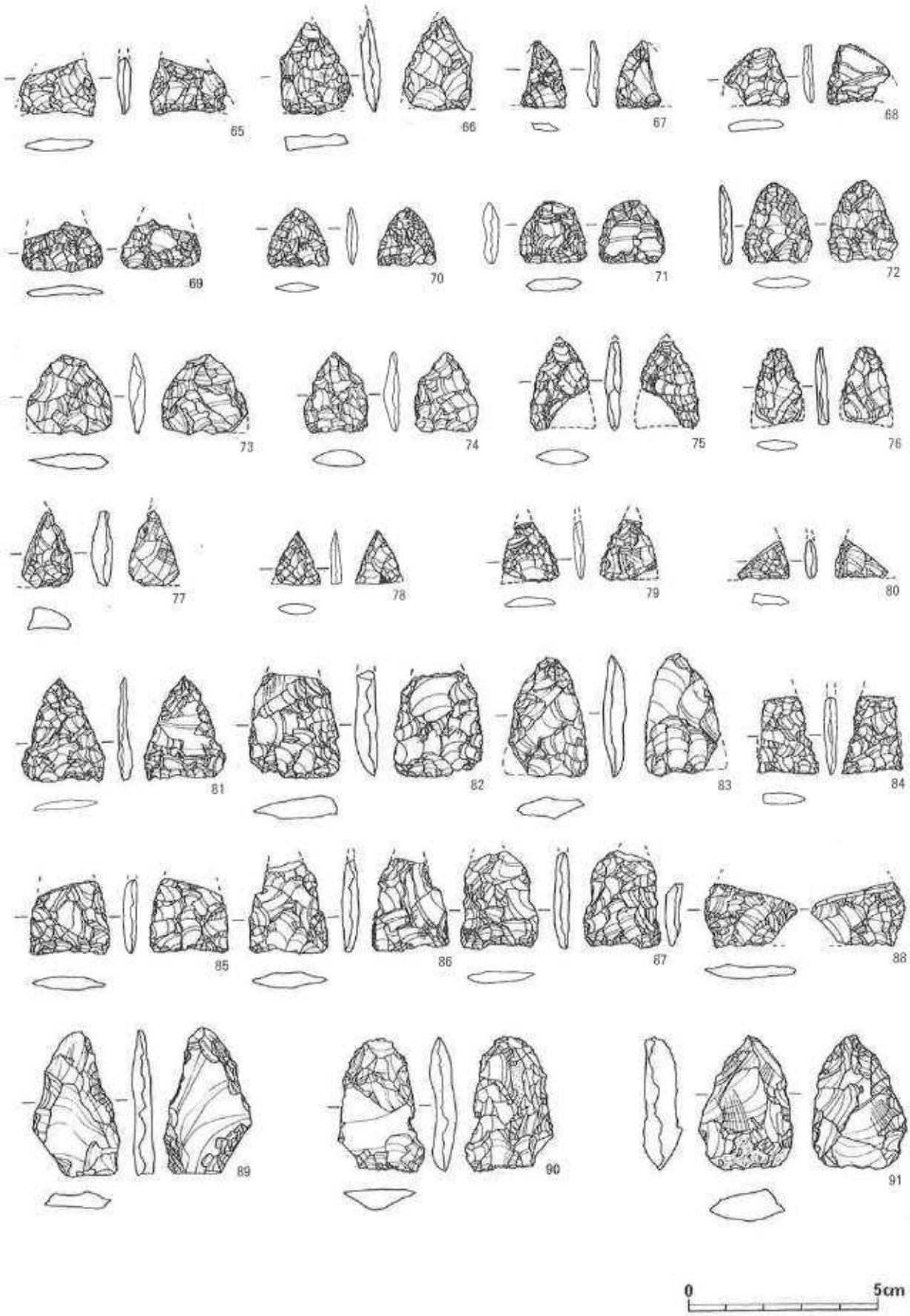
サイドブレイドは160を除いて、器形が方形である。すべて使用痕があり、薄手に仕上げられているものが多い。150・153・160は、鋸歯状の刃部を持つ。特に153は、鋸歯部分を両面から加工している。160は、比較的厚手で、平坦剥離調整が粗雑に行われている。刃部と逆の側縁に背面から主要剥



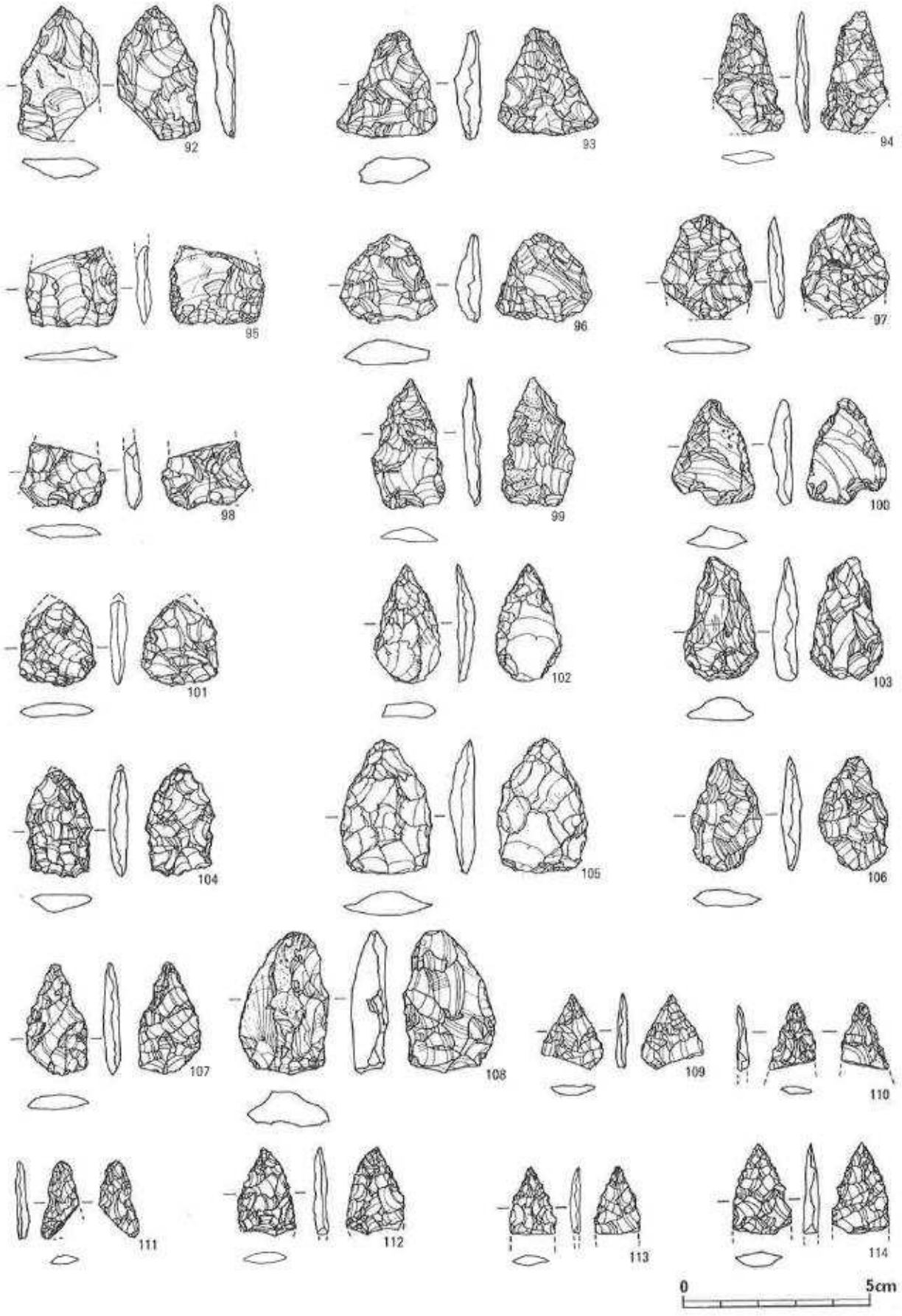
第18図　旧石器・縄文時代の遺物１（２／３）



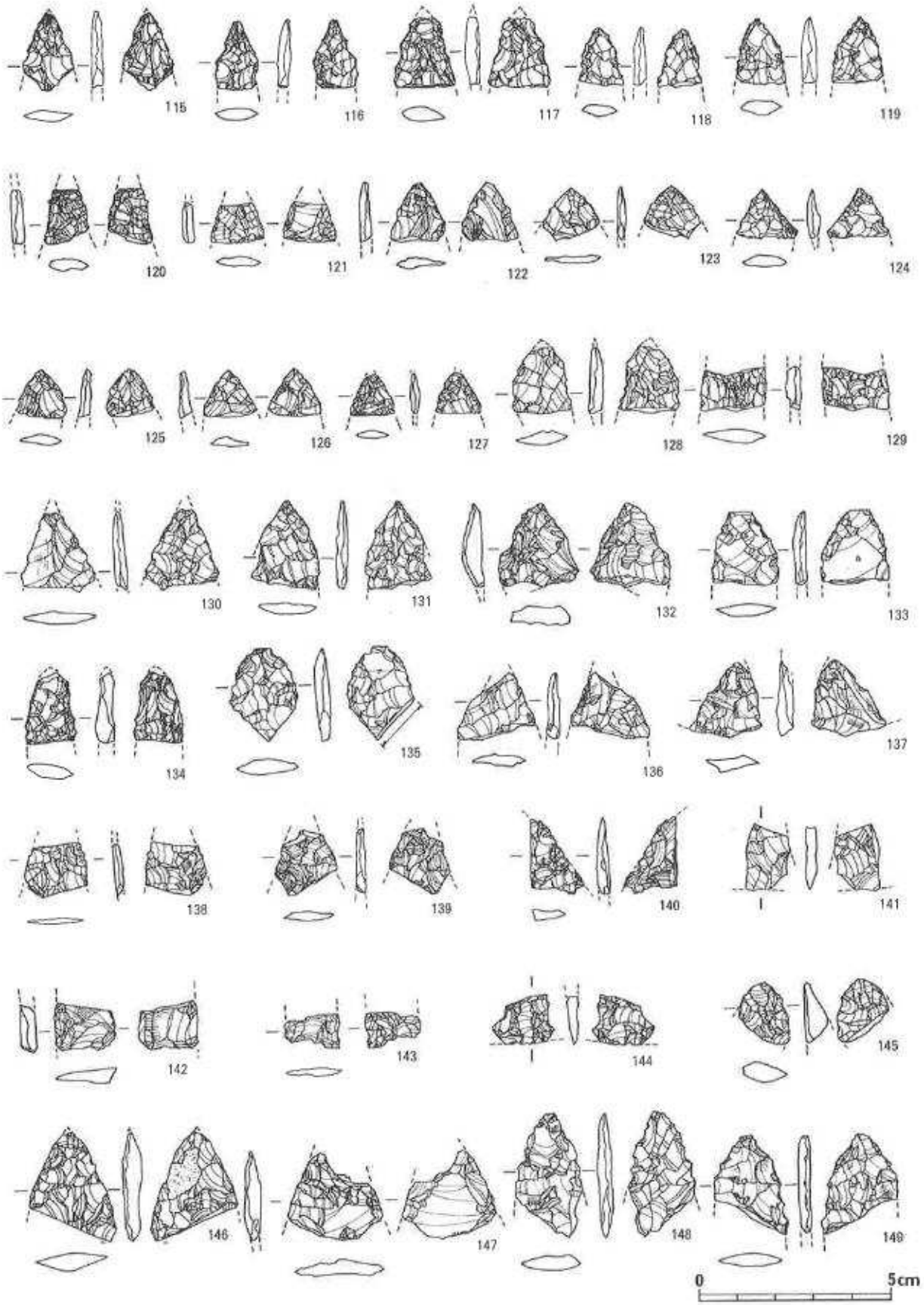
第19図　縄文時代の遺物２（２／３）



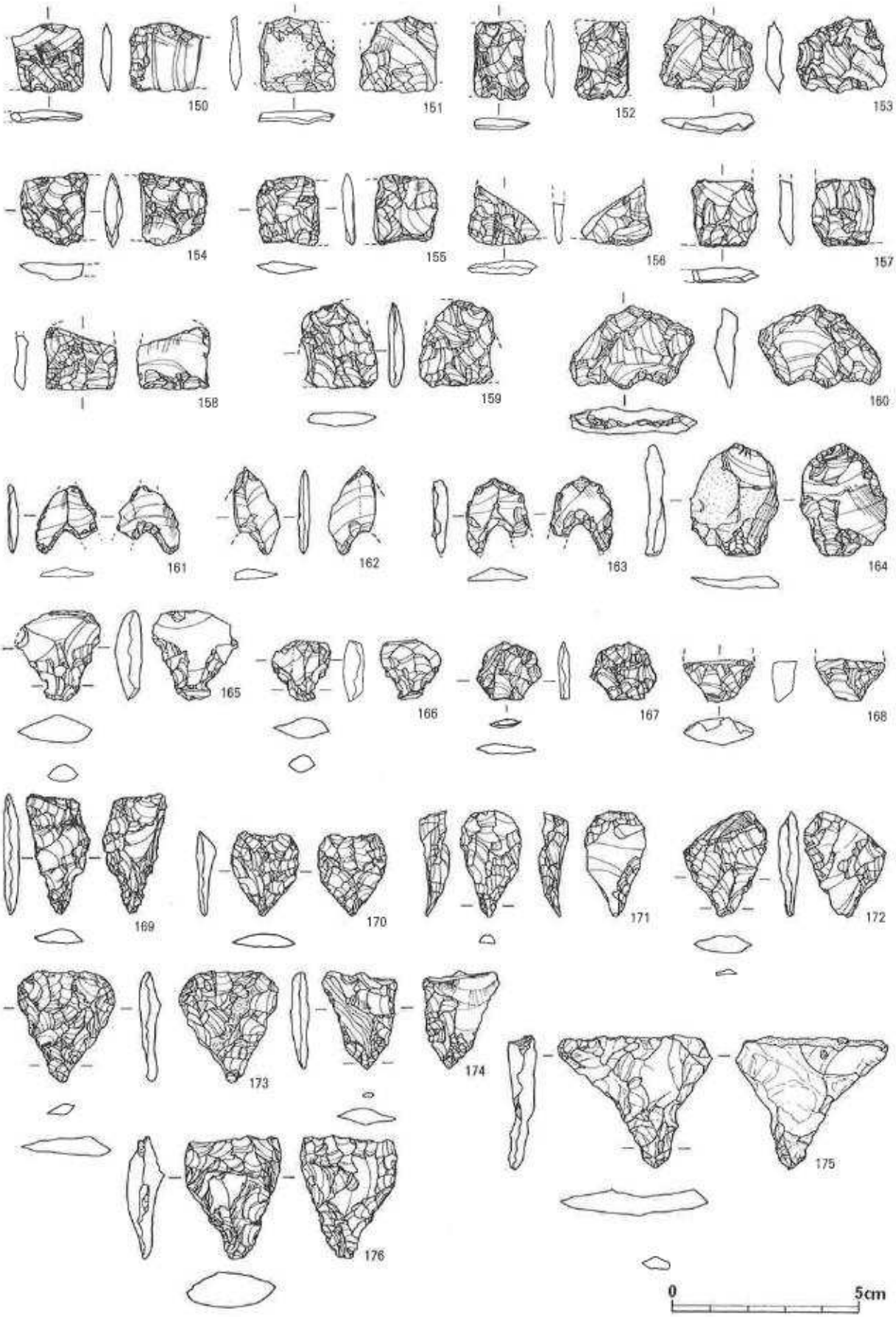
第20図　縄文時代の遺物３（２／３）



第21図　縄文時代の遺物４（２／３）



第22図　縄文時代の遺物５（２／３）



第23図　縄文時代の遺物６（２／３）

離面へ調整痕があり、刃潰し状になっている。他に刃部と逆の側縁に加工痕を持つのは、151・153・155である。152の左側縁と154の右側縁は、刃潰し状を呈する。

つまみ形石器はスクレイパーに転用したものと思われる168を含めた5点を図示した。164は縦長の楕円形を呈し、左側縁と切断面に使用痕が残る。165・166は横長の楕円形を呈し、どちらも背面から主要剥離面へ切断している。167は円形で、背面から主要剥離面へ切断されている。細かい平坦剥離が施されているため、転用されたものと思われる。168は、切断面と左右側縁に使用痕があり、ラウンドスクレイパー的に使用されたものであろう。

石錐は171・175・177が安山岩製で、その他は黒曜石製である。169・171・174は錐部から側縁中央にかけてやや幅広に加工されている。169・172・173・175～177の錐端部には使用痕がみられる。なお、175については、左側縁端部にも使用痕がみられる。

スクレイパーは、形態的機能的に3分類できる。サイドスクレイパーは178・179・183・194・195・221、エンドスクレイパーは186・187・192・197・223～226、ラウンドスクレイパーは180～182・184・185・188～191・193・196・198～200である。178は安山岩製で、刃部の調整はわずかにおさえて横長剥片のエッジを利用し、使用痕のため器形が石槍のように形成されている。179は石核の転用品で、側縁に刃潰し跡が残る。180は横長剥片を用い、右下部の側縁には主要剥離面側には刃潰し状の剥離痕がみられる。181は横長剥片を素材とし、左下縁に刃潰しを行う。182の刃部は、主要剥離面からの入念な調整と使用痕のため、刃潰し状を呈する。185はラウンドスクレイパーが半截したもので、使用による刃潰しがみられる。190の平坦剥離面には磨滅している部分があり、剥離調整には時間差があると思われる。191・192の上側縁は、主要剥離面から垂直方向に剥離を施し、使用痕を持つ。197は大型の黒曜石原石を利用している。自然面を打面とした横長剥片を使用し、バルブを有する。背面には擦痕があり、刃部の剥離調整を一部擦り消している。224は下側縁と左側縁に剥離加工を施すが、右側縁に刃潰しがみられる。

使用痕ある剥片はすべて縦長剥片を利用している。201・207は背面・主要剥離面とも剥離している部分を除いてやや磨滅していた。202は安山岩製で、左側縁の剥片のエッジを使用している。205は右側縁の自然面と背面の接線部分を使用し、刃潰し状を呈する。206は打点に小さなバルブをもつ細長い剥片で、角礫を素材としている。側縁だけでなく背面上端にも刃潰し状の使用痕がみられる。

石核の素材は、すべて角礫である。いずれも寸詰まりの剥離痕であるため、剥片剥離後放棄されたものと思われる。211は自然面を打面として、212は半截した原石の平坦打面から、どちらもほぼ一定方向に剥離している。213・214は前者と異なり、様々な方向から剥離されている。215は平坦面を打点とし、上下からの同時剥離を行っている。鈴桶技法の特徴をもつ。

石斧は打製が1点、磨製が3点、不明が1点である。216は蛤刃磨製石斧で、丁寧な研磨と鋭利な刃部を持ち、敲打痕をわずかに残す。217は磨製石斧で、基部がすぼまる。調整が粗く、背面右半分のみ研磨が残っている。218は、両側縁に敲打痕がわずかに認められるが、磨滅が著しく、研磨されたものかは不明である。219は磨製石斧である。基部付近には入念な研磨がなされているが、刃部付

近には敲打痕が残る。かなり磨滅している。220は扁平の打製石斧である。両側縁に剥離加工を施し、器形を短冊形に仕上げている。

礫石器は222の１点のみである。磨滅のため、稜は丸みを帯びている。双角ではあるが、大きな剥離のため上側縁の彎曲が甘い。短軸部を彎曲に剥離加工しているため、南高来郡北有馬町の今福遺跡から出土した礫石器分類のⅡａ型に相当する。

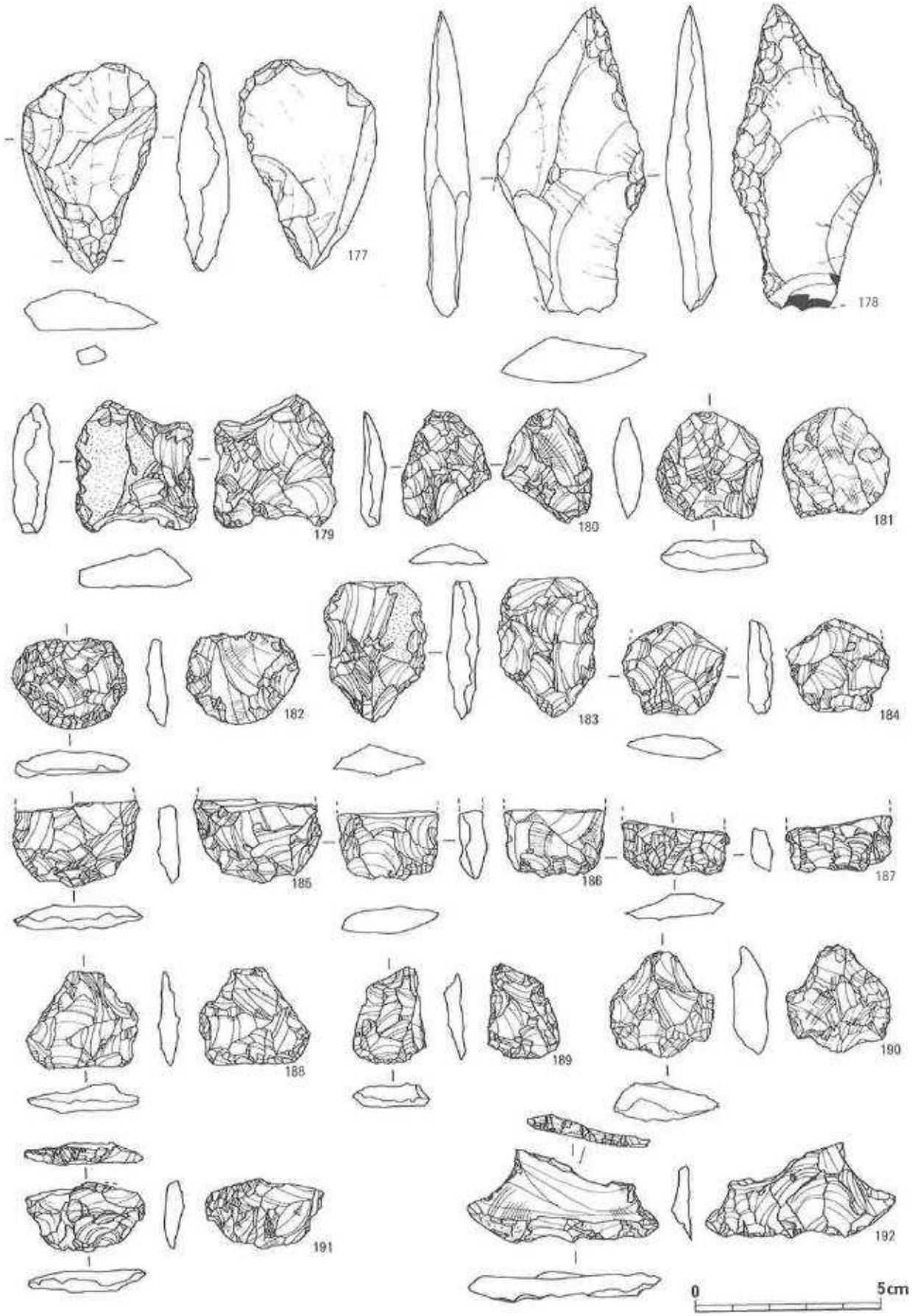
土器は、出土した688点中、74点を図示した（第28図227～第30図300）。砕片がほとんどだが、接合可能なものも数点あり、241のように復元できる土器も検出することができた。しかし、磨滅の程度がひどいものが多く、接合に困難を伴うものもあった。すべて深鉢・浅鉢で、主体は縄文時代晩期中葉の宮の本式から終末の夜臼式である。

227は、滑石を多く含む無文の胴部片である。内面はナデ調整を施す。縄文時代後期のものと思われる。

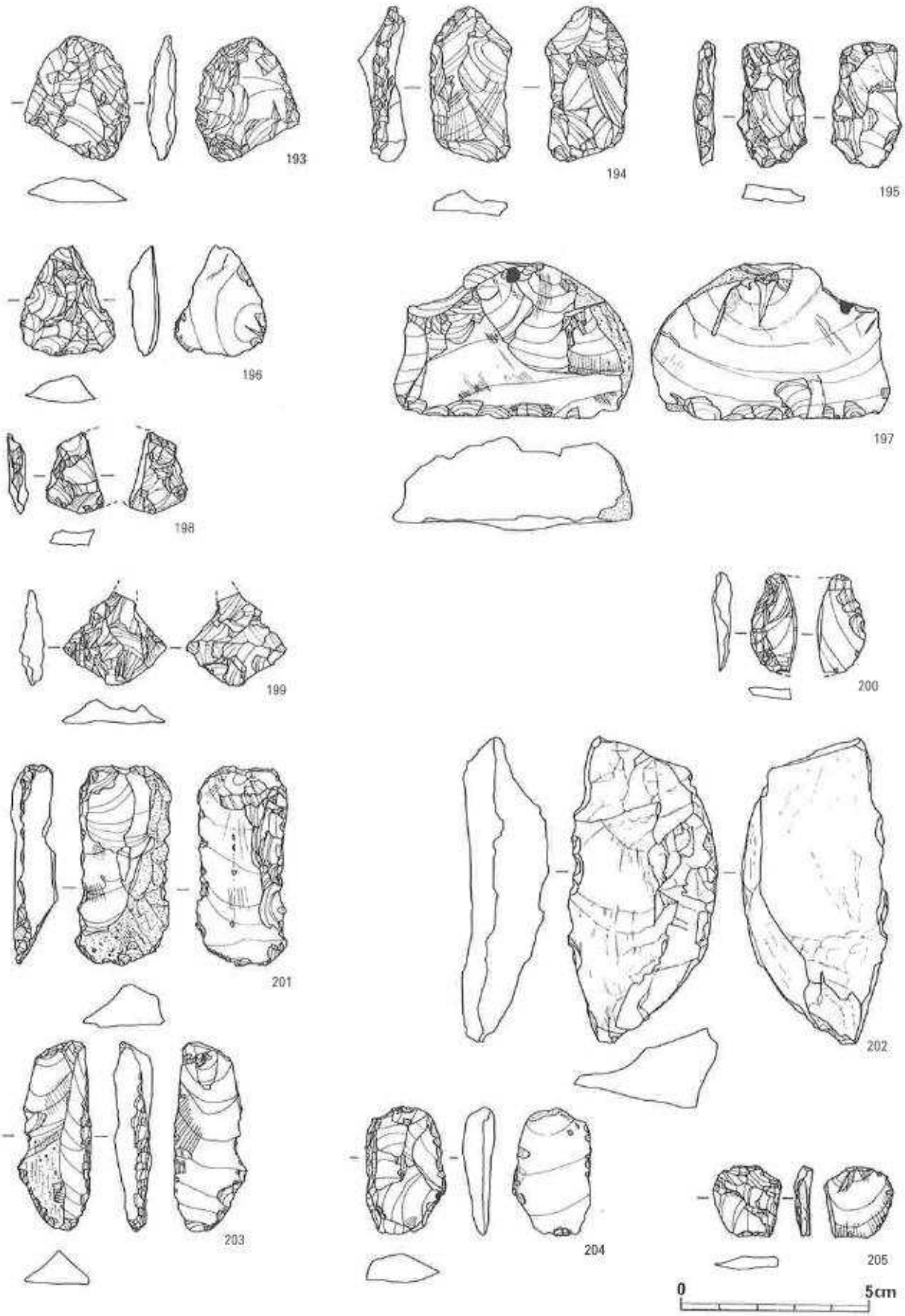
228～233・240・242・244・245・247～249・251・252・265・266・274は、直立かやや広がる口縁を持ち、少なくとも内外片面に条痕がみられる粗製の深鉢である。228は厚い器壁で、ナデ消しや磨滅のため条痕が両面にわずかに残る。229は両面ともはっきり条痕が残り、胴部でやや外彎する。230は器形は229と同様だが、比較的しっかりしたつくりである。外面調整は磨滅のため不明だが、内面は条痕で整えた後、口縁部をナデ調整している。231・232は両面条痕調整であるが、232は条痕調整の後、ヘラ状の工具でナデ調整を行っている。233は口縁部の砕片だが両面条痕調整後、ナデを施す。両面条痕が認められるものは240・244・247・248、外面に条痕、内面にナデを施すものは249・252・265、274は内面のみ条痕、245・251・266は両面ナデを施す。同じ粗製深鉢でも、口縁が内彎するものは242・243・254・258である。242・243は条痕がはっきり残っているが、254は外面の条痕を、258は両面ともナデ消している。266は口縁内面が鋭利に作出されている。口唇直下にヘラで削り取った跡がみられる。深鉢胴部片とみられる264には器壁に条痕が残り、内面はそれを消すためにナデを施す。

浅鉢と考えられるものに、253・255～257・259がある。そのうち、255～257は精製土器である。253は外面の上部に指圧痕と下部にヘラナデ痕、内面に幅広のヘラ具による横ナデを行う。ほか４点は、胴部から口縁へ直線的あるいはやや外彎気味に立ち上がり、口縁内面に突出部分をもつ。255は、直線的に胴部から口縁部を立ち上げている。口縁を工具で掻き取って口縁内面を突出させ、内面をヘラミガキしている。256はミガキはされていないが、丁寧なナデ調整がされているもので、口縁端部を工具で掻き取り、口唇を平坦にして、断面を「T」字状に形成している。この類例として、南高来郡小浜町所在の朝日山遺跡に１点みることができる。257・259の口縁部も255と同様のつくりをしている。

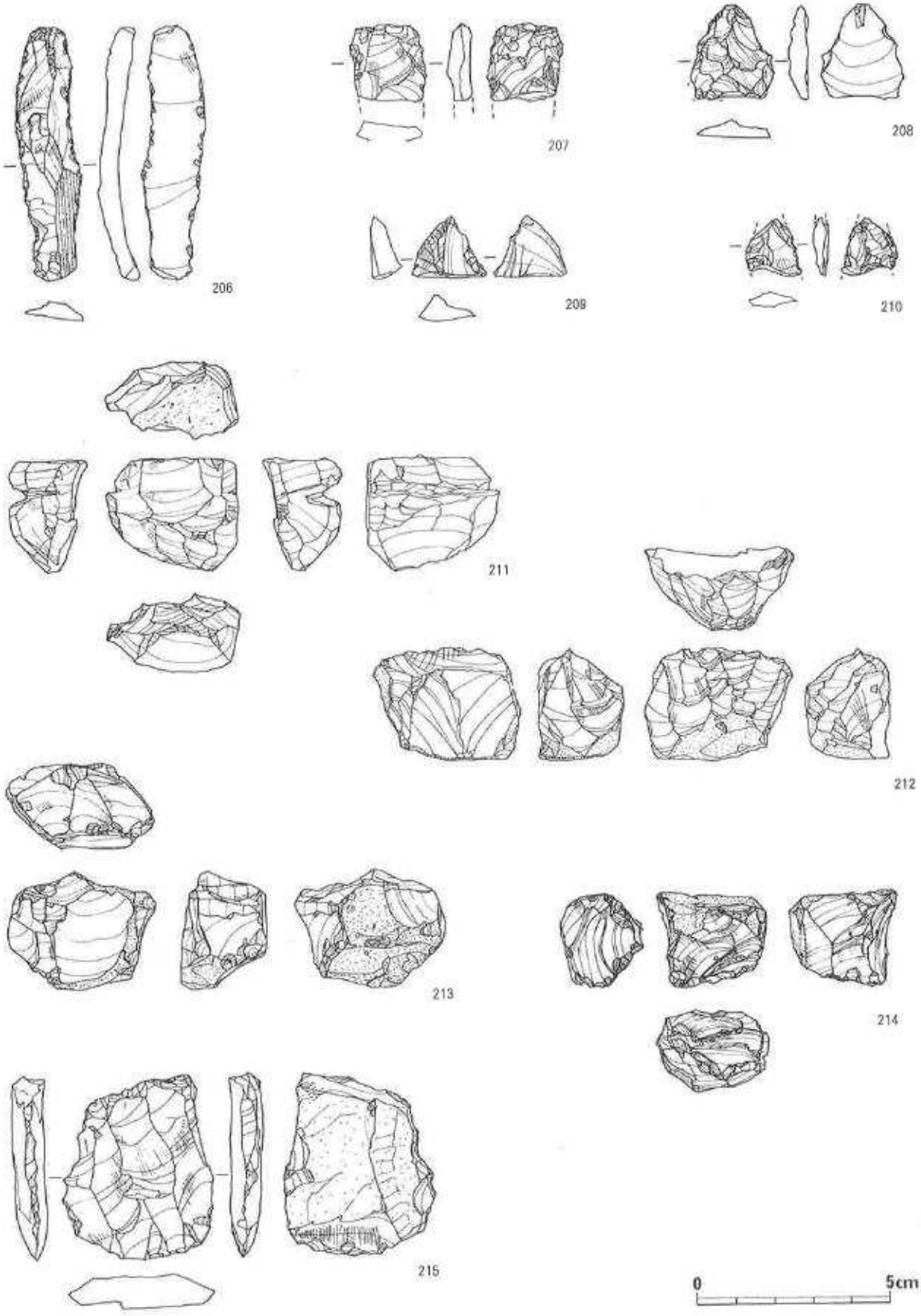
リボン状突起を口縁にもつ鉢は、234～239・241である。234は、口縁内面にわずかな隆起部分をもつとみられる浅鉢の口縁部である。胴部がゆるやかに屈曲し、リボン状突起が外反している。かなり磨滅しているため調整痕は不明だが、ミガキ目は認められない。235は深鉢の口縁部で、磨滅のため



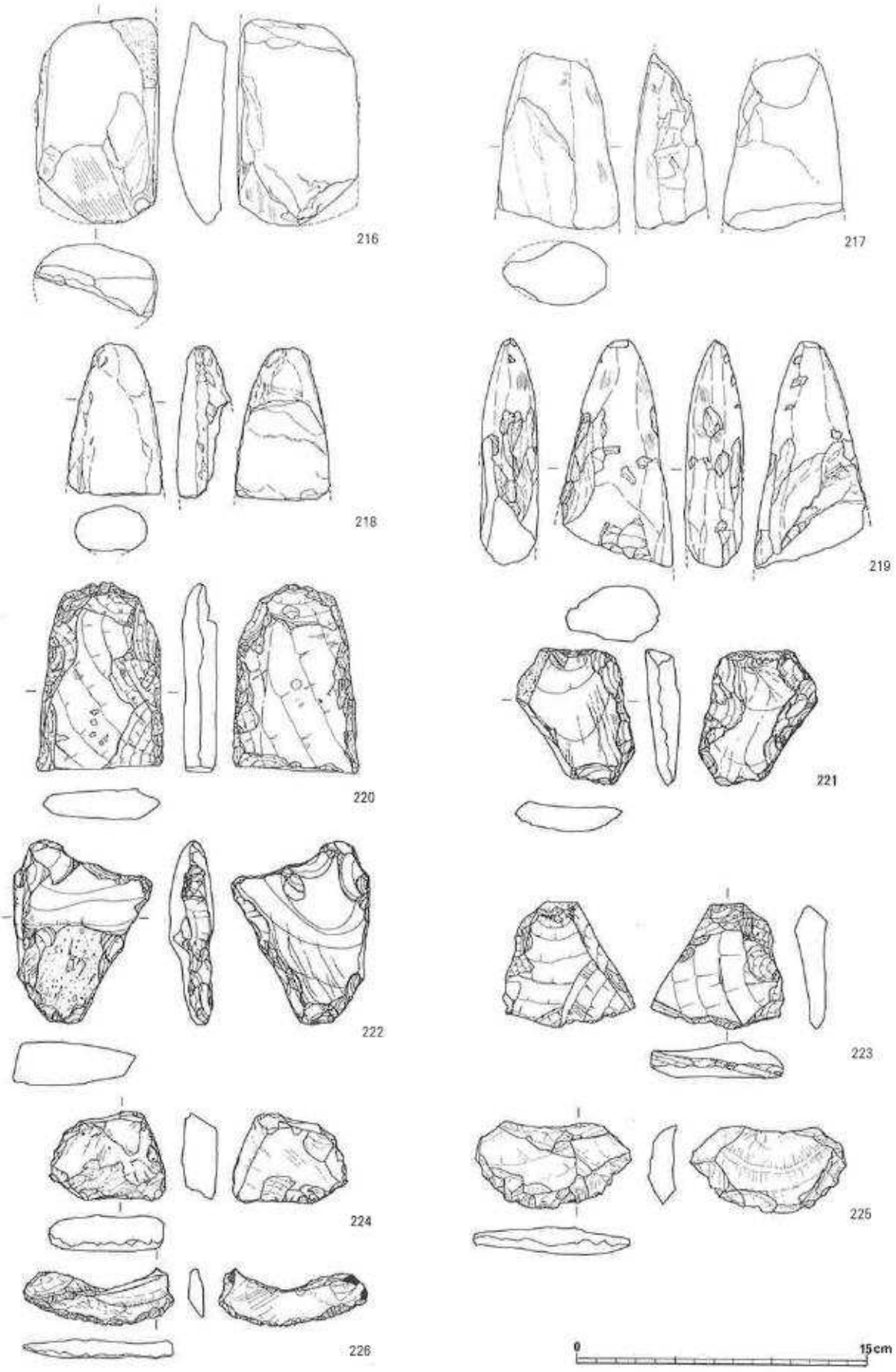
第24図　縄文時代の遺物７（２／３）



第25図　縄文時代の遺物８（２／３）



第26図　縄文時代の遺物９（２／３）



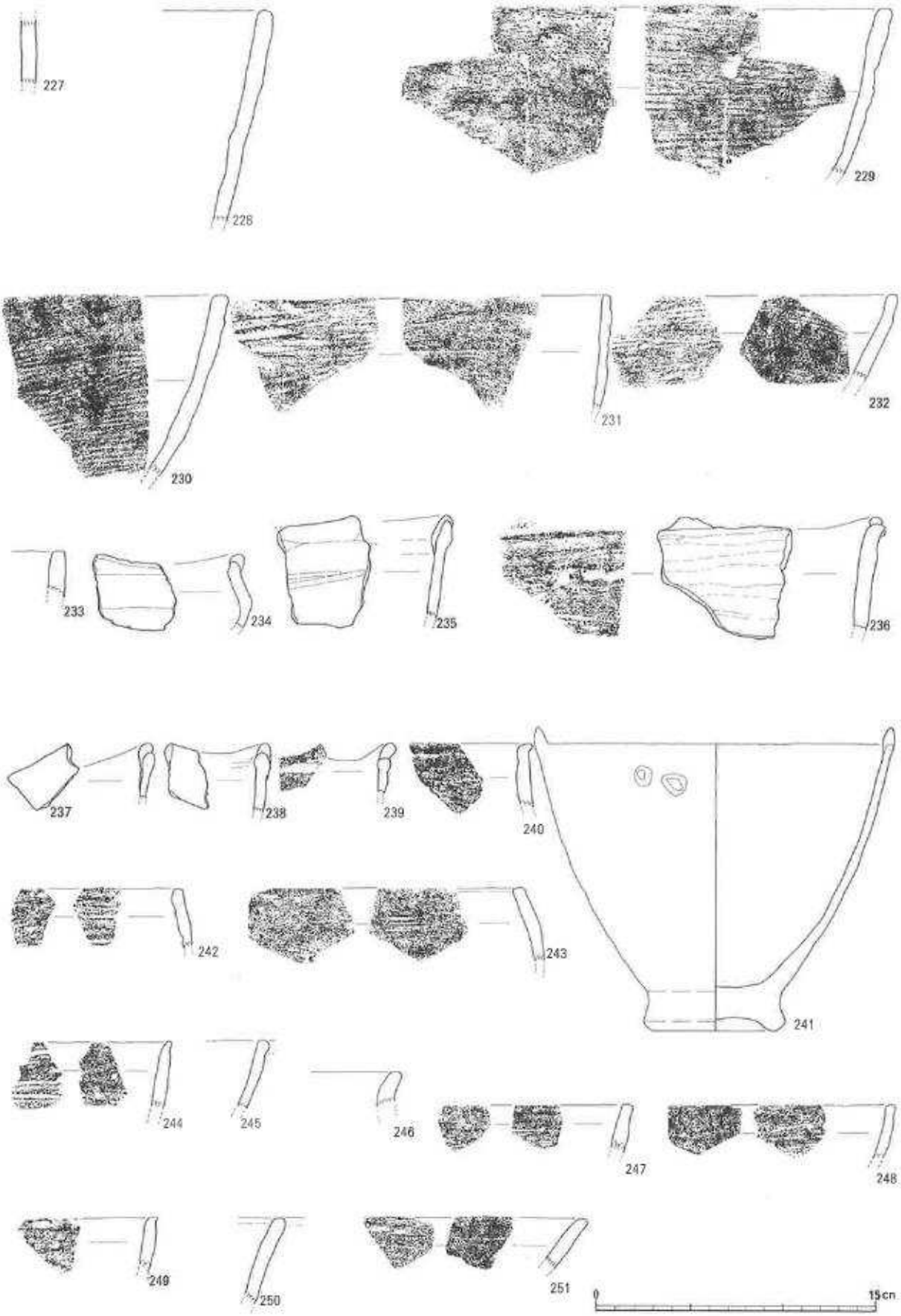
第27図　縄文時代の遺物10（２／３）

調整は不明瞭だが、条痕が外面にわずかに残る。突起の下端には、突起接着時に突起を指押しすることによって生じた凸部分が残っており、突起の最も高い部分の接着部分では特に肥厚している。粗製である。236は、張り付け痕が明白な突起をもつ深鉢の口縁部である。外面調整は条痕後ナデ、内面はナデを施す。粗製である。237は精製の浅鉢と思われる口縁部である。胎土は堅緻で、突起接着痕のはっきりしたものである。外面に条痕が残るが、内面はナデ調整を行う。238は鉢類の口縁部で、外面に条痕が残るが、内面はヘラナデが施される。突起下に張り付けのための段差がみられる。精製土器である。239は、内面にミガキが施されている浅鉢の口縁である。外面の突起下に、ヘラ書きによる断面「V」字形の沈線をめぐらす。241は、器形の約3分の2を検出した、リボン状鰭状突起をもつ鉢である。底部は上げ底で、すぼまり気味である。やや内彎しながら口縁部に至り、口唇は丸くおさめている。器壁調整は、条痕調整後丁寧にナデを施したものとみられ、粗製である。突起は「山」形で、1カ所に接着されている。2カ所の補修孔が外面から穿孔されている。鰭状突起は、佐世保市宮の本遺跡に類例をみる。

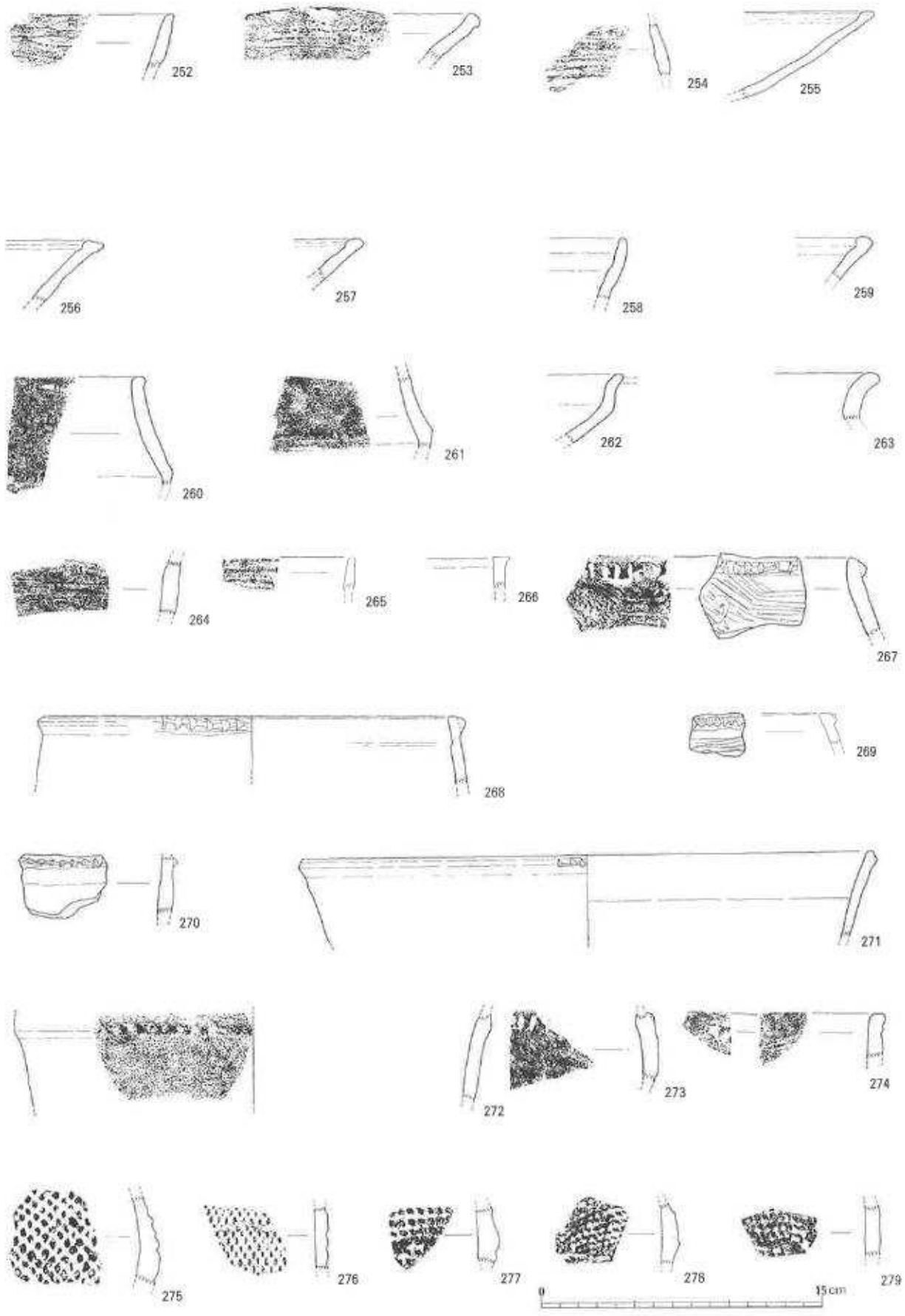
組織痕土器（第29図275～279）は、すべて網目状である。275～277は整然と並んだ網目痕をもつ。内面調整は、275がハケ状の工具、276には丁寧なミガキを施し、277～279はナデ調整を行っている。

246・250・260～263・267～273は晩期後葉の遺物である。250・260・261は深鉢の口縁部から頸部にかけてである。250・260は粗製で、条痕を残す。261は精製で、条痕を丁寧にナデ消し、外面の屈曲部直下にヘラ目が残る。262は浅鉢の口縁部で、口縁外面に丹がわずかに残る。246・263は甕と思われる口縁部砕片である。267～273は刻目突帯文をもつものである。267は断面台形状の突帯をもち、刻目は左から右へ押し引いている。外面に条痕を残す。268は断面正三角形状の肥厚した突帯に左右から刻目を施す。堅緻である。273は口唇に直接刻目をつけたらしく、突帯は認められない。270～273の刻目は右から左だが、269のそれは左から右である。

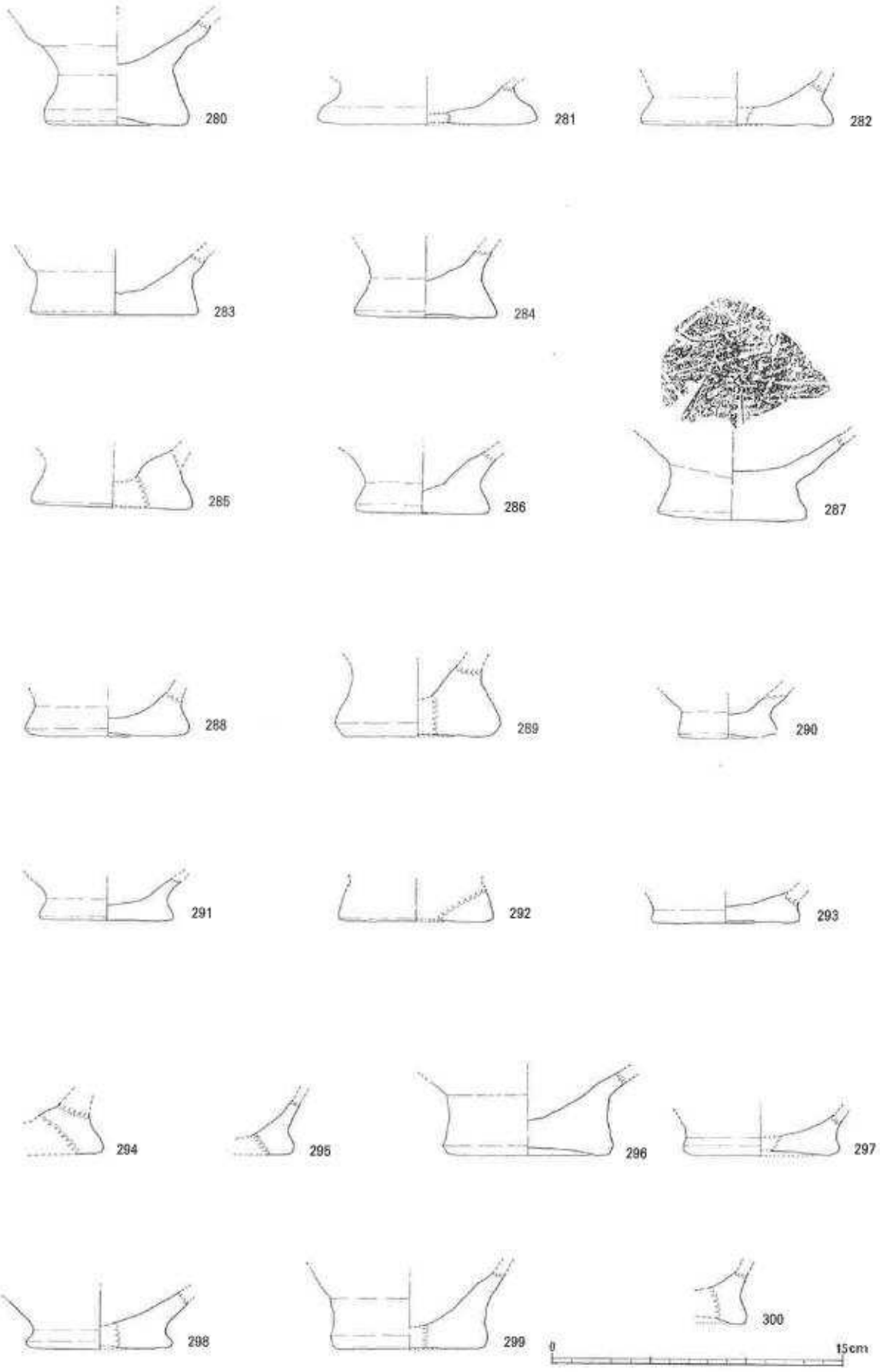
280～300は、鉢類の底部である。磨滅がひどく、ほとんどの砕片の調整痕が不明である。その中で、287は底部内面に細いヘラ目を残している。



第28図　縄文時代の遺物11（1／3）



第29図　縄文時代の遺物12（1／3）



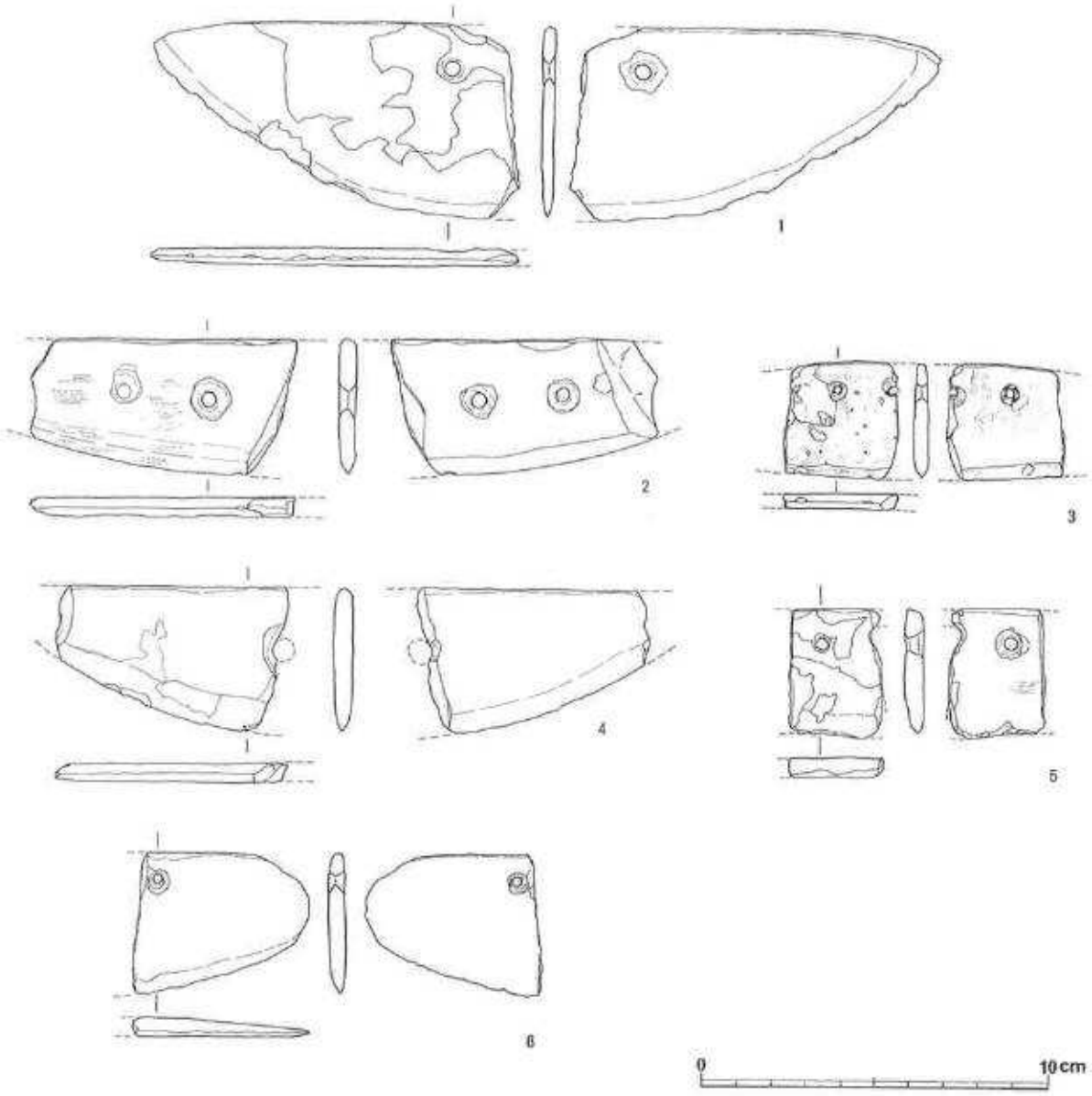
第30図　縄文時代の遺物13（1／3）

Ⅲ．弥生時代の遺物（第31図～第34図）

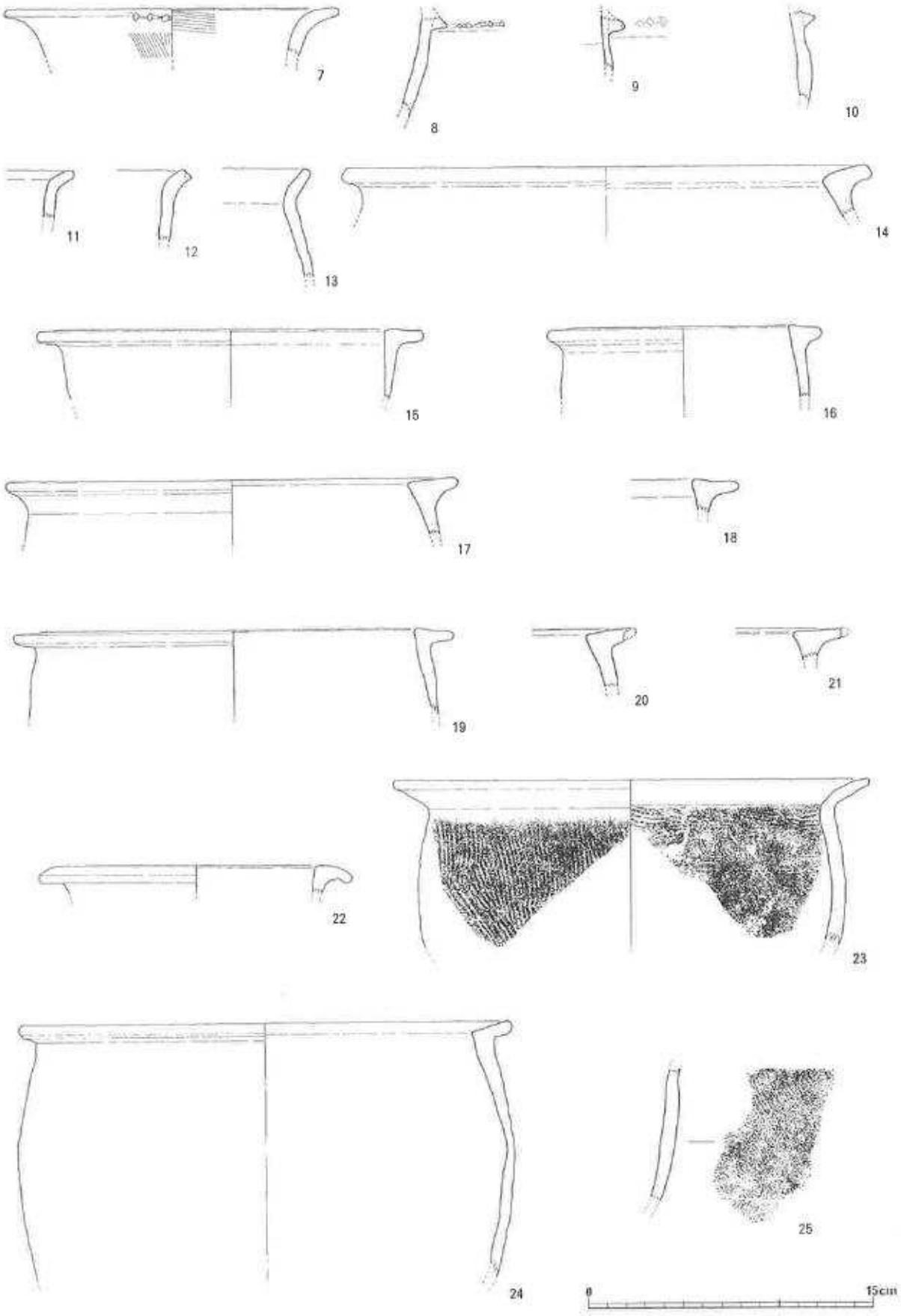
石庖丁が６点出土しており（第31図）、土器は前期から中期にかけてのものが中心になっている（第32図・第33図）。また、同層から木製加工品が出土しており、これも弥生時代の遺物に含めた（第34図）。

石庖丁は計６点出土し、調査区域の南側微高地からばらばらと検出した。器形は１・２・４が長い三日月状を呈するもの、６は楕円形のものと考えられる。１～４は両刃、５・６は片刃である。１は、刃部を丁寧に作出し使用痕がみられるもので、基部を平坦に加工している。石材は泥岩とみられる。２・４は砂岩製で、比較的胴部中央寄りに孔が２カ所穿たれている。３は丁寧に研磨された粘板岩製と思われるもので、刃部を鋭利に作出している。右側の穿孔は、両面ともややずれた位置から穿っている。５は玄武岩製で、右側縁を研磨されている。両面研磨されているが、粗雑な感がある。穿孔は主に片面から行われる。６も玄武岩製で、片面は剥離した礫の主要剥離面を利用している。

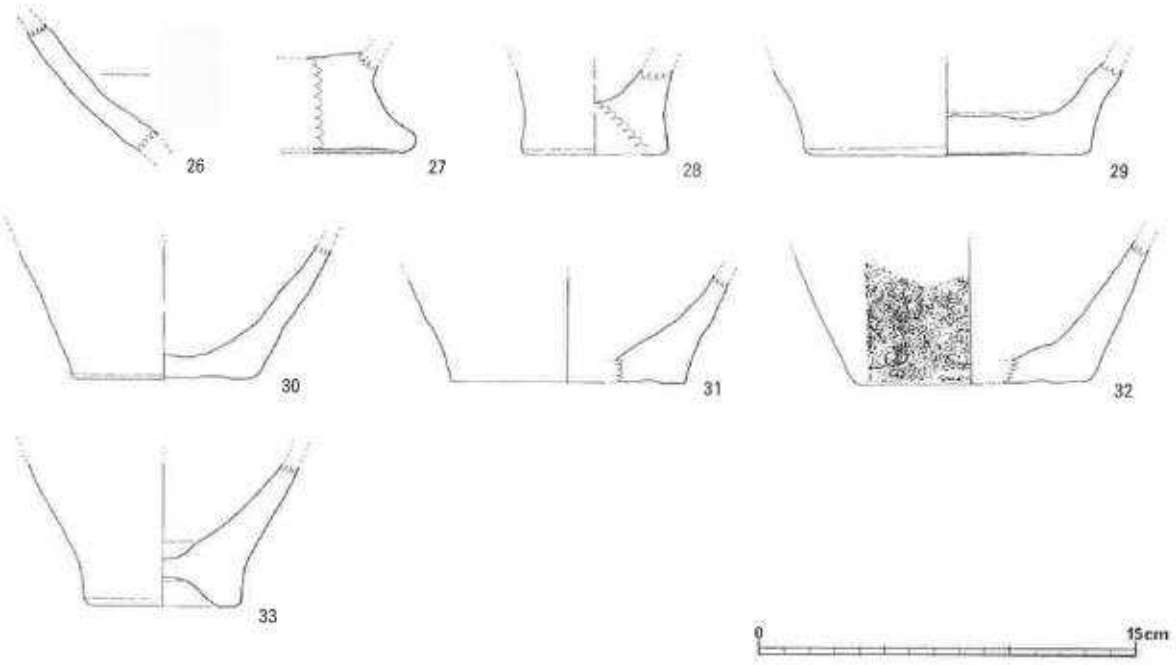
土器は、主に刻目突帯文をもつものと、鉤形口縁をもつものが出土している。７・13は刻目を有する口唇をもつ甕片である。７の刻目は左から右にむかう押し引き文、13のそれは右から左へむかう押し引き文で、両方とも粗雑である。13は外面にハケ調整、内面にナデを施す。８～10は断面三角形の突帯に、粗雑な刺突文をもつ。刺突後に突帯の調整を行ったと思われる。11・13は如意状口縁の甕片である。11は両面ナデ調整を施し、13は外面にハケ目、内面に指圧痕を残す。14～22・24は鉤形口縁の甕片である。14は口縁内面にわずかな張り出しをもつもので、口唇端部が若干膨らんでいる。ハケ調整後ナデを施し、焼成はやや不良である。15は摩滅が著しく、調整は不明である。焼成は不良。16は丁寧なつくりで、比較的短い口唇をもつ。口唇の内面側が上に突出しているが、内面に張り出しをもたない。口唇・外面はハケ調整、内面はハケ調整後ナデを施す。胎土は堅緻で、焼成は良好である。17は内彎気味に立ち上がった甕の口縁部で、外面の口縁下は粘土張り付けのため肥厚している。全面ナデを施す。焼成は良好。18はわずかに内傾した甕口縁部である。焼成はやや良好。19は口唇内面が若干上部に突出する甕口縁部である。やや内彎し、口縁付近から肥厚している。調整はナデで、焼成は良好である。20・21は磨滅がひどく、口縁端部は不明である。21は、口唇内面が突出している。焼成はどちらも不良である。22は口唇端が下がる甕の口縁部で、内面は垂直に立ち上がっている。焼成はやや不良。24は口唇端部に膨らみをもった甕の口縁部から胴部にかけてのもので、堅緻なつくりである。外面は不明だが、口唇はハケ調整、内面はナデ調整がなされる。焼成は良好。25は甕口縁下の屈曲から胴部にかけての破片で、口縁は如意状を呈すると思われる。外面はハケ調整、内面はハケ調整後ナデを施す。26は壺肩部で、丹が塗布されている。外面はナデ、内面は指ナデを施す。肩部には、屈曲による段がみられない。23は甕口縁部で、土師器的な胎土で形成されている。「く」字形口縁で、屈曲部の稜はゆるやかである。外面は縦方向にハケ調整、内面は屈曲直下まで横方向にハケ調整、下はナデられていて、一部ヘラ具で掻いた跡がみられる。調整後は化粧土が薄く塗布されている。焼成は良好。27～33は甕あるいは壺の底部である。29・30以外は焼成が良好である。28・31～33の外面にはハケ目が残り、31・32の内面には指圧痕を残す。



第31図　弥生時代の遺物１（１／２）

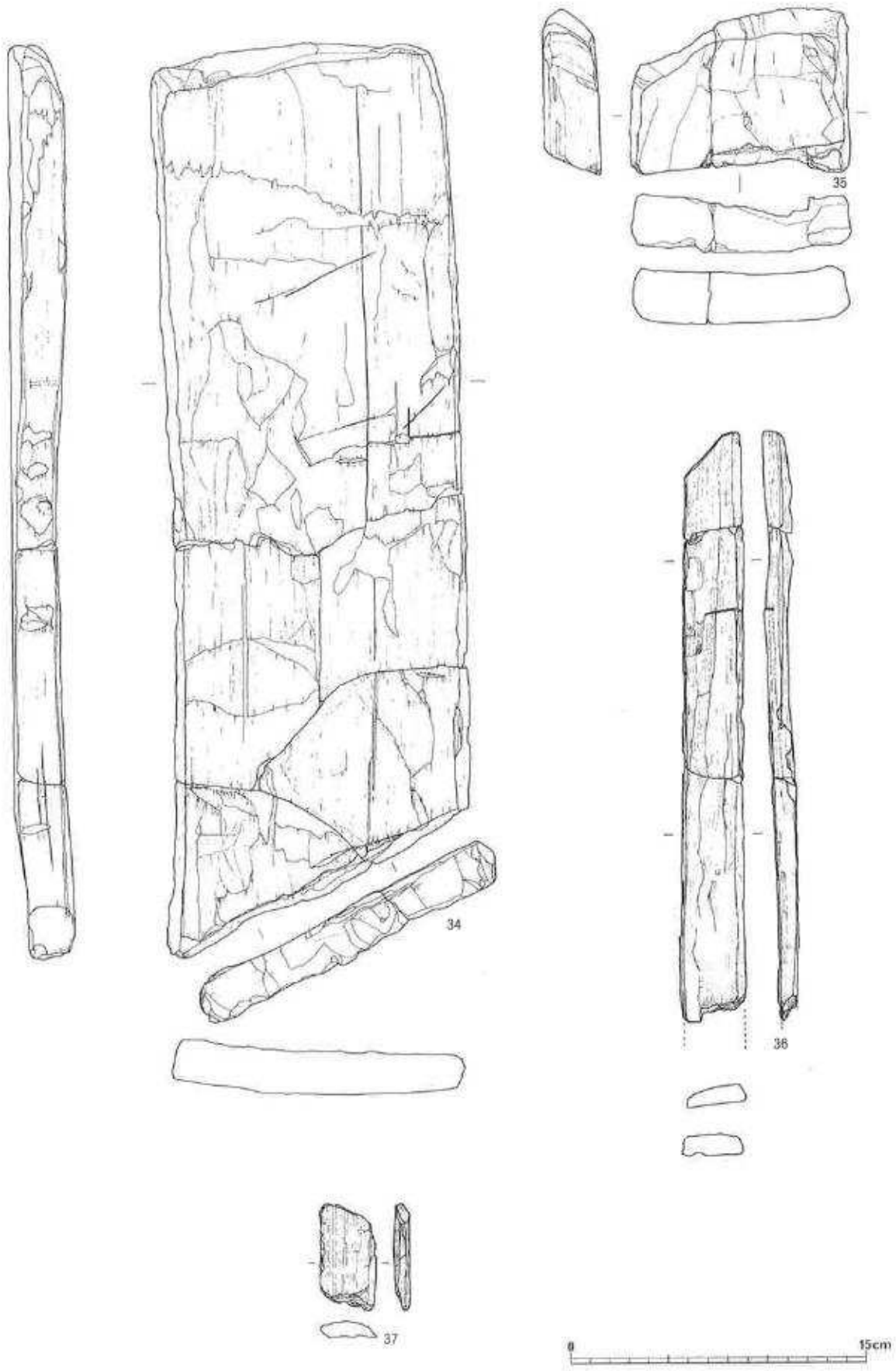


第32図　弥生時代の遺物２（１／３）



第33図　弥生時代の遺物３（１／３）

木製加工品は、すべて両面を平坦に加工しており、資材と考えられるが、用途は不明である。１は上側縁以外加工痕があるが、わずかに認められるだけで削りの方向は不明である。35も上側縁以外は加工痕がみられ、一部分だが削りの方向が確認できる箇所がある。36は上側縁に斜行した整ったカット面をもつ。その他のエッジも鋭利に調整されている。37は36に続く木片と考えられるが、接合しなかった。



第34図　弥生時代の遺物４（１／３）

Ⅳ．古墳時代の遺物（第35図～第45図）

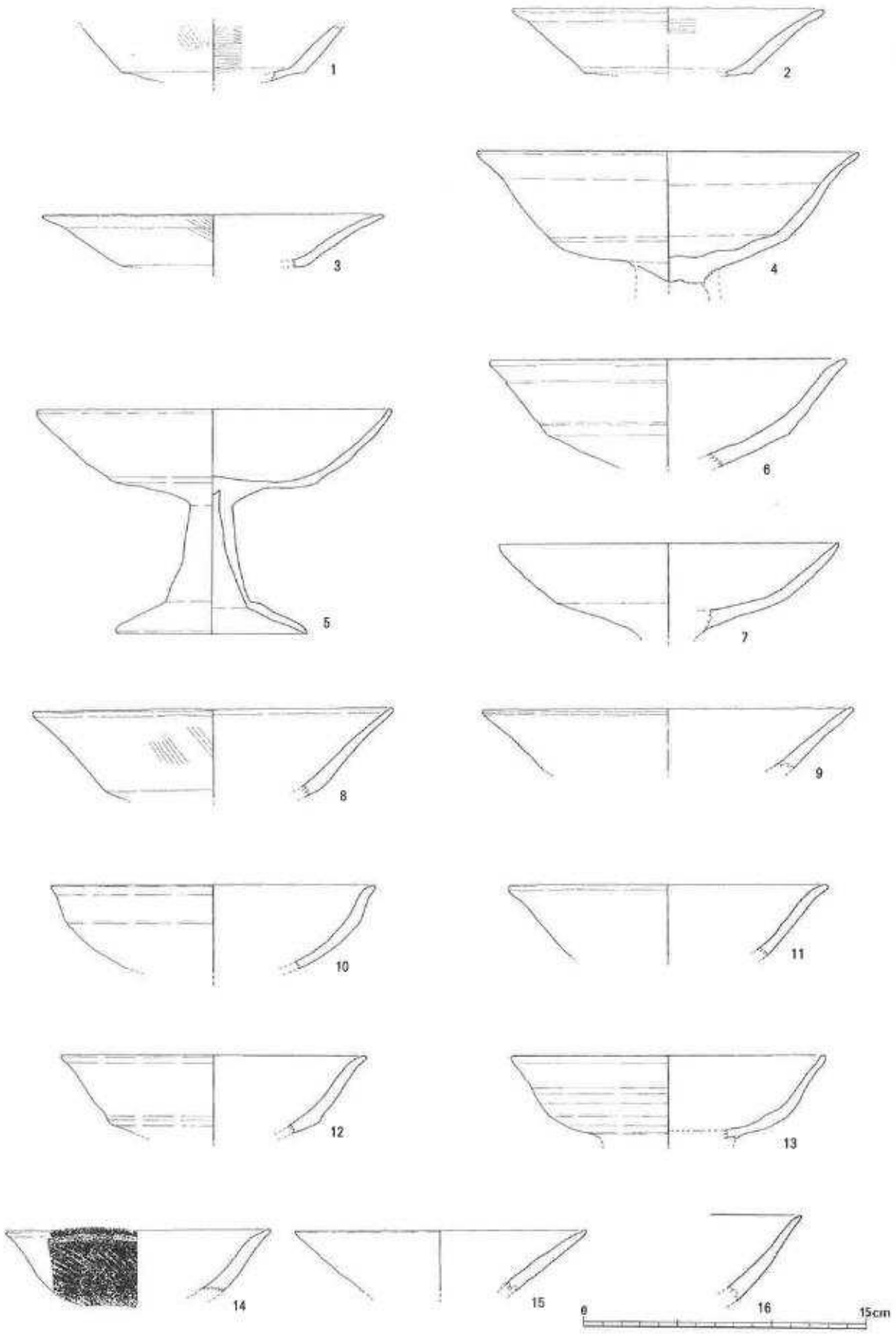
出土した土師器の器種は、甕・壺・高坏・坏・手捏ね・製塩土器で、その中から計102点を、須恵器の器種は、甕・壺・坏・高坏・鉢で、計80点を掲載した。

土師器は、砕片・磨滅したものがほとんどであった。甕は第37図・第38図、壺は第40図、高坏は第35図・第36図・第41図（97～100・103）、坏は第39図・第41図（94・95）、手捏ねや製塩土器などは第41図に図示し、図版どおり順を追って解説していく。

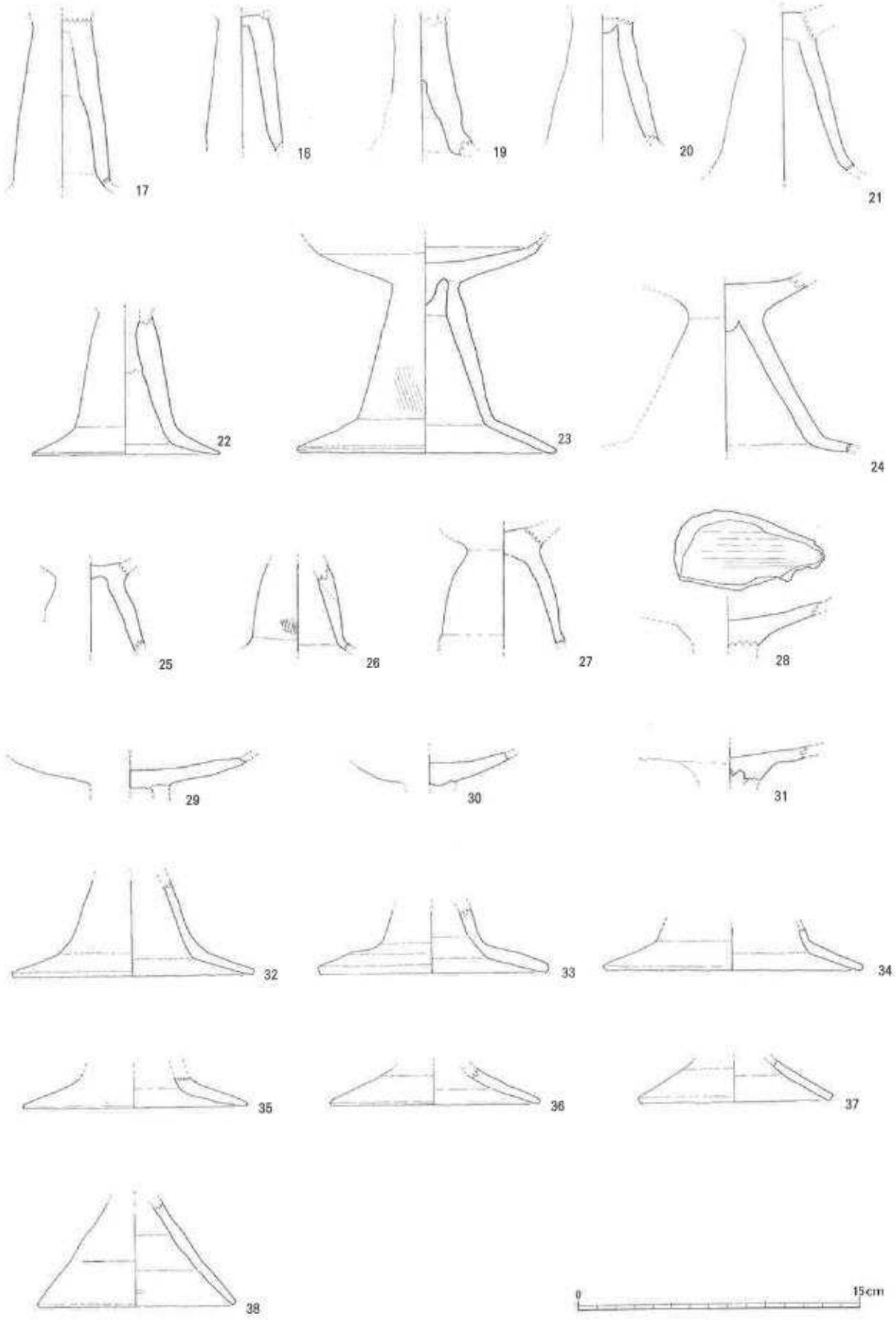
高坏は、坏部が残存しているものについては、坏胴部と同底部の接着による稜が明確なものと、稜が不明確なものとに分けられる。前者には1～6・8・9・12、後者には7・10・13が含まれ、他は不明である。有段高坏はまったくみられないため、時期的に古墳時代初期とは考え難い。1は比較的小型で、屈曲部復元径9.7cmを測る。口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁は外反する可能性がある。焼成はやや良好で、器壁にハケ調整を行う。2・3・12の器壁はゆるやかに外反し、口縁で朝顔状に広がる。磨滅が著しいが、ハケ目がわずかに残る。化粧土を施し、焼成はやや良好。4は、坏部がほぼ完形の状態で出土したもので、復元できる個体の中で最大の口径を測る。胴部は器壁が肥厚し、口縁は外反する。胴部の張り付け痕は残るが、1～3のように明確ではない。焼成は良好で、ナデを施す。5は、坏部と脚部をつなぐ部分は検出できなかったが、8割ほどの破片がそろったため、全体を復元した。口径の方が器高より大きく約1.6倍、坏部は4と比較して浅く形成される。底部は若干盛り上がり、坏胴部から口縁にかけてやや内彎している。磨滅が顕著だが、脚底部内面にハケ目が残り、化粧土が全体を赤く彩っていた。焼成は、やや不良。6は比較的厚手で、口縁は外反する。外面には無秩序なヘラ書き沈線、内面には化粧土を残す。焼成は良好。7は、口縁がやや内側にすぼまるもので、胴部の稜が目立たないものである。磨滅が著しいが、化粧土は全体に塗布されていたようだ。焼成は良好。8は、胴部から外彎し、7より口縁が内側にすぼまるものである。焼成は良好で堅緻だが、磨滅している。9は胴部接合部分で折れたもので、胴部は直線的に立ち上がる。焼成は良好で、化粧土を施す。10は丸みを帯びた器形で、外面はハケ調整、内面はナデ調整を行っている。口縁は外反し、口縁下は粘土紐のため肥厚する。化粧土を施し、焼成は良好である。11の胴部は丸みをもち、口縁が外反するもので、9と同様に接合部分で折れている。焼成は良好で、外面にはハケ調整、内面にはナデを施す。14は外面にハケ目をもつもので、9・11と同様に胴部接合部分で欠落する。厚手で、復元口径は小ぶりである。口縁は外反し、内外面にヘラを当てて、口唇を細く形成している。内面にはナデを施し、焼成は良好である。15は、口縁は細くすぼまり、胴部が直線的に立ち上がるものである。調整は不明だが、化粧土を施し、焼成は良好である。16は丸みを帯びた器形で、磨滅が著しいものである。化粧土を施し、焼成は不良である。13は胎土が緻密で、外面にはヘラ削りを行っているため、時代は下るものと思われる。17～27は脚部、28～31は坏底部、32～38は脚底部である。脚部において、17・18・20・22は堅緻で、焼成は良好である。19は中実で器壁が厚く、粗雑な感じがする。焼成は不良。21の焼成も不良だが、両面調整は丁寧に行っている。23は、やや離れた調査区から出土した円盤状の坏底部と、復元可能な脚部を同一個体として接合したものである。坏底部は胴部と

の接合面から上部を欠損し、やや磨滅している。脚部は直線気味に立ち上がり、底部の末端はヘラで面取りされる。外面はハケ調整され、内面は時計回りに掻き取っている。焼成は良好。24は、厚手でがっしりした器壁をもつもので、脚部はしっかりと踏ん張った状態である。焼成はやや良好。25～27は、エンタシス状の脚部である。25・27は坏底部と脚部を接合する凸状の突起を指圧してつぶし、器壁にナデつけている。焼成は25・26が良好、27は不良である。31は化粧土を施す。28・31の焼成は良好、29はやや良好、30は不良である。33は堅緻なつくりで、器形も丁寧なナデによって端麗に仕上げられている。38は小型高坏の脚部で、外面に横方向のヘラ書き沈線を刻む。32～34・36・37は化粧土を施し、32の焼成は不良、33～38は良好である。

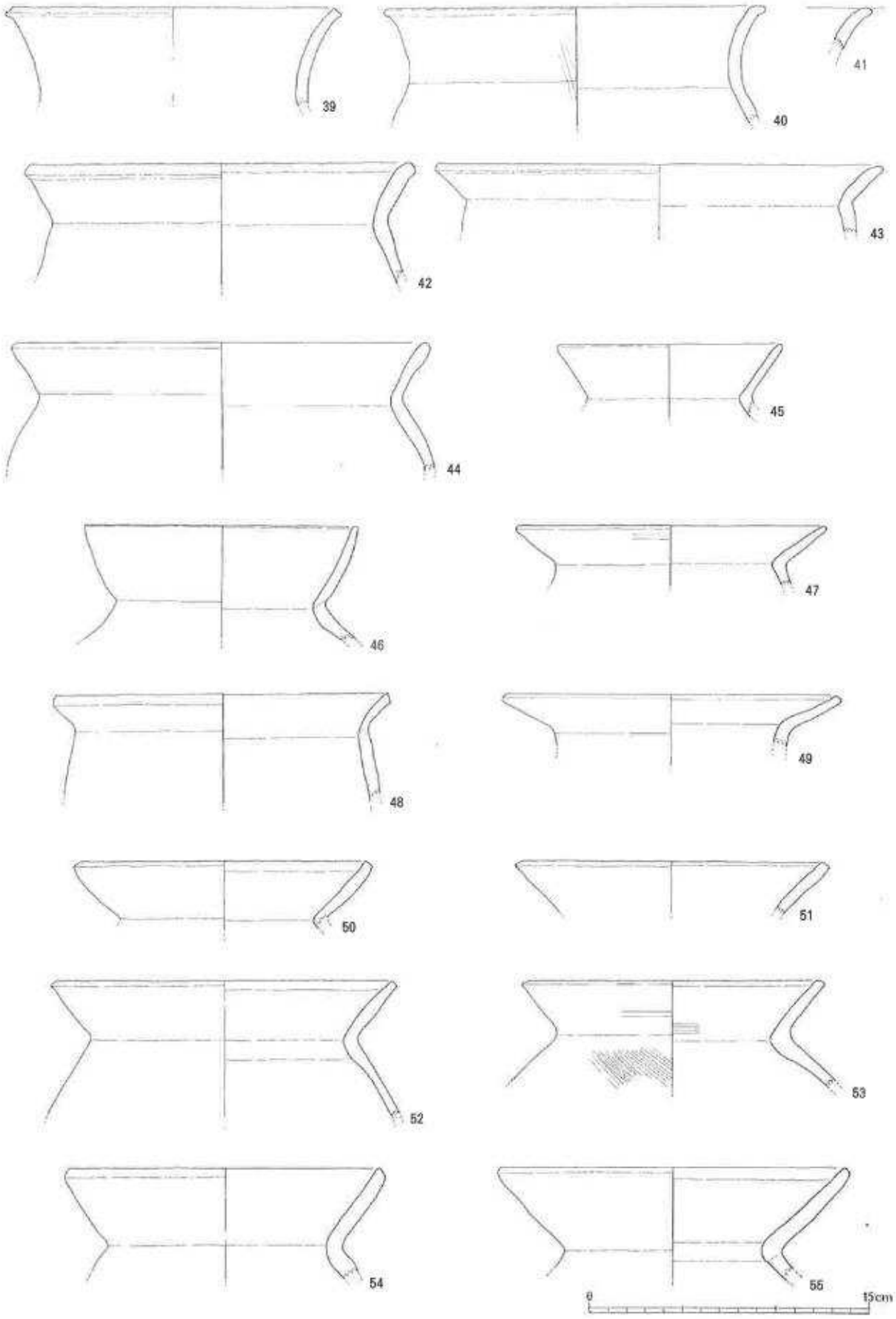
甕は口縁部17点と、口縁部から胴部までの3点を図示した。型式は布留式系が主体を占め、46～50・52・54～57が該当すると思われる。39・40は弥生土器型式の土師質の土器で、外面にハケ調整、内面にナデを施す。口縁は外反し、口唇調整は39が平らにヘラナデ、40はやや外面につまみ出した後、水平にヘラナデする。口縁部から胴部への移行には明確な屈曲をなさず、だらりと下方にのびている。焼成は良好。41～43は口縁が外反し、口唇を外側につまみ出して平らにするものである。42・43の頸部は、断面が「く」字状に屈曲する。口縁外反部分から頸部屈曲にかけては、器壁を肥厚させている。41はハケ調整、42・43はナデを行い、焼成は41・43は良好、42はやや不良である。44は口縁端部が肥厚し、外反気味の口縁をもつ。口唇はヘラナデされ、平らに形成されている。屈曲部は「く」字状を呈し、内面にははっきりと稜が残っている。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。45は、頸部の内面に明確な稜を残し、口唇をつまみ上げたものである。内面の屈曲部直下には横方向のハケ目がみられ、口縁部にはナデを施す。焼成は良好。46は内彎した口縁をもつ布留式系の甕だが、口唇は丸くすぼまる。ナデ調整で、焼成は良好。47～50・52・54～57は口唇の内面を上方に立ち上げたもの、あるいは内側に張り出したものである。前者は47～49・54・55・57で、後者は50・52・56である。47は、口縁に横方向のヘラナデを施し、口唇を細く立ち上げている。内面はナデを施し、焼成は良好である。48は、胴部があまり張らないと思われるものである。かなり磨滅しているが、外面にハケ目が残る。焼成は良好。49の胎土には一辺5㎜の石英が含まれているが、堅緻なつくりをしている。ナデ調整を施し、焼成は良好である。54・55は器壁が厚く、大型の製品であったと思われる。磨滅がひどく、55の内面調整はナデであることが確認できる。焼成は良好。57は胎土が堅緻な甕で、胴部は球状になると思われる。口縁は厚手で内彎し、口唇は丸く整えられている。口縁はハケ目、胴部外面はカキ目、内面はヘラナデ痕があり、焼成は良好である。50は磨滅が顕著だが、口唇内面の張り出しが明確に残っている。焼成は良好。52は内面にナデを施し、焼成は良好である。56は内彎した口縁をもった、軟質の甕である。胎土には砂粒を多量に含む。磨滅が著しく、調整は不明である。51・53は口唇を平坦に仕上げた堅緻な胎土のものである。口縁は直線的に立ち上がり、口唇直下にはヘラナデ痕がみられる。51がナデ調整、53がハケ調整を施し、焼成はどちらも良好。58は薄手で、やや長胴形を呈する。口縁は外反し、口唇は丸くおさめられている。外面はハケ調整、内面はナデが施され、焼成は良好である。



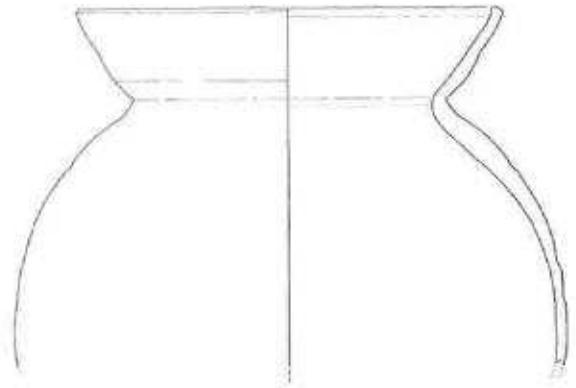
第35図　古墳時代の遺物１（１／３）



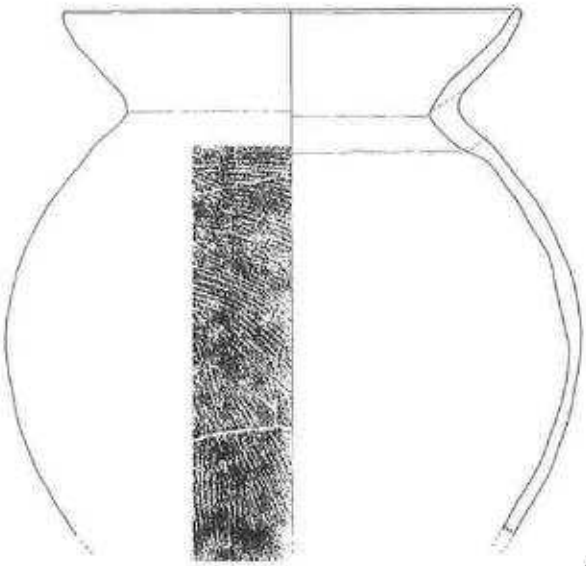
第36図　古墳時代の遺物２（１／３）



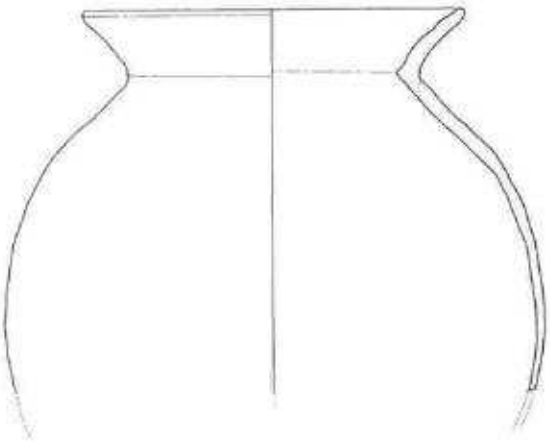
第37図　古墳時代の遺物３（１／３）



56

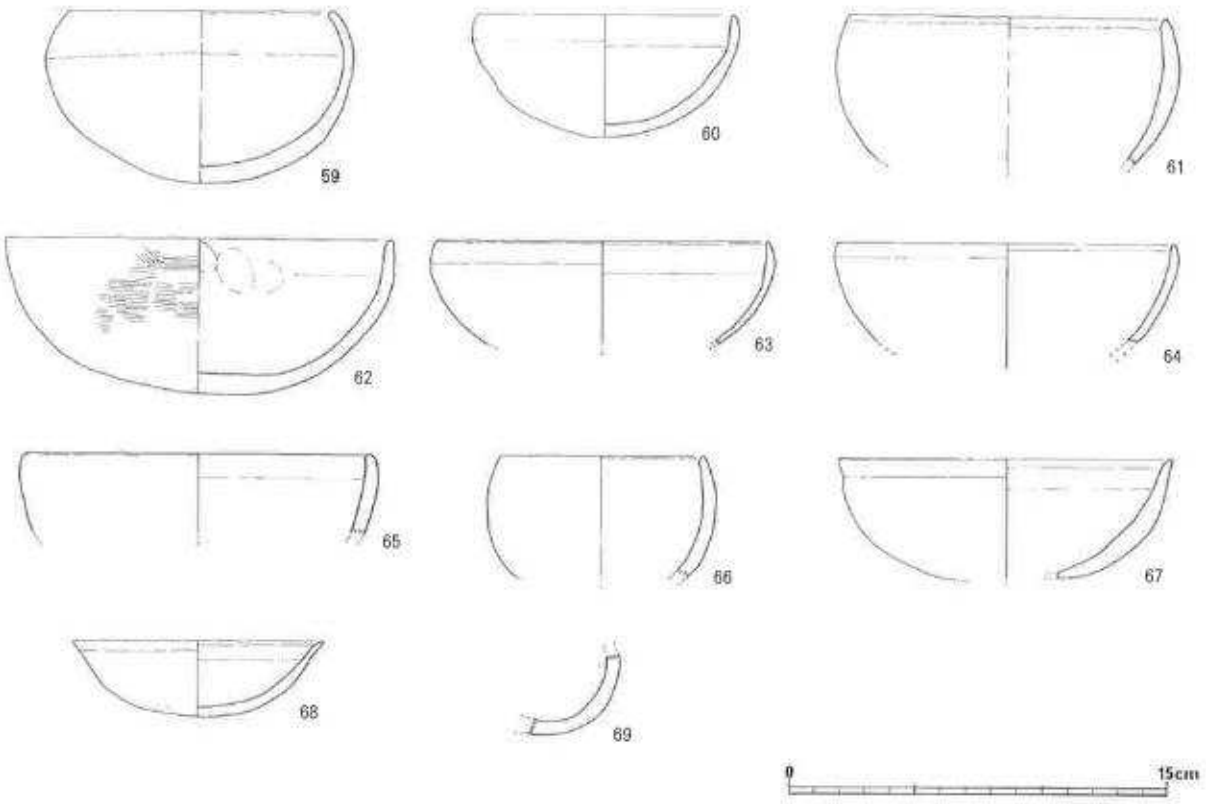


57



58

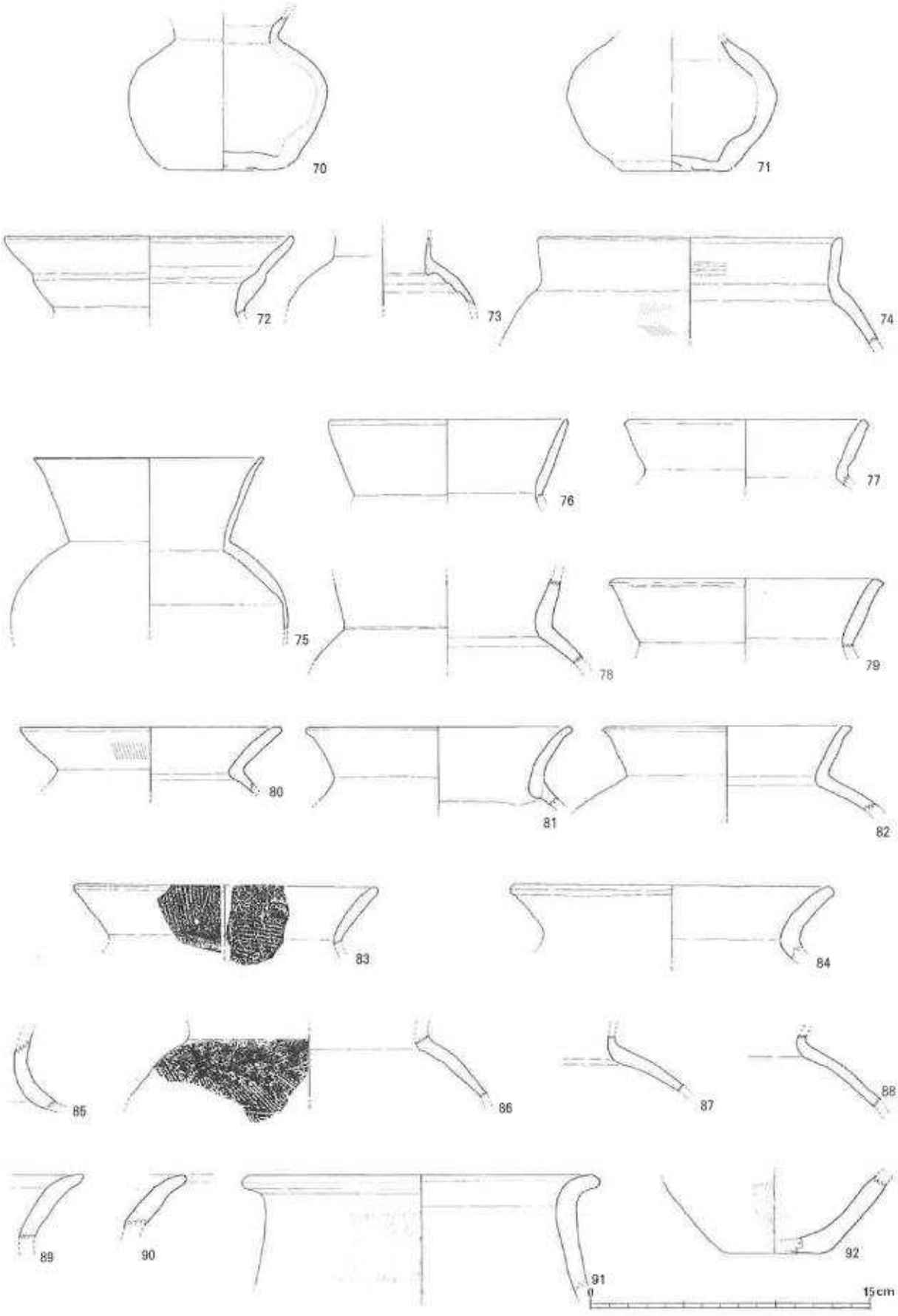
第38図　古墳時代の遺物４（１／３）



第39図　古墳時代の遺物５（１／３）

坏は11点あげた。すべて丸底で、59～66は内彎、67・68は外反した口縁をもつ。59は強く内彎した口縁をもつ。調整はナデを施し、焼成は良好である。60は第35図４の高坏坏部と共伴して出土した。ナデ調整後ハケ調整を施し、化粧土を塗布する。焼成は良好。62は復元したもので、口径はそれが判定できる坏の中で、最大径を測る。口唇には、ヘラケズリによって平坦にした部分がみられ、口縁部は暗褐色で堅く焼きしめられている。外面はハケ調整、内面はナデ調整で、焼成は良好である。61・63・64はナデ、65は外面にナデ、内面にハケ調整を施し、焼成は良好である。67・68はナデ調整をし、化粧土を施す。焼成は67が良好、68がやや不良。69はナデ調整をし、化粧土を施す。焼成は不良。

壺は布留式系甕と同時期のものが多いが、複合口縁壺と断定できる資料はほとんど検出できなかった。70・71は小型の短頸壺である。口縁を欠落しているが、頸部の開き具合から、朝顔状に外反する口縁をもつと思われる。70は71と比較して、頸部が細くくびれ、肩部の張りは上部に位置する。両方とも上げ底であるが、71にはヘラで掻き取った跡が残る。70の頸部の外面にはハケ目、内面にはヘラナデが認められる。全体には外面はナデ調整、内面には指による掻き取りが行われる。胎土は堅緻で、焼成は良好である。72は複合口縁壺の口縁である。かなり磨滅しているが、化粧土は全体的に薄く残っている。屈曲はゆるく、屈曲部以下は肥厚している。調整はナデだが、口唇部はヘラによる面取り、内面の口唇直下と内面屈曲部にはヘラナデを施す。焼成は良好。73は直口縁と思われる小型の壺である。器壁が薄く、外面には丁寧にナデを施すが、内面の頸部以下には粘土紐跡が輪積み状に残る。焼成は良好。74は広口直口壺である。口唇は、内面をヘラナデして外側に丸くおさめている。内面は口

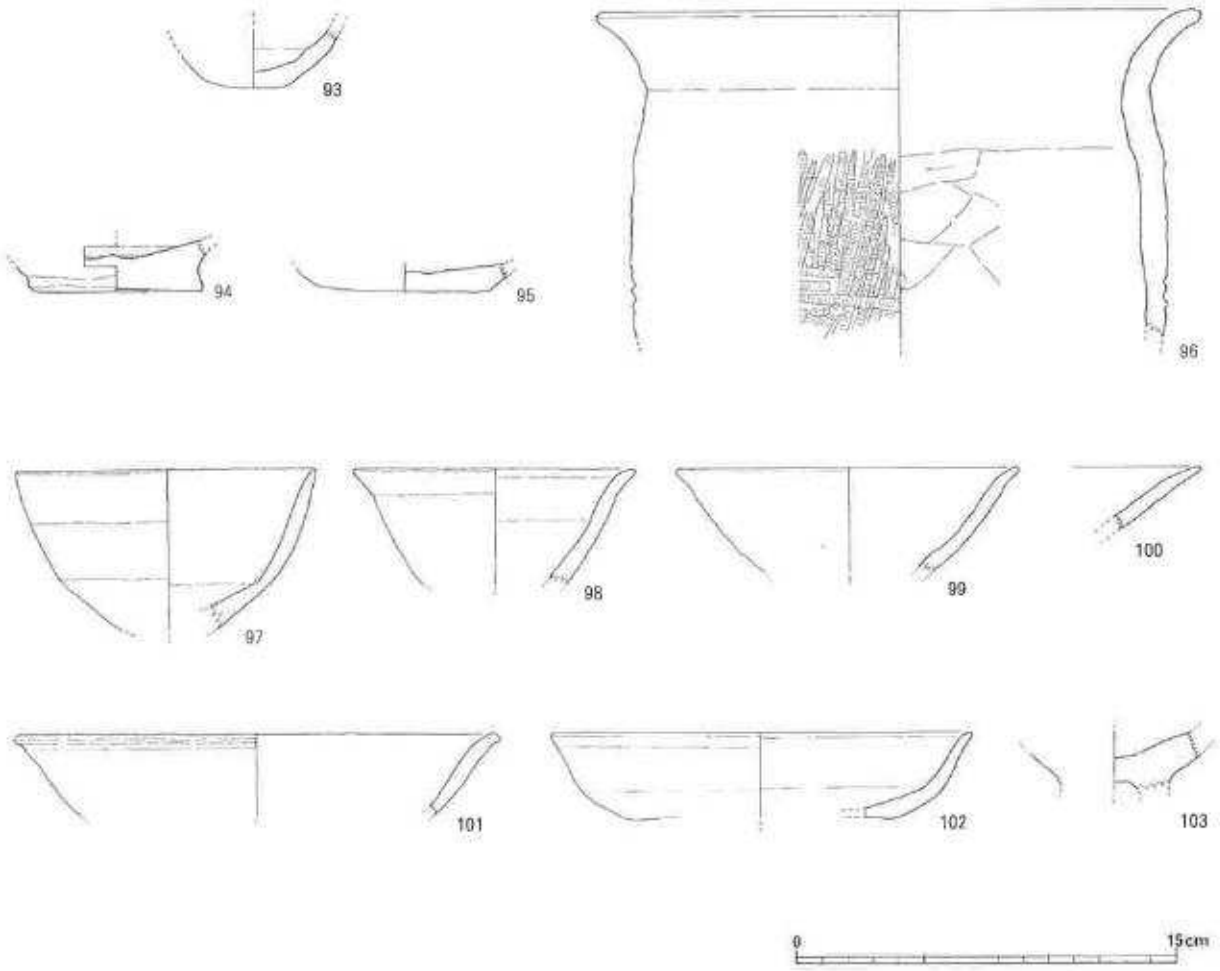


第40図　古墳時代の遺物６（１／３）

縁部がハケ調整、胴部がヘラ調整で、外面はハケ調整を施す。化粧土を塗布し、焼成は良好である。75は口縁がやや外反し、胴部に若干張りのあるものである。かなり薄手で、磨滅が顕著だが、わずかにナデがみられる。焼成はやや良好。76は直線的に立ち上がった口縁部で、口唇はヘラで両面からナデを行って、比較的鋭利に形成されている。頸部屈曲はゆるやかで、稜は不明確である。胎土には2～3㎜の長石を混入するが、器壁を薄く整えている。ナデ調整で、焼成は良好。78は頸部片を復元したもので、屈曲部に1条のヘラ書き沈線が巡っている。焼成はやや良好。口縁部が短く、口縁中部が肥厚して端部が外反するものは、77・79～84である。その内訳は、口唇を外側につまみ出し、ヘラ具で平坦にするものが77・79・82・84、平坦にしないものが80・81、外側につまみ出さず平坦なものが83である。77はナデを施し、化粧土が残るもので、焼成は良好である。79はナデを施し、焼成は良好。82は、外面がヘラナデによって丁寧に調整された後、カキ目を施したもので、3㎜程の砂粒が混入しているのにもかかわらず、器壁が堅緻である。化粧土がわずかに残り、焼成は良好。84は、厚手で堅緻である。焼成は良好だが、磨滅のため、調整は確認できない。80も堅緻で、外面をハケ調整、内面にナデを行う。外面は横方向のハケ調整後縦方向にも施す。焼成は良好。81は内面に口縁接着痕を大きく残す。化粧土を施し、ナデを行う。焼成はやや良好。83の胎土は緻密で、精錬された赤色粘土を使用している。ナデ調整後外面には縦方向のハケ目、内面には横方向のハケ目を残し、屈曲部にはヘラナデを行う。焼成は良好。85～88は、頸部から肩部の破片である。86以外はかなり磨滅している。86は外面にハケ目とカキ目が残り、内面はナデを施す。87は外面の所々にハケ目、内面にナデを行い、88の内面には粘土紐跡をナデ消した痕跡が認められる。焼成は86が良好、それ以外はやや良好。89～91は厚く短い口縁部で、後期のものである。焼成は良好。92はハケ目を残した底部で、若干丸みを帯びる。焼成はやや不良。93は手捏ね土器の底部である。やや磨滅する。焼成は良好。94・95は坏と思われる底部で、胎土には洗練された粘土を用いる。内面はヘラによる掻き取り、外面は94が不明、95がヘラケズリを施す。焼成は良好。96は、海の中道遺跡から出土の製塩土器Ⅰ類に相当するものである。器壁は堅く焼きしめられ、ざらついている。口縁は強く外反し、ナデとハケ調整により器壁調整がなされる。胴部には、外面が木目に直行する粗い平行刻み目文のタタキを施し、内面はヘラによる横方向のナデと無文のタタキ痕がみられる。俗に、玄界灘式製塩土器と呼ばれるものである。97～100は高坏口縁部から胴部にかけて、103は高坏の坏底部である。97～99はワイングラス型で、磨滅しているが、化粧土がわずかに残る。焼成は97が不良、98・99はやや良好。101は、坏か高坏の類いと思われるが、砕片のため不明である。外面はハケ調整、内面はナデを施す。焼成は良好。103は、胎土が緻密だが、磨滅が顕著である。調整は不明で、焼成は良好。

須恵器は坏を第42図・第43図、蓋を48～52・56・57、高坏を53～55・62・63、平瓶を60、壺を59・67・71・75～77・79・80、甕を61・63～66・68～70・72～74・78に図示した。

坏は、小田富士雄氏が提言した型式を用いれば、Ⅰ期は1～3・20、Ⅳ期は4～19・21～40に該当する。Ⅰ期は4点であるが、蓋は1～3、身は4に示す。蓋の器形に同一のものはない。1は口唇が細く形成され、立ち上がりは外へ広がる。突帯部分は丸く整えられている。焼成は不良で、軟質であ



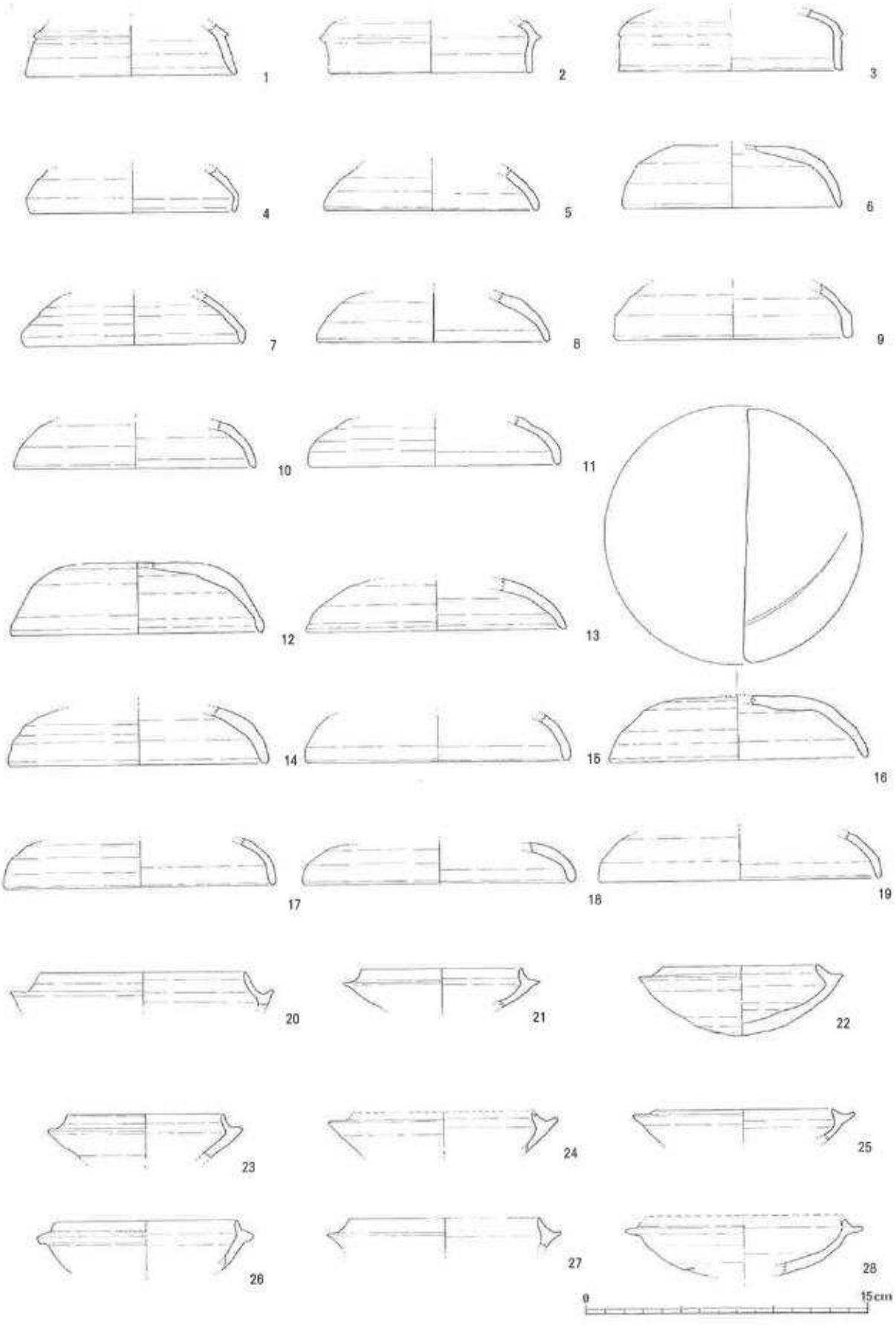
第41図　古墳時代の遺物７（１／３）

る。２の口唇は平坦にヘラナデされ、胴部から立ち上がりにかけて内彎した後、垂直に下がる。胴部には回転ヘラケズリによる段と、ヘラ圧痕が残っている。焼成はやや良好。３は立ち上がりが垂直に下がり、口唇に小さな段を有する。突帯部分は鋭利に作出されている。堅緻で、焼成は良好。20は立ち上がりが内傾し、口唇内面をヘラケズリした坏身である。立ち上がりが長く、かえりが胴部から直線的にのびる。堅緻で、焼成は良好。Ⅳ期に相当する蓋は４～19の16点、身は21～40の20点を図示した。蓋には口縁に二通りの形態があり、ヘラケズリによって口縁に段を有し、口唇にかけて内傾あるいは直立するものと、ゆるやかなカーブをなすものに分けられる。前者は４・７・９・11・15・19、他は後者である。４は回転ヘラケズリが最も顕著に残り、明確な段を有する。焼成は良好。７は薄手で、胎土に空気が抜けた跡がある。焼成は良好。９・11の焼成は良好。15・19は同一個体と思われる砕片である。外面は黒く変色している。焼成は良好だが、器壁にツヤがない。５の焼成は良好。６は磨滅が著しく、未焼成のようである。８・16は同一個体である。16のヘラ書き文は、ヘラケズリが回転によってキズとなって残ったものである。軟質で、焼成はやや良好。10の外面天井付近は、直線的である。焼成は良好。12は付着物と磨滅のため、ヘラケズリ跡を確認できない。口縁内面は丸く突出し、天井部は平らである。軟質で、焼成されたものか不明である。13・14は同一個体で、隣り合った

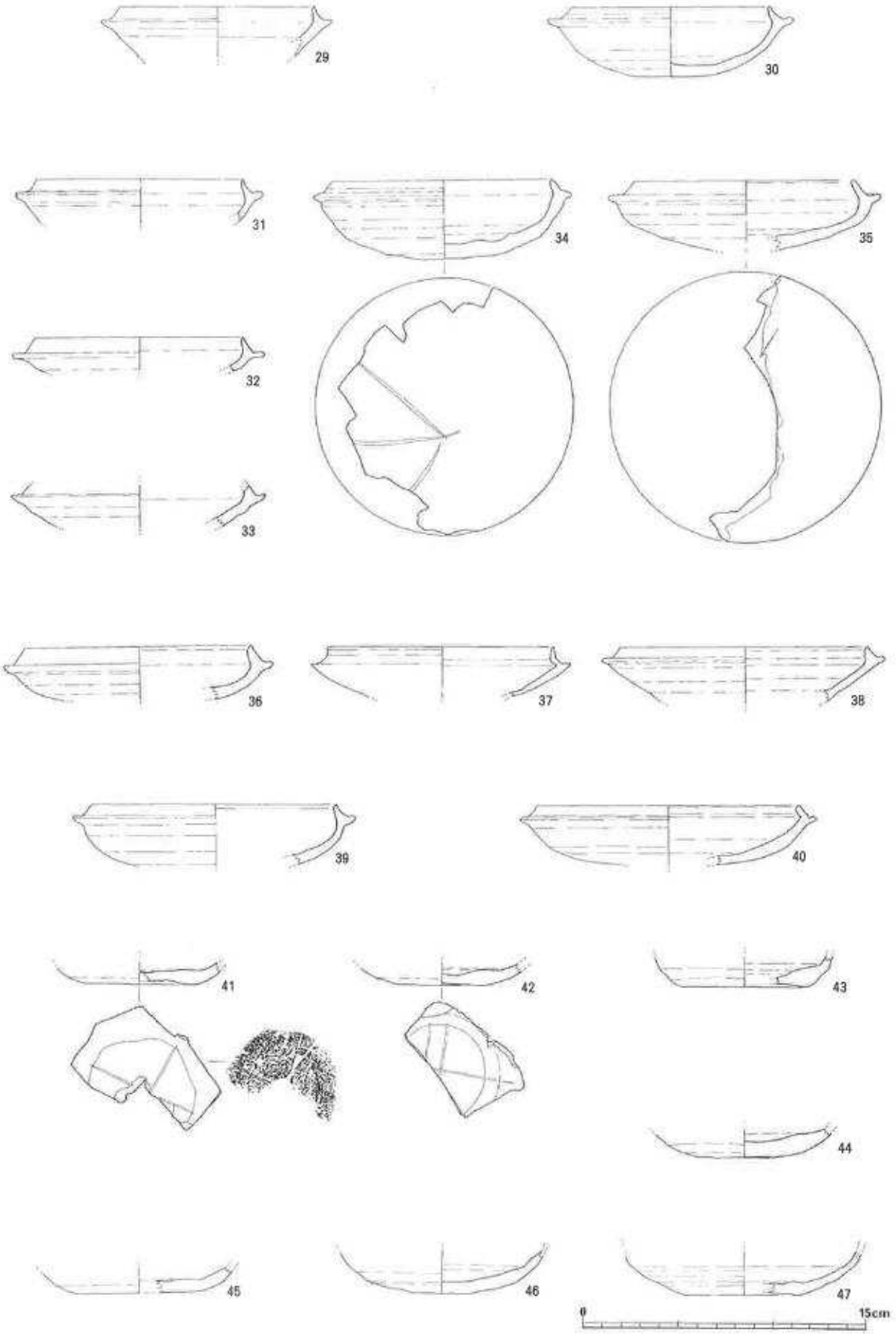
調査区で出土した。軟質で、焼成はやや不良。17・18は軟質で、焼成はやや良好。身は、すべて内傾した立ち上がりをもつ。蓋より復元可能なものが多いが、砕片で磨滅したものが大勢を占める。21はかえり下に凹みをもつもの、つまり、かえりが突出しているもので、他に25～32・34～36・38～40がある。これは、口縁部が確認できるものの中で最も多く、立ち上がりとかえりの部分の境界、かえり直下部分に、沈線を巡らせているものもある（前者は26・31・34・36～38・40、後者は26・34・39）。26・34は同一個体で、35と同様に底部にヘラ書き文を施す。26～30・32・34・40は硬質で、焼成は良好。残りが軟質で、焼成は35が良好、31・36・38がやや良好、25・39がやや不良である。22・23はかえりが直線的に立ち上がるもので、他に24・31・37がある。23・33が軟質で、焼成は23が不良、33がやや良好、22・24・37は硬質で焼成は良好である。41～47は蓋・身の判別が不可能なもので、41・42にはヘラ書き文を施す。

壺は口縁部分が48、頸部が49、胴部が50～52・56・57である。48は口唇に段をもち、外面に波状文を有する。両面が黒色に塗装され、内面には自然釉が付着する。50は肩が大きく張り、肩部に沈線が巡っている。内面には右から左へしぼり痕が残る。51は、胴部に櫛歯の列点文が巡るものである。52は2条の沈線間に櫛歯の刺突文が巡ったもので、検出した壺の中で、52のみ円孔が残存する。57は大型の壺である。胴部には、ヘラによる押し引き文が2条の沈線間を巡っている。焼成はすべて良好。53～55・58・62は高坏と思われるものである。58は、小型の高坏脚部である。生焼けの段階で脚部に3カ所穿孔し、脚端部外面をヘラケズリで玉状に仕上げている。62も小高坏の脚部だが、脚端部はだらりと裾広がりにのびている。焼成は53がやや良好だが、他は良好である。60は、口唇は細く、朝顔状にひらいた平瓶の口縁である。焼成は良好。

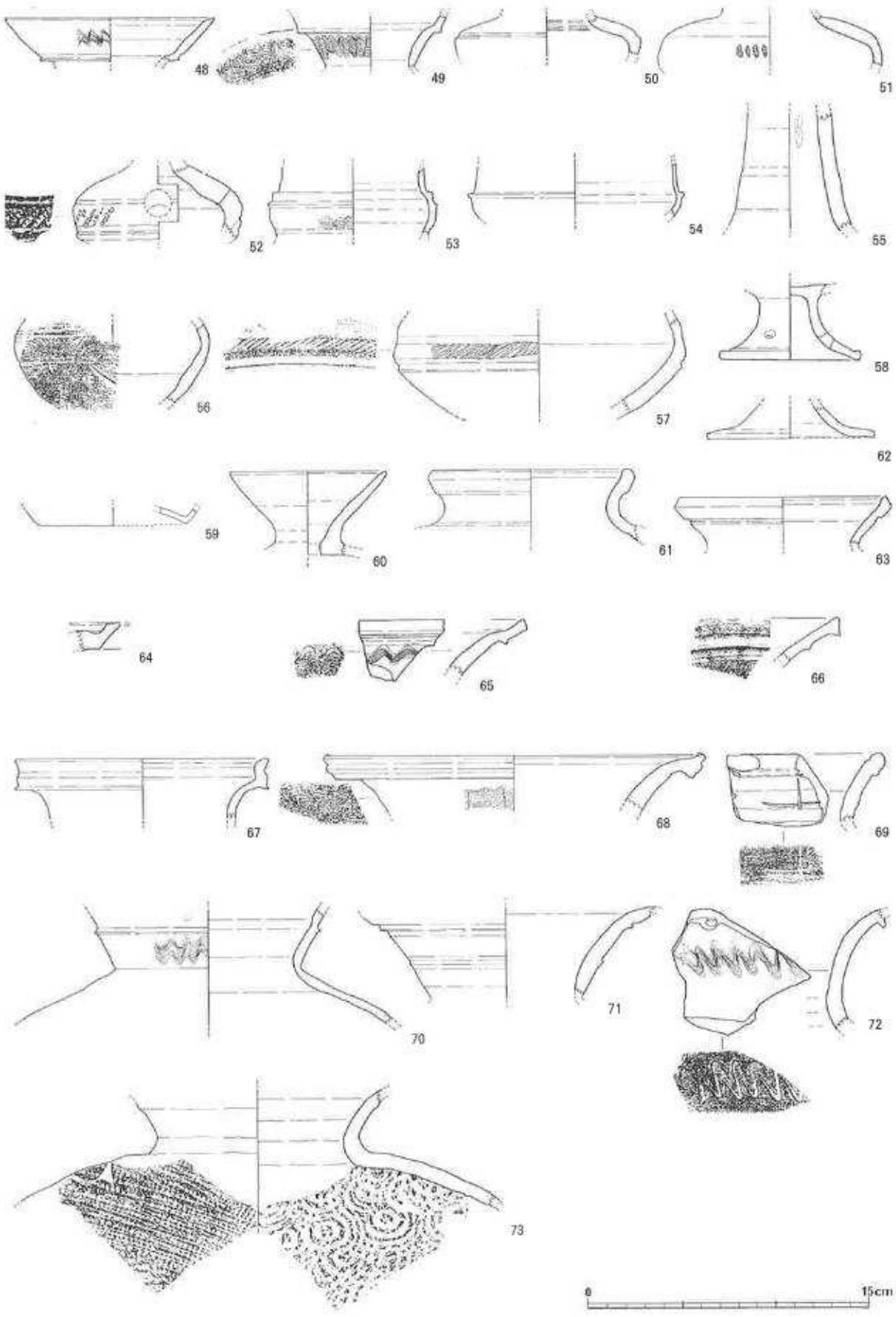
59・67・71・75～77・80は壺である。59は薄手に仕上げた上げ底の壺片で、外面に白色の付着物を残す。67は複合口縁の形態で、ヘラケズリによって、口縁下の段を鋭く作出している。堅緻である。71はやや磨滅した頸部片で、口縁は大きくひらく。ヘラで作出した2条の突帯が巡る。75は、高台が外に張り出した底部である。底部内面には自然釉が付着し、胴部外面には、直接火を受けた跡が黒く残る。堅緻である。76・77・80は平底の底部である。76は直線的だが、77・80は外側に広がる。焼成は71・80がやや良好で、他は良好である。甕は61・63・64～66・68～70・72～74・78・79である。61・63の口唇内面にはヘラケズリによる突出がみられ、61の内面の頸部直下にはタタキ目が認められる。64は、ヘラケズリの凹みをもつ大甕の口縁である。表面には自然釉が薄く付着する。65・66は口縁直下に波状文をもつものである。内面は自然釉が付着し、外面には65は突帯直下、66は口唇突帯から黒色に塗色される。66は堅緻である。68は粗雑な波状文をもつ。全体に自然釉を認めるが、表面はざらざらしている。粘土粒が口唇内面に付着する。69はかなり磨滅した軟質の口縁である。「十」字状にヘラ書きされている。72は波状文をもつ口縁から頸部にかけてである。波状文は二度書きしている。74は、1カ所から出土した破片を復元したものである。その場にあったものを、土砂が押し潰した格好で検出した。外面は、平行タタキの後、等間隔で横方向にハケ目をいれ、内面はハケ調整後ナデを施す。焼成は、64～66・70・72・78・79が良好、69が不良、他はやや良好である。



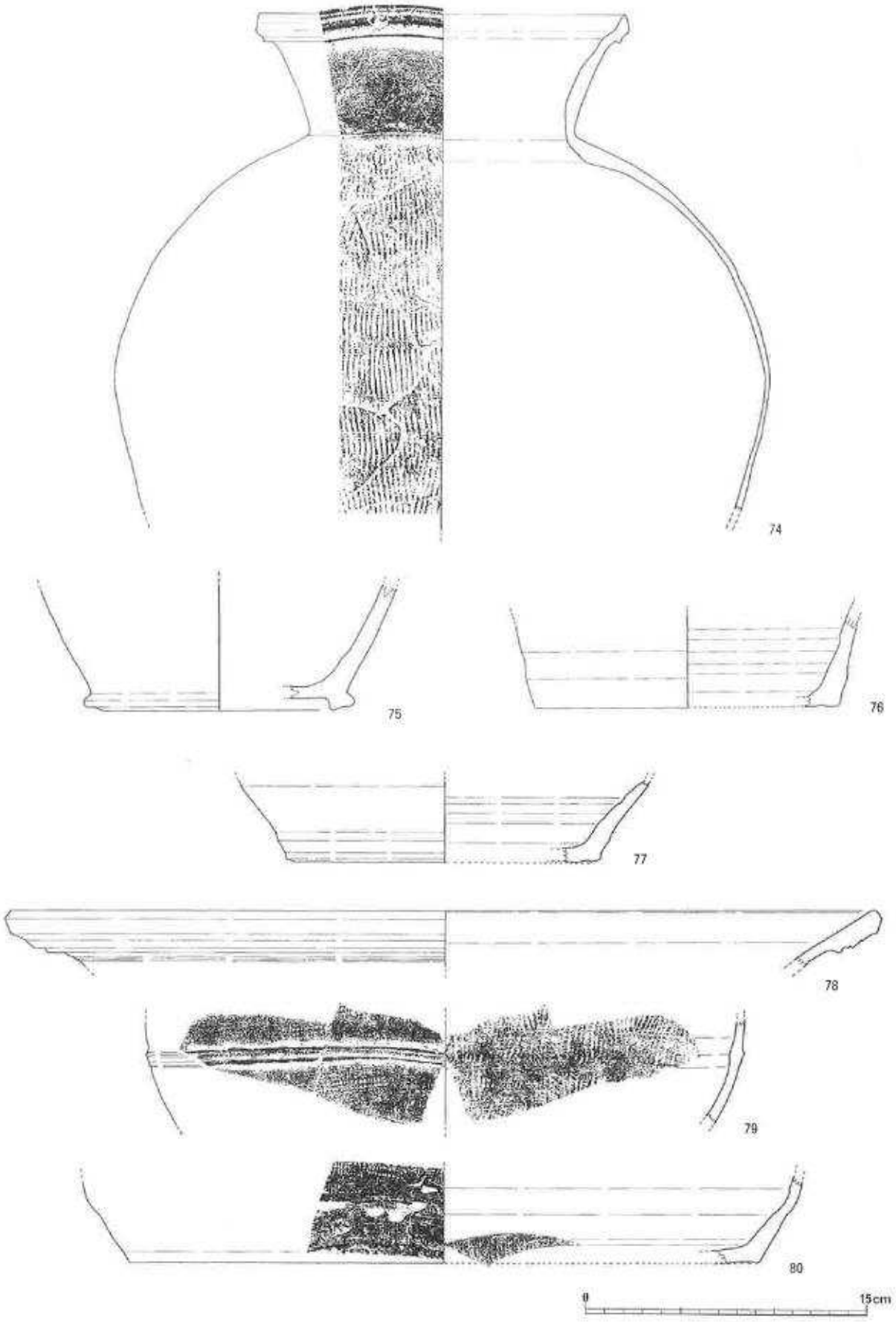
第42図　古墳時代の遺物８（１／３）



第43図　古墳時代の遺物９（１／３）



第44図　古墳時代の遺物10（１／３）



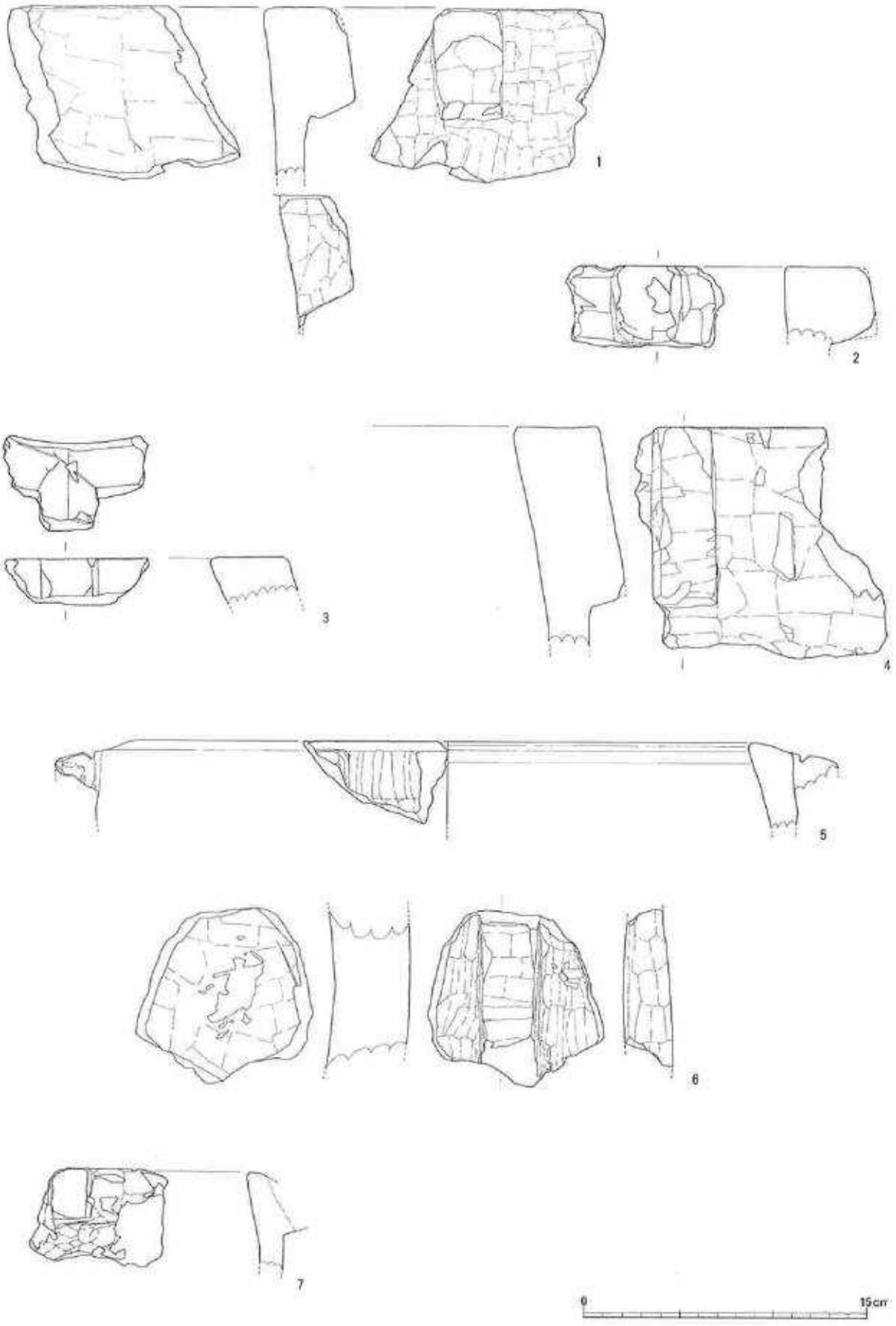
第45図　古墳時代の遺物11（1／3）

Ⅴ．中世の遺物（第46図～第58図）

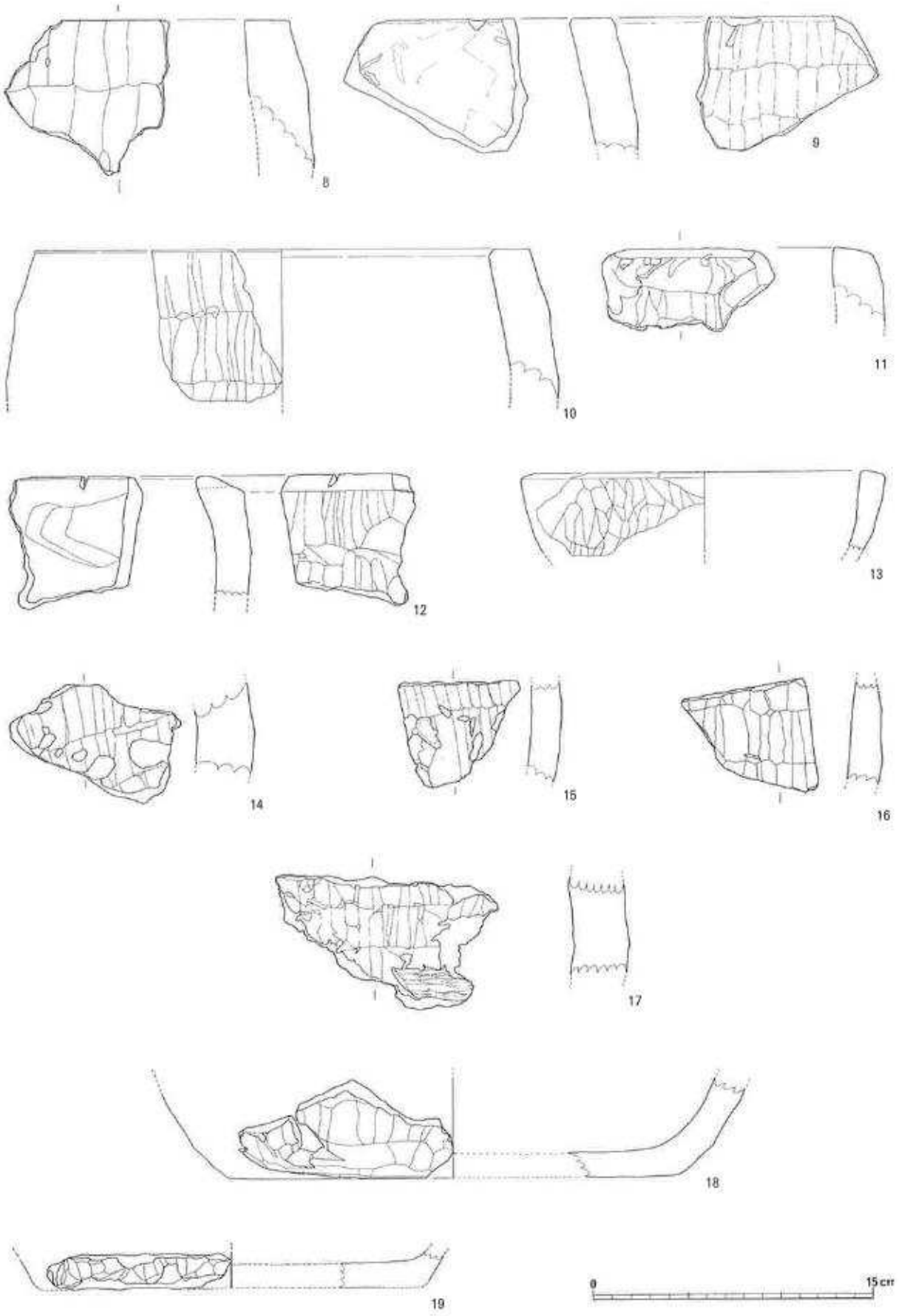
検出したほとんどの遺物は、碗・坏・皿・石鍋など、生活に密着した製品であったが、鞴の羽口が1点出土している。

石鍋（第46図・第47図）は、完形になるものはなかった。しかし、器形の特徴としては、胴部分に鍔をつくりだしたものはまったくなく、すべて方形の耳をもつものばかりで、森田　勉氏の型式分類ではA－1に属する。方形の耳をもつのは第46図に掲載し、耳付きの可能性はあるが、鍔をもたないものは8～13、不明は14～17、底部は18・19に図示した。外面にはケズリ痕を残すが、内面はある程度研磨したものが多い。研磨が丁寧なものは3・5・6・12で、紫色から暗灰色の光沢をもつ。耳付きのもので、比較的耳が短いものは1・2・7で、長いものは4・6である。炭化物を付着したのは1・2・4・8・9・18で、特に4・8・18は分厚い。4・8は同一個体である。3・5・12は金属器によると思われる沈線あるいは樋状のケズリ込みで、3は片彫、5は「V」字状、12は横断面長方形の深目の溝が刻まれている。13の内面には、横方向に細かいヘラ状の調整痕があり、17の外面には、一部に細かいケズリ痕がみられる。

白磁は、碗・皿が出土し、その中から78点を図示した（第48図～第50図・第52図101）。砕片がほとんどで、分類が不可能なものも少なからず存在した。白磁の中でも玉縁のものが多く、内面に文様をもつものは少ない。碗は第48図、第49図、第50図55～58・60～67・70・71・74、皿は第50図59・68・69・72・73・75～77、第52図101である。中国からの輸入陶磁器の分類については、森田氏の型式分類を用いた。碗類では、Ⅱ類を1・2・3・34・63・64、Ⅲ類を6・7・9・10・11・13～15・20・21・29・30・33・35・37・39・41・70、Ⅳ類を4・5・8・12・16～19・22～24・26・28・31・40・42・43・45～58、Ⅴ類を60・61・65、Ⅶ類を66・67、Ⅷ類を71、Ⅸ類を62・74とした。Ⅱ類は玉縁が小さく、胴部は丸みを帯びたものである。釉は全体的に薄く、内面は全面にかけられている。外面の下半にはかからないが、64のように高台まで流れているものもある。見込に段はない。2の玉縁は丸みが不足し、直下のヘラケズリが甘いため、不完全な玉縁を呈する。Ⅲ類は、Ⅱ類より若干大きな玉縁をもち、直線的な胴部にやや丸みを残したものである。釉は全体的に薄づきで、6は外面胴部下半に施釉していない。6・35・37と15・21は、同一個体と思われる。7は器壁のヘラケズリが粗雑で、施釉も粗く、釉自体も発色していない。Ⅳ類は玉縁が肥大し、器壁も厚手のものである。外面玉縁下に沈線による段を巡らすものもある（4・8・22・26）。底部は、高台内のケズリを浅くし、底部を厚く形成している。見込に段をもつものは5・46～48・52・54で、5は見込部分を強く押さえ、段を形成している。釉は比較的厚手で、玉縁直下や胴部と高台の境には釉溜まりができている。胴部下半には施釉されないものが多いが、49～51・53・57は高台部分までかかり、53・57については高台畳付の釉を掻き取っていない。19・52は釉が発色していない。5と23は同一個体である。Ⅴ類は高い高台を有し、口唇を平らにケズリ取ったものである。胴部は、ヘラケズリによって丸みをもたせている。見込には段をもつが、60・61には浅い沈線が巡っている。Ⅶ類は厚めの施釉で、高台畳付の釉は掻き取っている。66の口縁はやや外反し、口唇に輪花を有する。67と同様に内面には、ヘラの片彫と櫛目



第46図　中世の遺物１（１／３）



第47図　中世の遺物２（１／３）

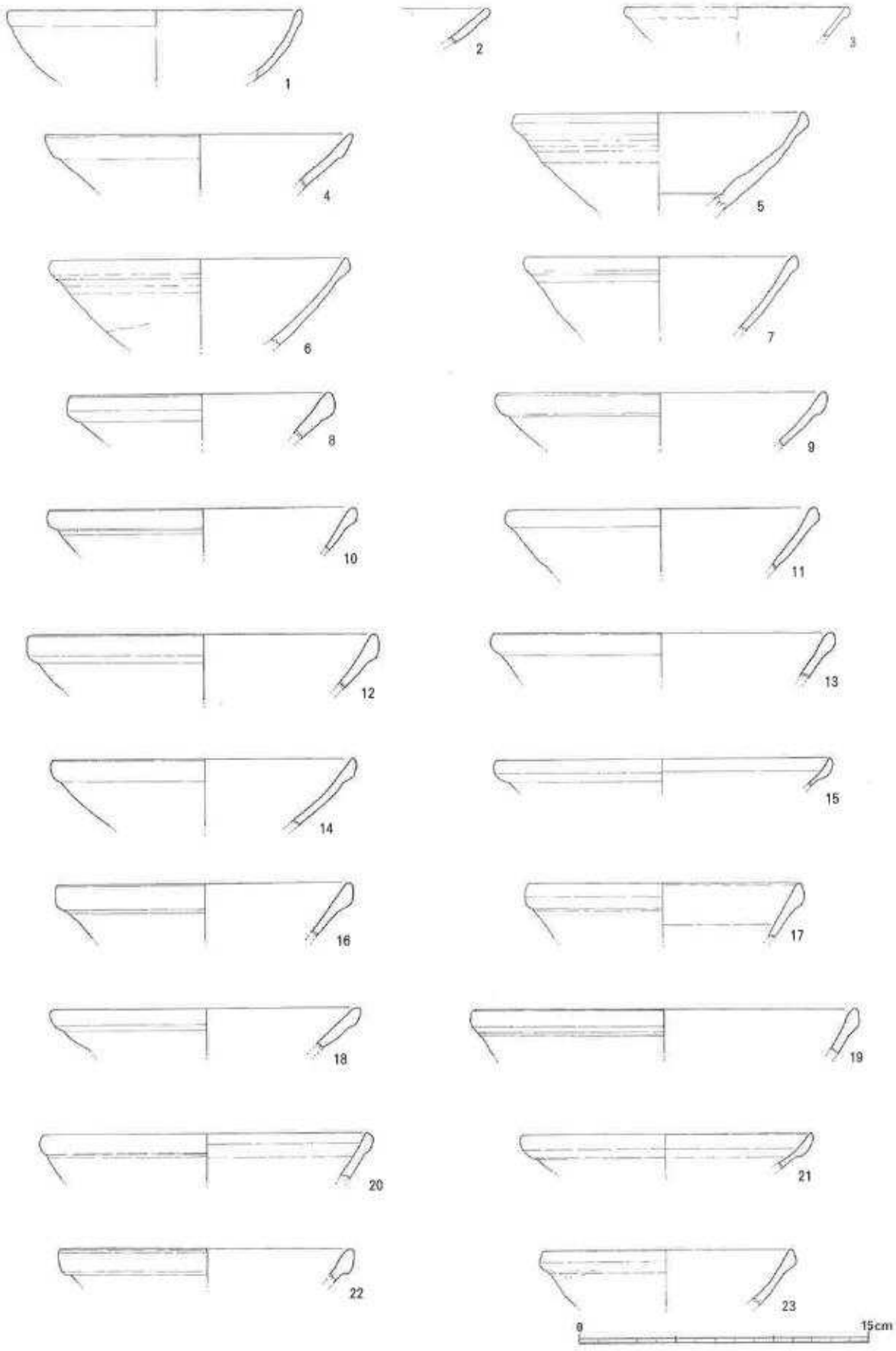
文が施される。Ⅷ類は口縁が外反し、口唇が平らになるものである。71の内面には櫛目文を施す。Ⅸ類は、口縁部の釉を掻き取った、口禿の白磁である。74は、口唇と口縁内面の釉を削ったもので、62は、見込に段を有し、胴部に丸みがある。高台の一部に釉がかかり、釉色は淡灰白色を呈する。皿は、Ⅱ類を59、Ⅲ類を68・75、Ⅵ類を76・77・101、Ⅸ類を72・73とした。Ⅱ類は、高台内を浅く削り、見込に一部沈線が残る。Ⅲ類は口縁が外反し、胴部がゆるやかに屈曲するもので、見込には段を有する。外面の胴部下半には、施釉されない。77は釉と露胎の境界が赤色になっている。底部にはヘラケズリによって作出された細い突帯が高台状に形成されている。

青磁では、越州窯系・龍泉窯系・同安窯系の碗・皿・香炉が出土した。越州窯系青磁は第51図・第52図100に図示した。78～81は碗口縁部である。78・79は口唇を丸くおさめるが、80・81は口縁を外反させ、口唇をヘラケズリして玉状に形成している。86～88・93は蛇ノ目高台をもった碗の底部である（Ⅰ－1）。高台畳付部には釉の掻き取りがみられるが、88・93は高台内にも施釉し、88の畳付部にはその釉が流れてきている。90～92は、輪状高台をもつ碗底部である（Ⅰ－2）。91・92は高台畳付部の釉を掻き取るが、90には全面に釉がかけられていない。90は見込と畳付部に、91は見込に目跡が残る。82～84は、円盤状高台の碗底部である（Ⅱ－2）。胎土は、Ⅰ類のものより粗めである。胴部下半は露胎で、ヘラケズリを施す。83以外の見込には目跡が残り、85の底部にも目跡を有する。89は胴下端をヘラケズリした平底の碗である（Ⅱ－3）。見込には目跡が残る。100は皿の底部である（Ⅰ－2）。器壁全面に施釉し、見込に段を有する。高台畳付部と高台内に目跡を残す。

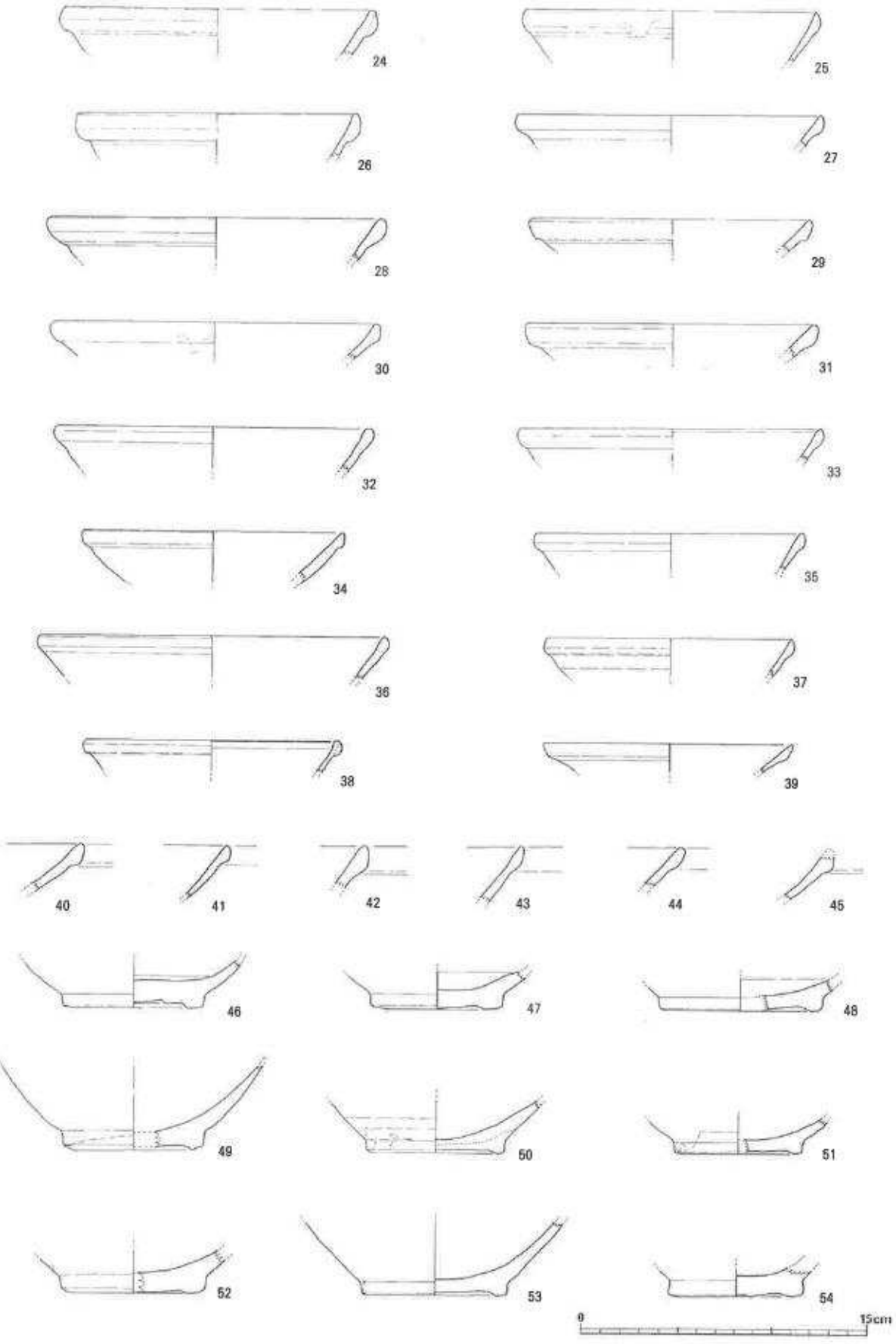
龍泉窯系青磁では、碗・皿・香炉が出土し、復元可能なものを検出することができた。96～99は内面に片彫蓮華文を施した碗である（Ⅰ－2）。96・99は同一個体で、見込に圏線がなく、見込には蓮華と思われる文様が彫り込まれる。97は、蓮華の葉文様と思われるヘラ・櫛目文が施されている。94・95は、口唇に輪花を施さない碗である（Ⅰ－4）。片彫ヘラ書きによって胴部内面を区分し飛雲文を、94には、見込に圏線を施してその内部に片彫ヘラ書き文を行う。94の高台畳付部には釉を掻き取った痕跡があるが、胴部から垂下した釉が付着している。高台内には、目跡が残る。104・105は、鎬連弁文の碗である（Ⅰ－5）。釉は厚くかけられているため、鎬が明確でない。103は坏口縁部の破片である（Ⅲ－3）。口唇は直上している。102は香炉である。外面には全面施釉されるが、内面は口縁付近のみである。釉と露胎の境界は、赤く染まっている。

同安窯系青磁は、微量の出土にとどまった。106～108・110は、外面に櫛目文をもつ碗である（Ⅰ－1）。内面にもヘラ・櫛目文を施し、デザインは似通っている。106・108の見込には段を有する。108は釉の発色がかなり不良で、内面の文様を確認することが困難である。110は口縁のみだが、両面とも下端に櫛目文が認められる。109は見込の段内側に櫛目文をもつ皿である（Ⅰ類）。胴下部の釉の状態が不明のため、細分できなかった。

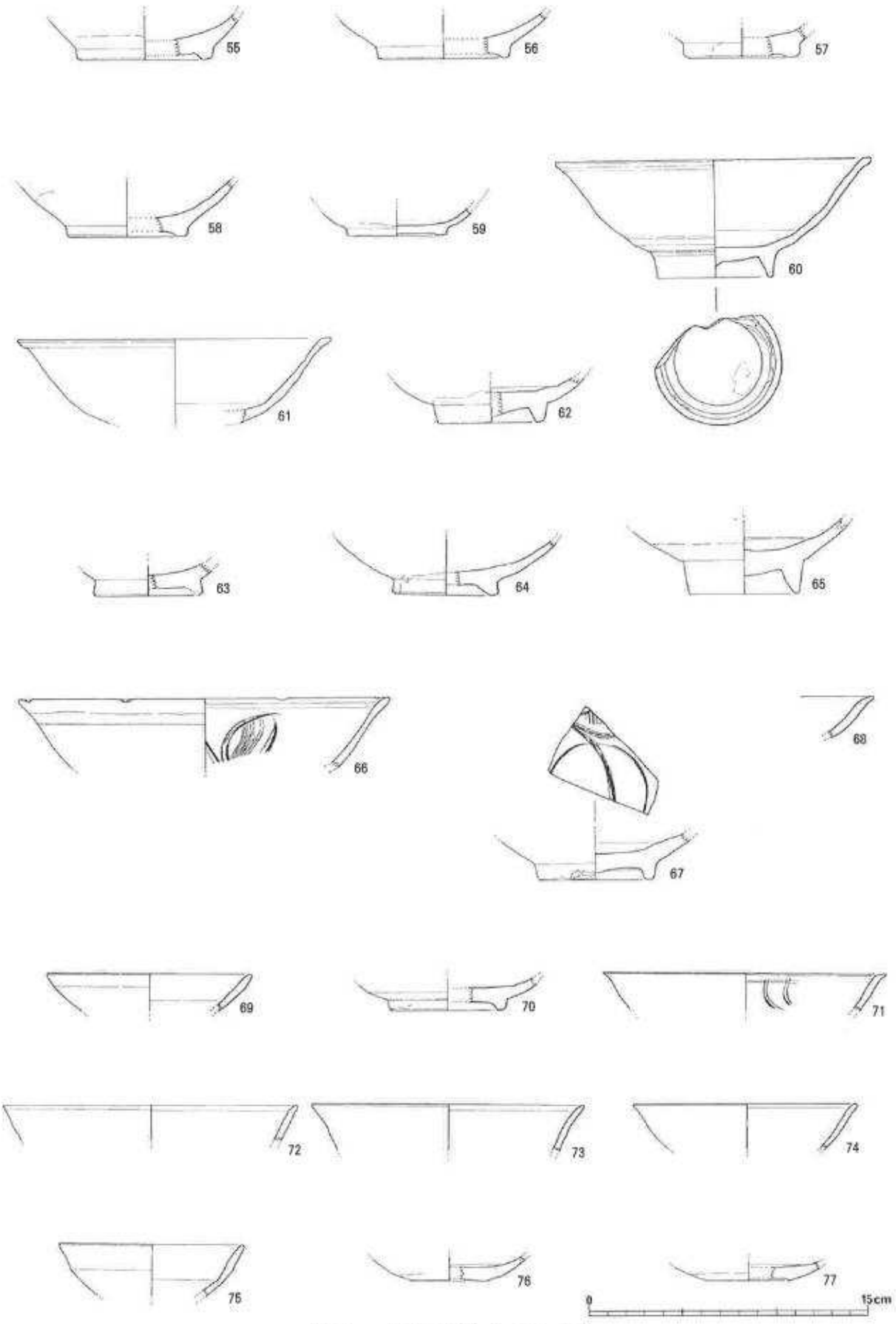
その他の輸入陶磁器は第53図に図示した。111～117は李朝期のもので、111は粉青沙器の底部である。白象嵌で、見込には蝶花文、胴部区画線の内部には剣頭文が施される。112～115・117は青磁である。112は粗雑なつくりで、空気混入のため、焼成時に胎土が膨張している。114はヘラケズリによ



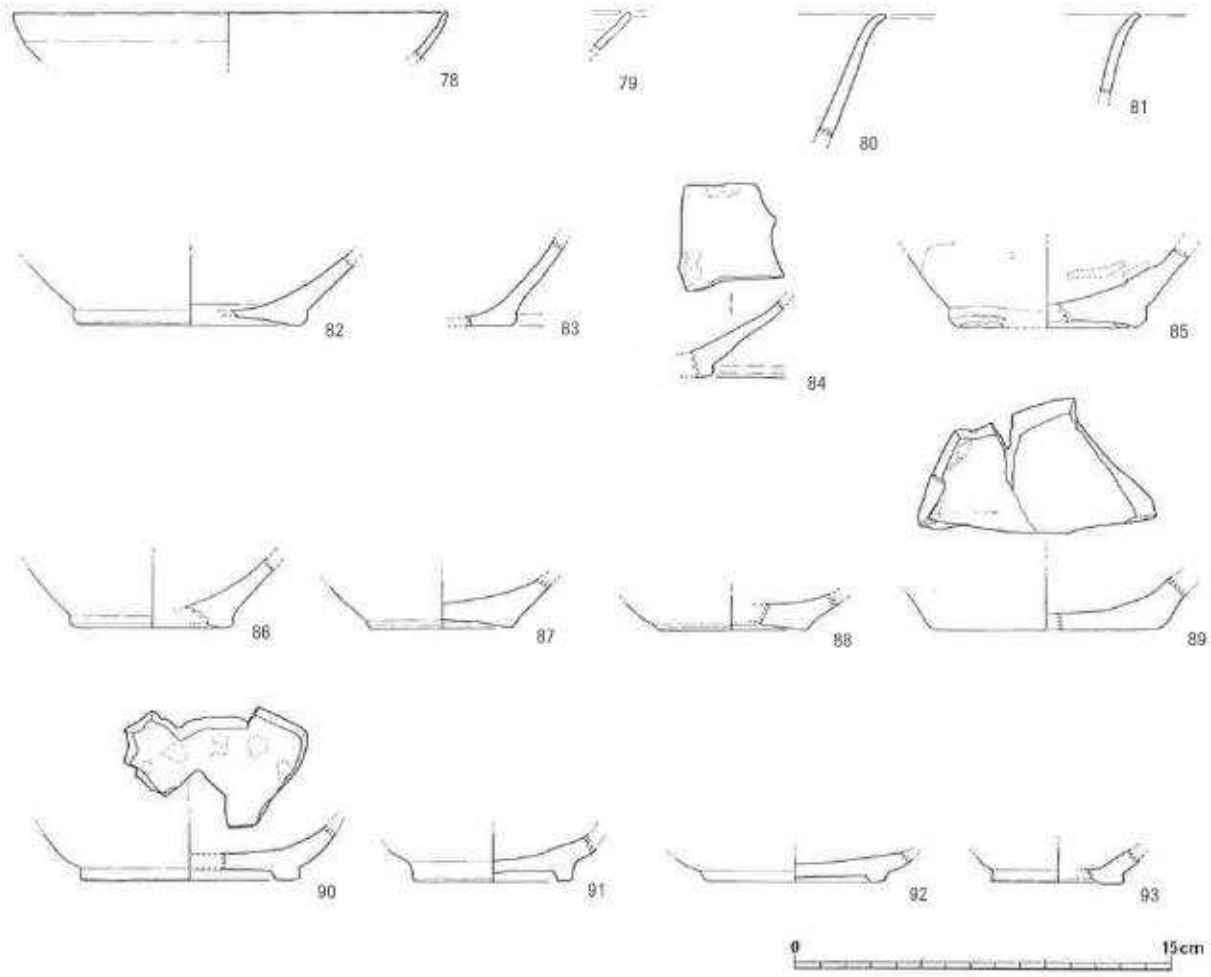
第48図　中世の遺物３（１／３）



第49図　中世の遺物４（１／３）



第50図　中世の遺物５（１／３）

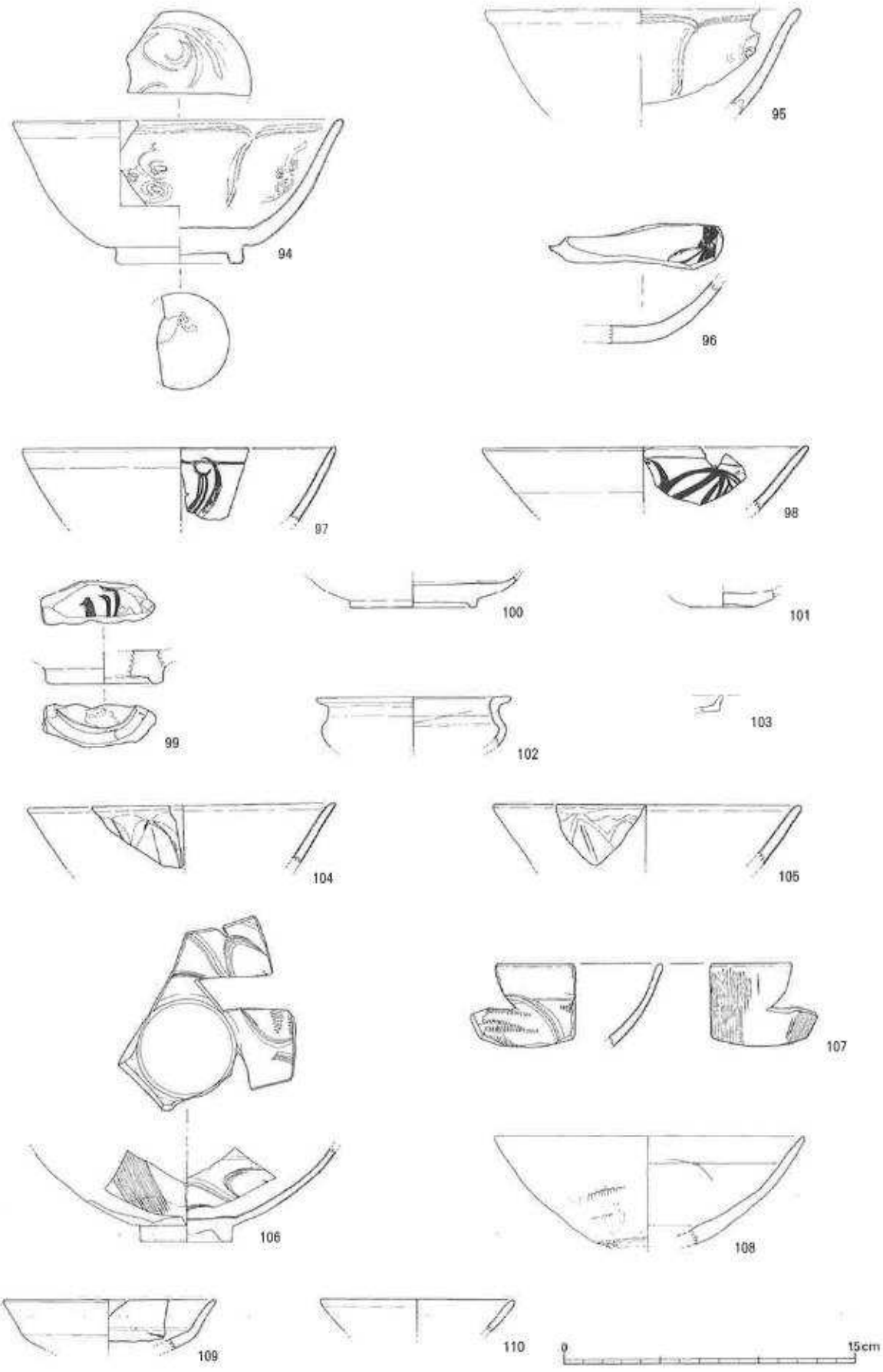


第51図　中世の遺物６（１／３）

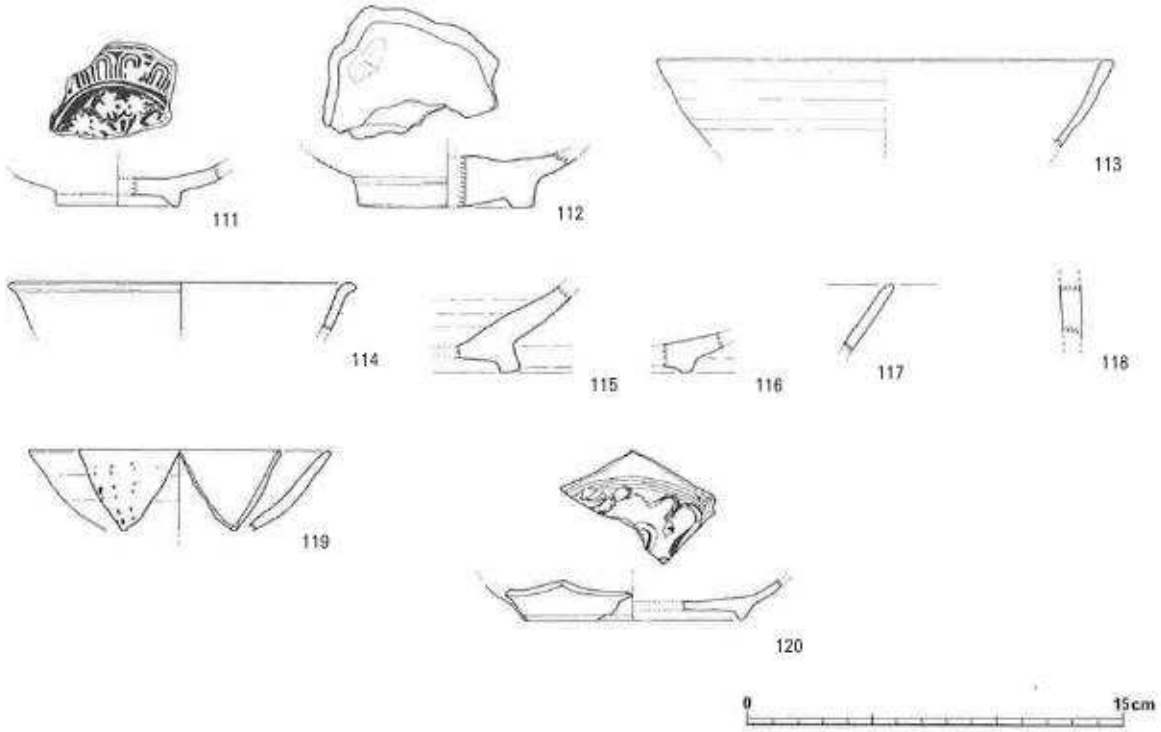
り口唇を突出させ、115は内面に水挽き跡を残す。119・120は明染付で、119の外面には青色の列点文、120の内面には植物の蔓状の文様が黒色で表現されている。

黒色土器・瓦器も300点を超える破片が出土した。黒色土器は内面のみ燻したため、内面が黒色のものＡ類と、両面とも燻した両面黒色のものＢ類がある。Ａ類は８点図示した（第54図１～７・第55図31）。磨滅したものがほとんどだが、特に硬質なのが２・６である。高台部はヘラケズリされ、１～３・31は外側へ踏ん張り、４～６は内彎する。７・31は同一個体である。黒色土器Ｂは第56図に図示した。両面ヘラミガキされたものが多いが、磨滅によるものだろうか、器壁が粗いものもある。口縁部がやや外反するもの（49・50・52・56～62）と、しないもの（48・51・53～55）に分けられる。胴部は内彎し、高台は短く、がっしりしたものがほとんどである。69のみ托付碗で、磨滅が著しい。54・67は同一個体である。瓦器は10点図示した（第54図８～17）。胴部は丸みをもち、口縁は外反している11・12を除き、そのまま上方にのびている。底部は黒色土器と同様で、短く踏ん張ったものが多い。17は硬質の坏底部である。内部にヘラケズリ痕が残る。

土師器は、器形から碗（第54図19、第55図21・23～30・32）・坏（第41図102、第54図18・20、第55図40～42）・皿（第55図22・33～39・43～47）に分類される。黒色土器・瓦器と同様、土師器も磨



第52図　中世の遺物７（１／３）



第53図　中世の遺物８（１／３）

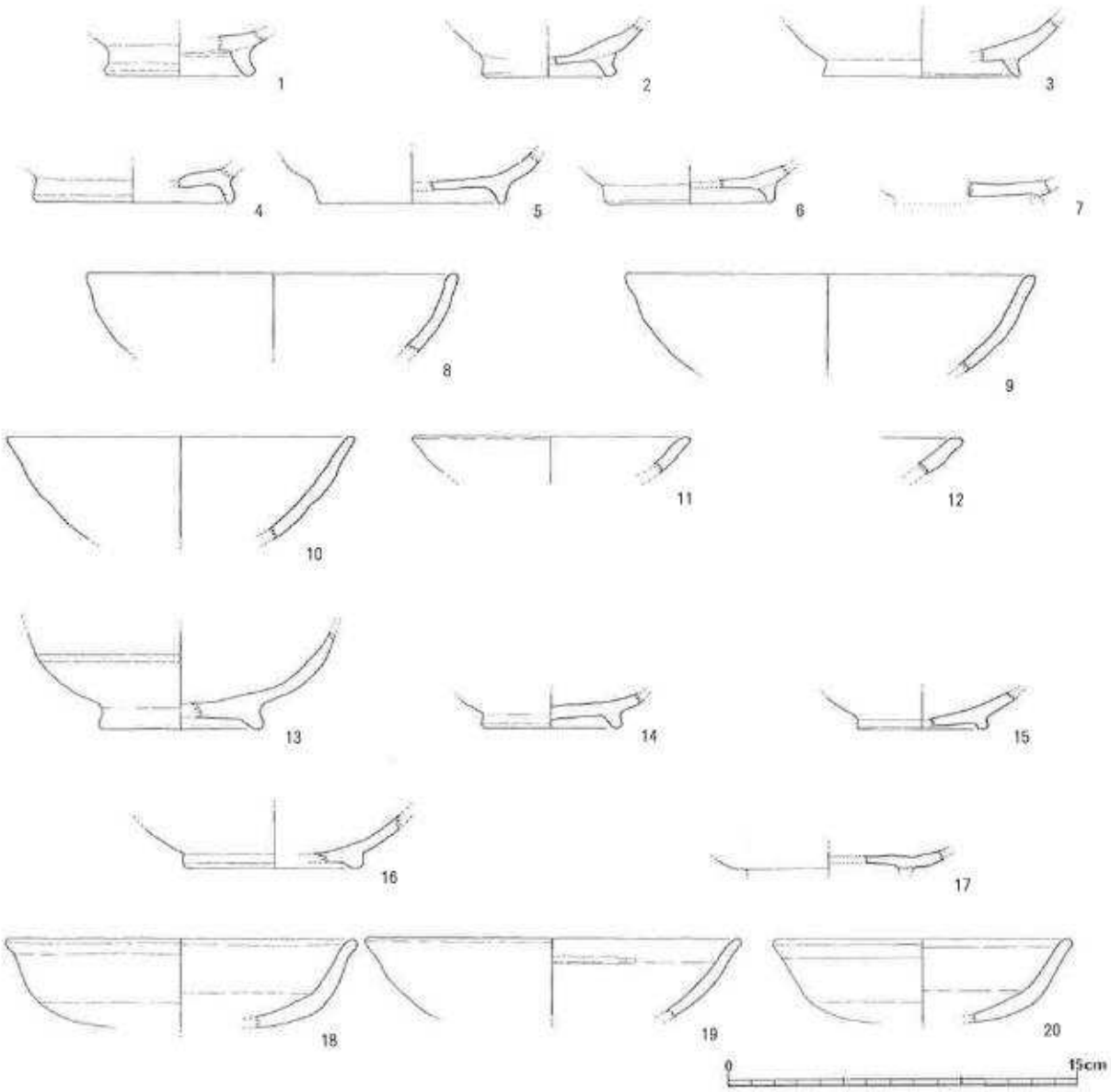
滅が顕著である。碗は胴部に丸みがあり、高台は22・23のように細長くのびるものと、27・28のように太くがっしりしたものがある。坏の底部調整は、第41図102・第54図18・20のヘラ切りと、40・41の糸切りがある。第41図102と第54図18は同一個体である。皿は、高台がつく22とつかないものがあり、つかないものは、口縁部に凹線をもつもの（33～39）と、それをもたずに底部に糸切り痕を残すもの（43～47）に分けることができる。糸切り痕を残すもののうち、43～45は回転糸切りを施し、43・45については、板目圧痕がみられる。

第57図71～73は東播系須恵質の捏鉢（71・72）と片口鉢（73）である。71・72は粗いヘラケズリを施し、73はヘラケズリ後ハケ調整を施す。74～76・79は陶器である。74は薄く釉が残る鉢と思われるものの底部で、胴部下端は回転ヘラケズリを行う。76は釉をわずかに残し、高台畳付部の釉は掻き取っている。79は耳付の緑釉陶器壺で、釉の塗布にはかなりムラがある。77・78は瓦質土器、77は摺鉢、78は火鉢である。77は横方向にハケ調整した後、縦方向のハケ調整を施す。燻しのため、口唇と外面上部、内面の一部が光沢のある黒色を呈する。78は菊花文スタンプを施したものである。外面の菊花文下には横方向のヘラ調整、内面にはなめにハケ目が残る。80は鞴の羽口、81は自然石を利用した砚、82は３面使用され、２条の樋状溝がある砂岩製の砥石と思われるもの、85は稜線が粗雑だが、丁寧に磨かれた銅鏡片である。第58図86～88は、石鍋を再利用したものである。87は両面から穿孔したもの、88は両面に樋状溝を刻んだものである。89は石錘で、全面に細かい削り痕があり、両面中央に刻みを入れた後、上下に段を施す。90は滑石製の勾玉で、下端部が欠損しているため、上端部と同様穿孔されていた可能性がある。全面研磨されている。91～98は土錘、99・100は断面が正方形状でア

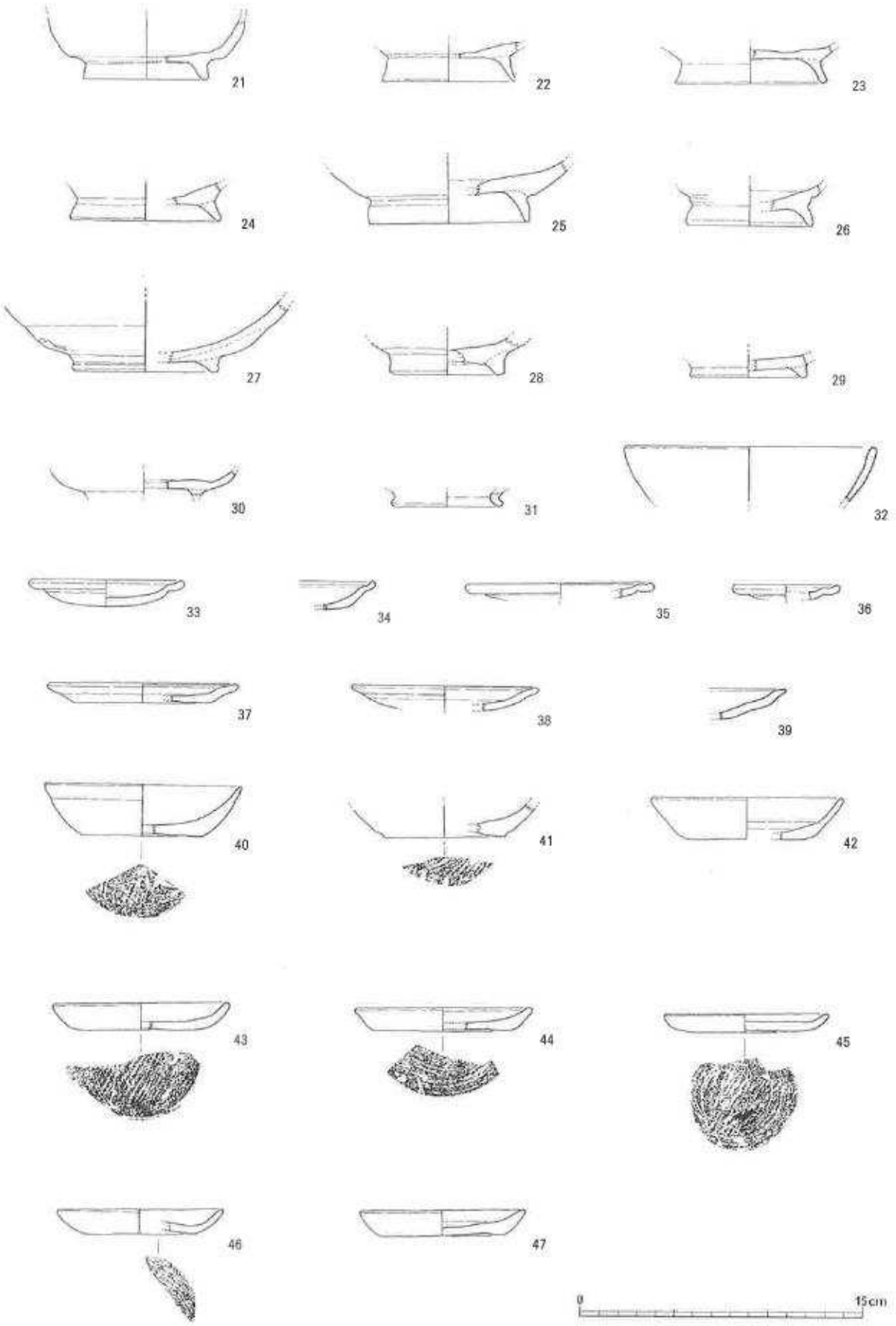
グをもたない。101は鉛製の鉄砲玉、102・103は、1086年初鋳の「元祐通寶」の刻印がある銅銭である。

参考文献

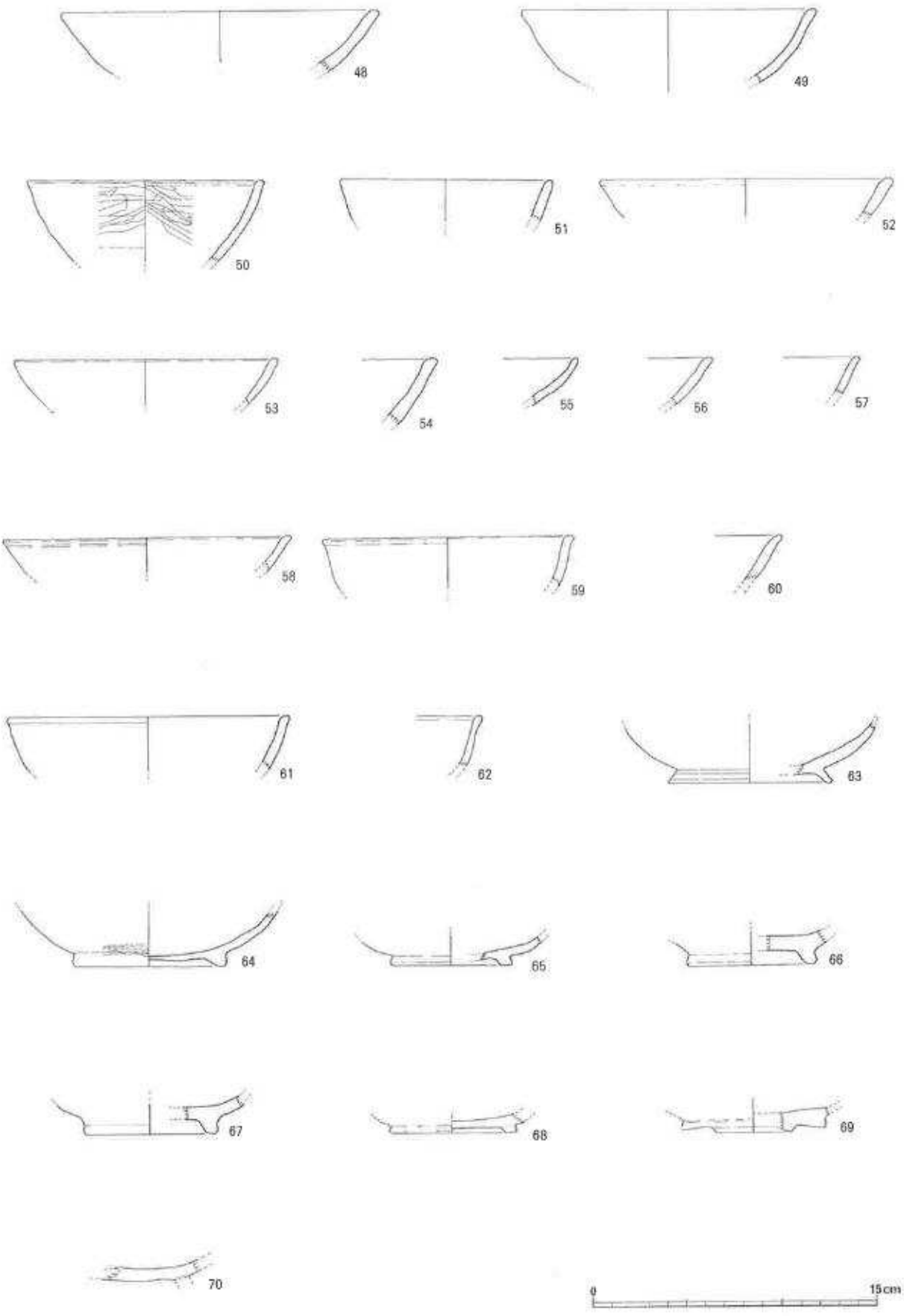
宮崎貴夫編　『今福遺跡Ⅰ』　長崎県文化財調査報告書第68集　長崎県教育委員会　1984
藤田和裕編　『朝日山遺跡』　小浜町文化財調査報告書第１集　小浜町教育委員会　1981
山崎純男・島津義昭　「４晩期の土器　九州の土器」　『縄文時代の研究』４　縄文土器Ⅱ　雄山閣
柳田康雄　「土師器の編年　２九州」　『古墳時代の研究』６　土師器と須恵器　雄山閣
舟山良一　「須恵器の編年　２九州」　『古墳時代の研究』６　土師器と須恵器　雄山閣
横山浩一　『海の中道遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第87集　福岡市教育委員会　1982
森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会編　「森田勉氏遺稿集」　『大宰府陶磁器研究』　1995



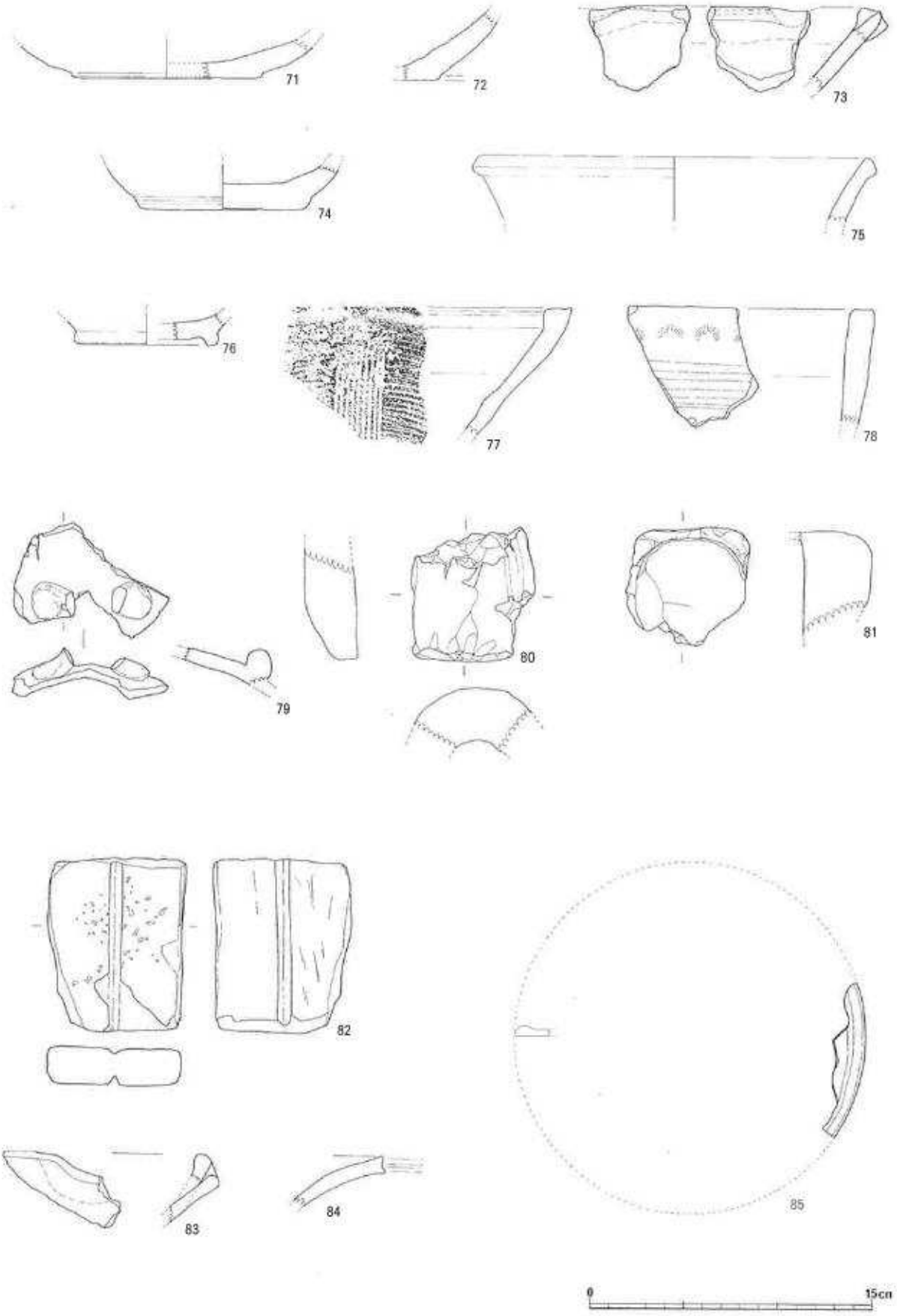
第54図　中世の遺物９（１／３）



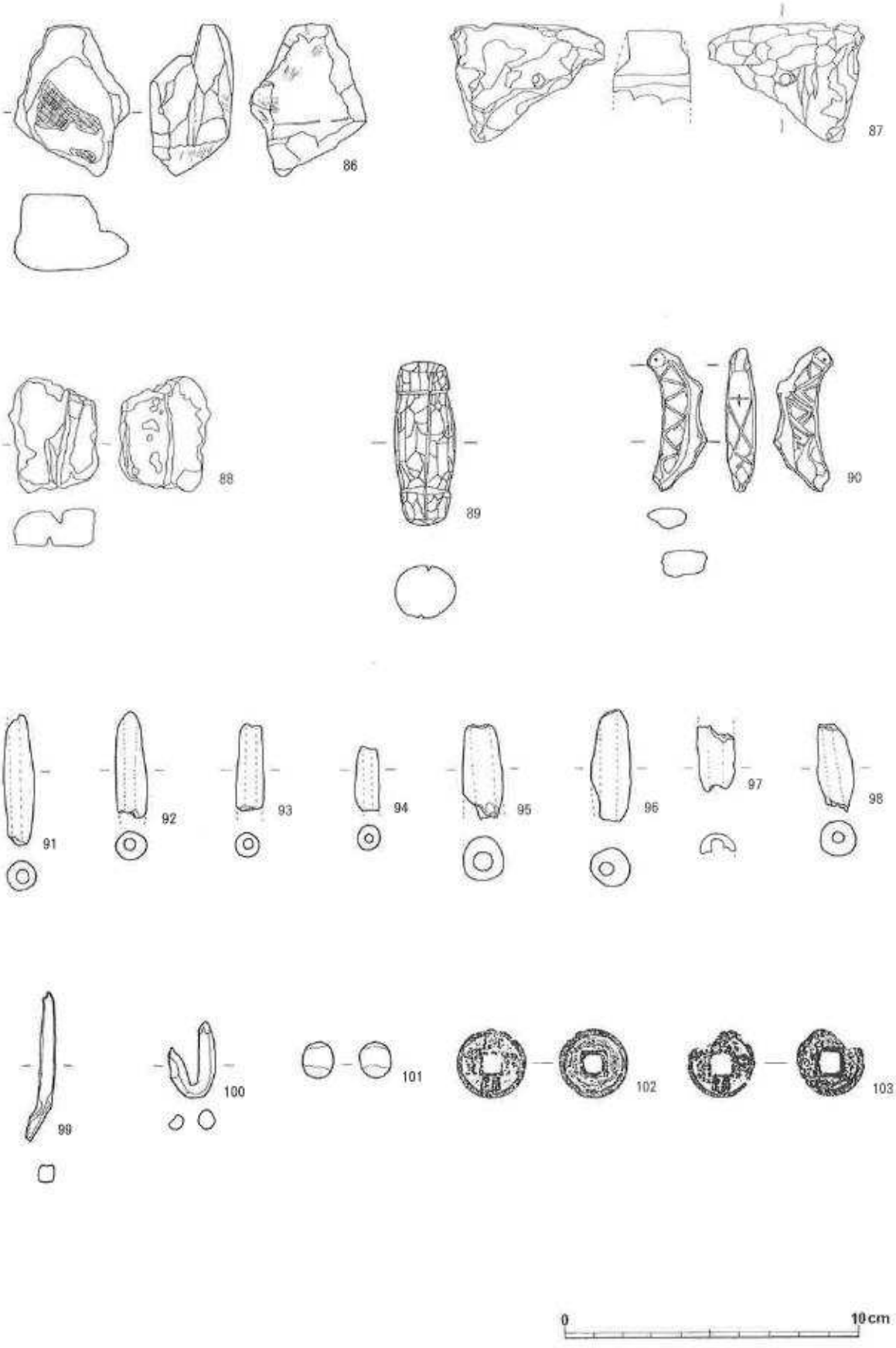
第55図　中世の遺物10（1／3）



第56図　中世の遺物11（1／3）



第57図　中世の遺物12（１／３）



第58図　中世の遺物13（１／３）

表1　今福遺跡出土石器計測表1

挿図番号	出土地点	器種	石材	計測値（cm・g）			
				全長	最大幅	厚さ	重量
18－ 1	表採	ナイフ形石器	黒曜石	2.55	1.15	0.3	0.8
－ 2	H14－Ⅵ	石鏃	〃	2.3	1.7	0.3	0.8
－ 3	g59－Ⅵ	〃	〃	2.15	1.25	0.35	0.6
－ 4	F 1 －Ⅸ	〃	〃	2.05	1.3	0.3	0.6
－ 5	F 2 －Ⅶ	〃	〃	1.9	1.65	0.5	1.2
－ 6	H14－Ⅱ	〃	〃	1.9	1.2	0.25	0.5
－ 7	B13－V	〃	〃	1.85	1.55	0.3	0.8
－ 8	F 1 －Ⅸ	〃	〃	2.95	1.9	0.4	2.0
－ 9	G 7 －縁下	〃	〃	2.6	1.55	0.4	1.2
－ 10	GH 7・8 －Ⅳ	〃	〃	2.75	1.9	0.3	2.0
－ 11	c57－Ⅶ	〃	〃	3.4	2.65	0.4	2.1
－ 12	F 8 －Ⅷ	〃	〃	1.3	1.85	0.35	0.7
－ 13	G40－Ⅵ	〃	〃	1.65	1.8	0.3	1.1
－ 14	FG 2 －Ⅶ	〃	〃	1.8	1.9	0.25	0.8
－ 15	F 2 －Ⅶ	〃	〃	1.6	2.1	0.45	1.4
－ 16	G 0 －Ⅲ～Ⅷ	〃	〃	3.05	2.05	0.5	2.2
－ 17	G 2・3 －Ⅷ	〃	〃	1.45	1.7	0.25	0.8
－ 18	N22－Ⅵ	〃	〃	2.6	1.85	0.4	1.0
－ 19	F 0・1 －Ⅱ～V	〃	〃	2.35	2.25	0.25	1.0
－ 20	G 2・3 －Ⅷ	〃	〃	1.4	1.9	0.25	0.8
－ 21	F 1 －Ⅸ	〃	〃	1.45	2.05	0.3	0.8
－ 22	F 0 －Ⅷ	〃	〃	1.7	1.85	0.35	1.0
－ 23	F 1 －Ⅸ	〃	〃	1.75	1.85	0.35	1.0
－ 24	E13－Ⅵ	〃	〃	2.0	2.05	0.35	1.2
－ 25	H42－Ⅵ	〃	〃	1.6	1.7	0.35	1.0
－ 26	F 1 －Ⅷ	〃	〃	3.25	2.15	0.5	2.2
－ 27	D13－Ⅵ	〃	〃	1.4	1.6	0.35	1.0
－ 28	F 2 －Ⅷ	〃	〃	1.65	1.75	0.5	1.2
－ 29	F 1 －Ⅸ	〃	〃	2.2	1.35	0.3	0.8
－ 30	F 0・1 －Ⅵ	〃	〃	1.95	1.45	0.3	0.8
－ 31	F 0・1 －Ⅵ	〃	〃	1.75	1.5	0.35	0.8
－ 32	F 3 －V	〃	〃	2.0	2.05	0.4	1.8
19－ 33	H 9 －V	〃	〃	2.55	1.75	0.4	1.4
－ 34	F 0・1 －Ⅵ	〃	〃	1.4	1.4	0.3	0.5
－ 35	D13－Ⅵ	〃	〃	1.45	1.75	0.3	0.8
－ 36	G36－Ⅱ	〃	〃	2.05	2.3	0.45	1.8
－ 37	F 2 －Ⅷ	〃	〃	1.1	1.4	0.3	0.4
－ 38	F 0 －Ⅷ	〃	〃	3.2	2.1	0.4	2.0
－ 39	E12－Ⅵ	〃	〃	2.05	1.7	0.45	1.0
－ 40	F 0・1 －Ⅵ	〃	〃	1.7	2.1	0.35	0.8
－ 41	F 2 －Ⅷ	〃	〃	2.15	1.5	0.4	0.8
－ 42	G37－Ⅵ′	〃	〃	1.5	1.55	0.3	0.6
－ 43	F 1 －Ⅷ	〃	〃	1.6	1.7	0.3	0.6
－ 44	G42－V	〃	〃	1.65	1.2	0.3	0.5
－ 45	FG 7 －Ⅳ～Ⅵ	〃	〃	2.55	1.9	0.4	1.6

表２　今福遺跡出土石器計測表２

挿図番号	出土地点	器種	石材	計測値（cm・g）			
				全長	最大幅	厚さ	重量
19－ 46	G40－Ⅵ	石鏃	黒曜石	3.1	2.05	0.4	2.7
－ 47	G０－Ⅲ～Ⅷ	〃	〃	2.6	2.1	0.6	2.8
－ 48	G７－Ⅴ	〃	〃	2.95	2.0	0.7	3.2
－ 49	F１－Ⅸ	〃	〃	3.4	2.25	0.7	3.5
－ 50	FG２－Ⅵ	〃	〃	2.3	1.9	0.35	1.0
－ 51	O22－Ⅷ	〃	〃	2.0	2.0	0.3	0.8
－ 52	D23－Ⅵ	〃	〃	1.8	1.9	0.4	0.8
－ 53	排土	〃	〃	2.4	1.7	0.3	1.1
－ 54	F０－Ⅶ	〃	〃	3.3	2.05	0.45	1.6
－ 55	F２－Ⅶ	〃	〃	2.3	1.8	0.35	1.4
－ 56	F０・１－Ⅵ	〃	〃	2.4	1.85	0.35	1.6
－ 57	F０－Ⅶ	〃	〃	1.85	1.75	0.35	1.0
－ 58	F２－Ⅶ	〃	〃	2.05	1.85	0.55	1.8
－ 59	F０－Ⅱ	〃	〃	1.75	1.75	0.3	1.0
－ 60	E13－Ⅶ	〃	〃	2.45	1.75	0.35	1.0
－ 61	GH42－Ⅵ	〃	〃	1.7	1.5	0.25	0.8
－ 62	H38－Ⅱ	〃	〃	2.2	2.35	0.35	1.4
－ 63	F１・２－Ⅶ	〃	〃	1.9	1.75	0.45	1.6
－ 64	H12－Ⅵ	〃	〃	0.9	1.65	0.25	0.6
20－ 65	F３－Ⅶ	〃	〃	1.5	2.0	0.35	0.9
－ 66	F３－Ⅶ	〃	〃	2.45	1.85	0.5	2.1
－ 67	G39－Ⅵ′	〃	〃	1.75	1.2	0.3	0.5
－ 68	H13－Ⅵ	〃	〃	1.55	1.7	0.25	0.6
－ 69	gh58－Ⅱ	〃	〃	1.3	2.15	0.3	0.7
－ 70	G37－Ⅵ′	〃	〃	1.5	1.55	0.25	0.7
－ 71	G39－Ⅵ	〃	〃	1.6	1.75	0.4	1.3
－ 72	H38－Ⅱ	〃	〃	2.1	1.85	0.3	1.4
－ 73	O23－Ⅴ′	〃	〃	2.1	2.25	0.4	1.9
－ 74	F０－Ⅶ	〃	〃	2.1	1.7	0.4	1.2
－ 75	J22－Ⅲ	〃	〃	2.3	1.55	0.4	1.2
－ 76	G11－Ⅲ	〃	〃	2.05	1.25	0.3	0.8
－ 77	D13－Ⅴ	〃	〃	2.0	1.3	0.6	1.2
－ 78	C13－Ⅵ	〃	〃	1.4	1.2	0.25	0.4
－ 79	H16－Ⅴ	〃	〃	1.55	1.5	0.25	0.6
－ 80	F１－Ⅸ	〃	〃	1.0	1.35	0.3	0.3
－ 81	F１・２－Ⅵ	〃	〃	2.75	2.2	0.35	1.6
－ 82	G31・32－Ⅵ	〃	〃	2.8	2.4	0.6	4.0
－ 83	F１・２－Ⅷ	〃	〃	3.25	2.1	0.6	3.4
－ 84	D13－Ⅵ	〃	〃	2.05	1.6	0.35	1.0
－ 85	F０・１－Ⅵ	〃	〃	1.95	2.15	0.35	1.6
－ 86	F２－Ⅷ	〃	〃	2.4	2.05	0.4	2.2
－ 87	F０－Ⅷ	〃	〃	2.6	2.05	0.4	2.0
－ 88	F１－Ⅷ	〃	〃	1.7	2.4	0.5	1.6
－ 89	F０－Ⅵ	〃	〃	3.9	2.3	0.5	5.1
－ 90	H22－Ⅲ	〃	〃	3.55	2.35	0.7	4.6

表3　今福遺跡出土石器計測表3

挿図番号	出土地点	器種	石材	計測値（cm・g）			
				全長	最大幅	厚さ	重量
20－ 91	D12－Ⅵ	石鏃	黒曜石	3.55	2.5	1.05	7.8
21－ 92	F 1 －Ⅷ	〃	〃	3.6	1.6	0.5	3.6
－ 93	G40－Ⅵ	〃	〃	2.8	2.65	0.7	4.1
－ 94	H 7 －Ⅷ	〃	〃	3.2	1.85	0.35	1.5
－ 95	G11－Ⅶ	〃	〃	2.1	2.5	0.4	2.3
－ 96	F 1 －Ⅸ	〃	〃	2.35	2.6	0.65	3.0
－ 97	F 0 －Ⅷ	〃	〃	2.8	2.4	0.4	2.2
－ 98	F 1 －Ⅸ	〃	〃	1.85	2.35	0.45	1.6
－ 99	F 3 －Ⅷ	〃	〃	3.45	1.95	0.45	2.8
－100	G 4 －Ⅶ	〃	〃	2.8	2.2	0.6	2.5
－101	F 0 －Ⅷ	〃	〃	2.3	2.1	0.4	1.6
－102	F 1 －Ⅸ	〃	安山岩	3.15	1.75	0.45	2.2
－103	F 0・1 －Ⅱ	〃	黒曜石	3.3	1.95	0.7	3.4
－104	F 2 －Ⅷ	〃	〃	2.9	1.8	0.5	2.4
－105	F 1 －Ⅸ	〃	安山岩	3.6	2.4	0.7	5.4
－106	H39－Ⅵ	〃	黒曜石	3.0	1.9	0.55	2.5
－107	F 1 －Ⅷ	〃	〃	3.0	1.65	0.4	1.8
－108	G39－Ⅵ′	〃	〃	3.8	2.4	1.0	8.5
－109	F 1 －Ⅷ	〃	〃	1.95	1.7	0.3	0.7
－110	G 8 －Ⅵ	〃	〃	1.75	1.25	0.3	0.5
－111	表採	〃	〃	2.05	1.0	0.35	0.5
－112	H110－Ⅵ	〃	〃	2.35	1.55	0.4	1.0
－113	H14－Ⅶ	〃	〃	1.8	1.2	0.25	0.6
－114	F 3 －Ⅳ	〃	〃	2.4	1.55	0.4	1.2
22－115	F 0・1 －Ⅱ～Ⅴ	〃	〃	2.05	1.35	0.3	0.6
－116	F 0 －Ⅶ	〃	〃	1.8	1.1	0.35	0.6
－117	G 0 －Ⅷ	〃	〃	1.8	1.6	0.4	1.2
－118	G18－Ⅵ	〃	〃	1.5	1.15	0.35	0.6
－119	D12－Ⅵ	〃	〃	1.7	1.3	0.4	0.8
－120	G58－Ⅱ	〃	〃	1.4	1.2	0.3	0.6
－121	F 1 －Ⅷ	〃	〃	1.05	1.4	0.3	0.5
－122	F 1 －Ⅸ	〃	〃	1.5	2.4	0.3	0.6
－123	F 0・1 －Ⅵ	〃	〃	1.35	1.45	0.2	0.5
－124	G21－Ⅱ	〃	〃	1.45	1.4	0.3	0.4
－125	F 0 －Ⅷ	〃	〃	1.25	1.35	0.3	0.4
－126	F 2 －Ⅶ	〃	〃	1.2	1.4	0.35	0.4
－127	F 2 －Ⅶ	〃	〃	1.05	1.15	0.2	0.3
－128	F 2 －Ⅶ	〃	〃	1.7	1.55	0.35	1.0
－129	F 0 －Ⅷ	〃	〃	1.15	1.75	0.45	0.8
－130	F 3 －Ⅷ	〃	〃	2.15	1.95	0.35	1.0
－131	F 0 －Ⅶ	〃	〃	2.3	1.75	0.3	1.0
－132	H39－Ⅵ	〃	〃	2.2	2.05	0.55	1.9
－133	G11－Ⅱ	〃	〃	1.95	1.75	0.3	1.4
－134	F 1 －Ⅸ	〃	〃	1.85	1.35	0.5	1.0
－135	G 2 －Ⅳ	〃	〃	2.45	1.75	0.4	1.6

表4　今福遺跡出土石器計測表4

挿図番号	出土地点	器種	石材	計測値（cm・g）			
				全長	最大幅	厚さ	重量
22－136	F2－Ⅷ	石鏃	黒曜石	1.75	2.05	0.35	0.9
－137	F0－Ⅷ	〃	〃	1.9	1.9	0.5	1.2
－138	FG7－Ⅳ～Ⅵ	〃	〃	1.4	1.6	0.2	0.7
－139	FG2－Ⅶ	〃	〃	1.7	1.6	0.3	0.7
－140	FG7－Ⅳ～Ⅵ	〃	〃	2.0	1.35	0.35	0.7
－141	F2－Ⅱ	〃	〃	1.75	1.2	0.3	0.7
－142	排土	〃	〃	1.6	1.2	0.4	0.9
－143	G25－Ⅱ	〃	〃	1.45	0.9	0.2	0.3
－144	G3－Ⅵ	〃	〃	1.3	1.5	0.3	0.6
－145	表採	〃	〃	1.6	1.3	0.6	1.1
－146	F1－Ⅸ	〃	〃	2.85	2.3	0.5	2.4
－147	F0－Ⅷ	〃	〃	2.0	2.35	0.45	2.0
－148	G7－隊下	〃	〃	3.25	1.75	0.4	2.0
－149	F13－Ⅷ′	〃	〃	2.6	2.0	0.3	1.4
23－150	F2－Ⅶ	サイドブレイド	〃	1.85	1.9	0.3	1.1
－151	F0－Ⅷ	〃	〃	2.05	2.05	0.35	1.7
－152	F8－Ⅷ	〃	〃	2.1	1.5	0.3	1.0
－153	B13－Ⅵ	〃	〃	2.0	2.45	0.55	2.4
－154	F2－Ⅶ	〃	〃	1.95	1.8	0.45	1.4
－155	H39－Ⅱ	〃	〃	1.9	1.7	0.45	1.3
－156	G4－Ⅵ	〃	〃	1.55	1.9	0.35	0.8
－157	F0・1－Ⅱ～Ⅴ	〃	〃	1.8	1.7	0.4	1.7
－158	H6－Ⅵ	〃	〃	1.65	1.9	0.35	1.3
－159	G2・3－Ⅷ	〃	〃	2.3	2.05	0.4	1.6
－160	G0－Ⅷ	石鋸	〃	2.25	3.25	0.75	4.6
－161	f59－Ⅶ	剥片鏃	〃	1.8	1.65	0.25	0.6
－162	R8－Ⅲ	〃	〃	2.25	1.2	0.3	0.7
－163	G38－Ⅵ′	〃	〃	2.0	1.65	0.4	1.0
－164	F8－Ⅵ	つまみ形石器	〃	3.0	2.35	0.55	3.3
－165	H10－Ⅰ	〃	〃	2.4	2.25	0.7	3.0
－166	E12－Ⅳ	〃	〃	1.6	1.6	0.55	1.2
－167	FG7－Ⅳ～Ⅵ	〃	〃	1.55	1.3	0.3	0.9
－168	F2－Ⅶ	〃	〃	1.1	1.85	0.75	1.3
－169	G39－Ⅴ	石錐	〃	3.2	1.7	0.4	1.8
－170	FG1－Ⅶ	〃	〃	2.25	1.85	0.5	1.4
－171	F1・2－Ⅶ	〃	〃	2.3	1.65	0.7	3.1
－172	E12－Ⅶ	〃	〃	2.8	2.2	0.55	2.7
－173	H42－Ⅲ	〃	〃	2.95	2.5	1.05	3.7
－174	FG2－Ⅶ	〃	〃	2.6	2.0	0.45	1.8
－175	G8－Ⅵ	〃	安山岩	3.5	4.15	0.75	7.7
－176	F0－Ⅷ	〃	黒曜石	3.3	2.6	1.0	5.8
24－177	G37－Ⅱ	〃	安山岩	5.6	3.6	1.4	22.8
－178	F1－Ⅸ	尖頭器	〃	8.25	3.95	1.2	30.8
－179	F1－Ⅸ	スクレイパー	黒曜石	3.5	3.2	1.1	11.6
－180	FG1－Ⅶ	〃	〃	3.1	2.4	0.5	3.3

表5　今福遺跡出土石器計測表5

挿図番号	出土地点	器種	石材	計測値（cm・g）			
				全長	最大幅	厚さ	重量
24－181	F 2－Ⅷ	スクレイパー	黒曜石	2.4	2.4	0.8	6.7
－182	G40－Ⅵ	ラウンドスクレイパー	〃	2.4	3.05	0.7	5.3
－183	G 0－Ⅵ	スクレイパー	〃	3.7	2.7	0.85	7.7
－184	F 1－Ⅷ	〃	〃	3.45	2.7	0.7	4.4
－185	F 1－Ⅸ	〃	〃	2.25	3.45	0.7	5.7
－186	FG 2－Ⅶ	〃	〃	1.8	2.7	0.75	4.1
－187	G11－アゼ	〃	〃	1.45	2.85	0.7	3.0
－188	G 4－Ⅵ	〃	〃	2.6	3.0	0.75	4.5
－189	H39－Ⅵ	〃	〃	2.5	1.95	0.65	3.2
－190	O22－Ⅴ	ラウンドスクレイパー	〃	2.85	2.8	1.05	7.1
－191	H 7－Ⅳ	スクレイパー	〃	1.85	3.2	0.55	3.2
－192	G10－Ⅵ	〃	〃	2.5	5.15	0.7	6.6
25－193	FG 1－Ⅶ	ラウンドスクレイパー	〃	3.25	2.75	0.75	5.9
－194	G 8－Ⅵ	スクレイパー	〃	4.1	2.2	1.25	8.1
－195	H39－Ⅵ	〃	〃	3.3	1.9	0.55	3.9
－196	表採	〃	〃	2.9	2.45	0.8	4.7
－197	d 58－Ⅵ	〃	〃	4.1	6.3	2.4	51.3
－198	H39－Ⅵ	〃	〃	2.1	1.5	0.55	1.5
－199	F 1－Ⅸ	〃	〃	2.5	2.7	0.6	2.6
－200	F 1－Ⅶ	〃	〃	2.6	1.25	0.5	1.5
－201	Q23－V′	使用痕ある剥片	〃	5.2	2.4	0.75	15.3
－202	H26・27－Ⅲ	〃	安山岩	8.05	3.95	2.3	52.9
－203	R23－Ⅵ	〃	黒曜石	5.0	1.95	1.0	7.6
－204	G40－Ⅵ	〃	〃	3.45	2.05	0.85	5.6
－205	F 0－Ⅷ	〃	〃	1.85	1.85	0.5	1.5
26－206	F 0－Ⅵ	〃	〃	6.6	1.7	0.5	5.9
－207	F 0－Ⅷ	加工痕ある剥片	〃	2.0	1.95	0.6	2.6
－208	F 0－Ⅷ	〃	〃	2.4	2.2	0.5	2.1
－209	FG 2－Ⅵ	〃	〃	1.6	1.9	0.8	1.3
－210	H14－Ⅲ	〃	〃	1.5	1.4	0.4	0.7
－211	F 0－Ⅷ	石核	〃	2.9	3.45	2.0	20.7
－212	FG 1－Ⅶ	〃	〃	2.9	3.85	2.15	22.3
－213	d 59－Ⅳ	〃	〃	3.05	3.6	2.2	26.6
－214	G42－Ⅵ	〃	〃	2.45	2.85	2.1	14.4
－215	F 4－Ⅲ	〃	〃	4.75	3.9	0.9	16.8
27－216	G13－Ⅱ	石斧	泥岩	10.65	6.2	3.75	282.0
－217	I 22－Ⅱ	〃	?	9.05	6.2	3.65	250.0
－218	G25－Ⅳ	〃	安山岩	7.85	4.8	2.75	112.0
－219	H 7－Ⅶ	〃	?	11.7	5.8	3.0	221.0
－220	G 8－Ⅵ	〃	玄武岩	9.75	6.5	1.8	148.0
－221	H26・27－Ⅲ	スクレイパー	安山岩	7.0	6.1	1.8	66.8
－222	P 8 攪乱	〃	〃	9.5	7.05	2.3	151.4
－223	表採	〃	〃	6.45	6.8	1.8	74.1
－224	U11－Ⅱ	〃	〃	4.55	5.9	1.85	65.0
－225	U13－Ⅳ	〃	〃	4.45	8.1	1.4	50.8

表6　今福遺跡出土石器計測表6

挿図番号	出土地点	器種	石材	計測値（cm・g）			
				全長	最大幅	厚さ	重量
27－226	排土	スクレイパー	安山岩	2.95	7.7	0.95	18.6
31－ 1	G4－Ⅵ	石匙丁	堆積岩	5.6	10.65	0.5	35.7
－ 2	G7－礫下	〃	砂岩	3.9	7.7	0.55	29.2
－ 3	F1－Ⅶ	〃	堆積岩	3.4	3.35	0.45	8.0
－ 4	G4－Ⅴ	〃	砂岩	4.2	6.75	0.55	24.9
－ 5	H13－Ⅱ	〃	玄武岩	3.75	2.75	0.55	9.8
－ 6	H10－Ⅳ	〃	〃	4.1	5.15	0.55	14.0
46－ 1	G0－Ⅲ～Ⅷ	石鍋	滑石	9.2	12.35	4.3	450.0
－ 2	F0－Ⅴ	〃	〃	4.3	8.3	4.7	210.0
－ 3	H7・8－Ⅳ	〃	〃	2.45	7.5	3.9	106.0
－ 4	F4－Ⅵ	〃	〃	12.2	13.4	4.5	876.0
－ 5	G7－礫	〃（口径18.4）	〃	4.3	7.6	4.25	111.0
－ 6	H5－Ⅵ	〃	〃	9.25	9.45	4.1	446.0
－ 7	L22－Ⅶ	〃	〃	5.15	7.15	2.25	99.8
47－ 8	排土	〃	〃	8.35	8.8	3.2	251.0
－ 9	R23－Ⅴ	〃	〃	7.15	9.85	2.45	319.8
－ 10	H17－Ⅷ	〃（口径26.6）	〃	8.15	7.05	2.7	280.0
－ 11	P22－Ⅴ	〃	〃	4.45	9.15	2.6	150.0
－ 12	G7－礫	〃	〃	7.1	7.15	2.3	189.0
－ 13	G7－礫	〃（口径19.6）	〃	4.3	8.95	1.35	99.5
－ 14	LM23－Ⅳ	〃	〃	6.4	9.15	3.15	207.0
－ 15	R8－Ⅲ	〃	〃	5.6	6.5	1.7	90.0
－ 16	G8－Ⅱ	〃	〃	6.1	7.3	1.75	114.0
－ 17	L22－Ⅶ	〃	〃	7.3	11.85	3.0	294.0
－ 18	H15－Ⅶ	〃（底径24.2）	〃	5.3	11.55	1.8	345.0
－ 19	FG11・12－Ⅳ	〃	〃	1.9	9.9	1.35	200.0
58－ 86	H5－Ⅵ	石鍋転用品	〃	5.2	4.0	2.8	60.2
－ 87	L22－Ⅶ	穿孔ある石器	〃	4.05	5.25	2.7	60.9
－ 88	B13－Ⅵ	石錘	〃	3.9	3.1	1.3	22.3
－ 89	FG－5	〃	〃	5.6	2.05	1.8	32.4
－ 90	L22－Ⅶ	勾玉	〃	4.85	2.0	1.0	12.1

表7　今福遺跡出土土器観察表1

挿図番号	出土地点	種別	器種	径・器高（cm）	色調	胎土
28－227	MN22･23－Ⅱ～Ⅳ	縄文	鉢		内暗茶褐色，外橙褐色	長石・雲母・滑石
－228	U11－Ⅶ	〃	深鉢		内黄灰色，外淡灰茶色	石英・長石・雲母・角閃石
－229	F1－Ⅸ	〃	〃		内淡灰茶色，外灰茶色	石英・長石・雲母・角閃石
－230	排土	〃	〃		淡灰茶色	雲母
－231	F1－Ⅸ	〃	〃		暗黄褐色	石英・雲母・角閃石
－232	F0－Ⅷ	〃	〃		内暗灰茶色，外暗茶褐色	雲母・角閃石
－233	F1－Ⅸ	〃	〃		内黒色，外灰茶色	石英・長石・雲母
－234	排土	〃	鉢		内淡黄灰色，外黄灰色	石英・長石
－235	F1・2－Ⅶ	〃	〃		淡灰黄色	石英・雲母
－236	F1－Ⅸ	〃	〃		内灰黒色，外灰茶色	石英・長石・雲母
－237	排土	〃	〃		内橙色，外暗橙色	長石・雲母
－238	F1－Ⅸ	〃	〃		内黒褐色，外茶褐色	石英・雲母・角閃石
－239	F2－Ⅶ	〃	〃		灰色	石英・雲母
－240	F1・2－Ⅶ	〃	深鉢		内淡灰茶色，外黄灰色	石英・長石・雲母・角閃石
－241	i57－Ⅵ	〃	鉢	口径19.2 底径 7.6	内暗茶褐色，外暗橙褐色	石英・長石・雲母・角閃石
－242	F1－Ⅸ	〃	深鉢		内黒灰色，外淡褐色	石英・雲母・角閃石
－243	F0－Ⅵ	〃	〃		内灰橙色，外橙色	石英・雲母・角閃石
－244	F0・1－Ⅵ	〃	〃		内灰茶色，外淡灰茶色	石英・雲母・角閃石
－245	F1－Ⅸ	〃	〃		灰茶色	石英・雲母・角閃石
－246	e58－礫	〃	甕		内暗灰茶褐色，外灰茶色	石英・雲母・角閃石
－247	F1－Ⅸ	〃	深鉢		内暗灰茶色，外灰茶色	
－248	F1－Ⅸ	〃	〃		内灰茶色，外灰茶褐色	石英・長石・雲母
－249	F1－Ⅸ	〃	〃		淡灰茶色	石英・雲母・角閃石
－250	F0－Ⅵ	〃	〃		暗灰茶色	石英・雲母・角閃石
－251	F1－Ⅸ	〃	〃		灰黒色	石英・雲母・角閃石
29－252	F0・1－Ⅵ	〃	〃		内黒褐色，外灰茶褐色	石英・長石・雲母
－253	G0－Ⅶ～Ⅷ	〃	浅鉢		内灰茶褐色，外黒褐色	石英・雲母・角閃石
－254	F0・1－Ⅵ	〃	深鉢		灰茶色	雲母
－255	F2－Ⅶ	〃	浅鉢		灰茶褐色	雲母
－256	F0・1－Ⅵ	〃	〃		内暗灰茶褐色，外淡灰茶色	雲母・角閃石
－257	F1－Ⅴ	〃	〃		内肌色，外灰黒色	石英・雲母・角閃石
－258	F1－Ⅸ	〃	深鉢		内灰橙色，外暗灰茶色	雲母・角閃石
－259	FG2－Ⅶ	〃	浅鉢		内灰茶色，外淡灰橙色	石英・長石・雲母・角閃石
－260	F1－Ⅸ	〃	深鉢		内黒褐色，外暗灰茶色	雲母・角閃石
－261	F1－Ⅸ	〃	〃		灰茶色	石英・長石・雲母
－262	G7－Ⅵ	〃	浅鉢		内灰黄色，外黒茶色	石英・雲母
－263	G37－Ⅵ	〃	甕		内茶褐色，外黄褐色	石英・雲母・角閃石
－264	FG2－Ⅶ	〃	深鉢		内暗橙色，外橙褐色	雲母
－265	F0－Ⅷ	〃	〃		灰茶色	雲母
－266	F0・1－Ⅵ	〃	〃		内灰茶色，外淡灰茶色	石英・雲母・角閃石
－267	F0・1－Ⅵ	〃	〃		灰黄褐色	石英・長石・雲母
－268	G0－Ⅷ	〃	〃	口径 23.0	内茶褐色，外黒褐色	石英・長石・雲母
－269	F1－Ⅸ	〃	〃		内茶褐色，外赤橙褐色	石英・長石・雲母・角閃石
－270	G40－Ⅵ	〃	〃		内灰色，外暗橙褐色	雲母・角閃石
－271	F1・2－Ⅷ	〃	〃	口径 31.1	内灰色，外淡灰茶褐色	石英・雲母・角閃石
－272	G3－Ⅴ	〃	〃		内淡黄白色，外淡灰茶褐色	石英・長石・雲母・角閃石

表8　今福遺跡出土土器観察表2

挿図番号	出土地点	種別	器種	径・器高（cm）	色調	胎土
29－273	F1・2－VI	縄文	深鉢		内灰茶色，外暗灰茶色	石英・雲母
－274	FG2－VII	〃	〃		淡黄灰色	石英・長石・雲母
－275	F1・2－VIII	〃	鉢		内黒褐色，外肌色	石英・雲母
－276	F0－VIII	〃	〃		内黒色，外黒褐色	石英・雲母・角閃石
－277	GH39－V	〃	〃		内黒褐色，外橙褐色	石英・雲母・角閃石
－278	F1－IV	〃	〃		内暗茶褐色，外暗橙褐色	石英・雲母
－279	F0－VIII	〃	〃		内黒色，外黒褐色	石英・雲母
30－280	GH37－V	〃	深鉢	底径 7.5	内淡灰橙色，外橙色	雲母・角閃石
－281	F0－VIII	〃	鉢	底径 11.4	淡黄灰色	石英・雲母・角閃石
－282	F1－IX	〃	〃	底径 10.0	内灰色，外橙色	雲母
－283	F2－VII	〃	深鉢	底径 8.7	内淡灰橙色，外橙色	石英・雲母・角閃石
－284	F0・1－VI	〃	鉢	底径 7.4	内淡灰色，外淡橙色	石英・雲母
－285	F8－V	〃	深鉢	底径 8.3	内暗黄褐色，外橙色	石英・雲母・角閃石
－286	H11－III	〃	鉢	底径 7.0	内灰黒褐色，外橙色	石英・雲母・角閃石
－287	F1－IX	〃	深鉢	底径 7.7	内淡灰茶色，外橙色	石英・雲母・角閃石
－288	G4－V	〃	鉢	底径 8.5	内黄灰色，外黄褐色	石英・雲母
－289	F1－IX	〃	深鉢	底径 8.6	赤橙褐色	石英・雲母・角閃石
－290	H39－VI	〃	鉢	底径 5.2	内灰色，外橙色	雲母・角閃石
－291	H37－VI	〃	〃	底径 7.0	内黄橙褐色，外赤橙褐色	石英・雲母・角閃石
－292	F1－IX	〃	〃	底径 8.0	赤橙色	石英・長石・雲母
－293	F0－VIII	〃	〃	底径 7.7	内灰色，外橙色	雲母・角閃石
－294	表採	〃	〃		内淡灰茶色，外赤橙色	長石・雲母
－295	FG1－VII	〃	〃		内灰色，外赤橙色	雲母・角閃石
－296	FG1－VII	〃	深鉢	底径 8.7	内淡灰茶色，外橙色	石英・雲母・角閃石
－297	G39－V	〃	鉢	底径 8.1	内灰黄色，外黄褐色	雲母・角閃石
－298	G37－VI	〃	〃	底径 7.6	内橙色，外赤橙色	石英・長石・雲母
－299	F1・2－VIII	〃	〃	底径 8.1	内淡灰茶色，外橙色	石英・雲母・角閃石
－300	F1・2－VIII	〃	〃		内淡黄白色，外橙色	雲母
32－ 7	F1・2－VII	弥生	甕	口径 17.8	内暗灰茶色，外灰茶色	石英・長石・雲母
－ 8	F1－IX	〃	〃		内淡黄白色，外淡灰茶色	石英・長石・雲母
－ 9	F1－IX	〃	〃		内淡黄白色，外灰茶色	石英・長石・雲母
－ 10	F1－IX	〃	〃		内淡黄褐色，外黄褐色	石英・長石・雲母
－ 11	F0－VIII	〃	〃		内灰茶色，外暗灰茶色	石英・長石・雲母
－ 12	F0－VIII	〃	〃		肌色	石英・長石・雲母
－ 13	F1-IX, F1・2-VIII	〃	〃		内灰茶色，外淡橙色	石英・長石・雲母
－ 14	G7－V	〃	〃	口径 28.0	内淡橙色，外橙褐色	石英・長石・雲母
－ 15	H7－V	〃	〃	口径 20.5	橙色	石英・長石・雲母
－ 16	F1－IX	〃	〃	口径 14.5	内茶褐色，外暗茶褐色	石英・雲母
－ 17	G7－V	〃	〃	口径 24.0	淡橙色	石英・長石・雲母
－ 18	FG7－IV～VI	〃	〃		橙褐色	石英・長石・雲母
－ 19	F1－IX	〃	〃	口径 23.4	灰茶色	石英・雲母
－ 20	H7－VI	〃	〃		橙褐色	石英・雲母
－ 21	Q9－撹乱	〃	〃		内橙色，外暗橙褐色	石英・長石・雲母
－ 22	FG7－IV～VI	〃	〃	口径 16.7	橙色	石英・雲母・角閃石
－ 23	F0－VI	〃	〃	口径 25.2	肌色	石英・長石・雲母
－ 24	F0－VIII	〃	〃	口径 26.2	内淡茶褐色，外赤褐色	石英・長石・雲母

表9　今福遺跡出土土器観察表3

挿図番号	出土地点	種別	器種	径・器高（cm）	色調	胎土
32－25	F0・1－Ⅵ	弥生	甕		内灰茶色，外暗灰茶色	石英・長石・雲母
33－26	O22－Ⅵ	〃	〃		内灰茶色，外淡黄褐色	石英・雲母
－27	F1－Ⅸ	〃	〃		内暗灰茶色，外橙色	石英・長石・雲母
－28	H7・8－Ⅱ	〃	〃	底径 5.8	内灰茶褐色，外赤橙色	石英・長石・雲母
－29	G4－Ⅶ	〃	〃	底径 11.4	橙褐色	石英・長石・雲母
－30	F1・2－Ⅷ	〃	〃	底径 7.6	内淡黄白色，外橙褐色	石英・長石・雲母
－31	F1－Ⅸ	〃	〃	底径 9.4	内淡灰茶色,外淡黄白色	石英・長石・雲母
－32	F0－Ⅷ	〃	〃	底径 9.3	内淡灰茶色，外灰橙色	石英・雲母
－33	I11－Ⅳ	〃	〃	底径 6.3	内淡灰茶色，外橙色	石英・長石・雲母
35－1	K22－Ⅷ	土師器	高坏		内淡灰茶色，外灰茶色	石英・長石・砂粒
－2	KL22－V′	〃	〃	口径 16.4	内淡橙色，外橙色	石英・長石・砂粒
－3	K22－Ⅶ	〃	〃	口径 18.1	橙褐色	石英・長石
－4	G22－V	〃	〃	口径 20.1	内橙色，外橙褐色	石英・雲母
－5	G22－V	〃	〃	口径18.8 底径10.1 器高12.0	内淡灰橙色,外淡灰黄色	石英・長石
－6	K23－Ⅶ	〃	〃	口径 18.8	内橙色，外灰褐色	石英・雲母
－7	K23－Ⅶ	〃	〃	口径 17.9	橙色	石英・長石・雲母
－8	KL22－Ⅶ	〃	〃	口径 19.1	内橙褐色，外橙灰色	長石・砂粒
－9	G30－Ⅳ	〃	〃	口径 19.6	淡赤色	長石・砂粒
－10	O23－Ⅵ	〃	〃	口径 17.2	橙色	石英・長石・角閃石
－11	K22－Ⅶ	〃	〃	口径 16.9	内黄白色，外肌色	石英・砂粒
－12	O23－Ⅵ	〃	〃	口径 16.2	暗橙色	石英・長石・雲母
－13	G8－縁	〃	〃	口径 16.6	橙色	石英・長石・雲母
－14	G30－V	〃	〃	口径 14.0	肌色	石英・雲母
－15	K23－Ⅶ	〃	〃	口径 15.4	内暗黄褐色,外暗橙褐色	石英・長石・雲母
－16	GH30－Ⅲ	〃	〃		内橙色，外灰橙色	長石
36－17	H8－Ⅳ	〃	〃		内肌色，外橙色	石英・雲母
－18	f58・59－Ⅲ	〃	〃		淡黄白色	長石・雲母
－19	G10－Ⅶ	〃	〃		橙色	長石・砂粒
－20	H30－V	〃	〃		内橙色，外淡橙色	長石・雲母・砂粒
－21	KL22－Ⅶ	〃	〃		内淡桃色，外桃色	石英・雲母
－22	H30－V	〃	〃	底径 10.0	内灰色，外淡赤橙色	石英・雲母・砂粒
－23	GH30－Ⅲ	〃	〃	底径 13.8	内黄橙色，外赤褐色	石英・長石・雲母・黒曜石
－24	H27－Ⅲ	〃	〃		黄白色	石英・長石・砂粒
－25	J22－Ⅳ	〃	〃		橙黄色	石英・雲母
－26	GH30－Ⅲ・Ⅳ	〃	〃		内淡灰赤白色，外淡赤白色	長石・砂粒
－27	G30－V	〃	〃		赤橙色	石英・長石・雲母
－28	H10－I	〃	〃		乳白色	石英・長石
－29	G30－V	〃	〃		内淡橙白色，外橙色	石英・雲母・砂粒
－30	L22－Ⅵ	〃	〃		淡黄灰色	長石・砂粒
－31	U11－Ⅱ	〃	〃		内淡白灰色,外淡黄白色	長石・雲母・砂粒
－32	K22－Ⅶ	〃	〃	底径 12.9	淡赤色	雲母・砂粒
－33	K22－Ⅶ	〃	〃	底径 12.3	橙灰色	石英・長石・雲母
－34	K22－Ⅶ	〃	〃	底径 13.8	内淡灰白赤色，外淡白赤色	長石・雲母・砂粒
－35	G30－Ⅵ	〃	〃	底径 12.0	灰黄白色	石英・長石・雲母
－36	K22－Ⅶ	〃	〃	底径 11.2	赤灰色	長石・雲母・砂粒
－37	H8－V	〃	〃	底径 10.3	赤灰色	石英・長石・雲母

表10　今福遺跡出土土器観察表 4

挿図番号	出土地点	種別	器種	径・器高（cm）	色調	胎土
36－ 38	K22－Ⅶ	土師器	高坏	底径 10.6	黄橙色	長石・雲母・角閃石
37－ 39	F 3－Ⅳ	〃	甕	口径 18.0	内茶褐色，外褐色	石英・長石・砂粒
－ 40	G 3－Ⅵ	〃	〃	口径 20.3	黄白色	石英・長石・角閃石
－ 41	O23－Ⅵ	〃	〃		内淡橙褐色，外橙褐色	石英・雲母
－ 42	H 8－Ⅳ	〃	〃	口径 21.0	内褐色，外橙色	石英・長石
－ 43	R22－Ⅳ	〃	〃	口径 24.0	内淡橙灰色，外橙色	石英・雲母
－ 44	G 7－Ⅳ	〃	〃	口径 22.5	橙褐色	石英・長石・雲母
－ 45	H 4－Ⅵ	〃	〃	口径 12.0	赤茶褐色	長石・雲母
－ 46	U12－Ⅲ	〃	〃	口径 14.6	内灰黄色，外暗黄褐色	石英・長石・雲母・砂粒
－ 47	K22－Ⅶ	〃	〃	口径 16.6	内灰黄褐色，外暗灰黄褐色	長石・雲母
－ 48	G 5－Ⅴ	〃	〃	口径 18.0	内淡橙白色，外橙白色	砂粒
－ 49	K23－Ⅶ	〃	〃	口径 18.2	赤茶褐色	石英・長石・雲母
－ 50	L22－Ⅵ	〃	〃	口径 16.0	内暗褐色，外白黄色	石英・長石
－ 51	H 4－Ⅵ	〃	〃	口径 16.8	淡橙灰褐色	長石・雲母・砂粒
－ 52	H 4－Ⅵ	〃	〃	口径 18.5	内白黄色，外暗黄茶褐色	石英・長石・雲母・砂粒
－ 53	H 5－Ⅵ	〃	〃	口径 16.3	灰白色	長石・角閃石・砂粒
－ 54	K22－Ⅶ	〃	〃	口径 17.0	内白黄色，外灰白色	石英・長石
－ 55	G 7－Ⅴ	〃	〃	口径 18.8	内乳白色，外灰白色	石英・長石・砂粒
38－ 56	F13－Ⅴ	〃	〃	口径 16.9	内淡黄褐色，外橙白色	石英・長石・雲母
－ 57	K23－Ⅶ	〃	〃	口径 18.2	内暗灰茶色，外暗茶褐色	石英・長石・雲母
－ 58	G30・31－Ⅴ	〃	〃	口径 15.2	内肌色，外橙灰色	石英・雲母
39－ 59	I 22－Ⅳ′	〃	坏	口径10.4 器高 6.9	橙色	角閃石・砂粒
－ 60	G22	〃	〃	口径10.2 器高 4.9	橙色	雲母
－ 61	g h58－Ⅷ	〃	〃	口径 12.4	淡赤白色	長石・雲母
－ 62	N23－Ⅵ	〃	〃	口径15.3 器高 6.2	暗黄橙色	砂粒
－ 63	g h58－Ⅷ	〃	〃	口径 13.2	内淡橙白色，外肌色	雲母
－ 64	O23－Ⅵ	〃	〃	口径 13.4	内淡白橙色，外淡橙白色	雲母
－ 65	g 58－Ⅴ	〃	〃	口径 13.8	橙白色	雲母
－ 66	K22－Ⅶ	〃	〃	口径 8.0	肌色	石英・砂粒
－ 67	N23－Ⅵ	〃	〃	口径 13.3	赤灰色	石英・雲母
－ 68	O22－Ⅵ	〃	〃	口径 9.9 器高 3.3	橙色	雲母・砂粒
－ 69	O23－Ⅵ	〃	〃		内灰橙褐色，外橙色	石英・長石・雲母
40－ 70	R 7－Ⅳ	〃	壺	底径 6.4	淡橙褐色	石英・雲母
－ 71	R 7－Ⅳ	〃	〃	底径 5.7	内肌色，外橙灰色	石英・長石・雲母
－ 72	K23－Ⅶ	〃	〃	口径 15.6	灰橙白色	長石・雲母・角閃石
－ 73	O23－Ⅵ	〃	〃		橙色	石英・長石・雲母
－ 74	G30－Ⅵ	〃	〃	口径 16.3	橙赤色	石英・雲母
－ 75	H 5－Ⅵ	〃	〃	口径 12.4	淡橙白色	石英・長石・雲母
－ 76	U12－Ⅲ	〃	〃	口径 12.9	内茶褐色，外褐色	石英・長石
－ 77	K23－Ⅶ	〃	〃	口径 13.1	内淡白橙色，外淡橙白色	石英・雲母
－ 78	G30－Ⅴ	〃	〃		内肌色，外淡黄橙褐色	石英・雲母
－ 79	K23－Ⅶ	〃	〃	口径 14.7	内淡橙灰白色，外橙白色	石英・雲母・砂粒
－ 80	G H30－Ⅲ・Ⅳ	〃	〃	口径 14.1	内淡桃灰色，外灰茶色	雲母・砂粒
－ 81	G31－Ⅳ′	〃	〃	口径 14.3	内橙色，外淡橙色	石英・雲母・砂粒
－ 82	K23－Ⅶ	〃	〃	口径 13.3	淡黄白色	長石・雲母・角閃石
－ 83	G30－Ⅴ	〃	〃	口径 16.4	濃橙色	石英・長石・雲母

表11　今福遺跡出土土器観察表5

挿図番号	出土地点	種別	器種	径・器高（cm）	色調	胎土
40－84	K22－Ⅶ	土師器	壺	口径 17.4	黄白色	長石・雲母
－85	G30－V	〃	〃		灰橙褐色	石英・長石・雲母
－86	G30・31－V	〃	〃		内淡橙灰褐色，外暗茶褐色	石英・長石・雲母・角閃石
－87	G30－V	〃	〃		内暗灰茶色，外淡橙色	石英・雲母・角閃石
－88	G30－V	〃	〃		内赤橙色，外橙褐色	石英・長石・雲母
－89	G30－V	〃	〃		淡白橙色	石英・長石・雲母・角閃石
－90	GH30－Ⅲ	〃	〃		内橙白色，外淡灰黄色	雲母・角閃石
－91	f59－Ⅲ′	〃	〃	口径 19.2	内淡橙色，外暗褐色	雲母
－92	G5－V	〃	〃	底径 5.5	内白黄色，外淡灰褐色	長石・雲母・砂粒
41－93	O23－Ⅵ	〃	手捏ね	底径 2.7	内肌色，外淡橙白色	石英・長石・雲母
－94	G0－V	〃	坏	底径 7.0	淡赤橙色	石英・長石・雲母・砂粒
－95	G8－Ⅵ	〃	〃	底径 6.9	内橙黄色，外橙褐色	石英・長石・雲母
－96	F0－Ⅲ	〃	製塩土器	口径 24.0	内淡茶褐色，外暗茶褐色	石英・長石・角閃石
－97	H4－V	〃	高坏	口径 11.9	内灰色，外淡灰橙色	長石
－98	K22－Ⅶ	〃	〃	口径 11.2	内淡灰色，外淡橙色	石英・雲母
－99	K23－Ⅶ	〃	〃	口径 13.6	淡橙白色	石英・長石・雲母
－100	K23－Ⅶ	〃	〃		内淡橙色，外橙色	石英・長石・雲母
－101	K22－Ⅶ′	〃	坏	口径 19.2	内橙色，外灰黄白色	石英・雲母・砂粒
－102	G7-礫,G7-V	〃	〃	口径 16.7	内灰褐色，外肌色	
－103	H30－V	〃	高坏		淡橙白色	石英・雲母
42－1	J22－V	須恵器	坏蓋	口径 11.4	灰青色	長石
－2	Q22－Ⅳ′	〃	〃	口径 10.9	灰白色	長石・黒粒子
－3	d57-Ⅳ,fg60-Ⅲ	〃	〃	口径 11.9	内紫灰色，外青灰色	石英・長石
－4	H30－V	〃	〃	口径 10.9	内青灰色，外灰色	石英・長石
－5	G42－Ⅵ	〃	〃	口径 11.5	濁灰色	石英
－6	H37－Ⅵ	〃	〃	口径 11.5	淡灰褐色	長石
－7	L23－V′	〃	〃	口径 11.7	内淡青灰色，外暗青灰色	
－8	H30－V	〃	〃	口径 12.2	内淡灰色，外灰色	石英・長石
－9	G41－Ⅵ	〃	〃	口径 12.4	暗紫灰色	石英・長石
－10	G36－Ⅱ	〃	〃	口径 12.8	内青灰色，外暗灰青色	黒粒子・砂粒
－11	G30－Ⅳ	〃	〃	口径 13.2	淡灰青色	石英・長石
－12	G37－V	〃	〃	口径13.4 器高 3.8	白灰色	石英・長石
－13	H30－V	〃	〃	口径 13.7	内灰白色，外灰色	長石
－14	G30・31－V	〃	〃	口径 13.8	灰白色	長石
－15	H30－V	〃	〃	口径 13.8	内灰色，外灰黒褐色	石英・砂粒
－16	H30－V	〃	〃	口径13.7 器高 3.4	灰白色	石英・長石
－17	H37・38－V	〃	〃	口径 14.3	灰色	長石
－18	G31－Ⅶ	〃	〃	口径 14.4	内明灰褐色，外灰褐色	石英・長石
－19	H30－V	〃	〃	口径 14.9	内青灰色，外灰緑色	石英
－20	G31－Ⅶ	〃	坏身	口径 11.0	内青灰色，外暗青灰色	砂粒
－21	K23－Ⅶ	〃	〃	口径 8.7	暗赤灰色	石英・長石・雲母
－22	G31－Ⅶ	〃	〃	口径 8.4 器高 3.8	暗青灰色	石英・長石
－23	G41－Ⅵ	〃	〃	口径 8.4	灰白色	石英・長石
－24	H29－V	〃	〃		内淡青灰色，外白灰色	石英
－25	H38－Ⅱ	〃	〃	口径 9.6	灰白色	長石
－26	H30－V	〃	〃	口径 9.8	内青灰色，外暗青灰色	長石

表12　今福遺跡出土土器観察表6

挿図番号	出土地点	種別	器種	径・器高（cm）	色調	胎土
42－27	GH30－Ⅲ	須恵器	坏身	口径 10.2	灰白色	
－28	排土	〃	〃		青灰色	長石・砂粒
43－29	K22－Ⅶ	〃	〃	口径 10.4	内暗青色，外深青灰色	長石
－30	H30－Ⅴ	〃	〃	口径10.4 器高 3.7	内青灰色，外灰色	石英・長石
－31	H30－Ⅴ	〃	〃	口径 10.8	灰色	長石
－32	G23－Ⅱ	〃	〃	口径 11.0	内青灰色，外灰褐色	長石
－33	H34・35－Ⅵ′	〃	〃		内淡灰青色，外灰青色	長石
－34	GH30－Ⅲ～Ⅵ	〃	〃	口径11.6 器高 4.2	灰色	石英・長石
－35	de59－撹乱	〃	〃	口径 11.6	灰白色	長石
－36	de59－撹乱	〃	〃	口径 11.9	灰白色	石英・長石
－37	GH30－Ⅲ	〃	〃	口径 11.8	内青灰色，外灰白色	長石・黒粒子
－38	G37－Ⅴ	〃	〃	口径 13.2	灰白色	長石
－39	H30－Ⅴ	〃	〃	口径 13.0	灰白色	長石・砂粒
－40	P23－Ⅴ	〃	〃	口径 14.0	内青灰色，外濃灰色	石英
－41	H41-Ⅴ,G42-Ⅵ	〃	〃	底径 5.7	内青灰褐色，外淡灰褐色	砂粒
－42	H41－Ⅴ	〃	〃	底径 4.8	内淡青灰色，外青灰色	石英
－43	GH41・42,H41-Ⅵ	〃	〃	底径 6.6	内灰白色，外灰色	石英・長石・黒粒子・砂粒
－44	H37－Ⅲ	〃	〃	底径 4.2	青灰色	石英・黒粒子
－45	H23－Ⅵ	〃	〃	底径 3.6	内暗青灰色，外青灰色	石英・長石・雲母
－46	K25－Ⅳ	〃	〃	底径 6.4	内灰色，外暗灰色	石英・長石・雲母
47	K23－Ⅶ	〃	〃	底径 6.2	灰青色	石英・雲母
44－48	P22－Ⅴ	〃	鉢	口径 11.3	内緑黒色(自然釉)，外黒色	長石
－49	G31－Ⅳ	〃	〃		内赤灰色，外灰色	長石
－50	G41－Ⅴ	〃	〃		内淡青灰色，外灰白色	黒粒子
－51	GH30-Ⅲ,G30-Ⅳ	〃	〃		内灰白色，外赤褐色	長石
－52	H30－Ⅴ	〃	〃		内淡青灰色，外灰色	石英・長石
－53	Q22－Ⅷ	〃	高坏		白灰色	砂粒
－54	G30－Ⅳ	〃	〃		内灰白色，外灰色	
－55	G42－Ⅵ	〃	〃		内淡青灰色，外灰色	石英・長石
－56	N22－Ⅵ	〃	鉢		内白灰色，外赤灰色	長石
－57	H39－Ⅴ	〃	〃		内青灰色，外暗青色	長石
－58	h59－Ⅶ	〃	高坏	底径 7.7	内暗灰褐色，外暗灰色	石英・長石
－59	H38－Ⅱ	〃	壺	底径 8.0	内暗青灰色，外暗灰色	
－60	H31・32－Ⅳ	〃	平瓶	口径 8.4	内青灰色，外淡青灰色	石英・長石
－61	H35－Ⅱ	〃	甕	口径 11.1	灰白色	
－62	H38－Ⅱ′	〃	高坏	底径 9.0	内青灰色，淡青灰白色	長石
－63	GH32－Ⅴ	〃	甕	口径 11.7	内緑白色，外白色	砂粒
－64	F1－Ⅳ	〃	〃		白灰色，釉深緑色	
－65	L23－Ⅴ	〃	〃		内淡青灰色，外黒色	石英・長石
－66	H29－Ⅵ	〃	〃		内淡灰青色，外黒灰色	
－67	L22－Ⅳ	〃	壺	口径 13.7	暗青灰色	
－68	H31・32－Ⅴ	〃	甕	口径 20.5	緑灰色	長石
－69	G37－Ⅴ	〃	〃		淡灰色	長石
－70	P22－Ⅴ	〃	〃		淡青灰色	長石
－71	H16－Ⅶ	〃	壺		内淡灰色，外淡青灰色	黒粒子・砂粒
－72	f58－Ⅲ	〃	甕		灰色	長石・砂粒
－73	GH30－Ⅲ・Ⅳ	〃	〃		内赤灰色，外灰色	石英・長石

表13　今福遺跡出土土器観察表 7

挿図番号	出土地点	種別	器種	径・器高（cm）	色調	胎土
45－ 74	H13－Ⅷ	須恵器	甕	口径 20.0	内灰色，外灰青色	石英・長石・雲母
－ 75	G 0 －Ⅲ	〃	壺	底径 14.4	灰色	砂粒
－ 76	J K22－ V′	〃	〃	底径 16.2	灰青色	
－ 77	G 7 －鍵	〃	〃	底径 16.8	暗青灰色	長石
－ 78	G42－ V	〃	甕	口径 46.9	灰色	石英・長石
－ 79	L 22－Ⅳ	〃	〃		内灰白色，外灰色	長石
－ 80	L 22－Ⅷ	〃	壺	底径 33.7	内灰白色，外淡灰色	長石
48－ 1	H11-Ⅱ,H8･9-Ⅶ,G9-Ⅵ	白磁	玉縁碗	口径 15.4	灰白色，釉淡黄灰色	
－ 2	O23－ V	〃	〃		灰白色，釉淡黄灰色	
－ 3	排土	〃	〃	口径 11.7	白灰色，釉灰白色	
－ 4	H40－Ⅱ	〃	〃	口径 16.0	白灰色，釉灰白色	
－ 5	G 7 －鍵下	〃	〃	口径 15.4	白色，釉白灰色	
－ 6	P 7 －Ⅶ	〃	〃	口径 15.7	白灰色，釉淡灰白色	
－ 7	L 22－ V′	〃	〃	口径 14.2	白灰色，釉白黄色	
－ 8	N 22－Ⅳ	〃	〃	口径 14.0	白黄色，釉灰白色	
－ 9	P 7 －撹乱	〃	〃	口径 17.3	白灰色，釉灰白色	
－ 10	L 22－ V	〃	〃	口径 16.2	白灰色，釉灰白色	
－ 11	H31－Ⅳ	〃	〃	口径 16.3	白灰色，釉灰白色	
－ 12	R 22－Ⅱ	〃	〃	口径 18.3	白灰色，釉灰白色	
－ 13	c57-Ⅲ,a57-Ⅱ′	〃	〃	口径 18.0	白灰色，釉灰白色	
－ 14	F 5 － V	〃	〃	口径 16.0	白灰色，釉灰白色	
－ 15	O23－Ⅵ	〃	〃	口径 17.7	白色，釉白灰色	
－ 16	H12－Ⅵ	〃	〃	口径 15.6	白灰色，釉灰白色	
－ 17	U11－Ⅱ	〃	〃	口径 14.5	白灰色，釉灰白色	
－ 18	U11－Ⅱ	〃	〃	口径 16.2	白灰色，釉淡灰白色	
－ 19	P 13－Ⅵ	〃	〃	口径 20.2	白黄色，釉黄白色	
－ 20	Q22－Ⅷ	〃	〃	口径 17.4	白黄色，釉灰白色	
－ 21	Q23－Ⅵ	〃	〃	口径 15.2	白色，釉淡灰白色	
－ 22	c 55－Ⅷ	〃	〃	口径 15.4	白灰色，釉灰白色	
－ 23	G 8 －Ⅵ	〃	〃	口径 13.4	白灰色，釉灰乳色	
49－ 24	g h58－Ⅲ′	〃	〃	口径 16.7	白灰色，釉灰白色	
－ 25	R 23－ V	〃	〃	口径 15.7	白黄色，釉灰白色	
－ 26	U V17･18－ V	〃	〃	口径 15.0	白灰色，釉灰白色	黒粒子
－ 27	f 58－Ⅲ	〃	〃	口径 16.2	白灰色，釉灰白色	
－ 28	H12－Ⅱ	〃	〃	口径 17.8	白黄色，釉淡黄灰色	
－ 29	Q22－Ⅷ	〃	〃	口径 15.0	灰白色，釉淡緑灰色	
－ 30	h 57－Ⅳ	〃	〃	口径 17.3	白色，釉乳白色	
－ 31	U V17・18－ V	〃	〃	口径 15.4	淡灰色，釉灰白色	
－ 32	表採	〃	〃	口径 16.8	白灰色，釉淡灰緑色	
－ 33	R 23－ V	〃	〃	口径 16.1	白灰色，釉灰白色	
－ 34	G H 7 ・ 8 －Ⅳ	〃	〃	口径 13.8	白灰色，釉灰白色	
－ 35	N 8 －Ⅵ	〃	〃	口径 14.3	白色，釉灰白色	
－ 36	H29－ V	〃	〃	口径 18.4	白灰色，釉灰白色	
－ 37	S 8 －Ⅱ′	〃	〃	口径 13.2	白色，釉淡灰黄色	
－ 38	J 22－Ⅳ	〃	〃	口径 13.6	白灰色，釉灰白色	黒粒子
－ 39	g 59－Ⅲ′	〃	〃	口径 13.1	白灰色，釉灰白色	
－ 40	M22－ V	〃	〃		白灰色，釉淡灰緑色	

表14　今福遺跡出土土器観察表 8

挿図番号	出土地点	種別	器種	径・器高（cm）	色調	胎土
49－ 41	NO23－Ⅳ	白磁	玉縁碗		白灰色，釉灰白色	
－ 42	U11－Ⅱ	〃	〃		白灰色，釉灰白色	
－ 43	G 2－V	〃	〃		白灰色，釉灰白色	
－ 44	L22－V′	〃	〃		白灰色，釉淡黄灰色	
－ 45	G15－Ⅲ	〃	〃		白灰色，釉淡灰緑色	
－ 46	e60－礫	〃	碗	高台径 7.4	白色，釉淡白灰色	
－ 47	P22－V	〃	〃	高台径 7.0	灰白色，釉灰白色	砂粒
－ 48	H16－Ⅶ	〃	〃	高台径 8.6	白灰色，釉灰白色	
－ 49	表採	〃	〃	高台径 7.4	白灰色，釉灰白色	黒粒子
－ 50	UV16・17－Ⅲ	〃	〃	高台径 7.3	白黄色，釉淡黄灰色	
－ 51	J22－V	〃	〃	高台径 6.8	白色，釉淡灰白色	黒粒子
－ 52	L22－Ⅳ	〃	〃	高台径 7.6	白黄色，釉黄白灰色	
－ 53	G 4－V	〃	〃	高台径 7.6	白灰色，釉白灰色	黒粒子
－ 54	U12－Ⅲ	〃	〃	高台径 7.1	白色，釉白灰色	
50－ 55	H11－Ⅱ	〃	〃	高台径 7.2	白灰色，釉灰白色	
－ 56	P22－V	〃	〃	高台径 7.0	白灰色，釉灰白色	
－ 57	R23－Ⅳ	〃	〃	高台径 6.2	白灰色，釉灰白色	
－ 58	G 9－Ⅳ	〃	〃	高台径 6.4	白灰色，釉灰白色	
－ 59	K23－Ⅶ	〃	Ⅲ	高台径 5.3	白灰色，釉白灰色	
－ 60	NO23－Ⅶ	〃	碗	口径17.0 高台径 6.1 器高 6.3	白灰色，釉白灰色	
－ 61	G 8－Ⅲ	〃	〃	口径 16.9	白灰色，釉淡灰黄色	
－ 62	f g60－Ⅳ	〃	〃	高台径 5.6	白灰色，釉淡白灰色	黒粒子
－ 63	Q23－Ⅵ	〃	〃	高台径 5.8	白黄色，釉淡黄灰色	
－ 64	D22－V	〃	〃	高台径 5.6	白灰色，釉淡黄灰色	
－ 65	H12－Ⅱ，Ⅳ	〃	〃	高台径 5.9	灰白色，釉淡緑灰色	
－ 66	R23－V	〃	〃	口径 20.0	白灰色，釉淡灰緑色	
－ 67	R23－V	〃	〃	高台径 6.4	白灰色，釉灰白色	黒粒子
－ 68	G 9－Ⅵ	〃	Ⅲ		白灰色，釉灰白色	
－ 69	G10－Ⅵ	〃	〃	口径 11.0	白灰色，釉白灰色	
－ 70	U14－V	〃	碗	高台径 6.2	白黄色，釉白灰色	
－ 71	U13－攪乱	〃	〃	口径 15.2	白灰色，釉淡灰緑色	
－ 72	G31－Ⅳ	〃	口禿皿	口径 15.8	淡灰色，釉淡灰色	黒粒子
－ 73	G33－攪乱	〃	〃	口径 14.7	淡灰色，釉淡灰色	
－ 74	G34－Ⅱ	〃	口禿碗	口径 12.0	白色，釉灰白色	
－ 75	K22－Ⅶ	〃	Ⅲ	口径 10.0	白灰色，釉灰白色	
－ 76	排土	〃	〃	高台径 4.1	白黄色，釉黄灰色	
－ 77	表採	〃	〃	高台径 4.4	白灰色，釉淡黄灰色	
51－ 78	f 58－Ⅵ	龍泉窯青磁	碗	口径 17.2	白灰色，釉白緑色	
－ 79	g59・60－V	〃	〃		淡灰色，釉緑黄色	
－ 80	G 1－V	〃	〃		灰色，釉淡灰緑色	
－ 81	H 5－Ⅵ	〃	〃		淡灰色	
－ 82	g58－Ⅳ	〃	〃	高台径 9.3	灰色，釉白緑色	
－ 83	d59－Ⅳ	〃	〃		淡灰青色，釉淡緑黄色	黒粒子
－ 84	f 58－Ⅲ	〃	〃		灰色，釉黄緑色	長石・黒粒子
－ 85	g58－Ⅵ	〃	〃	高台径 7.8	淡灰色，釉暗緑色	
－ 86	n57－Ⅲ	〃	〃	高台径 6.6	淡灰色，釉灰緑色	長石
－ 87	e f 59－礫	〃	〃	高台径 5.8	灰黄色，釉緑黄灰色	

表15　今福遺跡出土土器観察表 9

挿図番号	出土地点	種別	器種	径・器高（cm）	色調	胎土
51－ 88	e 60－Ⅲ′	越州窯系青磁	碗	高台径 5.9	白灰色，釉緑灰色	
－ 89	c d 58－Ⅳ	〃	〃	高台径 9.0	灰色，釉緑灰褐色	
－ 90	G0-Ⅲ,G6-Ⅲ,F3-Ⅴ	〃	〃	高台径 8.8	淡灰色	長石
－ 91	G 9－Ⅳ	〃	〃	高台径 6.4	灰色，釉黄灰色	
－ 92	F 1－Ⅳ	〃	〃	高台径 7.1	灰色，釉緑灰色	
－ 93	H 7－Ⅳ	〃	〃	高台径 5.3	灰白色，釉緑黄色	
52－ 94	G 8－ 1	龍泉窯系青磁	〃	口径 [?] 高台径 6.6 器高 7.4	灰白色，釉緑褐色	
－ 95	H11－Ⅲ′	〃	〃	口径 16.2	灰白色，釉緑灰色	
－ 96	H11－Ⅲ′	〃	〃		白灰色，釉緑灰色	
－ 97	G H 9－Ⅳ	〃	〃	口径 16.2	淡灰白色，釉淡緑灰色	
－ 98	H10-Ⅱ,H14-Ⅲ	〃	〃	口径 16.8	白灰色，釉緑灰色	
－ 99	H14－Ⅶ	〃	〃	高台径 6.0	白灰色，釉緑灰色	
－100	G 0－Ⅴ	白磁	Ⅲ	高台径 6.5	淡灰褐色，釉淡黄褐色	
－101	Q22－Ⅷ	龍泉窯系青磁	坏	高台径 3.4	淡灰色，釉淡緑灰色	
－102	J 22－Ⅱ	〃	香炉	口径 10.0	淡灰白色，釉淡緑灰色	
－103	V 15－撹乱	〃	坏		白灰色，釉緑白色	
－104	G33－撹乱	〃	〃	口径 15.9	淡灰白色，釉淡緑灰色	
－105	H33－Ⅴ	〃	〃	口径 15.9	淡灰白色，釉淡緑灰色	
－106	G23－撹乱	〃	〃	高台径 4.8	淡灰色，釉灰緑色	
－107	R23－Ⅴ	〃	〃		淡灰色，釉緑灰色	
－108	NO23-Ⅶ,R23-Ⅳ	〃	〃	口径 16.0	灰色，釉緑黄色	
－109	H10－Ⅲ	〃	Ⅲ	口径 11.0	淡灰白色，釉灰白色	
－110	H34－Ⅱ	〃	碗	口径 10.0	灰白色，釉灰緑色	
53－111	S 7－Ⅱ	李朝陶器	〃	高台径 4.8	灰色，釉黄白色	
－112	G 2－Ⅴ	〃	〃	高台径 7.0	淡灰色，釉緑黄色	石英
－113	G 3－Ⅳ	〃	〃	口径 18.0	淡灰色，釉淡黄灰色	
－114	c 56・57－Ⅳ	〃	〃	口径 13.8	白灰色，釉緑灰色	
－115	表採	〃	〃		淡灰色，釉暗緑灰色	長石・黒粒子
－116	G F 1－Ⅳ	〃	〃		淡灰黄色，釉黄白色	
－117	F 58－Ⅲ	〃	〃		淡灰色，釉淡黄灰色	
－118	G 27－Ⅲ	中国陶器	〃		灰黄色，釉黄緑褐色	石英・長石
－119	表採	明染付	〃	口径 12.0	白黄色，釉淡灰色	
－120	G18－Ⅰ′	〃	〃	高台径 8.6	白灰色，釉淡灰色	
54－ 1	f g 60－Ⅳ	黒色土器	〃	高台径 6.2	内黒灰色，外黄白色	石英・長石・雲母
－ 2	G31－Ⅳ′	〃	〃	高台径 5.8	内暗灰褐色，外橙白色	長石・雲母
－ 3	f g 60－Ⅲ	〃	〃	高台径 8.3	内黒色，外淡橙灰色	石英・長石・雲母
－ 4	f 57－Ⅵ	〃	〃	高台径 8.7	内黒色，外橙白色	石英・長石・雲母
－ 5	G 0－Ⅴ	〃	〃	高台径 8.2	内黒灰色，外灰黄色	石英・長石・雲母
－ 6	e 57－Ⅴ	〃	〃	高台径 7.4	内黒褐色，外黄白色	石英・長石・雲母
－ 7	Q R 22－Ⅳ	〃	〃		内黒褐色，外暗褐色	長石・金雲母
－ 8	H20－Ⅱ	瓦器	〃	口径 16.0	内灰黄色，外灰色	雲母
－ 9	G 27－Ⅲ	〃	〃	口径 17.6	白灰色	石英・長石
－ 10	G 27－Ⅲ	〃	〃	口径 15.0	内白黄色，外灰色	
－ 11	U10－Ⅱ	〃	〃	口径 12.0	内灰白色，外黒灰色	長石・雲母
－ 12	U13－Ⅲ	〃	〃		内灰色，外黄灰褐色	長石
－ 13	G 1－Ⅴ	〃	〃	高台径 7.0	内灰白色，外乳白色	石英・雲母
－ 14	U13－Ⅲ	〃	〃	高台径 6.0	内灰褐色，外淡灰色	石英・長石・雲母

表16　今福遺跡出土土器観察表10

挿図番号	出土地点	種別	器種	径・器高（cm）	色調	胎土
54－15	i57－Ⅵ	瓦器	碗	高台径 5.5	内淡灰黄色，外黄白色	石英・雲母
－16	e f59－Ⅴ	〃	〃	高台径 7.8	内淡灰黄色，外灰色	長石・雲母
－17	F 0－Ⅴ	〃	坏		内灰色，外淡橙灰色	石英・長石
－18	G 7－Ⅴ	土師器	〃	口径 15.2	橙白色	
－19	H 8－Ⅵ	〃	碗	口径 16.2	橙色	長石・雲母
－20	F G 7－Ⅳ～Ⅵ	〃	坏	口径 12.8	淡灰橙色	雲母
55－21	G 0－Ⅴ	〃	碗	高台径 6.6	内肌色，外白橙色	雲母
－22	G 2－Ⅴ	〃	Ⅲ	高台径 7.0	淡橙灰色	
－23	G 1－Ⅴ	〃	碗	高台径 8.0	暗褐色	雲母
－24	G 4－Ⅲ	〃	〃	高台径 8.0	橙白色	長石
－25	F 0－Ⅲ	〃	〃	高台径 8.5	内灰褐色，外赤褐色	雲母
－26	G 8－Ⅵ	〃	〃	高台径 6.7	淡橙色	雲母
－27	G26－Ⅲ	〃	〃	高台径 7.7	黄灰色	雲母
－28	G 8－Ⅲ	〃	〃	高台径 6.1	橙白色	雲母
－29	U11－Ⅱ	〃	〃	高台径 6.2	内淡灰黄色，外黄白色	石英・長石
－30	表採	〃	〃		内茶褐色，外暗赤橙色	石英・雲母・角閃石
－31	P Q22－Ⅵ	〃	〃	高台径 5.9	暗褐色	雲母
－32	G 0－Ⅲ～Ⅷ	〃	〃	口径 13.4	内淡橙白色，外橙色	長石・雲母
－33	K22－Ⅶ	〃	Ⅲ	口径 8.3 底径 3.3	内淡灰黄色，外黄橙色	
－34	G27－Ⅲ	〃	〃		肌色	
－35	e57－Ⅲ	〃	〃	口径 10.0	白赤色	
－36	g59－Ⅳ	〃	〃	口径 5.7	橙白色	長石・雲母
－37	表採	〃	〃	口径10.1 底径 7.3	橙白色	長石
－38	Q23－Ⅵ	〃	〃	口径 9.9	肌色	石英・雲母
－39	e57－Ⅲ	〃	〃		内橙白色，外白黄色	石英・雲母
－40	表採	〃	坏	口径10.5 底径 6.4	橙白色	石英・雲母
－41	F 0－Ⅴ	〃	〃	口径 6.5	橙色	雲母・砂粒
－42	G 1－Ⅳ	〃	〃	口径10.2 底径 6.0	淡灰黄色	雲母
－43	U V17・18－Ⅴ	〃	Ⅲ	口径 9.5 底径 5.7	内橙白色，外橙色	長石・雲母
－44	R22－Ⅴ	〃	〃	口径 9.5 底径 7.3	肌色	石英・雲母
－45	U V17・18－Ⅴ	〃	〃	口径 8.8 底径 6.0	白橙色	雲母
－46	H 7－Ⅷ	〃	〃	口径 8.8 底径 5.8	橙白色	長石・雲母
－47	J 22－Ⅴ	〃	〃	口径 8.8 底径 6.6	淡黄橙色	長石
56－48	G 0－Ⅲ～Ⅷ	黒色土器	碗	口径 16.9	黒褐色	雲母
－49	G 1－Ⅴ	〃	〃	口径 15.6	内黒色，外黒褐色	石英・雲母
－50	P 7－Ⅷ	〃	〃	口径 12.6	暗青灰色	
－51	F 0－Ⅴ	〃	〃	口径 11.3	内黒色，外黒灰色	雲母
－52	G 0－Ⅴ	〃	〃	口径 15.6	黒褐色	雲母
－53	c 55－Ⅷ	〃	〃	口径 14.0	黒灰色	石英・雲母
－54	G 0－Ⅲ～Ⅷ	〃	〃		黒灰色	雲母
－55	G 1－Ⅴ	〃	〃		黒褐色	石英・雲母
－56	F G 0－Ⅱ～Ⅴ	〃	〃		黒褐色	雲母
－57	G 1－Ⅳ	〃	〃		内黒灰色，外黄灰褐色	雲母
－58	G 1－Ⅴ	〃	〃	口径 15.4	内黒色，外黒灰色	石英・雲母
－59	G 0－Ⅴ	〃	〃	口径 13.4	黒褐色	石英・雲母
－60	G 1－Ⅴ	〃	〃		内黒褐色，外黒灰色	雲母
－61	F G 0－Ⅱ～Ⅴ	〃	〃	口径 15.0	黒褐色	石英・雲母

表17　今福遺跡出土土器観察表11

挿図番号	出土地点	種別	器種	径・器高（cm）	色調	胎土
56－62	G 0－V	黒色土器	碗		黒褐色	雲母
－63	G 0－V	〃	〃	高台径 8.6	黒褐色	雲母
－64	G 0－V	〃	〃	高台径 8.2	黒灰色	石英・雲母
－65	O 9－撹乱	〃	〃	高台径 6.4	暗青灰色	長石
－66	G 0－Ⅲ～Ⅷ	〃	〃	高台径 6.8	黒灰色	雲母
－67	排土	〃	〃	高台径 7.1	黒灰色	雲母
－68	Q 7－Ⅳ	〃	〃	高台径 6.8	暗青灰色	
－69	H 5－Ⅳ	〃	〃	高台径 3.8	黒褐色	雲母
－70	G 0－V	〃	〃		黒灰色	雲母
57－71	U V17・18－V	[illegible]	捏鉢	底径 10.0	灰色	石英・長石
－72	U11－Ⅱ	〃	〃		灰色	長石
－73	S 8－Ⅱ′	〃	片口鉢		灰白色	石英・長石
－74	d e57－V	陶器	鉢	底径 9.0	淡赤橙白色，釉黄白色	石英・長石
－75	H38－Ⅱ	〃	壺	口径 21.4	灰色	長石
－76	G 4－Ⅶ	〃	碗	高台径 7.6	淡赤白色，釉黄灰色	長石
－77	M 8－Ⅲ	瓦質土器	擂鉢		内灰色，外青灰色	石英・長石
－78	G 9－Ⅲ	〃	火鉢		灰色	雲母
－79	G37－Ⅱ	陶器	壺		黄灰色，釉暗茶褐色	
－83	O 9－撹乱	瓦器	片口鉢		黄白色	石英・長石・雲母
－84	I 10－Ⅱ	〃	?		内橙白色，外橙灰褐色	石英・長石・雲母
58－91	G37－Ⅱ	土製品	土錘	長さ 4.5 最大径 1.0	暗灰色，赤白色	
－92	U13－Ⅲ	〃	〃		灰黄色，橙色	長石・砂粒
－93	H 1－Ⅱ	〃	〃		橙褐色	
－94	G16－Ⅶ	〃	〃		橙色	
－95	d57－Ⅱ	〃	〃		暗橙色	長石
－96	G 7－Ⅲ	〃	〃	長さ 3.8 最大径 1.4	灰黄褐色	石英・雲母
－97	排土	〃	〃		白橙色	雲母
－98	O 7－V	〃	〃		橙褐色	
14－1	G 7－礫	白磁	玉縁碗	口径 15.4	白色，釉灰白色	
－2	G 7－礫	〃	〃	口径 15.5	白灰色，釉灰白色	
－3	G 7－礫	[illegible]	碗	口径16.4 高台径 5.1 器高 6.5	灰白色，釉深緑色	砂粒
－4	G 7－礫	〃	〃		灰白色，釉深緑色	
－5	G 7－礫	李朝陶器	〃		灰黄色，釉緑褐色	
－6	G 8－礫	土師器	〃	高台径 6.6	淡橙色	石英・長石・雲母
－7	G 7－礫	〃	〃	高台径 4.7	乳白色	石英・長石・雲母・角閃石
－8	G 7－礫	〃	〃	高台径 6.4	淡橙色	雲母
－9	G 7－礫	黒色土器	〃	高台径 6.9	内暗褐色，外黄灰色	雲母
－10	G 7－礫	土師器	〃	高台径 7.4	橙白色	
－11	G 8－礫下	黒色土器	〃	高台径 6.5	黒色	雲母
－12	G7-礫,G8-礫下	〃	坏	口径13.7 底径 6.2	黒褐色	石英・長石・雲母
－13	G 7－礫	土師器	皿	口径 9.4 底径 6.3 器高 1.5	肌色	雲母
－14	G 7－礫	〃	〃	口径 9.0 底径 4.4 器高 1.3	橙色	雲母
15－19	G 8－礫下	〃	〃	高台径 8.0	内灰黒色，外乳白色	石英・長石・雲母
－20	G 8－礫下	黒色土器	碗	高台径 6.2	内灰茶色，外暗褐色	石英・雲母
－21	G 7－礫	弥生	甕	口径 19.0	淡橙色	石英・長石・金雲母
－22	G 7－礫	〃	〃	底径 7.05	内灰茶色，外赤橙色	石英・長石・雲母

表18　今福遺跡出土遺物一覧表

調査区	点数	調査区	点数	調査区	点数	調査区	点数	調査区	点数
B－13	293	G－34・35	2	I－10	38	c－53・54	5	J・K－22	16
C－12	27	G－35	31	I－11	276	c－54	6	K・L－22	179
C－12・13	3	G－35・36	5	I－22	94	c－55	24	K・L－23	26
C－13	214	G－36	80	I－57	9	c－56	86	L・M－23	3
D－12	86	G－37	242	J－9	4	c－56・57	22	M・N－23	2
D－12・13	24	G－37・38	48	J－10	46	c－57	106	N・O－22	41
D－13	338	G－38	158	J－11	27	c－57・58	13	N・O－23	46
E－12	149	G－38・39	6	J－22	360	c－58	44	O・P－22	30
E－12・13	5	G－39	242	K－9	6	c－59	7	O・P－23	21
E－13	91	G－39・40	11	K－10	11	d－57	67	P・Q－22	62
F－0	1183	G－40	384	K－22	693	d－57・58	5	P・Q－23	12
F－0・1	428	G－40・41	14	K－23	446	d－58	83	Q・R－22	57
F－1	1535	G－41	106	L－22	524	d－59	33	U・V－16	25
F－1・2	325	G－41・42	17	L－22・23	23	d－60	13	U・V－17	4
F－2	463	G－42	216	L－23	161	e－57	64	Z・a－57	19
F－2・3	41	H－4	122	M－8	53	e－57・58	5	b・c－57	30
F－3	228	H－5	231	M－9	22	e－58	50	b・c－58	6
F－3・4	11	H－6	46	M－22	74	e－59	55	c・d－58	4
F－4	14	H－6・7	28	M－23	3	e－59・60	14	d・e－57	48
F－5	11	H－7	89	N－8	21	e－60	116	d・e－59	22
F－6	3	H－7・8	14	N－22	95	e－60・61	14	d・e－60	13
F－7	177	H－8	127	N－22・23	10	e－61	33	e・f－57	14
F－8	121	H－8・9	7	N－23	47	f－57	54	e・f－58	24
F－10	2	H－9	36	O－7	4	f－57・58	17	e・f－59	41
F－12	86	H－10	141	O－8	26	f－58	68	f・g－58	11
F－12・13	3	H－11	166	O－9	37	f－58・59	20	f・g－60	90
F－13	89	H－12	97	O－22	309	f－59	115	g・h－57	4
F－17	13	H－13	112	O－22・23	120	f－59・60	3	g・h－58	32
G－0	285	H－14	62	O－23	563	f－60	1	F・G－11・12	2
G－1	121	H－15	73	P－7	19	f－60・61	1	G・H－8・8	13
G－1・2	1	H－16	61	P－8	35	f－61	1	G・H－41・42	8
G－2	66	H－17	43	P－9	15	g－57	37	M・N－22・23	17
G－2・3	40	H－18	62	P－22	318	g－58	50	U・V－16・17	14
G－3	145	H－19	10	P－22・23	47	g－59	90	U・V－17・18	16
G－3・4	9	H－20	23	P－23	48	g－59・60	29	a・b－57・58	1
G－4	244	H－21	36	Q－7	12	h－57	22	c・d－57・58	9
G－4・5	28	H－22	26	Q－8	54	h－58	35		
G－5	62	H－23	6	Q－9	25	h－58・59	10	排土	768
G－6	47	H－24	7	Q－22	307	h－59	1	表採	282
G－6・7	7	H－25	6	Q－23	70	i－57	52	ピット出土	46
G－7	523	H－26	36	R－7	76	F・G－0	36		
G－8	190	H－26・27	42	R－8	23	F・G－1	117	合計　２８，６８８点	
G－9	63	H－27	165	R－9	15	F・G－2	167		
G－10	73	H－28	58	R－22	543	F・G－3	18		
G－11	120	H－29	487	R－22・23	6	F・G－4	15		
G－12	63	H－29・30	203	R－23	191	F・G－5	1		
G－12・13	6	H－30	776	S－7	7	F・G－7	195		
G－13	65	H－30・31	20	S－8	9	F・G－9	16		
G－14	19	H－31	91	U－10	6	G・H－4	2		
G－15	22	H－31・32	17	U－11	134	G・H－6	1		
G－16	61	H－32	30	U－12	154	G・H－7	39		
G－17	48	H－33	54	U－13	75	G・H－8	14		
G－18	117	H－34	72	U－14	28	G・H－9	7		
G－19	6	H－34・35	11	U－14・15	6	G・H－13	6		
G－21	19	H－35	59	U－15	31	G・H－26	8		
G－22	45	H－35・36	6	U－17	7	G・H－27	105		
G－25	94	H－36	61	Y－57	59	G・H－30	119		
G－26	165	H－37	250	Z－57	30	G・H－31	9		
G－27	850	H－37・38	28	a－56・57	6	G・H－32	10		
G－28	9	H－38	90	a－57	69	G・H－33	2		
G－29	42	H－38・39	1	a－58	13	G・H－34	4		
G－29・30	21	H－39	220	b－57	123	G・H－35	14		
G－30	658	H－39・40	4	b－58	25	G・H－37	22		
G－30・31	85	H－40	46	c－48	7	G・H－38	13		
G－31	423	H－40・41	11	c－50	8	G・H－39	28		
G－31・32	52	H－41	56	c－50・51	3	G・H－40	15		
G－32	88	H－41・42	15	c－51・52	3	G・H－41	16		
G－33	60	H－42	141	c－52	30	G・H－42	20		
G－33・34	3	I－8	31	c－52・53	3	H・I－10	37		
G－34	43	I－8・9	7	c－53	18	I・J－22	11		

第V章　科　学　分　析

1．今福遺跡におけるプラント・オパール分析

株式会社　古環境研究所

1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（藤原・杉山，1984）。

2．試料

試料は、K－22区の4点およびF－0北壁の6点の計10点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
2）試料約1ｇに対して直径約40μmのガラスビーズを約0.02ｇ添加
（電子分析天秤により1万分の1ｇの精度で秤量）
3）電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
5）沈底法による20μm以下の微粒子除去
6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
7）検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1ｇ中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}ｇ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94、ススキ属（ススキ）は1.24、タケ亜科（ネザサ節）は0.48である。

4．分析結果

水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（おもにネザサ節）の主要な５分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１、図２に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

５．考察

水田跡の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料１ｇあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、長崎県内では密度が3,000個／g程度でも水田遺構が検出されていることから、ここでは判断の基準を3,000個／gとして検討を行った。

１）Ｋ－22区（図１）

奈良・平安時代とされる洪水層の上層（試料４）と下層（試料５、６）、およびその下層（試料７）について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、洪水直下層（古墳時代、試料５）では、密度が3,000個／gと高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。その他の層準では、密度が1,500個／g程度と比較的低いことから、稲作の可能性は考えられるものの、上層もしくは他所からの混入の可能性も否定できない。

２）Ｆ－０区（図２）

V′層（試料２）からX層（試料７）までの層準について分析を行った。その結果、Ⅷ層（弥生時代、試料３）、Ⅷ‴層（弥生時代前期～縄文時代晩期、試料４、５）、Ⅸ層（同、試料６）からイネが検出された。このうち、Ⅷ‴層（試料５）では密度が5,900個／g、Ⅸ層（試料６）でも6,700個／gと高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。Ⅷ層（弥生時代、試料３）では密度が1,500個／g程度と比較的低いことから、稲作の可能性は考えられるものの、上層もしくは他所からの混入の可能性も否定できない。

６．まとめ

プラント・オパール分析の結果、Ｋ－22区の洪水直下層（古墳時代）およびＦ－０区のⅧ‴層（弥生時代前期～縄文時代晩期）とⅨ層（同）では、イネが多量に検出され、それぞれ稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、Ｆ－０区のⅧ層（弥生時代）などでも稲作が行われていた可能性が認められた。

参考文献

藤原宏志　（1976）　プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学９，p.15－29.

藤原宏志・杉山真二　（1984）　プラント・オパール分析法の基礎的研究（５）－プラント・オパール分析による水田址の探査－　考古学と自然科学，17，p.73－85.

表1　松浦市、今福遺跡におけるプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群＼試料	K-22区				F-0北壁					
	4	5	6	7	2	3	4	5	6	7
イネ	15	30	22	15		15	37	59	67	
ススキ属型			7	15			29	7		
タケ亜科		15	7				7			

推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	0.44	0.89	0.63	0.44	0.44	1.08	1.75	1.97	
ススキ属型			0.09	0.18		0.36	0.09		
タケ亜科		0.07	0.03			0.04			

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

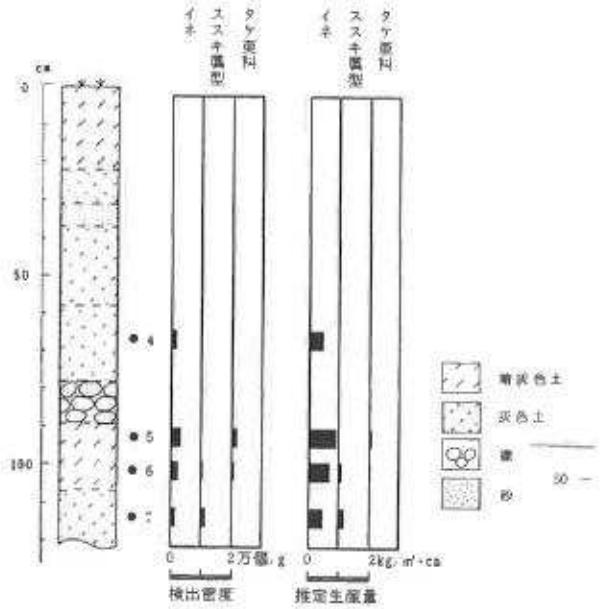


図1　今福遺跡、K-22区におけるプラント・オパール分析結果

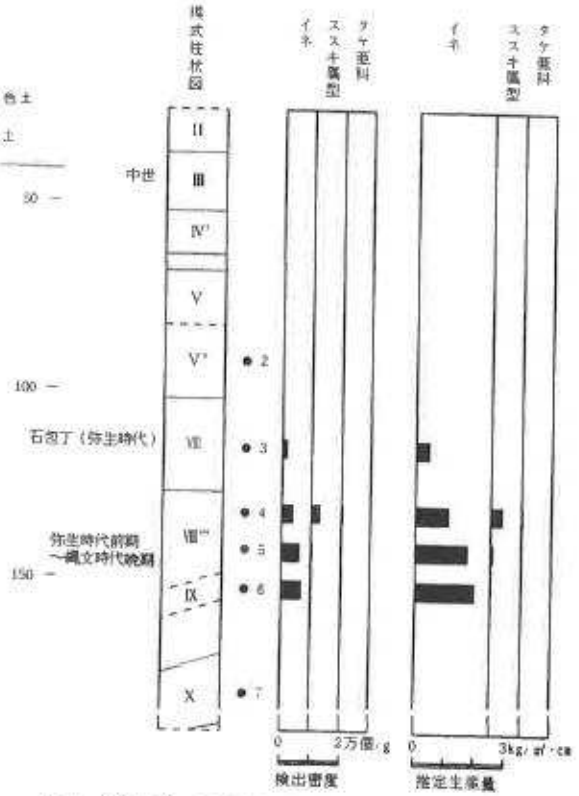


図2　今福遺跡、F-0区におけるプラント・オパール分析結果

II．今福遺跡における花粉分析

1．試料

試料は、K－22区の7点およびF－0北壁の7点の計14点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

2．方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）を参考にして、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

1）5％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。

2）水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。

3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。

4）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。

5）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1,500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1,000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974，1977）を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類し、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

3．結果

（1）花粉の分類群

出現した分類群は、樹木花粉30、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉18、シダ植物胞子2形態の計52である。これらの学名と和名および粒数を表に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を示す。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤマモモ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ－シイ属－マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－

ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、ウルシ属、モチノキ属、カエデ属、ツバキ属、グミ属、モクセイ科、ニワトコ属－ガマズミ属、マンサク科、スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ノブドウ、アリノトウグサ属－フサモ属、セリ科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

（2）花粉群集の特徴と変遷

1）K－22区

下位の試料7～5では花粉がほとんど検出されなかった。花粉の出現する層準は下位よりⅠ、Ⅱ、Ⅲ帯に区分された。

Ⅰ帯（試料4）：イネ属型を含むイネ科が極めて優占することによって特徴づけられる。他は低率であり、草本花粉ではカヤツリグサ科、ヨモギ属、樹木花粉ではマツ属複維管束亜属、コナラ属アカガシ亜属が主に伴われる。

Ⅱ帯（試料3、2）：イネ属型を含むイネ科の優占に加え、アブラナ科の出現率が高いことによって特徴づけられ、ソバ属も出現する。他は低率であり、草本花粉ではカヤツリグサ科、ヨモギ属、ナデシコ科、タンポポ亜科、樹木花粉ではマツ属複維管束亜属、コナラ属アカガシ亜属、クリ－シイ属－マテバシイ属が主に伴われる。

Ⅲ帯（試料1）：樹木花粉のスギの出現率が増加し、マツ属複維管束亜属も増加することによって特徴づけられる。他はⅡ帯と大きく変化しない。

2）F－0北壁

試料2、7では花粉があまり検出されなかった。花粉の出現する層準は下位よりⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ帯に区分された。

Ⅰ帯（試料7）：樹木花粉およびシダ植物胞子の占める割合が、草本花粉より高く、特にクリ－シイ属－マテバシイ属の優占によって特徴づけられる。樹木花粉では他にコナラ属アカガシ亜属、マツ属複維管束亜属が伴われる。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科が主要をなす。

Ⅱ帯（試料6～4）：草本花粉の占める割合が高くなり、特にイネ属型を含むイネ科の優占によって特徴づけられる。草本花粉では他にカヤツリグサ科、ミズアオイ属などが伴われる。樹木花粉ではクリ－シイ属－マテバシイ属が減少するもののやや高い出現率を示し、コナラ属アカガシ亜属、マツ属複維管束亜属もやや高い出現率を示す。

Ⅲ帯（試料３）：イネ属型が減少し、カヤツリグサ科やクリ－シイ属－マテバシイ属が増加する。ミズアオイ属やマツ属複維管束亜属は出現しない。

Ⅳ帯（試料１）：樹木花粉の占める割合が草本花粉より高くなり、シダ植物胞子の割合が極めて高くなる。樹木花粉ではクリ－シイ属－マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属の出現率が高く、マツ属複維管束亜属の出現率もやや高くなる。草本花粉ではイネ科を中心にカヤツリグサ科、ヨモギ属などが出現する。

４．花粉分析から推定される植生と環境

（１）Ｋ－22区

古墳時代の土層からは、花粉はほとんど検出されなかった。奈良・平安時代とされる洪水層の直上層では、イネ属型が多いことから水田が分布していたと推定される。また、草本ではイネ科をはじめ水田雑草などの水湿地植物を含むカヤツリグサ科、畦などのやや乾燥したところを好むヨモギ属などが分布していたと考えられる。森林植生としては、マツ（マツ属複維管束亜属、アカマツないしクロマツ）、カシ（コナラ属アカガシ亜属）が主に分布するが、周囲は樹木が極めて少なかったとみなされる。マツは二次林要素であり、周辺地域の森林が二次林化していたと考えられる。

その後、アブラナ科やソバ属などを栽培する畑作も行われるようになり、周辺では乾燥地を好むナデシコ科やタンポポ亜科が生育していたものと推定される。樹木ではマツ、カシに加え、シイ類（クリ－シイ属－マテバシイ属）が微増し、照葉二次林としてのシイ類が増加した可能性がある。また、最上層（試料１）ではスギやマツの造林が行われていたものと考えられる。

（２）Ｆ－０北壁

縄文晩期以前の遺跡周辺は、シイ類（クリ－シイ属－マテバシイ属）やカシ（コナラ属アカガシ亜属）などで構成される照葉樹林が分布していたと考えられ、樹林内や周囲にはシダ植物が生育していたものと推定される。また、堆積地の周囲には部分的にイネ科やカヤツリグサ科の草本が生育する日当たりのよい開地も分布していたと考えられる。

縄文晩期～弥生時代には、周囲で水田稲作が行われるようになり、カヤツリグサ科やミズアオイ属などの水田雑草も生育していたものと推定される。弥生時代には、何らかの原因で水田が減少し、シイ類などの照葉二次林が拡大したものと推定される。

中世の頃も、周囲にはシイ類、カシ、マツなどの二次林要素の強い森林が分布しており、樹林下にはやや乾燥した環境を好むシダ植物が生育していたものと推定される。また、堆積地はイネ科、カヤツリグサ科などの生育する水湿地であったものと推定される。

５．まとめ

縄文晩期以前の遺跡周辺は、シイ類を主にカシなどで構成される照葉樹林が分布し、樹林下や周囲

にはシダ植物が生育していたものと推定される。また、部分的にイネ科やカヤツリグサ科の草本が生育する日当たりのよい開地が分布していたと考えられる。

縄文晩期～弥生前期には、周囲で水田稲作が行われるようになり、カヤツリグサ科やミズアオイ属などの水田雑草も生育していたものと推定される。弥生時代には何らかの原因で水田が減少し、シイ類などの照葉二次林が拡大したものと考えられる。奈良・平安時代以降には、アブラナ科やソバ属などを栽培する畑作も行われるようになり、比較的最近になってスギやマツの造林が行われたものと推定される。

参考文献

中村　純　(1973)　花粉分析．古今書院，p.82-110.

金原正明　(1993)　花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本　第10巻　古代資料研究の方法，角川書店，p.248－262.

島倉巳三郎 (1973)　日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60.p

中村　純　(1980)　日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91.p

中村　純　(1974)　イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.

中村　純　(1977)　稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21－30.

Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Jounal of Archaeological Science，19，p.231－245.

金原正明・金原正子　(1992)　花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構－藤原京７条１坊－，奈良国立文化財研究所，p.14－15.

金子清俊・谷口博一　(1987)　線形動物・扁形動物．医動物学，新版臨床検査講座，８，医歯薬出版，p.9－55.

表1　今福遺跡における花粉分析結果(1)

分類群		K-22区						
学名	和名	1	2	3	4	5	6	7
Arboreal pollen	樹木花粉							
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	21	7	12	19	1	1	
Pinus subgen. Haploxylon	マツ属単維管束亜属				1			
Cryptomeria japonica	スギ	23		1			1	
Myrica	ヤマモモ属				3			
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ			1				
Alnus	ハンノキ属		2	1		5	3	
Betula	カバノキ属	1	1	2	1			
Corylus	ハシバミ属			1	1			
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ		3			2	5	
Castanea crenata-Castanopsis-Pasania	クリ-シイ属-マテバシイ属	12	8	6	3	2	3	1
Fagus	ブナ属			1				
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	5	4	5	2	1	4	
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	8	8	13	15	2	12	1
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ		1					
Rhus	ウルシ属			1				
Ilex	モチノキ属		1					
Acer	カエデ属			1				
Camellia	ツバキ属			1				
Oleaceae	モクセイ科	1						
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属			1	1			
Lonicera	スイカズラ属			1				
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉							
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	1	4	3	4			
Araliaceae	ウコギ科			1				
Nonarboreal pollen	草本花粉							
Sagittaria	オモダカ属			1	1			
Gramineae	イネ科	195	151	162	196	9	23	2
Oryza type	イネ属型	12	31	77	57			
Cyperaceae	カヤツリグサ科	10	13	19	22			4
Monochoria	ミズアオイ属	2			2			
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節	1	1	1				
Fagopyrum	ソバ属	2		1				
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1	2			1		
Caryophyllaceae	ナデシコ科	6	3	6	1			
Cruciferae	アブラナ科	35	66	45	4			
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属-フサモ属		1	1				
Umbelliferae	セリ科				1	1		
Plantago	オオバコ属	2						
Lactucoideae	タンポポ亜科	4	5	4	1			
Asteroideae	キク亜科	3	1	1	5			
Artemisia	ヨモギ属	10	12	12	21		3	
Fern spore	シダ植物胞子							
Monolate type spore	単条溝胞子	6	24	18	9	285	213	12
Trilate type spore	三条溝胞子	21	17	11	14	59	80	4
Arboreal pollen	樹木花粉	*****	35	48	46	13	29	2
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	1	4	4	4	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	283	286	330	311	11	26	6
Total pollen	花粉総数	*****	325	382	361	24	55	8
Unknown pollen	未同定花粉	1	6	4	1	1	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	27	41	29	23	344	293	16
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

表2　今福遺跡における花粉分析結果(2)

分類群		F-0 北壁						
学名	和名	1	2	3	4	5	6	7
Arboreal pollen	樹木花粉							
Podocarpus	マキ属				1	1	1	
Abies	モミ属				1	1	2	
Tsuga	ツガ属				1	1		
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	33			26	9	12	9
Cryptomeria japonica	スギ	6	2	1	1		2	
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科			1				
Myrica	ヤマモモ属			1	2	1		
Alnus	ハンノキ属		2	3	2	1	1	4
Betula	カバノキ属	1				1	1	
Corylus	ハシバミ属	2				1	1	
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ	4		1	5			3
Castanea crenata-Castanopsis-Pasania	クリ-シイ属-マテバシイ属	128	7	90	52	85	123	103
Fagus	ブナ属						1	
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	5		4	4	1	3	
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	82		15	67	57	64	13
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ	2			1			
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ				1	1		
Mallotus japonicus	アカメガシワ				1			
Zanthoxylum	サンショウ属	1						
Ilex	モチノキ属						1	
Camellia	ツバキ属						1	
Elaeagnus	グミ属	3						
Oleaceae	モクセイ科				1			
Hamameridaceae	マンサク科					1		
Nonarboreal pollen	草本花粉							
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属				2			
Sagittaria	オモダカ属	2			2			
Gramineae	イネ科	69		44	107	103	102	16
Oryza type	イネ属型	4		2	82	35	40	1
Cyperaceae	カヤツリグサ科	22	1	42	51	32	71	21
Monochoria	ミズアオイ属	1			11	1	2	
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節	1			1	1	2	
Caryophyllaceae	ナデシコ科					1	1	
Cruciferae	アブラナ科	2				1	2	
Ampelopsis brevipedunculata	ノブドウ	1						
Umbelliferae	セリ科	1		1	3	4	2	
Lactucoideae	タンポポ亜科	2		1	1	3	1	1
Asteroideae	キク亜科			1		2	8	1
Artemisia	ヨモギ属	6		2	5	4	10	1
Fern spore	シダ植物胞子							
Monolate type spore	単条溝胞子	199	7	8	11	6	14	57
Trilate type spore	三条溝胞子	437	3	13	14	11	37	29
Arboreal pollen	樹木花粉	267	11	116	166	161	213	132
Nonarboreal pollen	草本花粉	111	1	93	265	187	241	41
Total pollen	花粉総数	378	12	209	431	348	454	173
Unknown pollen	未同定花粉	4	1	2	2	1	3	2
Fern spore	シダ植物胞子	636	10	21	25	17	51	86
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(+)

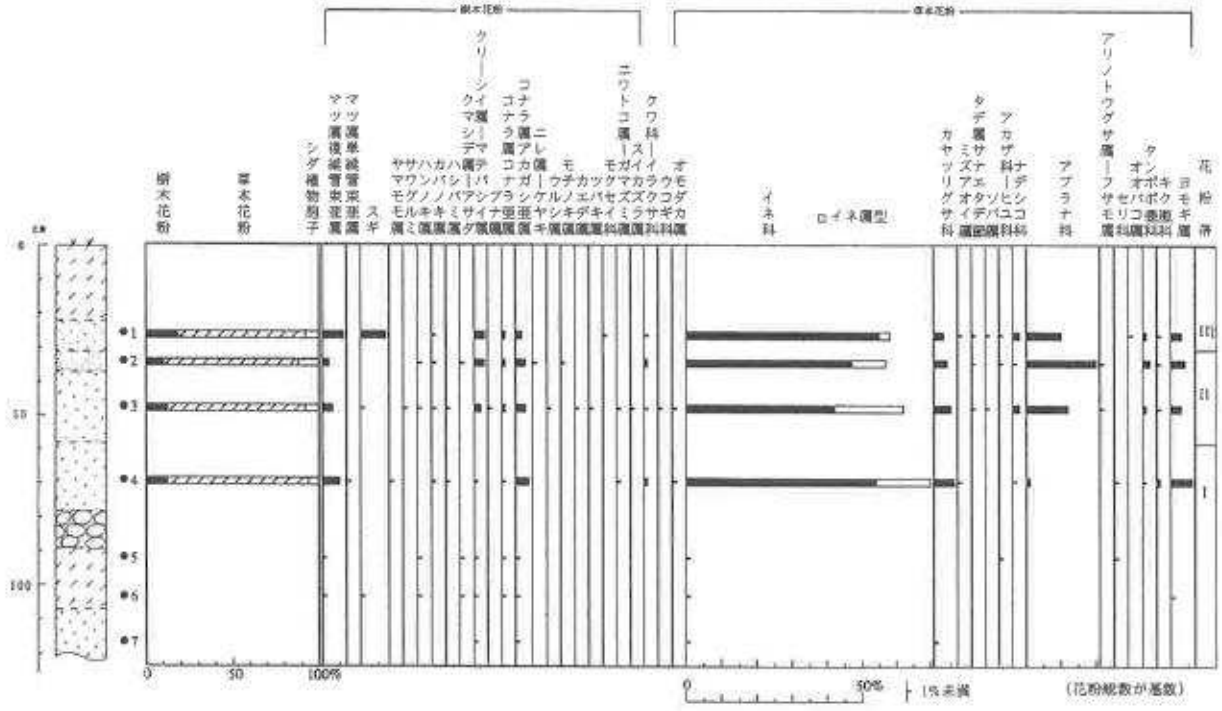


図1　今福遺跡、K-22区における花粉ダイアグラム

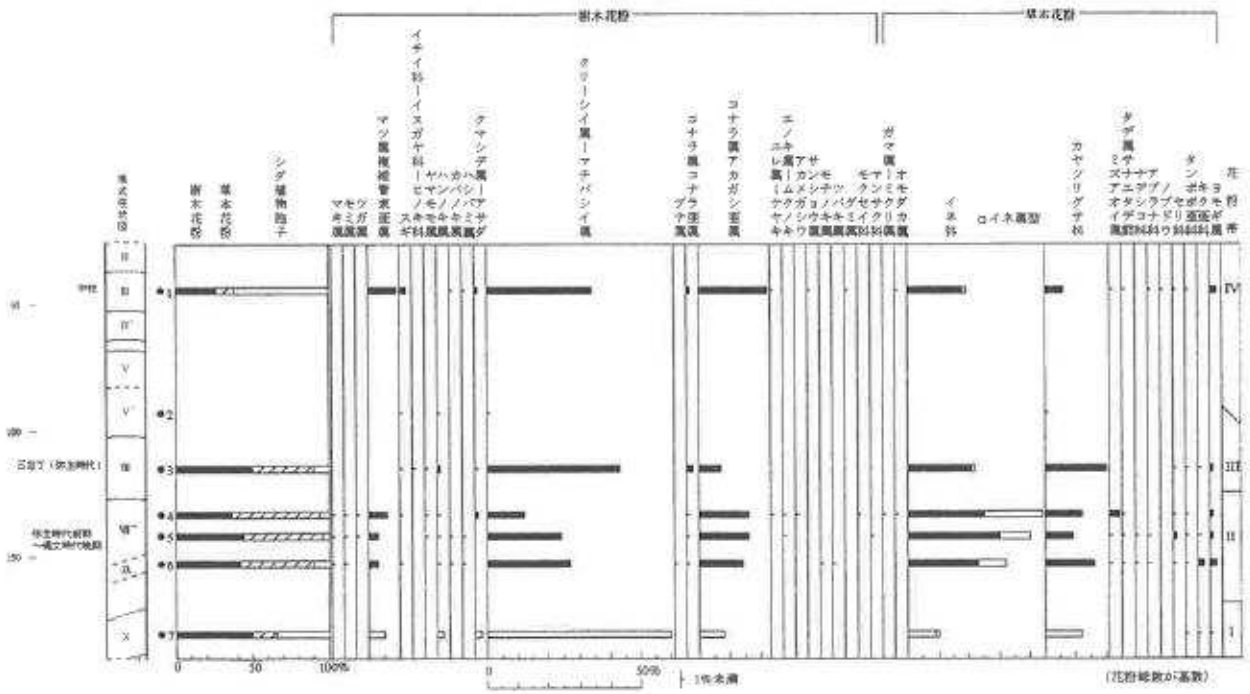
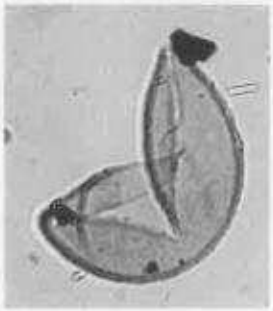


図2　今福遺跡、F-0北壁における花粉ダイアグラム

今福遺跡の花粉・寄生虫卵・胞子遺体

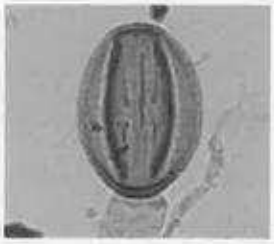
1 マツ属複維管束亜属



2 スギ

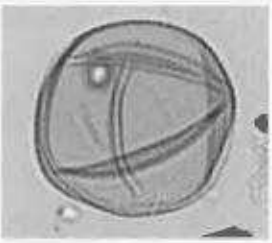
3 クリーシイ属

4 コナラ属コナラ亜属



5 コナラ属アカガシ亜属

6 オモダカ属

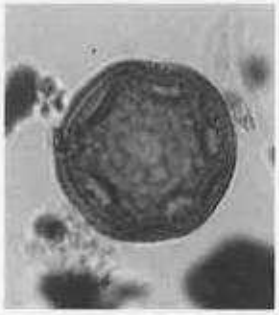


7 イネ科

8 イネ属型

9 カヤツリグサ科

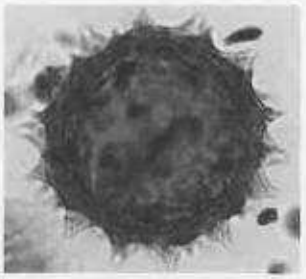
10 ソバ属



11 ナデシコ科

12 アブラナ科

13 タンポポ亜科



14 キク亜科

15 ヨモギ属

16 シダ植物単条溝胞子

17 シダ植物三条溝胞子

18 種虫卵

19 鞭虫卵

45 μm

第Ⅵ章　ま　と　め

1．遺物と遺跡について

今回は、長崎県北部で始まった国営農地再編整備事業に伴う今福工区内の今福遺跡発掘調査であった。特にモデル地区でもあったため、事業所・地元の土地所有者・市農林課と連絡を密にして調査にあたった。調査では、本工事との関係で期間が限定されていたため、調査体制の充実と作業員の確保に努めた。その結果、予定通りに発掘調査を終了することができた。

試掘調査の結果から遺跡の主体を古墳時代であると予想をしていた。しかし、縄文晩期中頃から弥生前期にかけての遺物を多数検出することができた。晩期中頃には黒川式に代表される深鉢では口縁部の沈線が消え、頸部のくびれがゆるく、胴部の屈曲がなくなる器形を呈し、口縁部ではリボン状の突起を伴うものがある。組織痕土器網目状の発見は松浦市において初現のものであった。さらに前期の石庖丁6点の出土は当地においても稲作の起源が弥生時代にまでさかのぼることも確認された。これまで石庖丁の出土は同じ様な立地条件をもつ志佐町栢ノ木遺跡の第5次・第8次の調査でそれぞれ1点が出土していたのみで、今回の発見は2例目である。それが6点もまとまって出土したことは、今後の長崎県内への稲作のルートを研究する上で注目されるであろう。

古墳時代では、土師器の器種の多さであろう。高坏・坏・手捏ね・甕・壺・製塩土器があり、特に完形に近い資料もあった。4世紀後半から5世紀代に包含される資料である。須恵器では坏・甕・平瓶・壺・高坏・鉢の種類があり、坏蓋は天井が低く平に近く、全体に丸みが少なく扁平である。坏身は器高が低く、扁平な感を与え、立上りは短く内傾している。6世紀後半から7世紀初めの資料である。その他の遺物も同時期が考えられる。量的には多くないが5世紀前半から6世紀初めの坏蓋もある。

古代から中世においては、輸入陶磁器は8世紀末から10世紀中頃の越州窯系青磁Ⅰ類・Ⅱ類がある。出土量はそれほど多くない。11世紀後半から12世紀前半の北宋後半代の白磁碗Ⅱ類～Ⅷ類ではⅣ類の量が他を圧倒している。龍泉窯系青磁碗ではⅠ－2類・Ⅰ－4類があり、Ⅰ－5類は量的に大変少なかった。そのほかでは同安窯系青磁・明染付・李朝粉青沙器が若干出土している。

国内産の石器・土器では、石鍋は外面口縁部に方形の耳がつくタイプで鍔がつくタイプは出土していない。外面に炭化物が付着したものが多く明らかに鍋として使用されているようである。器形からA類の資料が多く11世紀代に包含されるであろう。土器は、土師器・瓦器・黒色土器A・B類が出土している。小皿では口縁内面に凹線や段を有するものは10世紀中頃から11世紀後半までの資料である。その後の小皿は糸切りが少量出現している。坏も糸切りである。碗は細くて高い高台と低い高台がある。10世紀末から12世紀前半の資料である。黒色土器では量的にはB類が多い。1点ではあるが托上碗と思われる資料がある。A類は底端部に外方へ踏ん張る断面逆台形の高台を有し、成形手法も回転台を使用した須恵器的な製作手法が用いられている。10世紀代の資料であろう。B類は11世紀後半から12世紀前半の資料である。同じく瓦器もその頃の年代が与えられる。

これらの遺物の多さに反して、遺構は貧弱であった。かろうじてピット群・集石土壙等を検出したがいずれも中世の時期で正確な時期判定の資料が少なかった。礫群は年代差がある遺物が出土しているが遅くとも13世紀前半頃の遺構であろう。

以上のように、出土した遺物からは12世紀前半まで集落が営まれていたが、なんらかの理由によってその後は急速に衰えて行ったようである。今福川の氾濫であれば一時的ではあるがその後も集落は形成されても不思議ではない。延久元年（1069）に源久なる人物が摂津国渡辺荘より今福に下向している。それまで中国大陸との交易を行っていた在地の土豪的な集団は源久によって統一されてしまったのか今後の研究課題としたい。

最後に、開発に伴う近年の発掘調査は、件数の増加とともに調査規模も大きくなってきている。このため調査にあたっては、専門職員の確保と職員の資質の向上及び作業員の確保も大きな悩みになってきている。今後も国営農地再編整備事業に伴う発掘調査が予定されており、専門職員を含め調査体制そのものの整備が課題となっている。今回の今福遺跡の発掘調査は、遺跡の面積約16,300㎡のうち約15.8%の 2,580㎡を調査した。残りの遺跡については、ほかにとるべき方法がなかったため盛土保存を行っている。この盛土保存の方法と是非についてはこれまで多くの自治体で議論されてきている。本来ならば開発を迅速に行うためにという理由のみで安易に盛土保存を選択すべきでないと思う。盛土保存の前提には精密な遺跡地図の作成と将来において発掘調査の必要が生じた時に対応できるような措置をしておかなければならないのではないだろうか。

一方、松浦市でも過去の調査で出土した遺物はおびただしい量に達している。その中には歴史的・美術的価値の高いものも少なくないが、住民にはほとんど公開されず、文化の普及には役立っていないばかりでなく、貴重な文化財の保管上にも問題がある。このため、都道府県市町村では、埋蔵文化財の保護行政の円滑かつ効果的な推進と文化財愛護精神の普及・啓発を図る目的で、調査・研究・整理・公開・展示・収蔵等の施設を兼ね備えた埋蔵文化財センター・博物館等の建設が盛んになってきている。こうした施設の建設は、今後さらに増加する開発事業と埋蔵文化財の保護を円滑に進める上で最も重要な課題である。松浦市においても住民の文化財に対する正しい理解と認識を深めるとともに郷土愛を培う拠点としての早急な施設の建設が望まれている。

これまでの埋蔵文化財保護行政は、遺跡の現状保存を基本として遺跡を守り後世の人々に伝えていくことは我々の責務でもあった。経済大国に発展した日本において一方では心豊かな人づくりも提唱され、ふるさと創世・まちおこし・むらおこし事業は人づくりや地域の活性化を目的とするものであり、地域の文化に対する人々の意識は高まりを見せている。しかし、地域の人々にとって、その遺跡が自分たちの生活にどのような係わりがあるのか、今後の地域の発展にどのような関係があるのかなどを含めて理解することによって、遺跡や文化財に対する愛護の思想が生まれてくるのではないだろうか。こんな中で、文化財を守るだけではなく、活用することも今後の文化財保護行政の課題ではなかろうか。その活用については、現在では様々な方法がとられてきている。単なる人集めに利用するのではなく、郷土の歴史と文化を正しく理解させるための活用でなければならない。これからの埋蔵

文化財保護行政は、ますます複雑で多様化が予想されている。しかし、文化財は国民共有の財産であり、我々の先祖が残した足跡でもある。この足跡を大切に守り、そして活用していくことは郷土愛と人間愛を育むとともに心豊かな人づくりに資するものであるという基本的な認識にたって、今後の埋蔵文化財保護行政の推進を図っていく必要があるのではないだろうか。

図　　版

図版 1

遺跡遠景

調査風景

ＦＯ東土層

図版 2

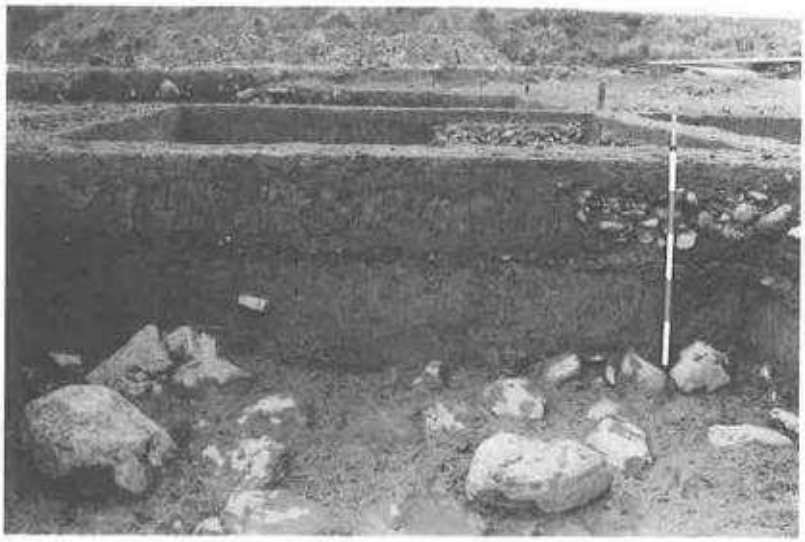
H 7 東土層

H13東土層

H18東土層

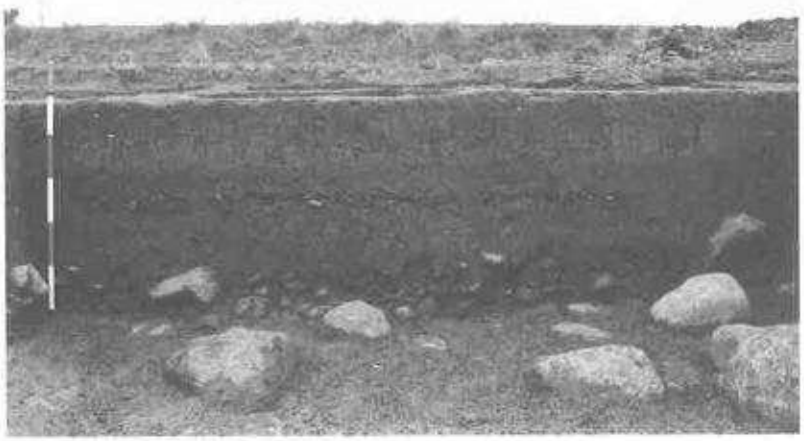
H42東土層

J22東土層



e59北土層

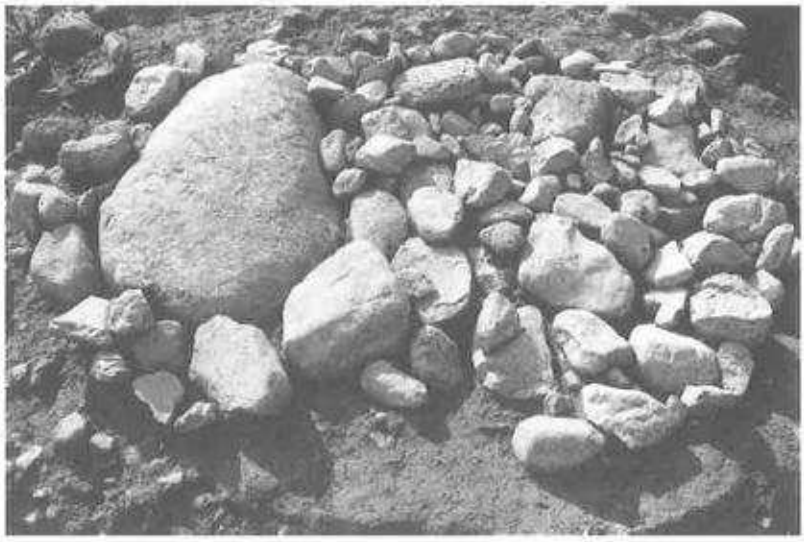
図版4



f58東土層

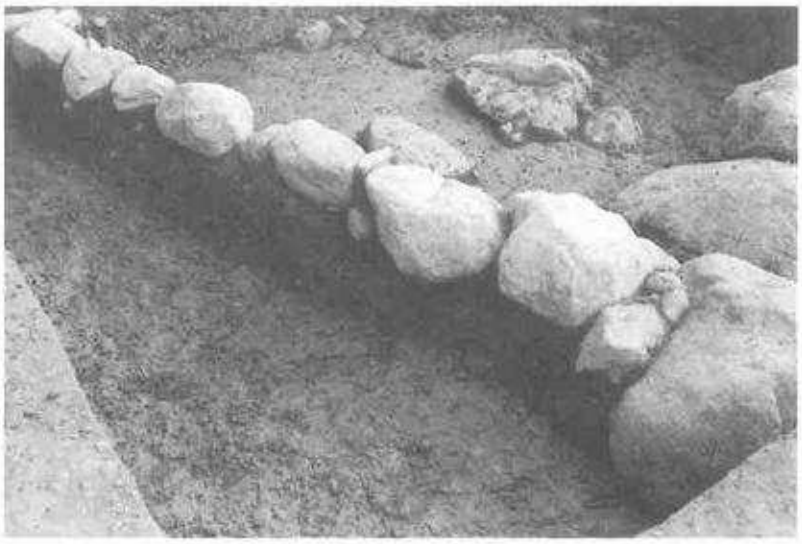
GH14～16ピット検出状況

M～Q22・23ピット検出状況



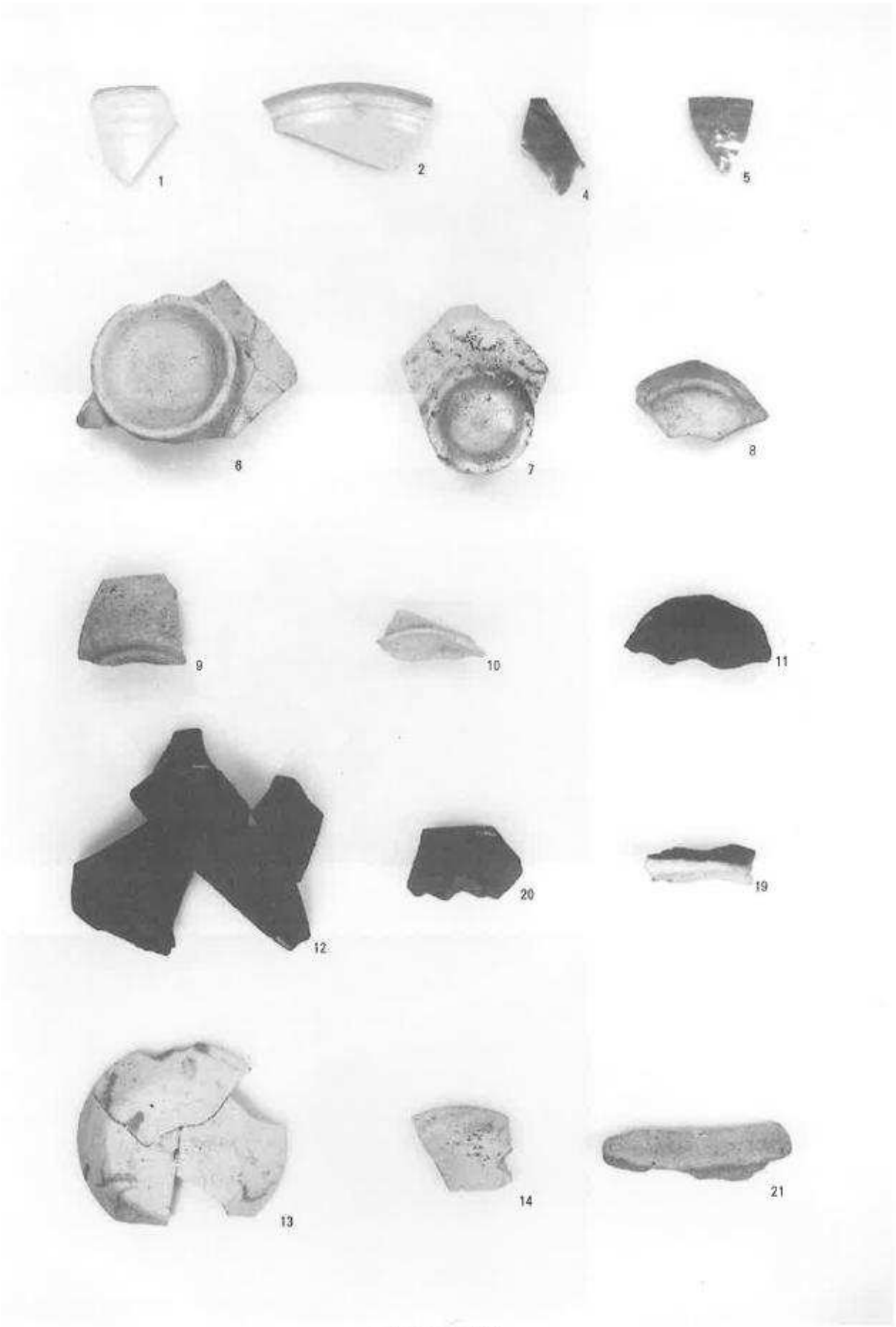
MN22集石土壙検出状況

G7礫群検出状況

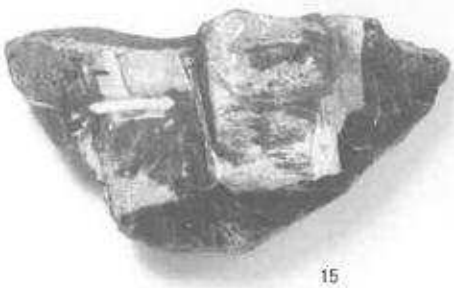


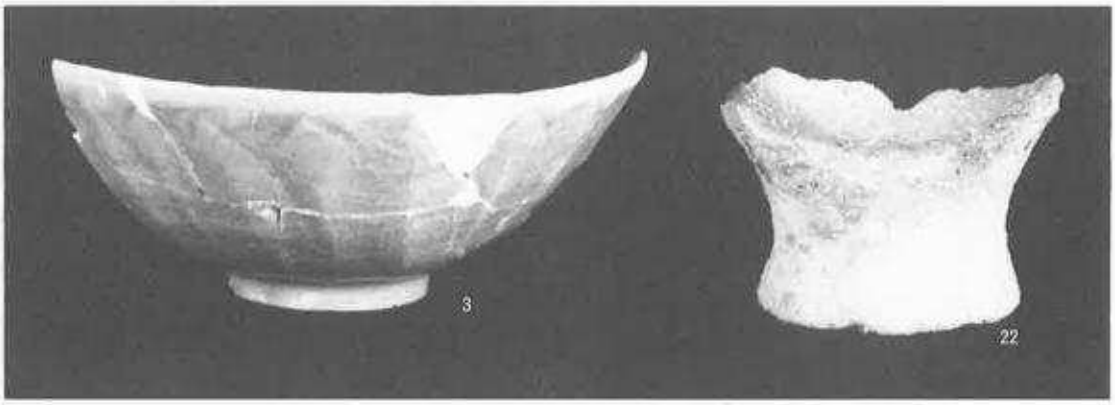
B13列石検出状況

図版 6



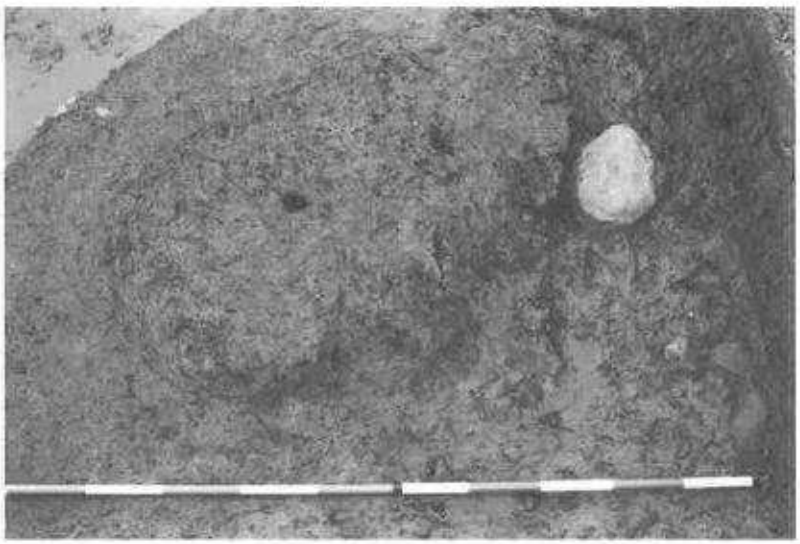
礫群内出土遺物 1



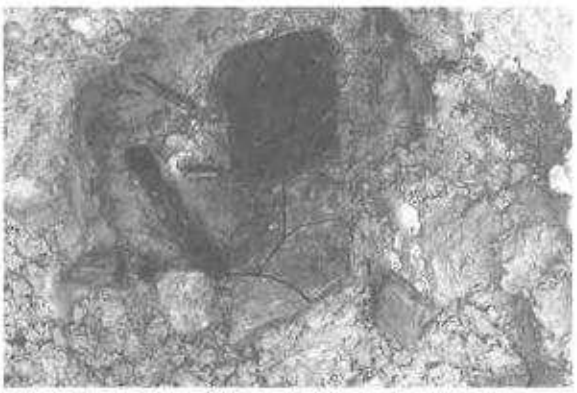


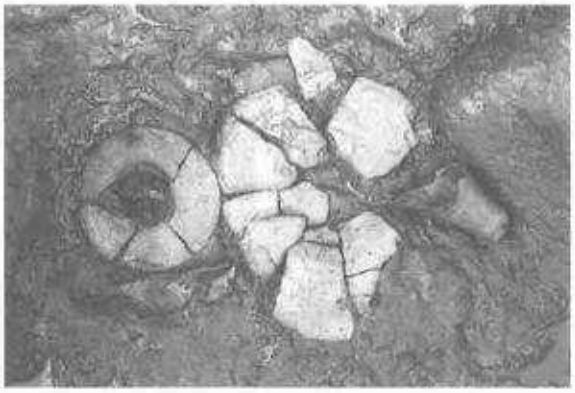
礫群内出土遺物 2

図版 8

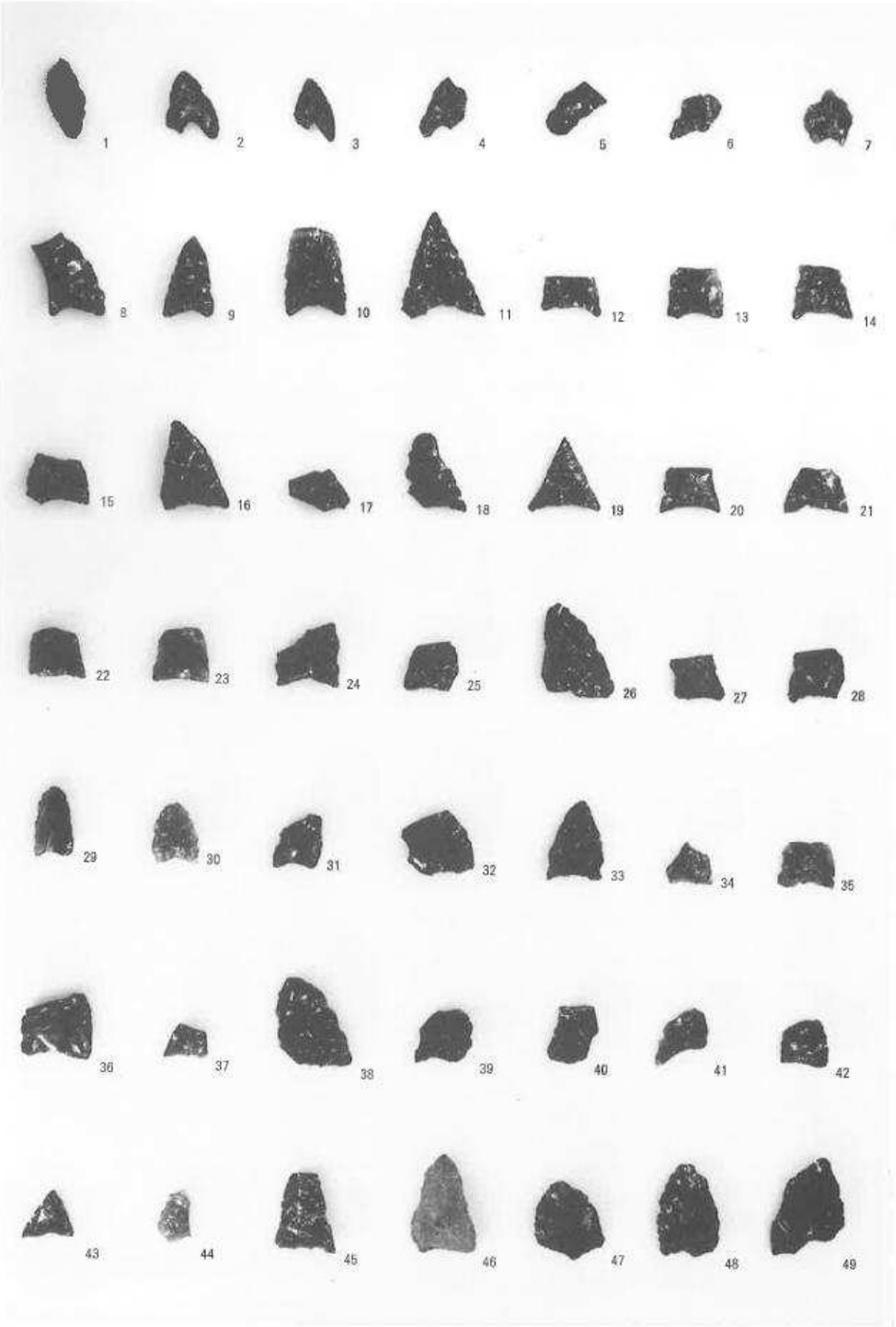


e 57土壙検出状況



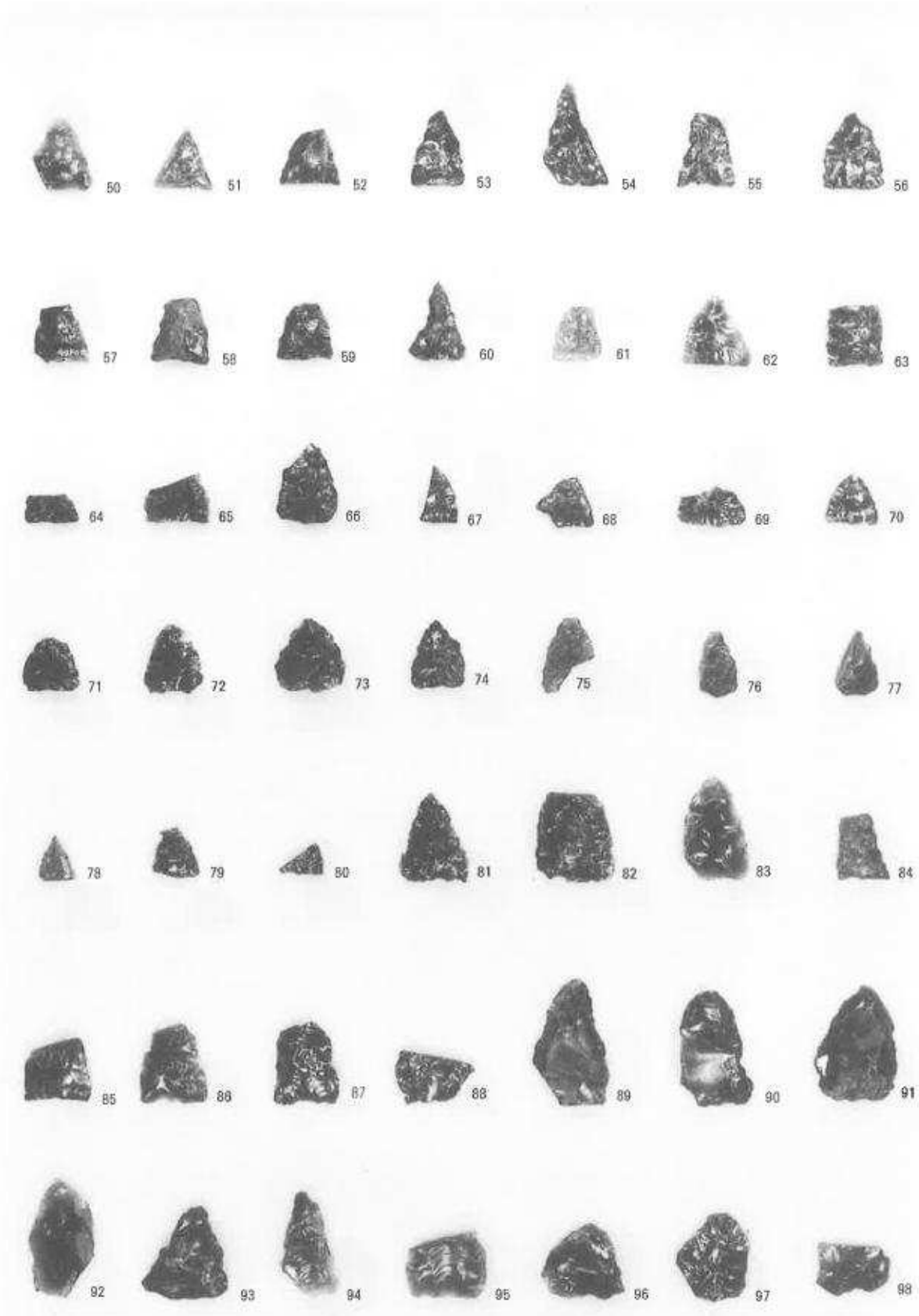


遺 物 出 土 状 況

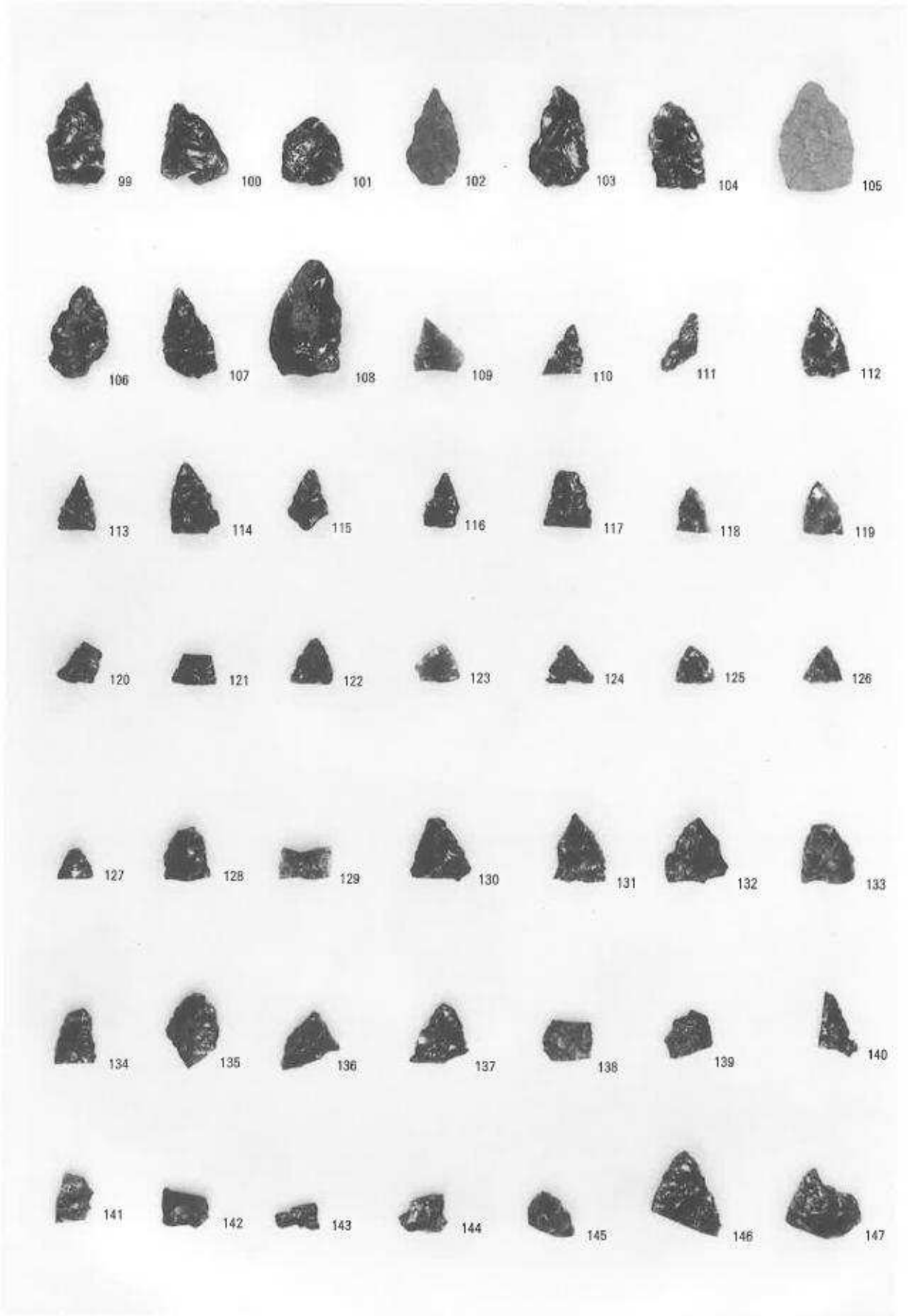


旧石器・縄文時代の遺物 1

図版10

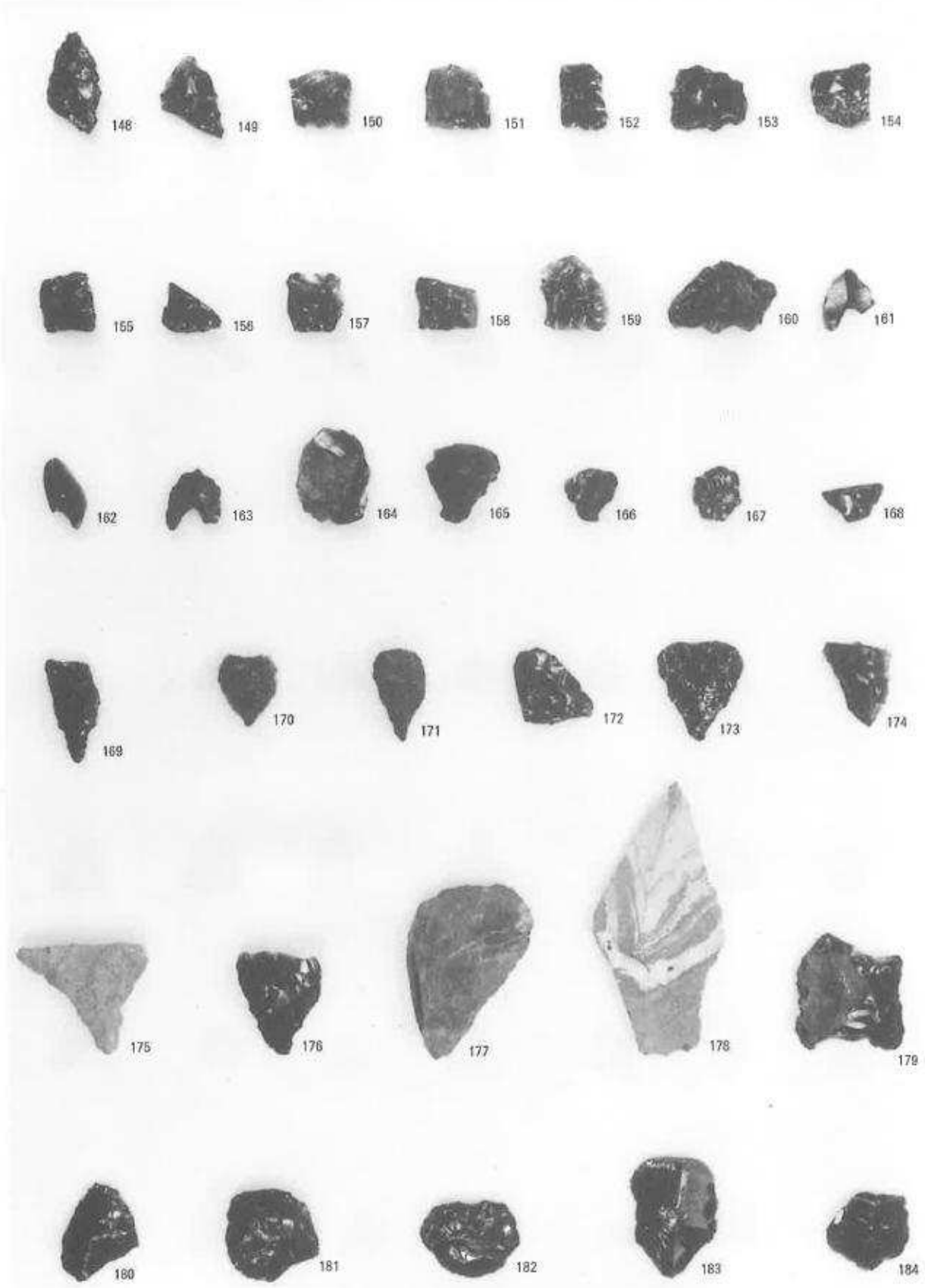


縄文時代の遺物 2

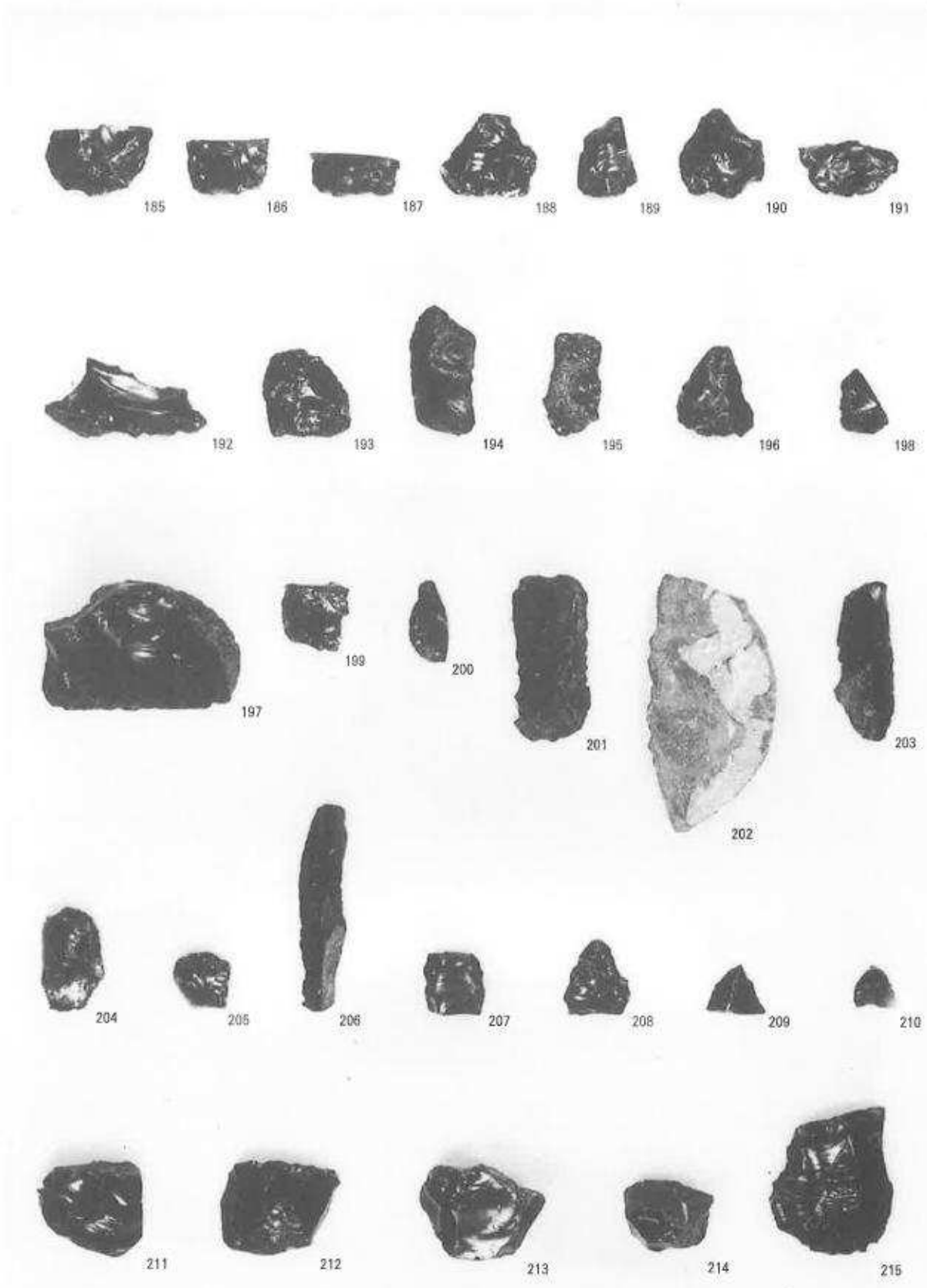

99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147

縄文時代の遺物3

図版12

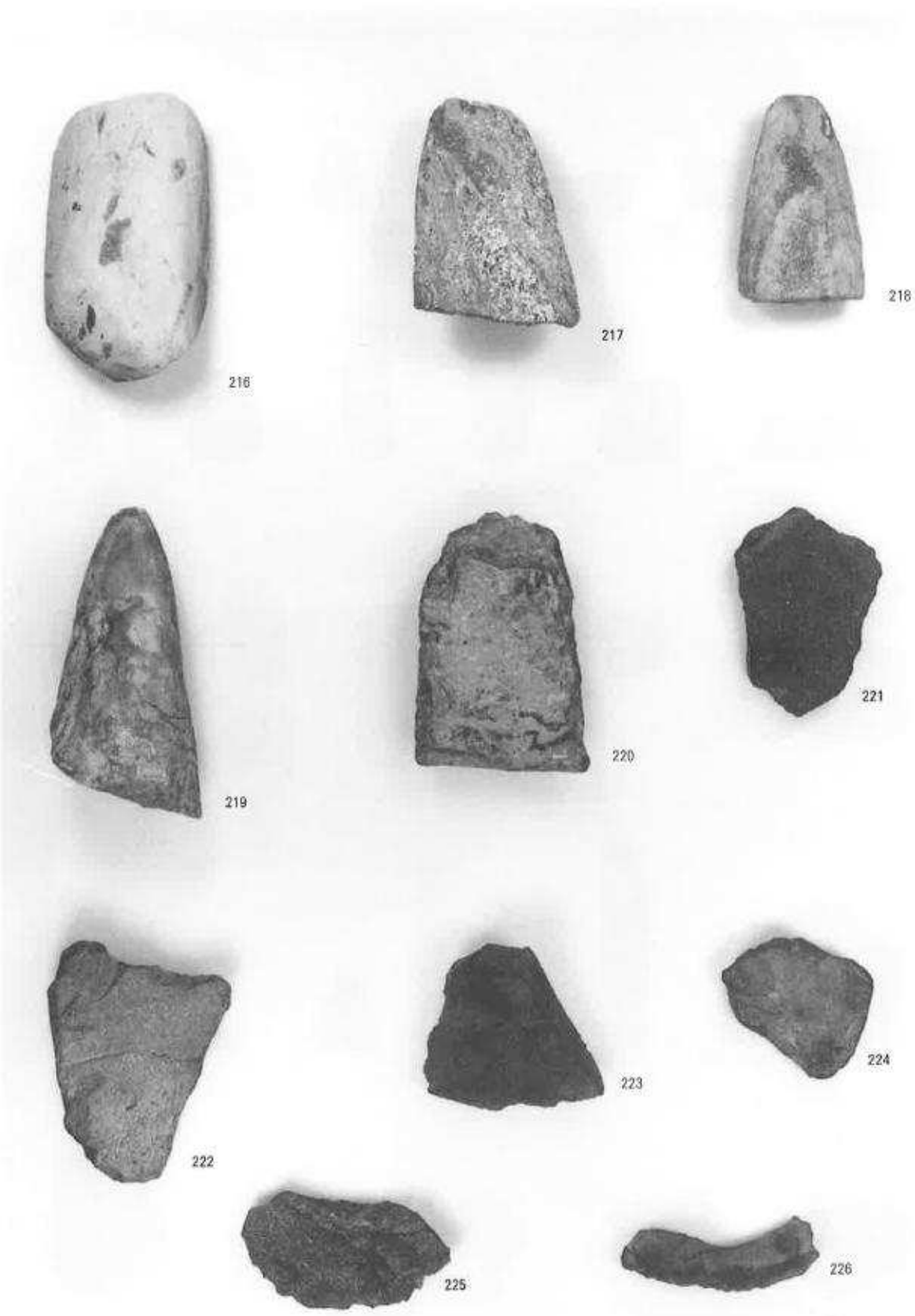


縄文時代の遺物 4

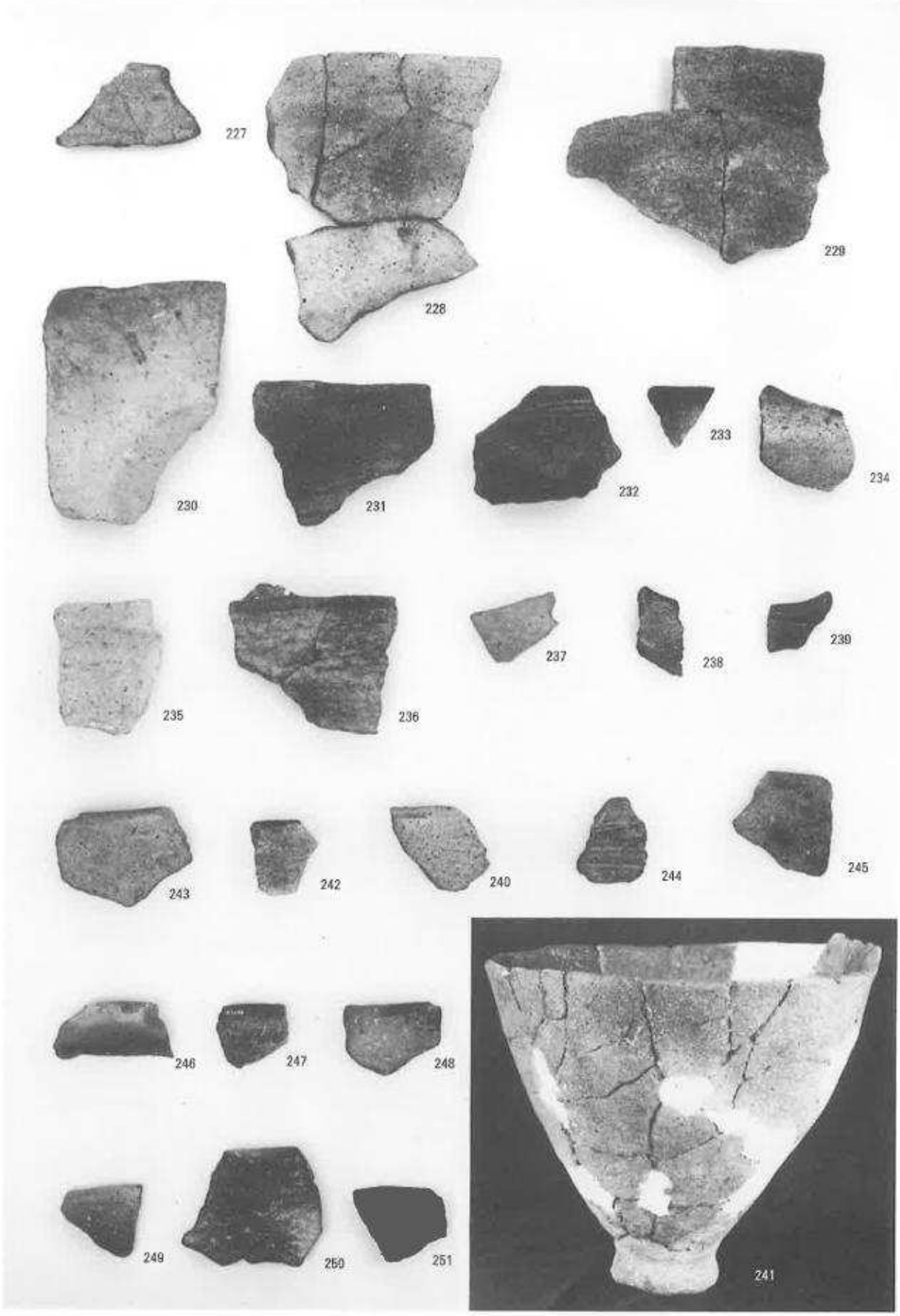

185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
198
197
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215

縄文時代の遺物5

図版14

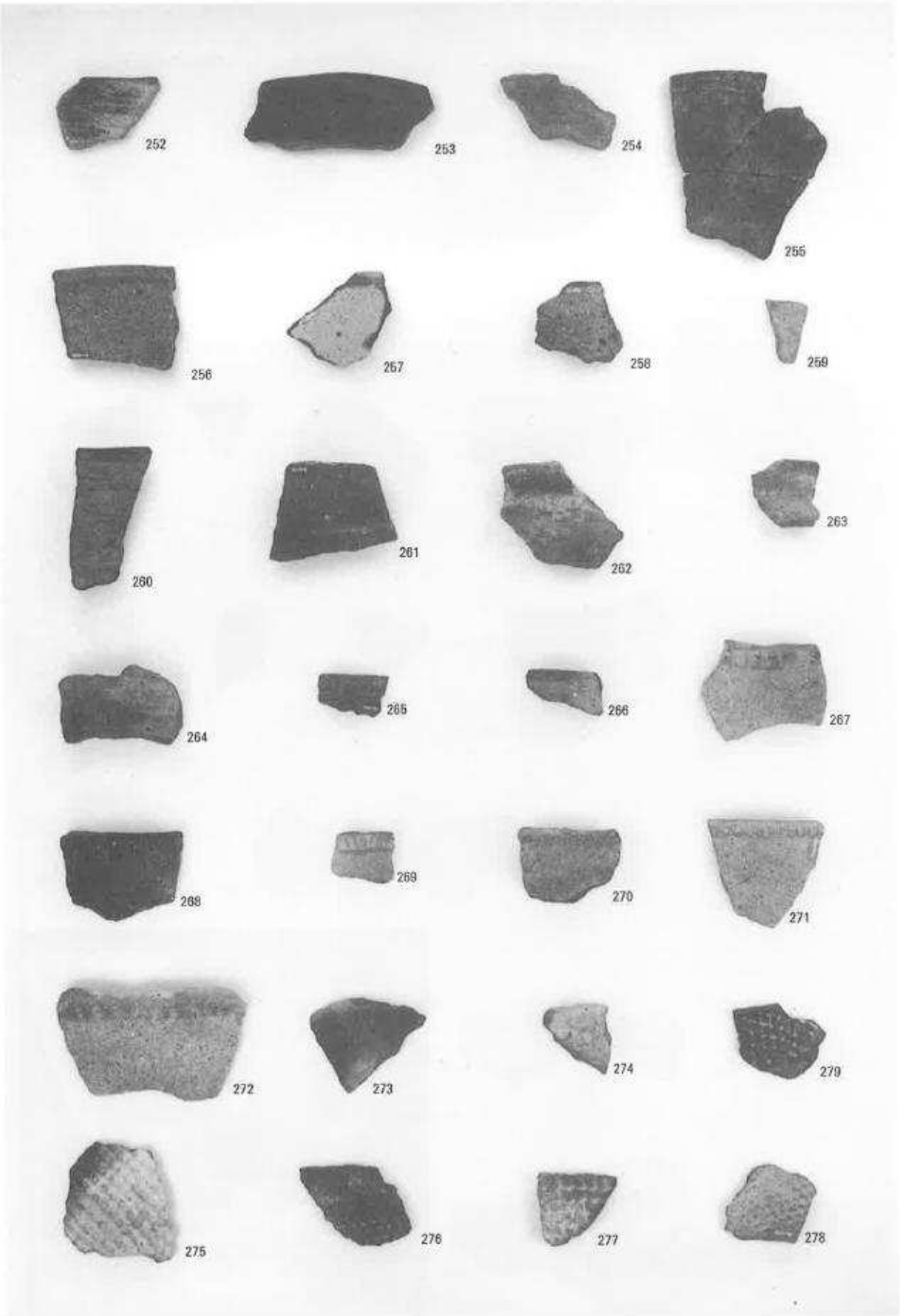


縄文時代の遺物6

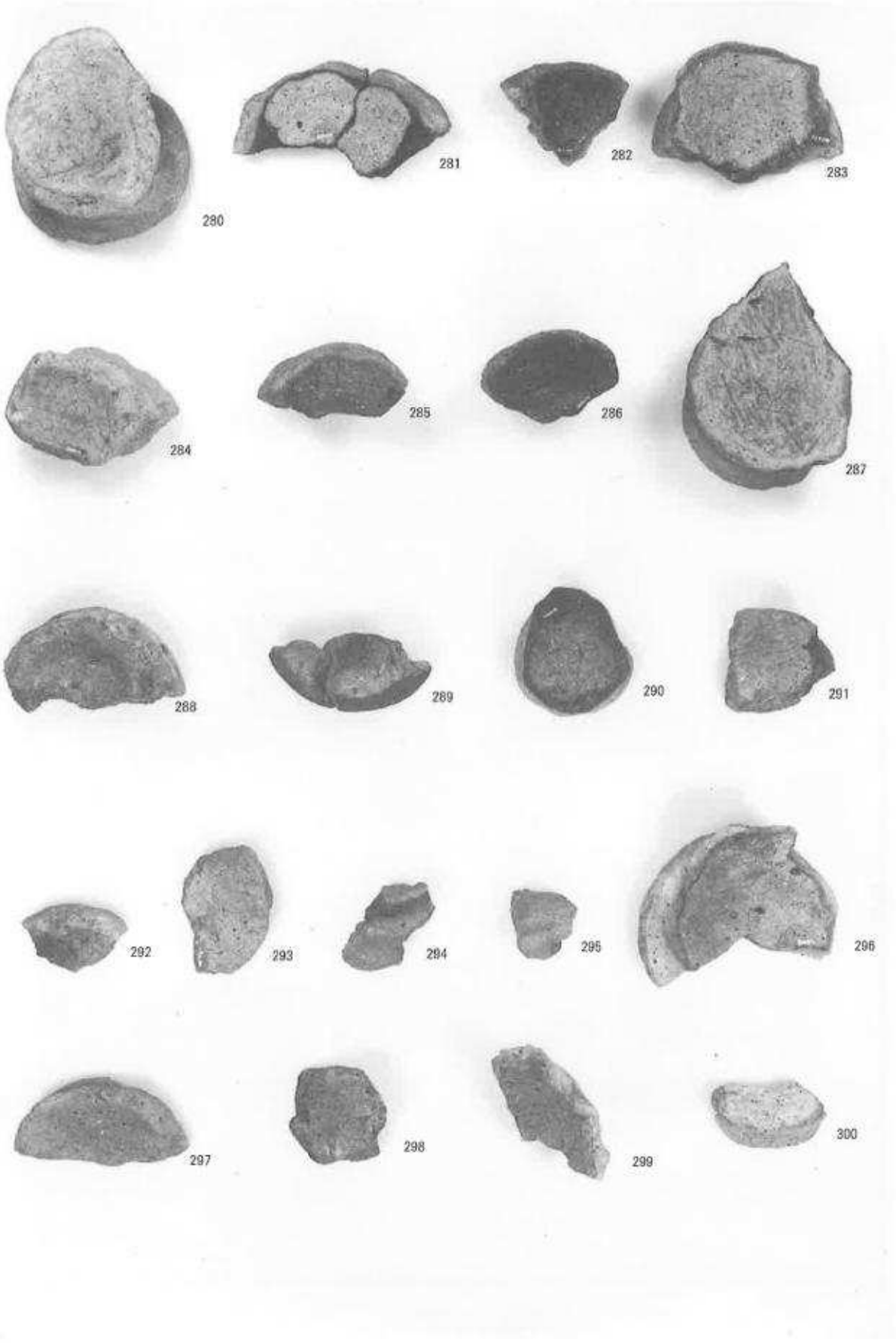

227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
241

縄文時代の遺物 7

図版16

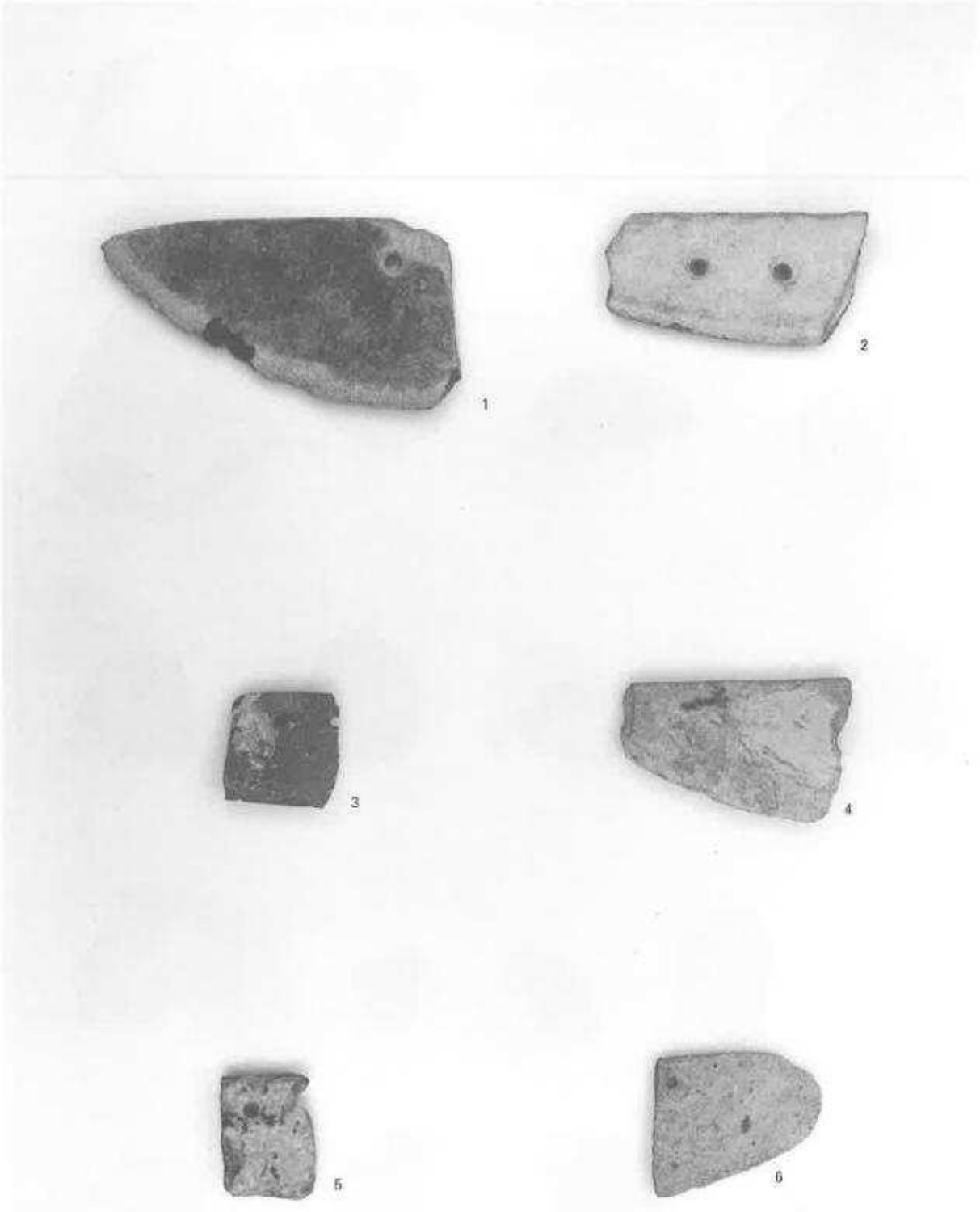


縄文時代の遺物8

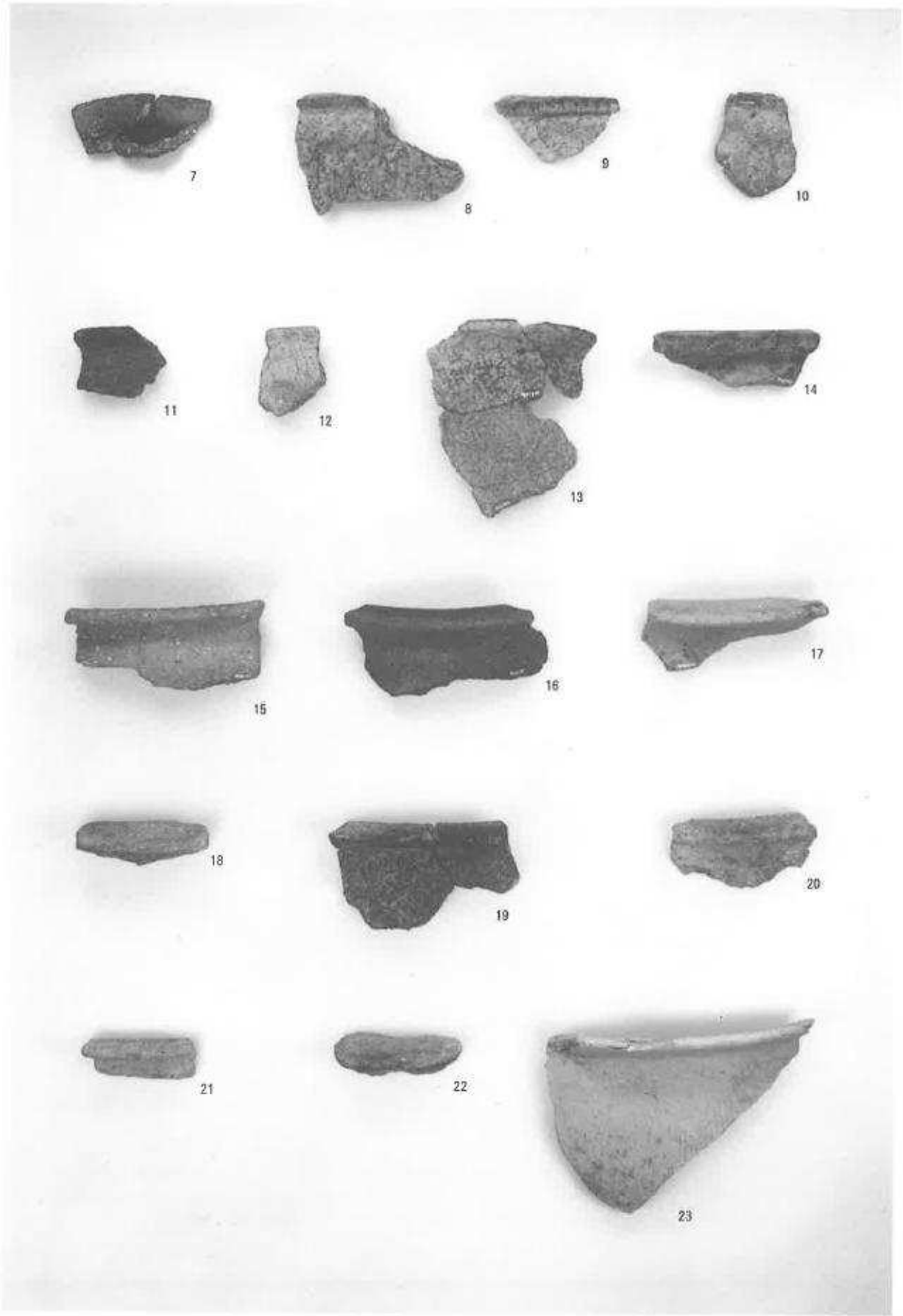

280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300

縄文時代の遺物9

図版18

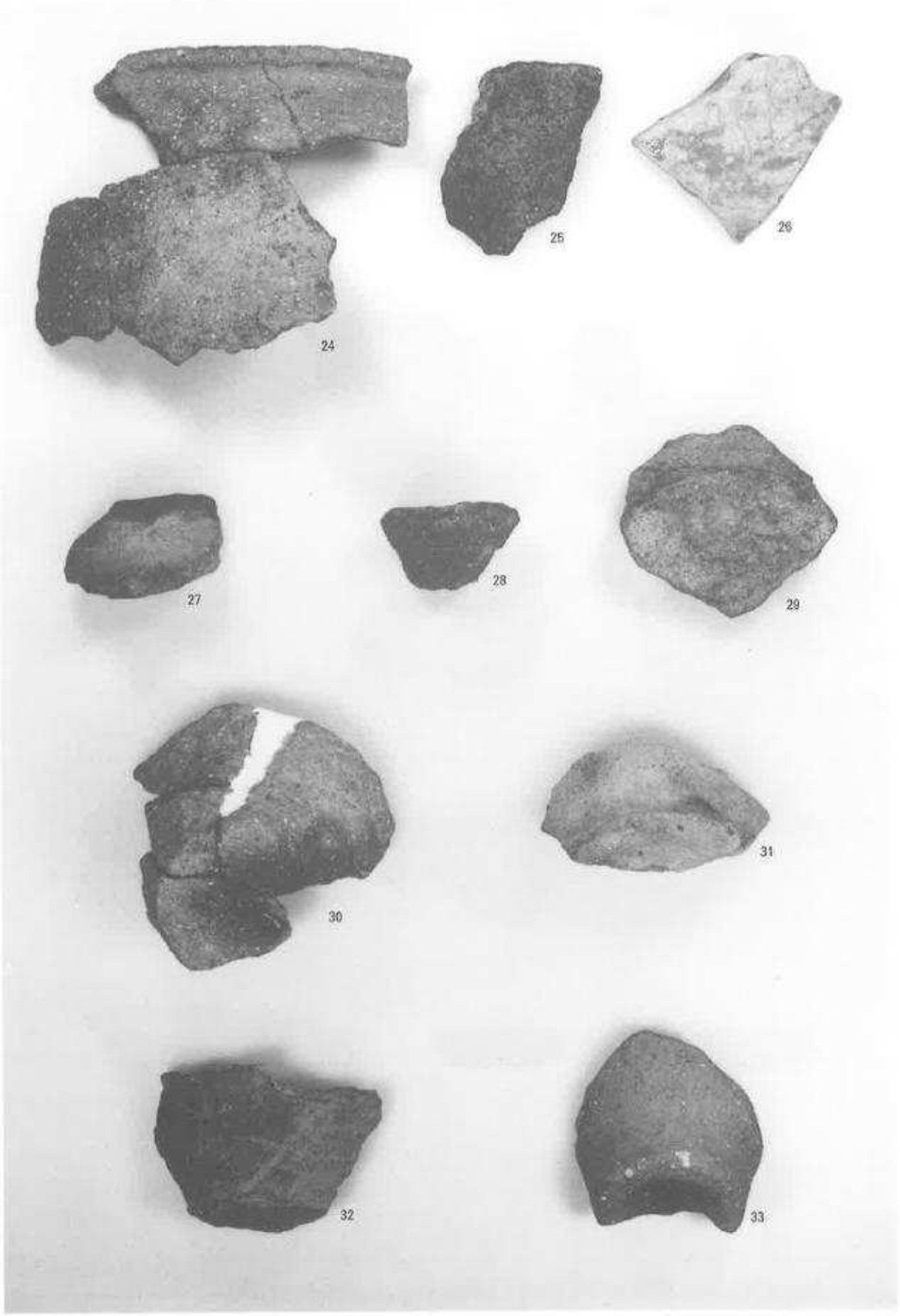


弥生時代の遺物 1

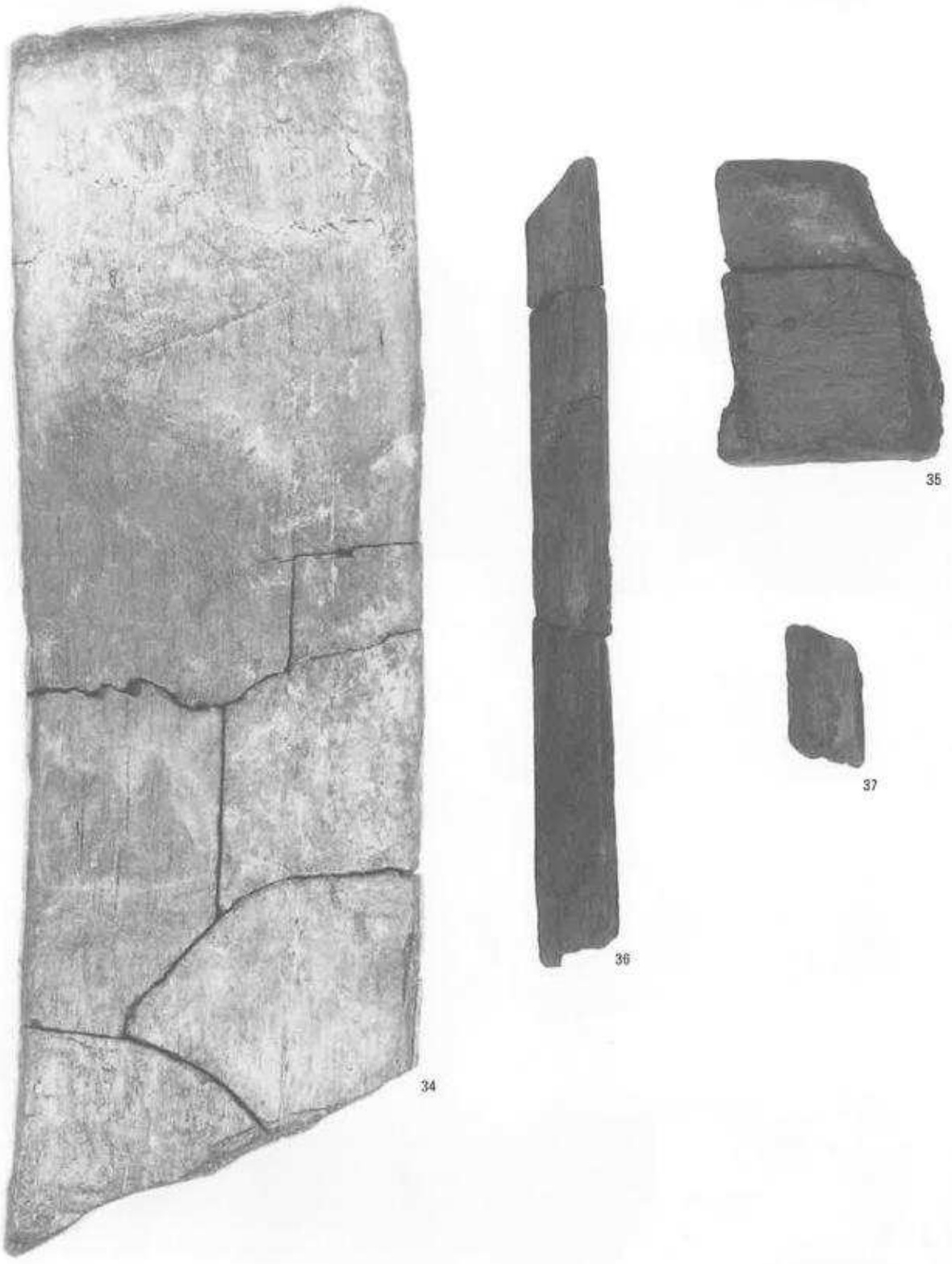


弥生時代の遺物 2

図版20

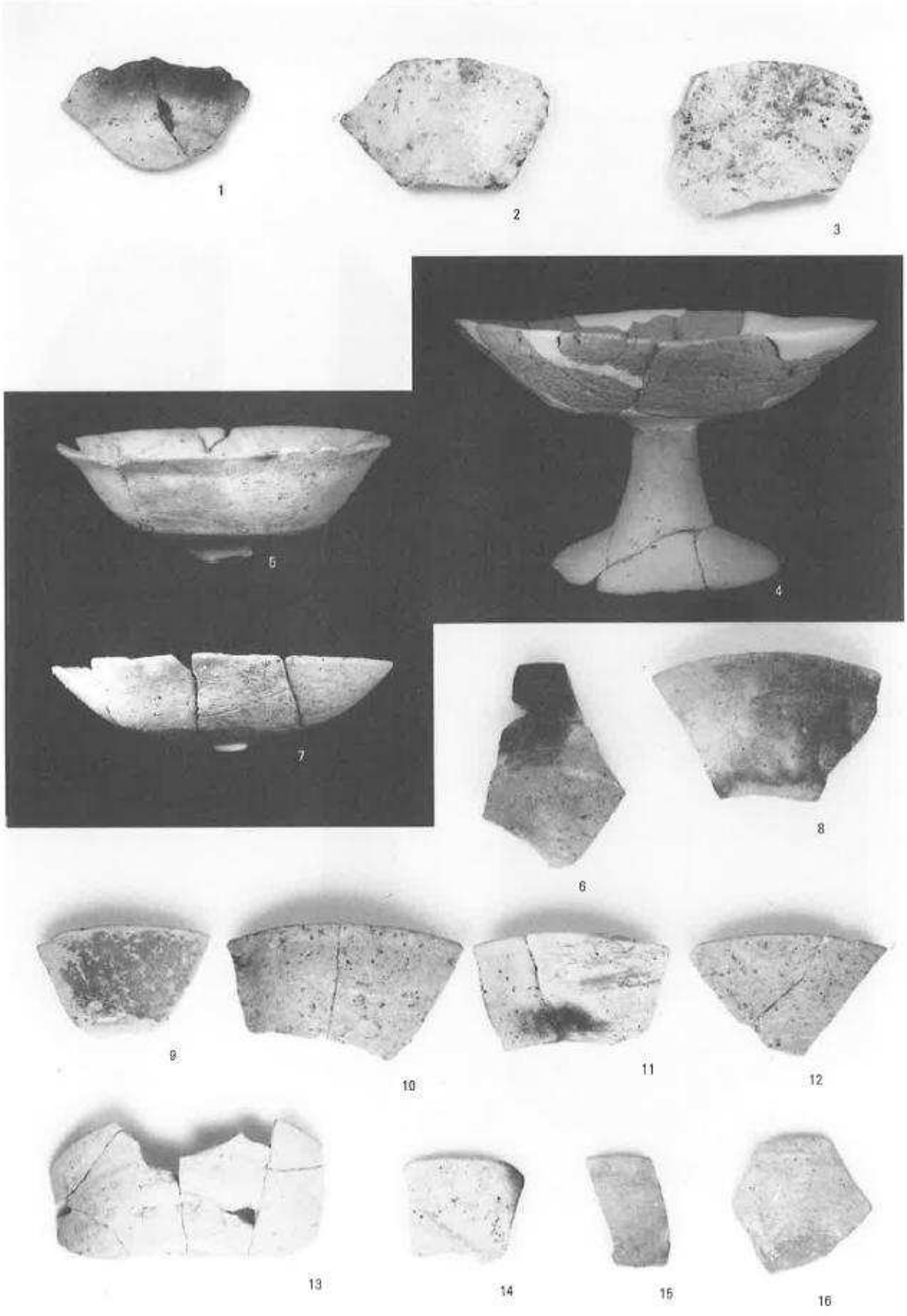


弥生時代の遺物3

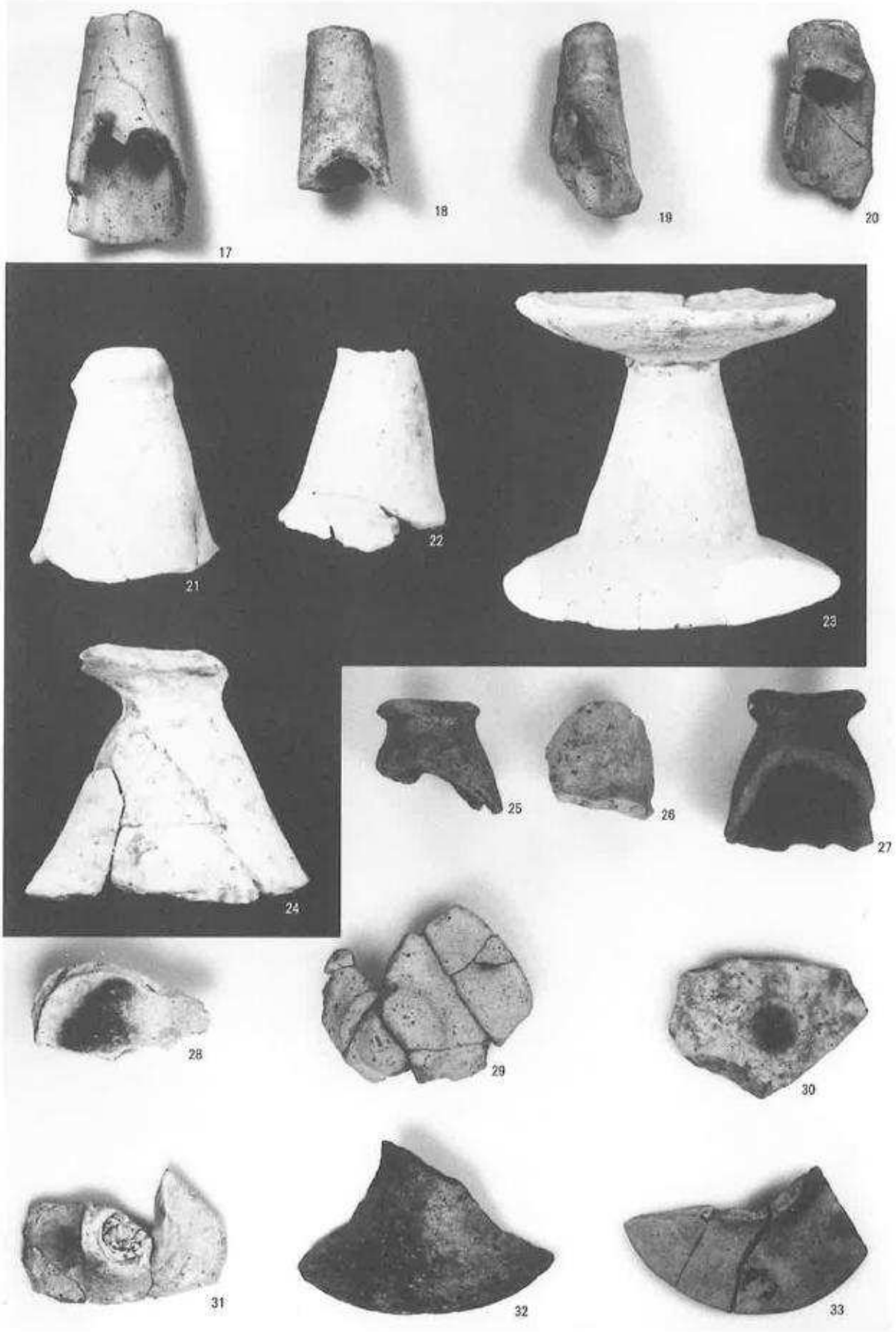


弥生時代の遺物 4

図版22

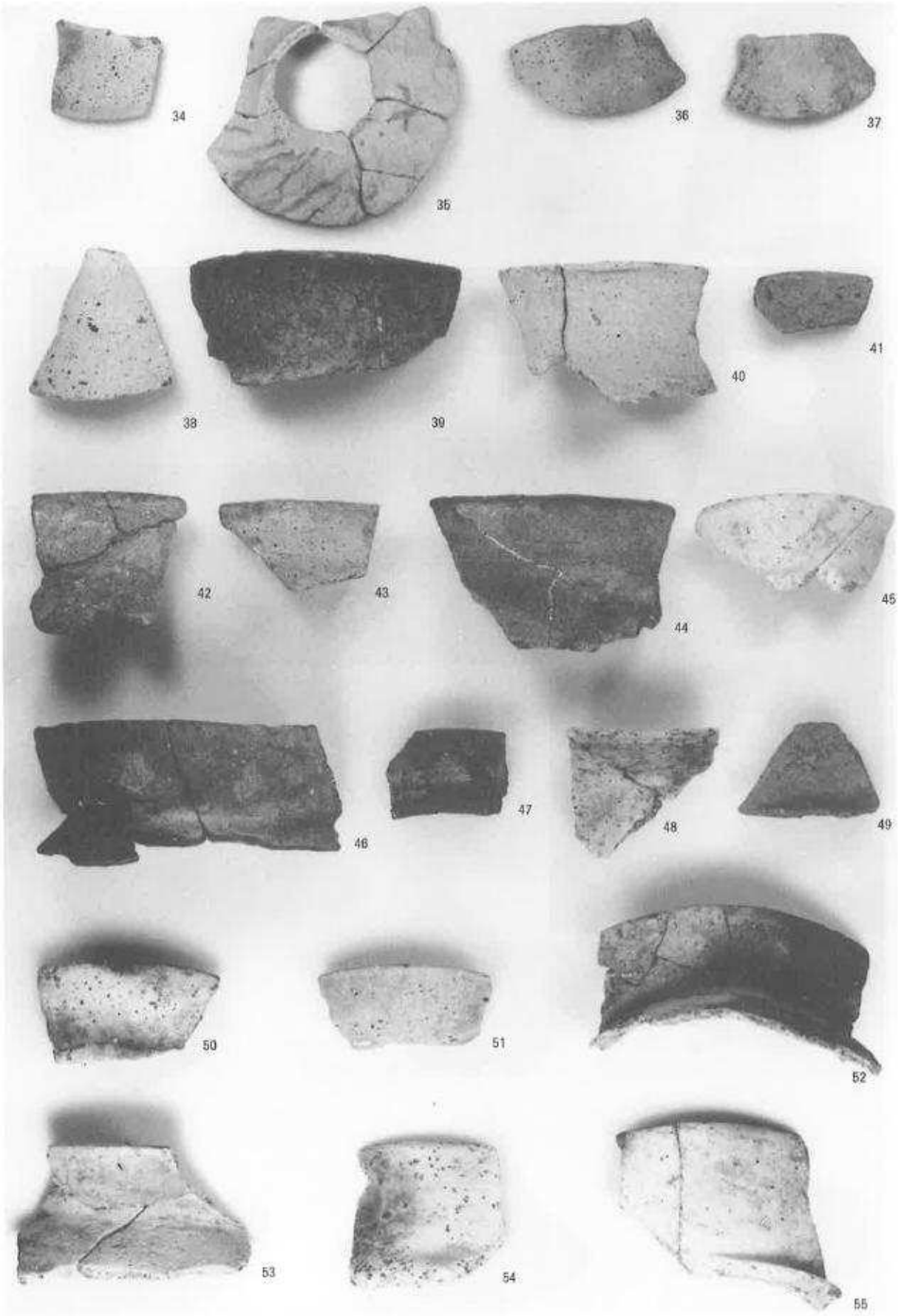


古墳時代の遺物1

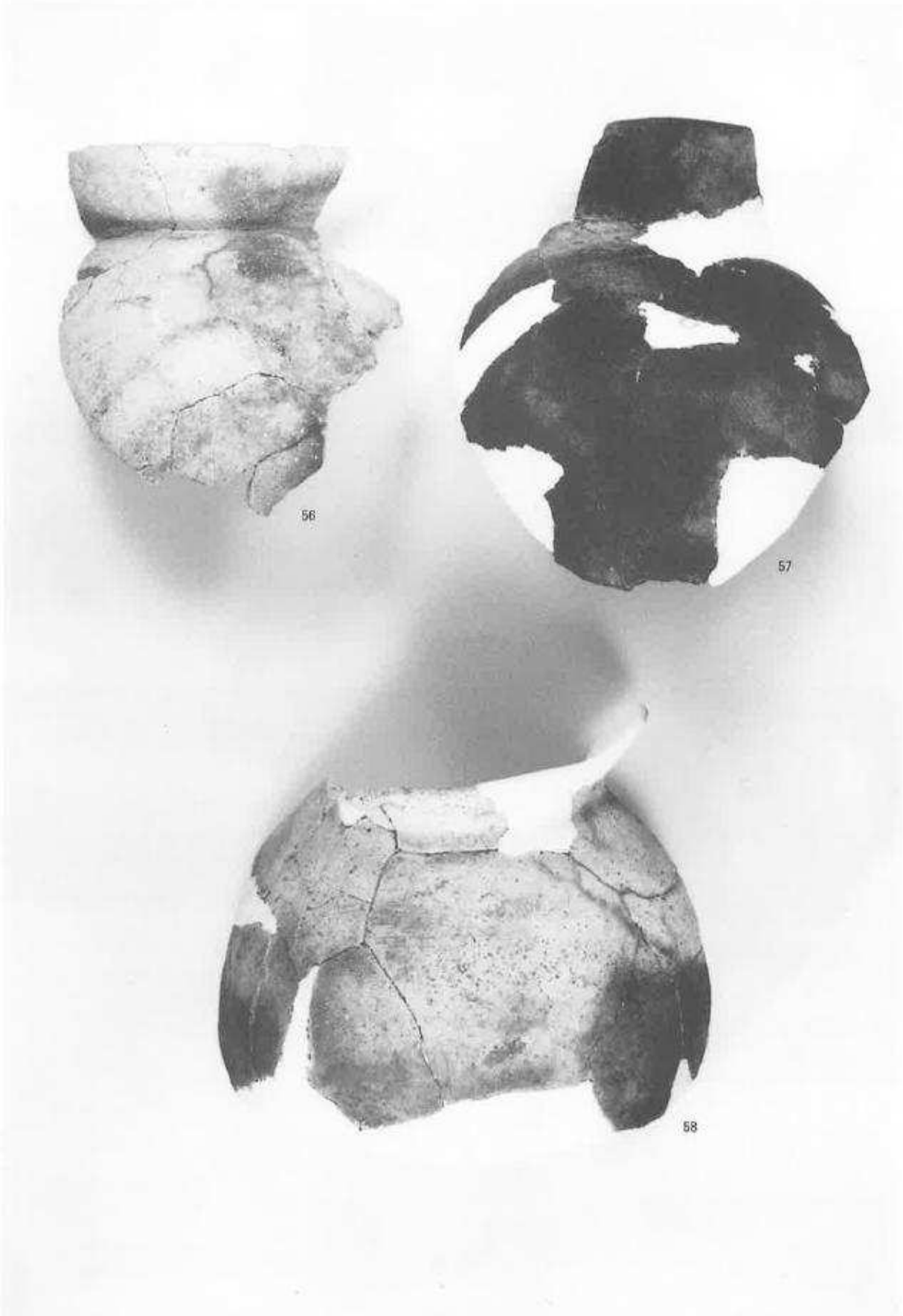


古墳時代の遺物 2

図版24

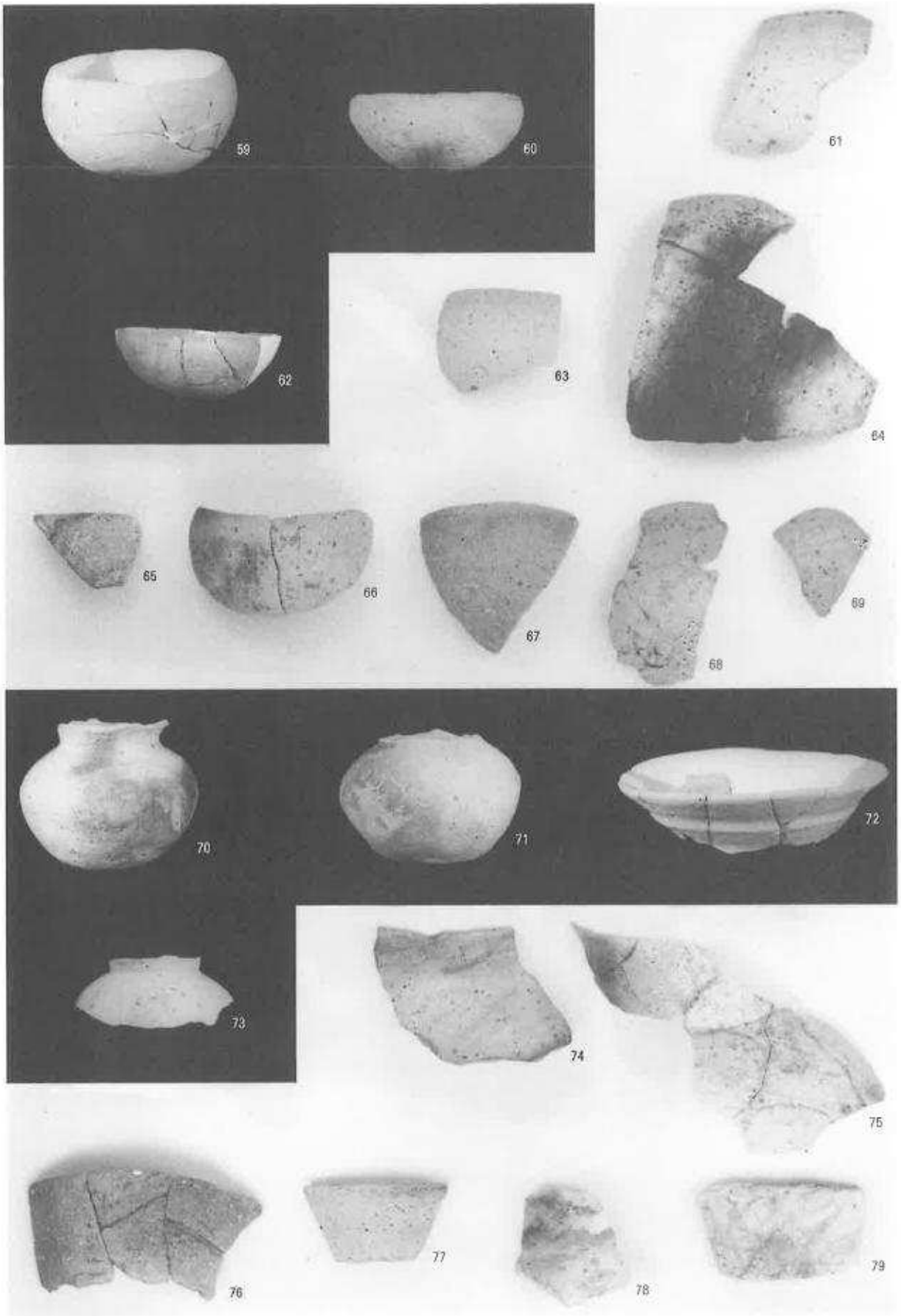


古墳時代の遺物3

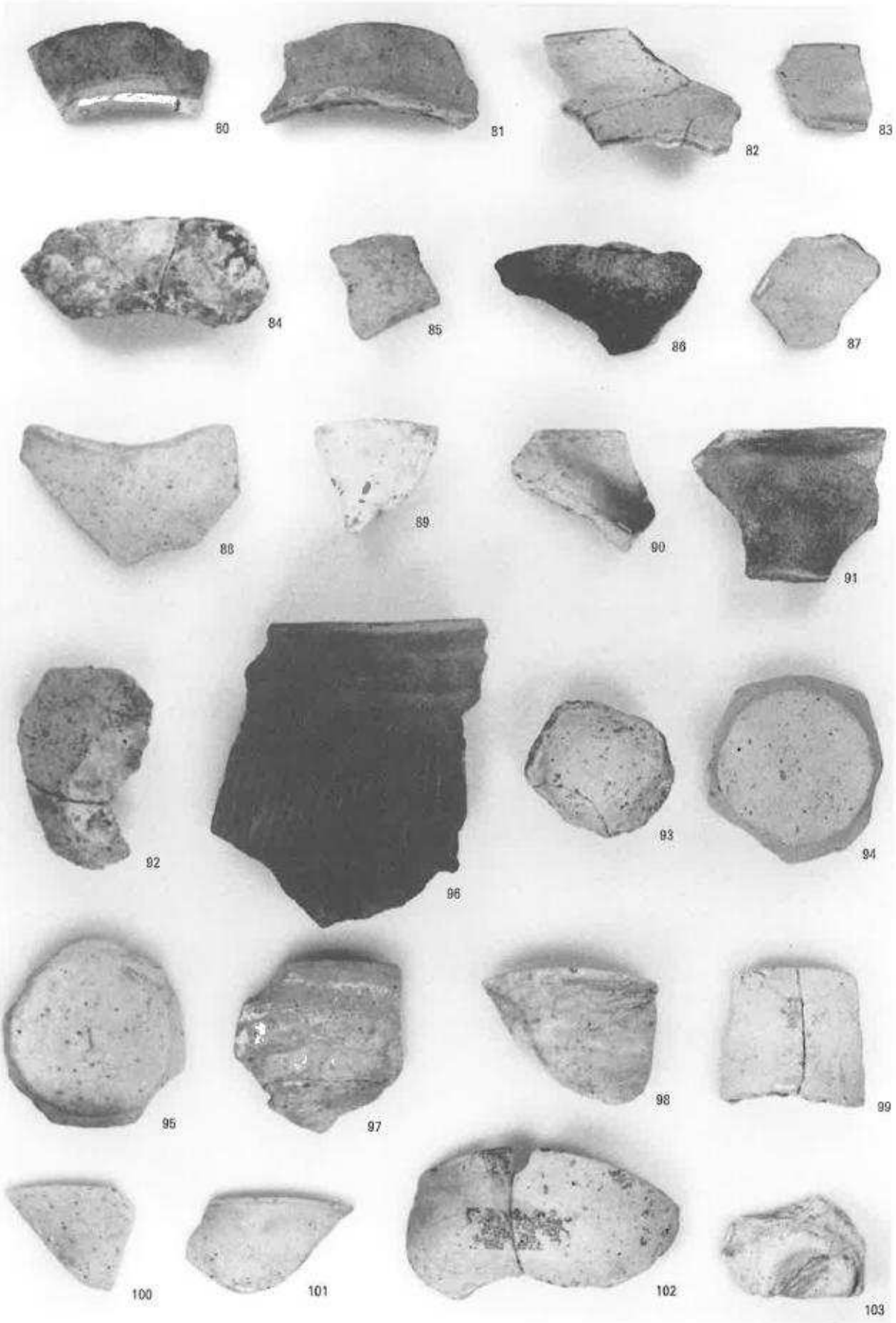


古墳時代の遺物 4

図版26

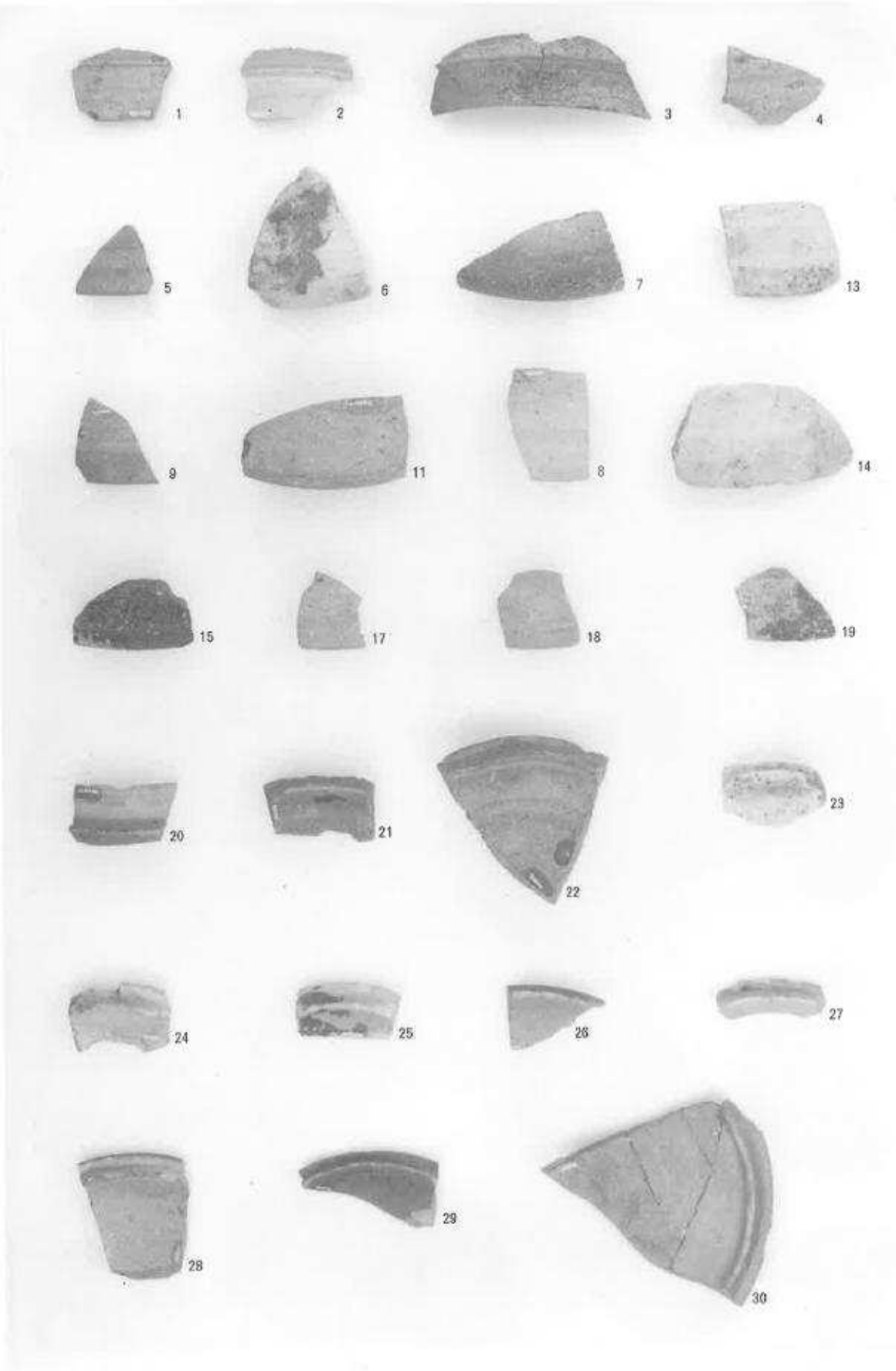


古墳時代の遺物 5

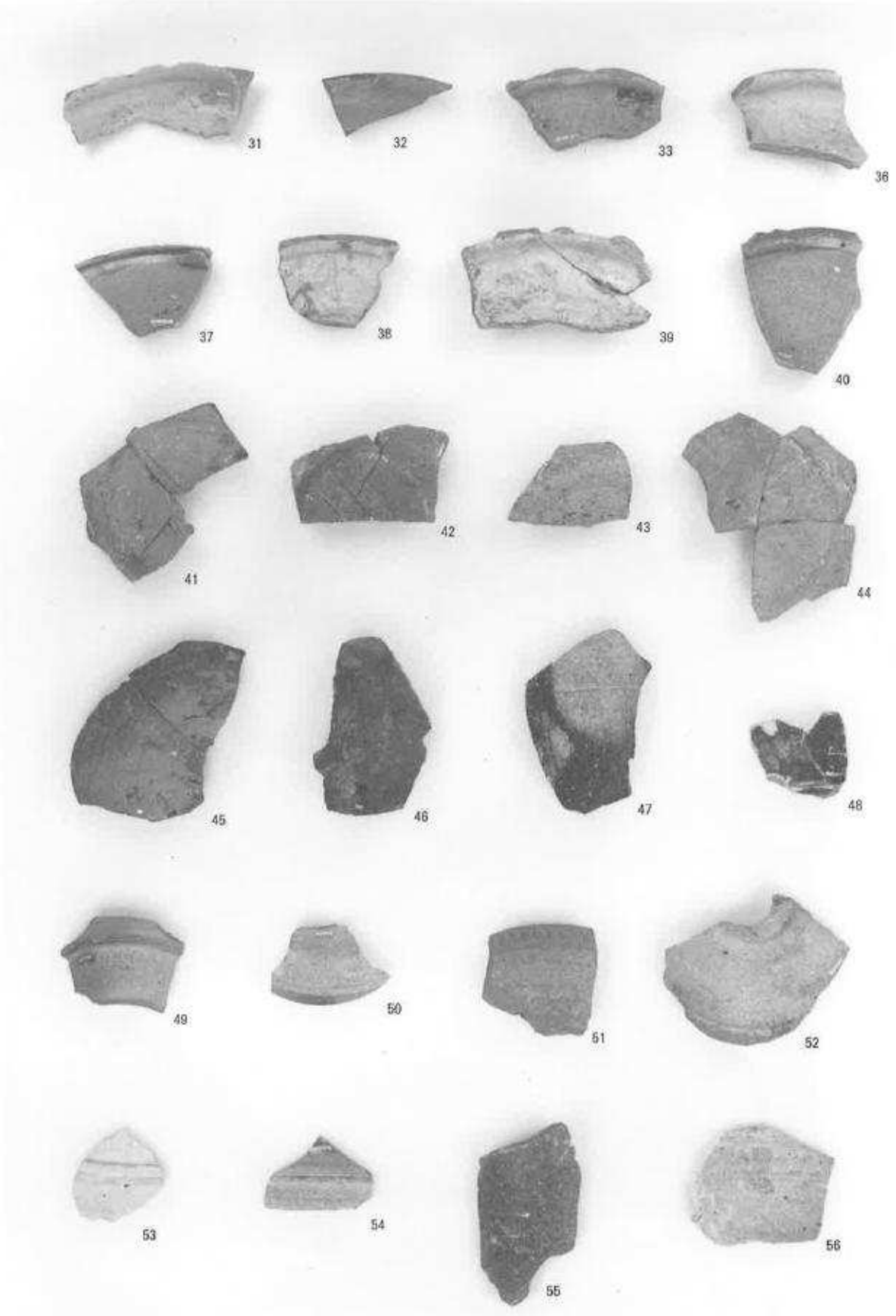

80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
96
93
94
95
97
98
99
100
101
102
103

古墳時代の遺物 6

図版28

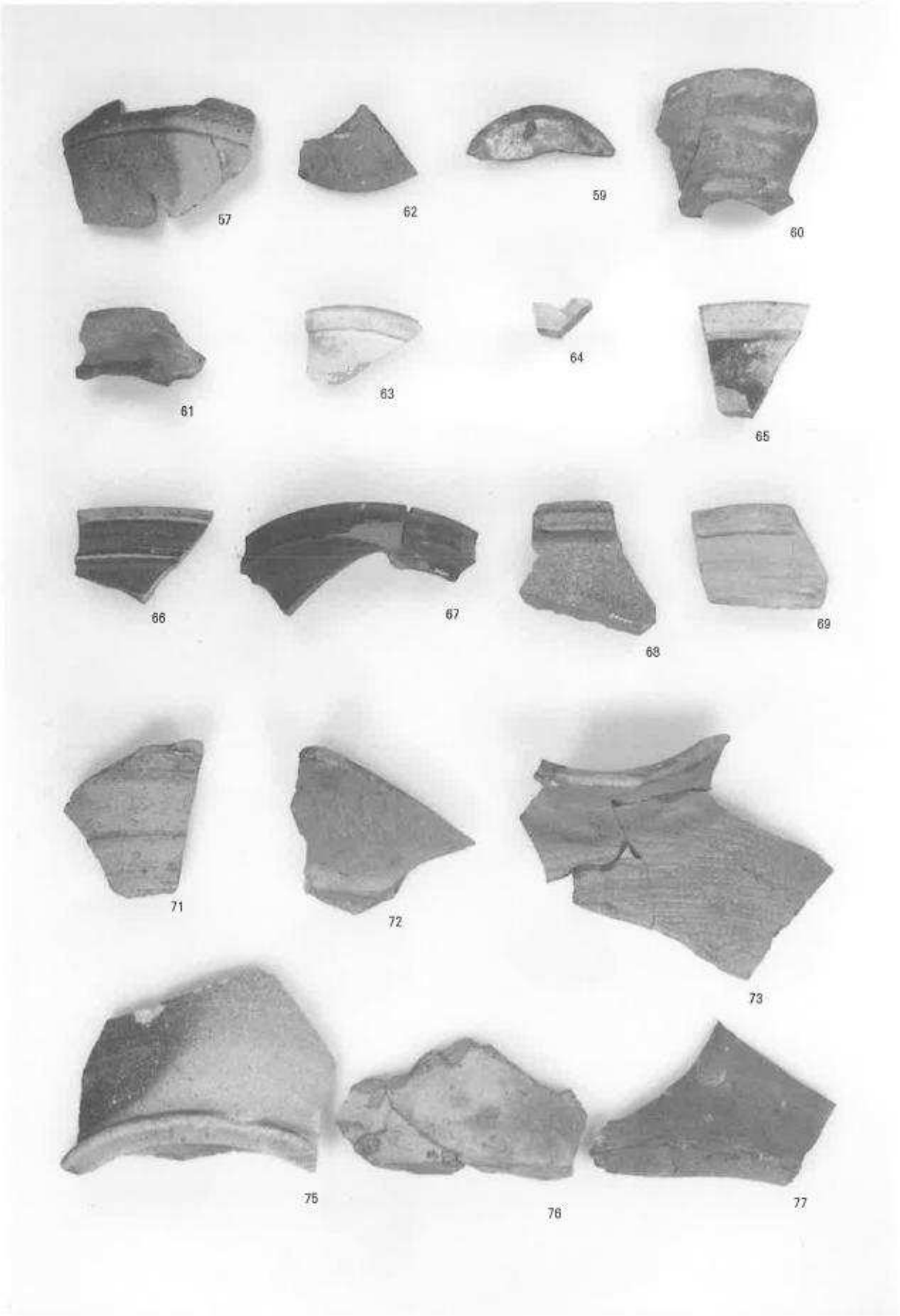


古墳時代の遺物7

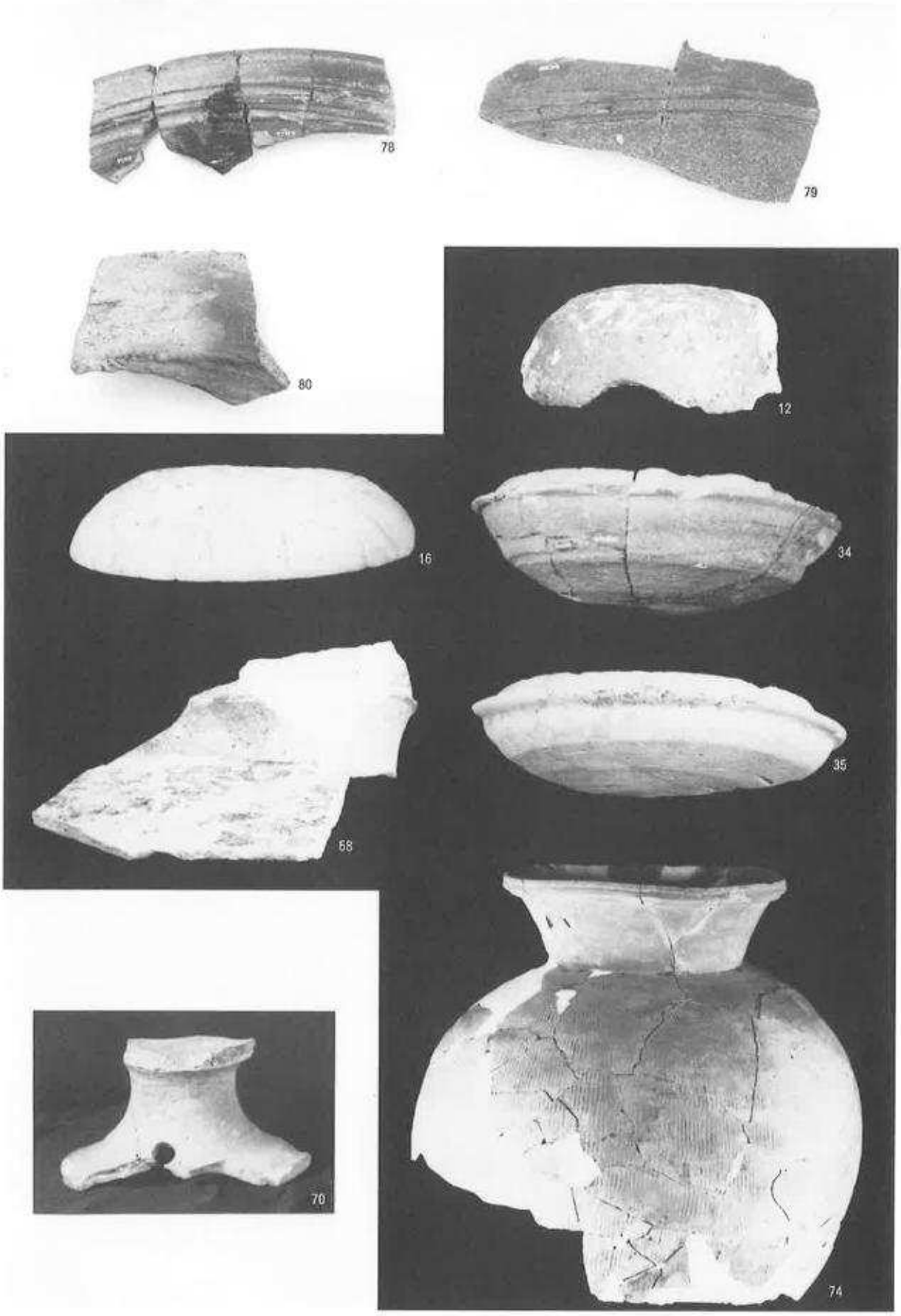


古墳時代の遺物 8

図版30



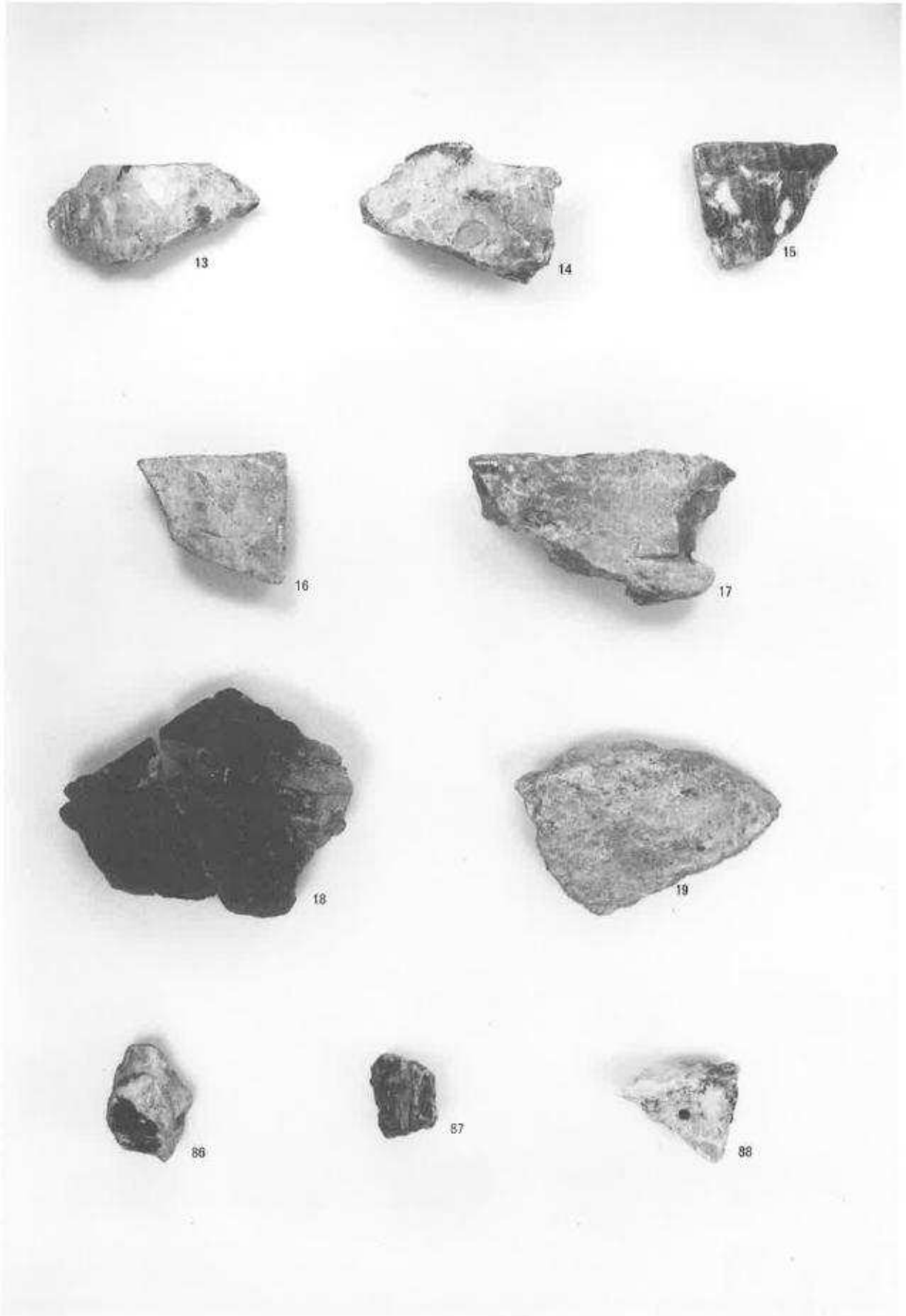
古墳時代の遺物 9



古墳時代の遺物10

図版32

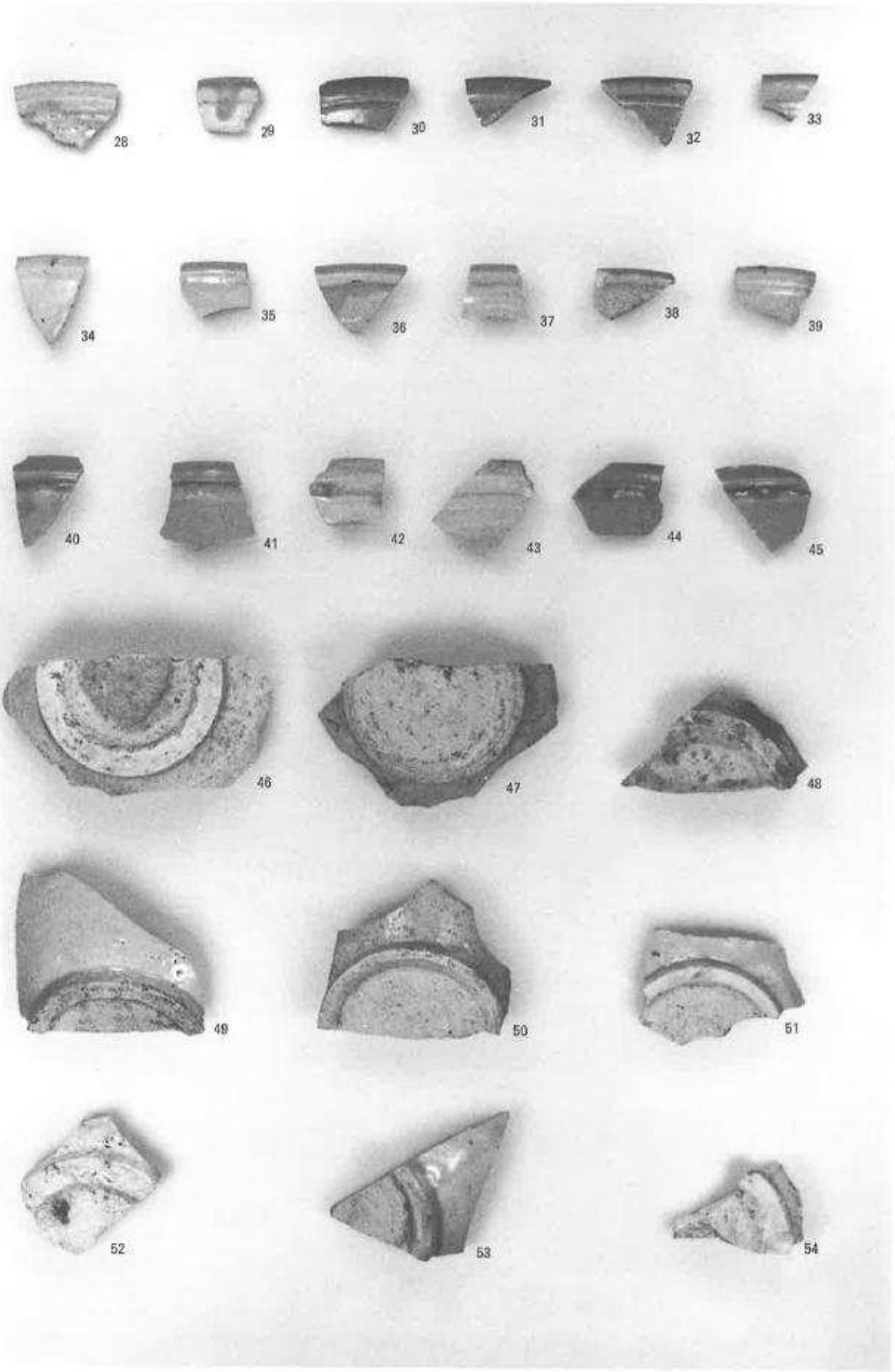
中世の遺物1



中世の遺物 2

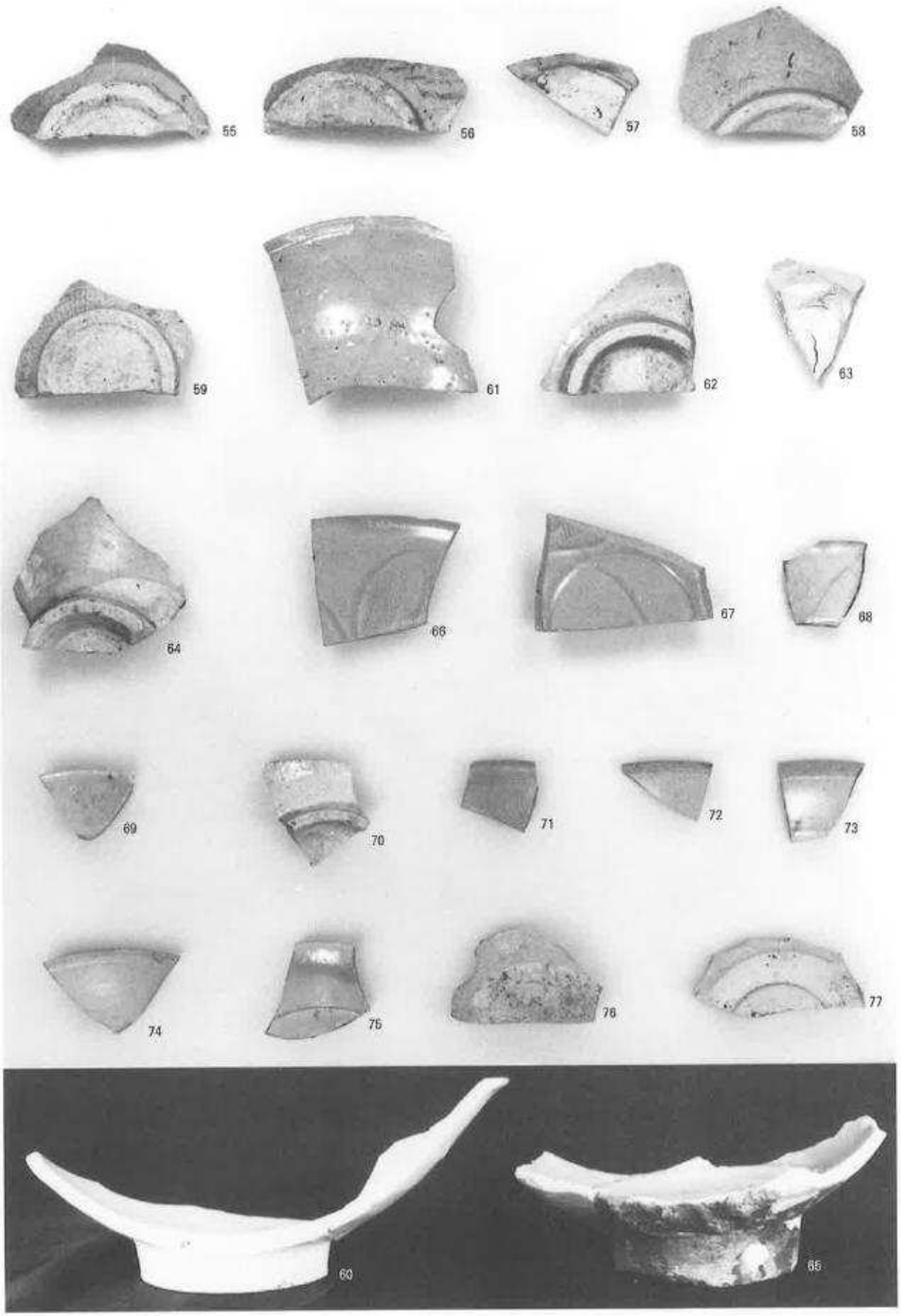
図版34

中世の遺物3


28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54

中世の遺物 4

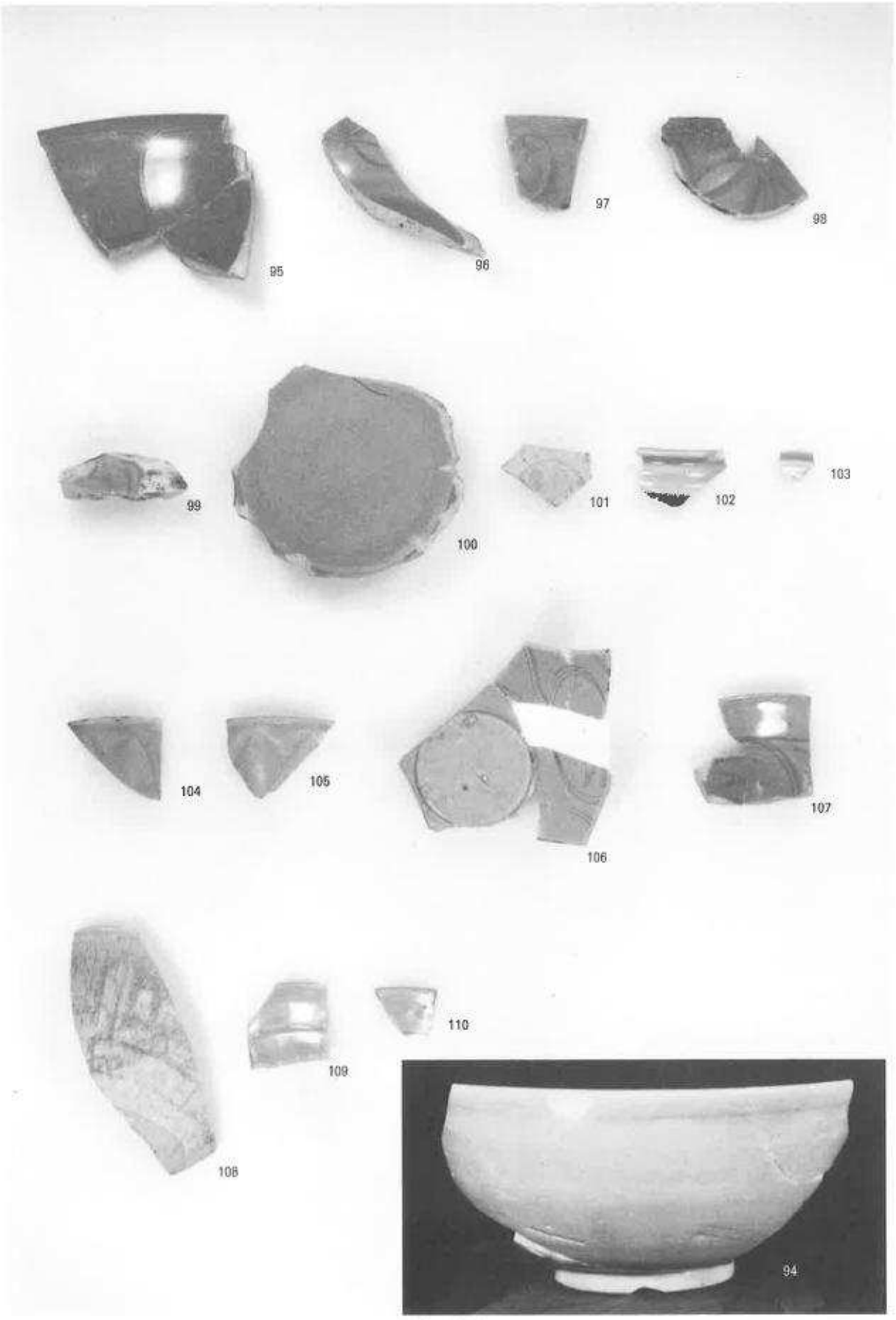
図版36



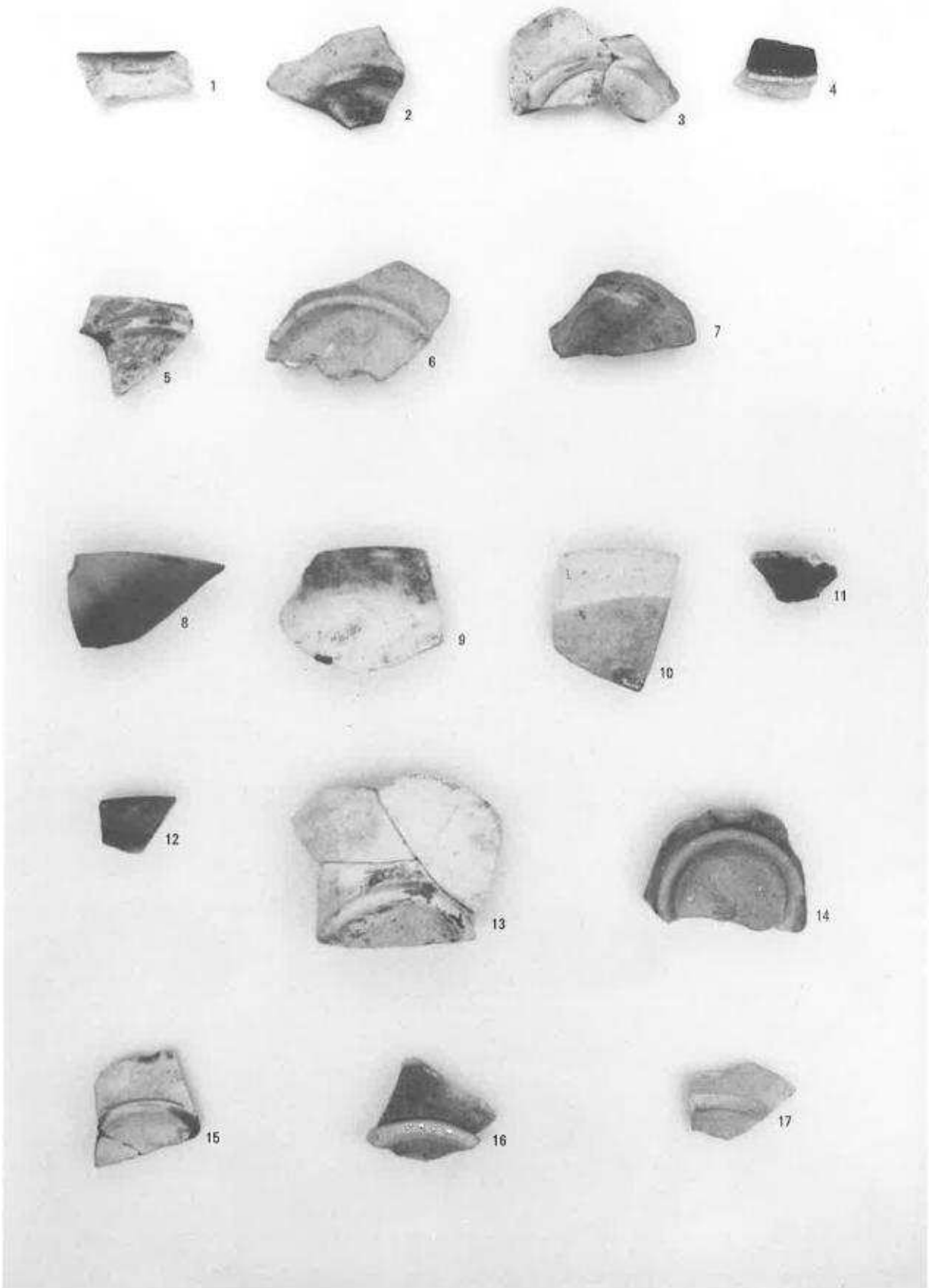
中世の遺物5

中世の遺物 6

図版38

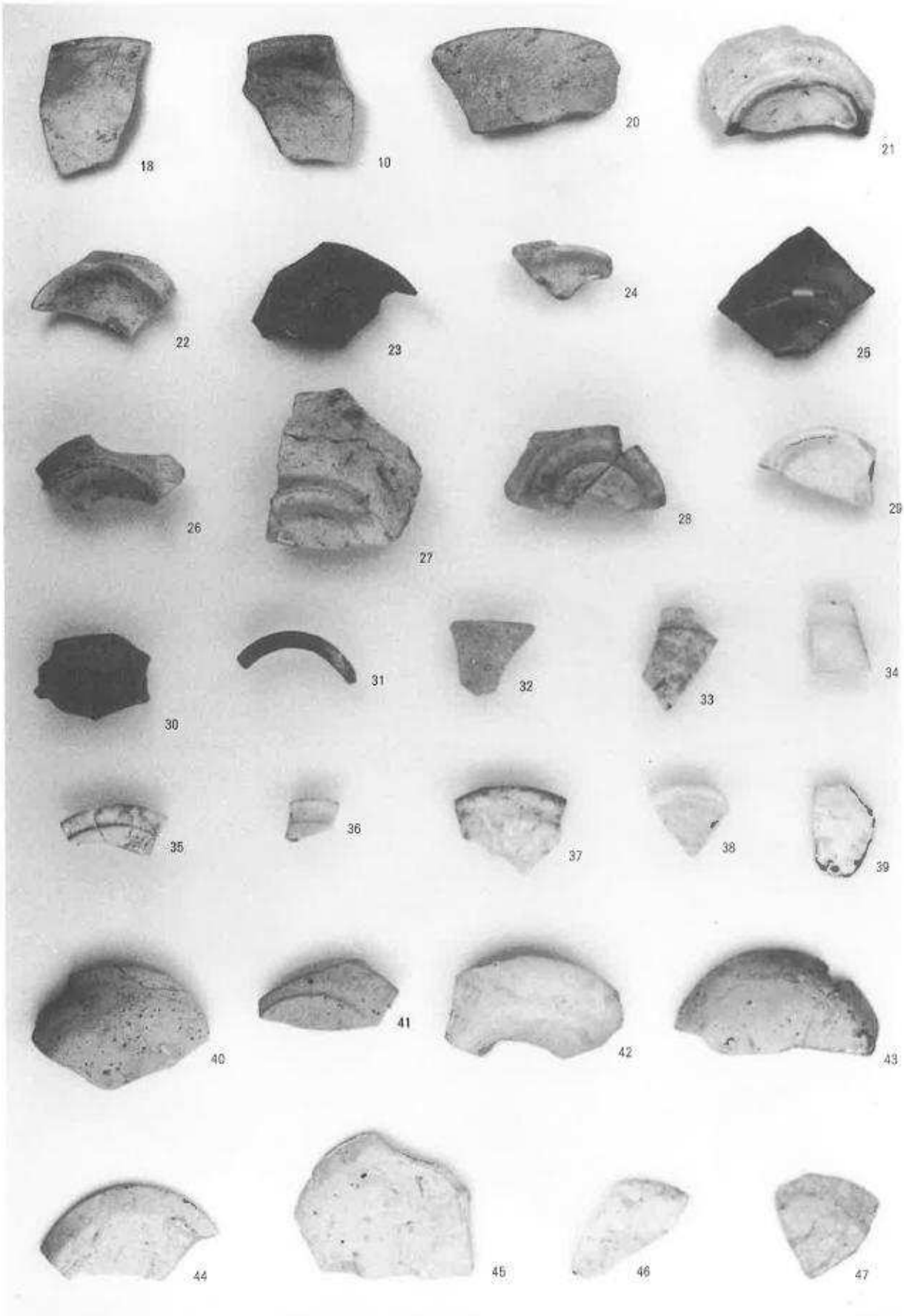


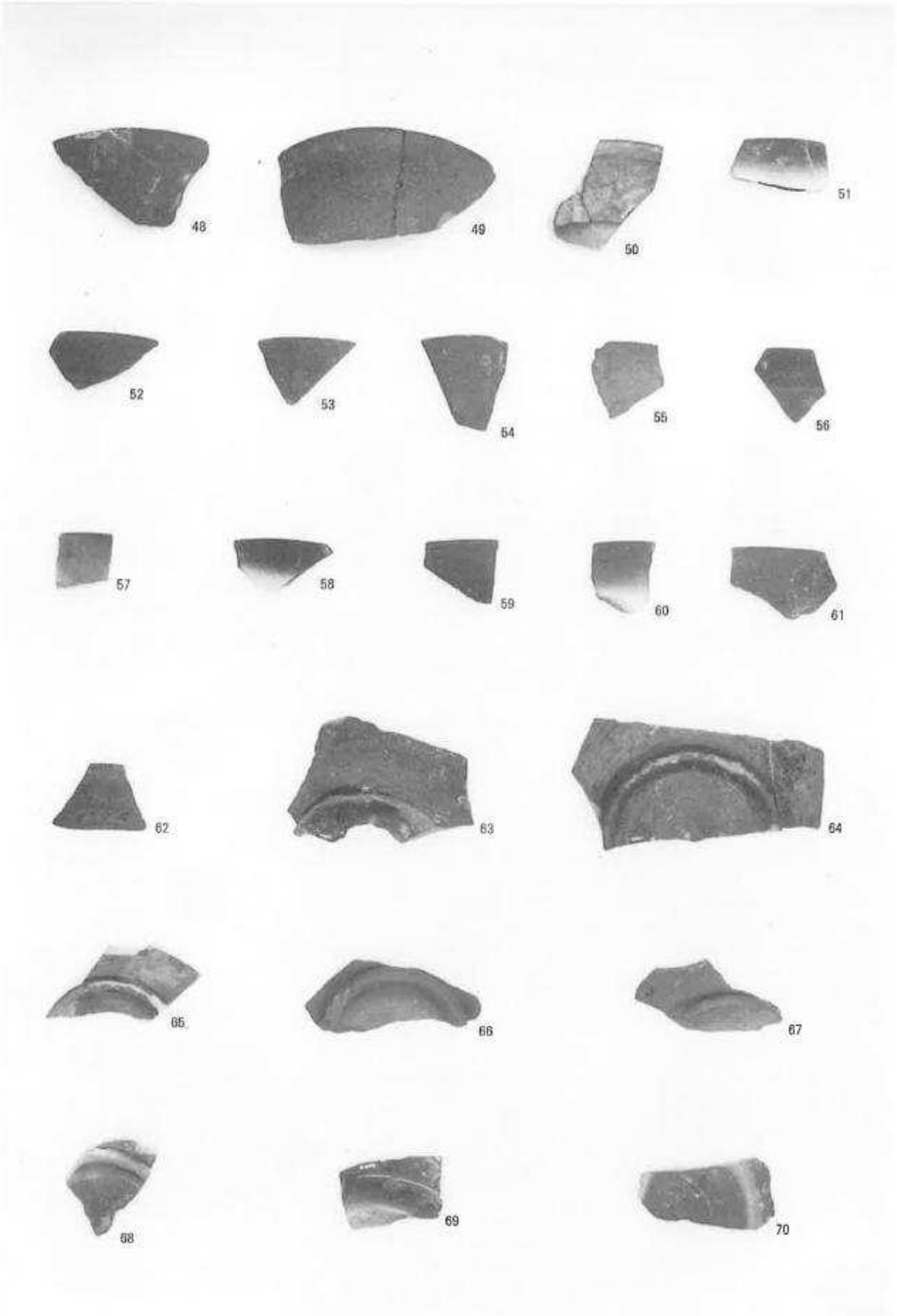
中世の遺物 7



中世の遺物8

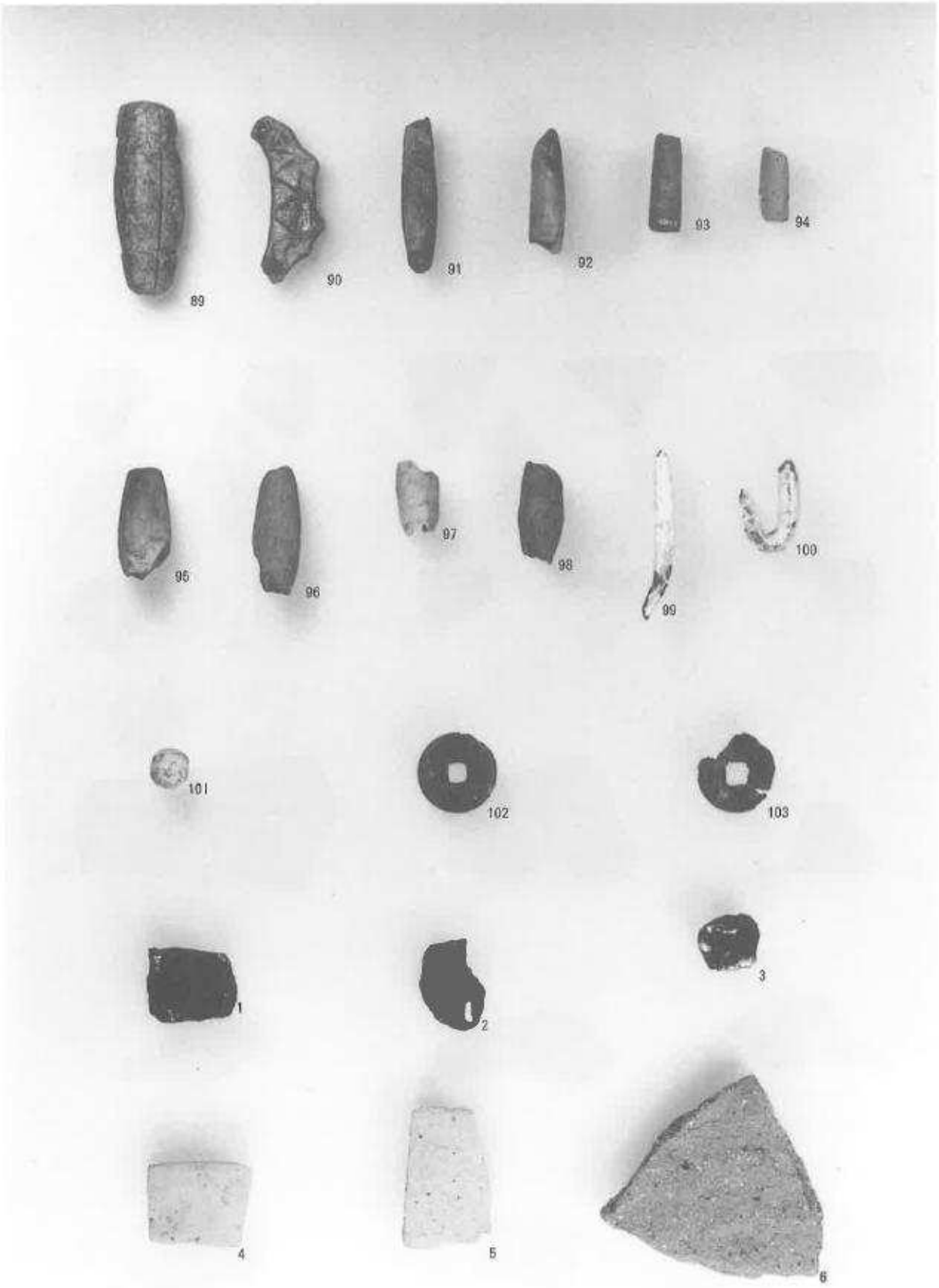
図版40

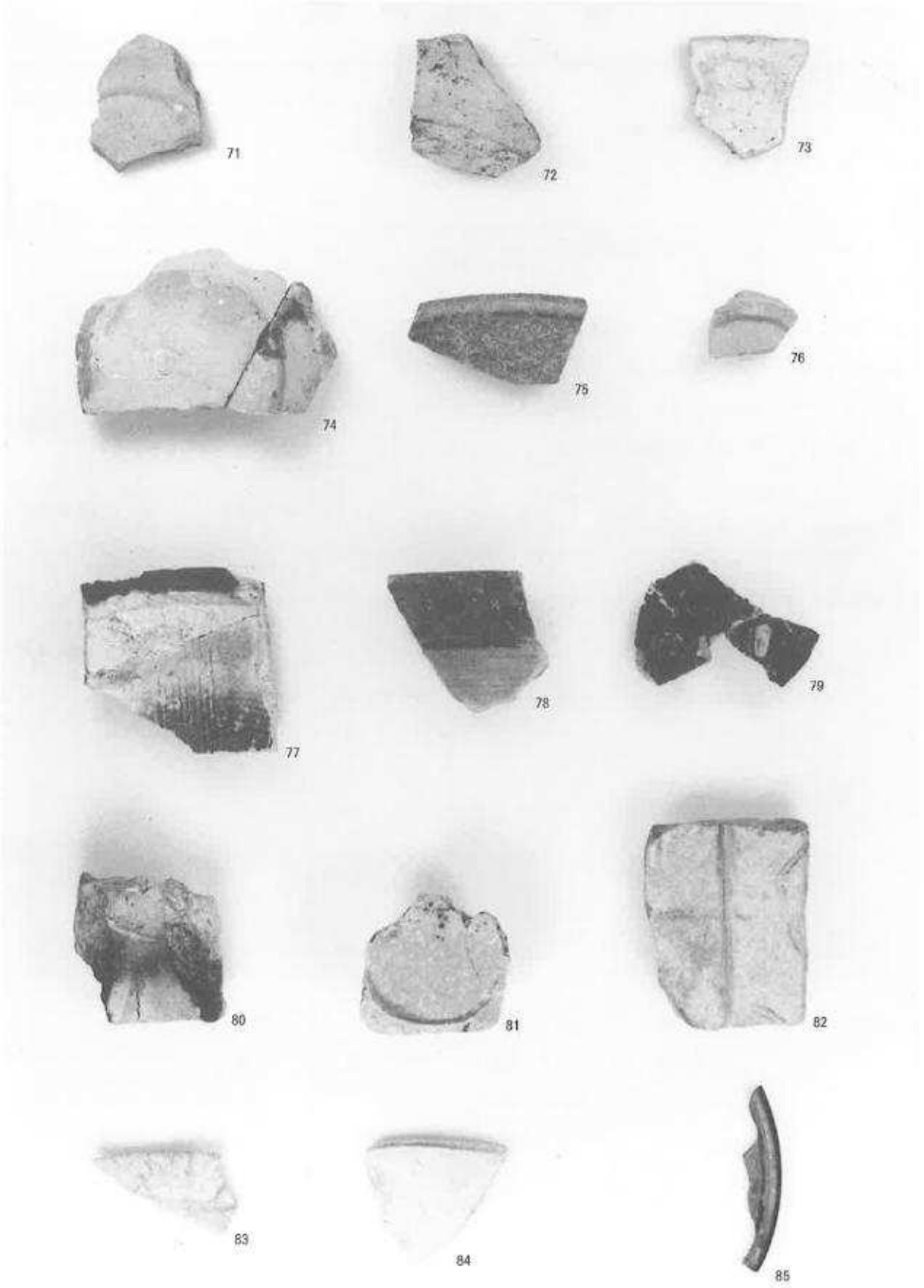

18
10
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47



中世の遺物10

図版42




71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85

報 告 書 抄 録

ふりがな	いまふくいせき
書名	今福遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	松浦市文化財調査報告書
シリーズ番号	第14集
編著者名	中田敦之・高原　愛
編集機関	松浦市教育委員会
所在地	〒859－4502　長崎県松浦市志佐町里免365番地　TEL　0956－72－1111
発行年月日	西暦　1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
今福遺跡（いまふくいせき）	長崎県（ながさきけん） 松浦市（まつうらし） 今福町（いまふくちょう） 仏坂免・浦免（ほとけざかめんうらめん）	42208	101	33°20′42″ ～ 33°20′49″	129°45′57″ ～ 129°46′00″	19961105 ～ 19970218	2,580㎡	国営農地 再編整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
今福遺跡	遺物 包含地	縄文 古墳 中世	柱穴 集石土壙 土壙	縄文土器 石鏃 弥生土器 石庖丁 土師器 須恵器 輸入陶磁器 石鍋	

松浦市文化財調査報告書 第14集

松浦・今福遺跡

平成10年３月30日印刷

平成10年３月31日発行

発行　松浦市教育委員会
長崎県松浦市志佐町里免365番地

印刷　山口印刷株式会社
佐賀県伊万里市二里町大里乙